582-133
1200501522640
582
33

25 .133

157

新選

北原白秋集散文篇

新選 北原白秋集 散文篇

納本

昭和三・一・二 帝國圖書

582-133

新選北原白秋集（散文篇）目錄

生ひたちの記　一頁
桐の花小品　一九頁
桐の花とカステラ　一九頁
晝の思　一二頁
感覺の小函　二七頁
植物園小品　二九頁
春の暗示　二九頁
溫室觀覽　三二頁
春　三五頁
四月の藥草園　三六頁
春のゆく日　三七頁
五月朔日　三八頁

五月末　三八頁
六月の花　四〇頁
女四種　四一頁
南海小品　四四頁
漁村の秋　四四頁
肥後の三角　五〇頁
河豚　五四頁
パパヤ物語　五五頁
油蟲　五五頁
正覺坊　六一頁
蟻と黑人　六八頁
小笠原の夏　七五頁
葛飾小品　八二頁
葛飾から伊太利へ　八二頁
螢　九〇頁

馬　九四頁
蓮の花　九八頁
蘆間の煙　一〇〇頁
潮來の黎明　一〇三頁
小田原小品　その一　一〇八頁
お花畑の春雨　一〇八頁
鐘の音を聽きながら　一一五頁
虎が煙草を吸ふ　一一七頁
野外劇場の初夏　一二一頁
小田原小品　その二　一二四頁
金魚經序品　一二四頁
山莊建立　一二九頁
神童の死　一三一頁
蒼蠅　一三六頁
海の畫の解說　一三九頁

『海上法悦』一三九頁
『海　空』一四〇頁
「泥潟展望」一四一頁
「胡蝶の海渡り」一四三頁
「雀の生活」抄一四五頁
雀と人間との愛一四五頁
雀の形態と本質一六七頁
雀の神經感覺及性格一八三頁
雀の靈覺とその神格一九七頁
山莊主人手記二一六頁
山莊主人手記二一六頁
芙蓉記二二〇頁
その日のこと二二二頁
胡麻の實二二二頁
季節の窓抄二二三頁
王維二二三頁
孟宗と七面鳥二二三頁
食卓の上二二三頁
三月の言葉二二三頁
藪菖蒲二二三頁
四月の言葉二二三頁
五月の言葉二二三頁
雜草の季節二二四〇頁
蟻の牧童二四一頁
立秋の丘より二四二頁
芙蓉の庭二四三頁
雲助の隱居二四六頁
汽車二四九頁
ゐねむり爺さん二五三頁
根つ株二五六頁
二五九頁

鶫の季節　二六一頁
豆柿　二六三頁
蜜柑山散策　二六五頁
竹林の茶飯　二六九頁
春を待つ　二七二頁
「風景は動く」抄　二七四頁
風景は動く　二七四頁
鶯　二七四頁
野山の花　二七八頁
このごろの花　二七九頁
白い家禽　二八三頁
搖れてる書齋　二九四頁
季節の梅　三〇九頁
雉子ぐるま　三一二頁
麻布山　三一二頁

雲畦先生　三一五頁
母の手習　三一六頁
父の踊り　三一七頁
古問屋の正月　三一八頁
「フレップ・トリップ」抄　三二二頁

小說

葛飾文章　三六七頁
哥路　三九七頁
よぼよぼ順禮　四七三頁
影　五三六頁
秋山小助　五四七頁

生ひたちの記

……時は逝く、何時しらず柔かに影してぞゆく、
時は逝く、赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく。
（過ぎし日第二十）

1

時は過ぎた。さうして溫かい荞麥のほめきに、赤い首の螢に、或は青いとんぼの眼に、黑猫の美くしい毛色に、謂れなき不可思議の愛着を寄せた私の幼年時代も何時の間にか慕はしい「思ひ出」の哀歡となつてゆく。

捉へがたい感覺の記憶は今日もなほ私の心を苛だたしめ、恐れしめ、歎かしめ、苦しませる。この小さな抒情小曲集に歌はれた私の十五歳以前の「Life」はいかにも幼稚な柔順しい、然し飾氣のない、時としては淫婦の手を恐るゝ赤い石竹の花のやうに無智であつた。さうして驚き易い私の皮膚と靈とはつねに鍼斯の薄い四肢のやうに新しい發見の前に喜び顫へた。兎に角私は感じた。さうして生れたまゝの水々しい五官の感觸が私にある「神祕」を傳へ、ある「懷疑」の萠芽を微かながらも泡立たせたことは事實である。さうしてまだ知らぬ人生の「秘密」を知らうとする幼年の本能は常に銀箔の光を放つ水面にかのついついと跳ねてゆく水すましの番ひにも震慄いたのである。

尤も、私は過去追憶にのみ生きんとするものではない。私はまたこの現在の生活に不滿足な爲に美くしい過ぎし日の世界に、懷かしい靈の避難所を見出さうとする弱い心からかういふ詩作にのみ耽つてゐるのでもない。「思ひ出」は、私の藝術の半面である。私は同時に「邪宗門」の象徵詩を公にし、今はまた「東京景物詩」の製作にも從うてゐる。從てその一面をのみ觀て、輕々にその傾向なり詩風なりを速斷せらるゝほど作者に取つて苦痛なことはない。如何なる人生の姿にも矛盾はある。影の形に添ふごとく、開き盡した牡丹花のかげに昨日の薄あかりのなほ顫へてやまぬやうに、現實に執する私の心は時として一椀の楂古(チョコレート)事に蒸し熱い鄕土のにほひを嗅ぎ、幽かな泪芙藍の凋れにある日の未練を殘す。見果てぬ夢の歎きは目に見えぬ銀の鎖の微かに過去と現在とを繼いで慓くや

うに、つねに忙たゞしい生活の耳元に毀り泣く。さはいへ此集の第三章に收めた「おもひで」二十篇の追憶體は寧ろ「邪宗門」以前の詩風であつた。まだ現實の痛苦にも思ひ到らず、ただ羅漫的な氣分の、何となき追憶に耽つたひとしきりの夢に過ぎなかつた。さりながら「性の芽生 及 Tonka John の悲哀」に輯めた新作の幾十篇には幼年を幼年として、自分の感覺に牴觸し得た現實の生そのものを拙ないながらも官能的に描き出さうと欲した。從つて用ゐた語彙なり手法なりもやはり現在風にして試みたのである。畢竟自叙傳として見て欲しい一種の感覺史なり性慾史なりに外ならぬ。實際私は過去を全く今の自分から遊離したものとして追慕するよりも、充實した現在生活の根底を更に力强く印象せしめんが爲に、兎に角過去といふわが第一の烙印を自分で力ある額の上に烙きつけやうと欲したのである。とはいふものゝ、私はなほこの小さな詩集の限りある紙面に於て企畫した事の十分の一も描寫し得なかつたのを悲しむ。幼ない昔は兎に角秘密多き少年時代の感情生活はまだ〳〵複雜であり神經的である。私はなほ何らかの新らしい形式の上にその切ないほど怪しかつた感覺の負債を充分に償ひ得べき何らかの新らしい機會の來らんことを待つ。

「斷章」の六十一篇は「邪宗門」と同時代の小曲であつてその以後の新風ではない。それは恰度强い印象派の色彩のかげに微かなテレビン油の潤りのさまようてゐるやうに彼の集のかげに今なほ見出されずして顫へてゐたものである。私はかの私の抒情の「歌」とともにこの「斷章」のやうな仄かな藝術品が「邪宗門」や「東京景物詩」やその他の異なつた象徴詩の間にも、なほ純なるわかき日の悲しみを頼りなく伴奏しつゝあつた事をせめては首肯して欲しいのである。

私は兎に角、可憐なさうして手ごろの小さい抒情小曲集を私のなつかしい人々の手に獻げたいと思つて、なるべく自分に親しみの深い、稚い時代の「思ひ出」を茲に集めた。從て私の生ひたちなり、生れた鄕土の特色なり、豫め多少は知つて戴く必要がある。

2

私の鄕里柳河は水鄕である。さうして靜かな廢市の一つである。自然の風物は如何にも南國的であるが、既に柳河の街を貫通する數知れぬ溝渠のにほひには日に日に廢れてゆく舊い封建時代の白壁が今なほ懷かしい影を映す。肥後路より、或は久留米路より、或は佐賀より筑後川の流を超えて、わが街に入り來る旅びとはその周圍の大平野に分岐して、遠く近く瓏銀の光を放つてゐる幾多の人工的河水を眼にするであらう。さうして歩むにつれて、その水面の隨所に、菱の葉、蓮、眞菰、河骨、或は赤褐黄綠その他樣々の浮藻の强烈な更

紗模樣のなかに微かに淡紫のウオタアヒヤシンスの花を見出すであらう。水は淸らかに流れて廢市に入り、廢れはてたNoskai屋(遊女屋)の人もなき厨の下を流れ、洗濯女の白い晒布に注ぎ、水門に堰かれては、三味線の音の緩む晝すぎを小料理の黑いダリヤの花に歎き、酒造る水となり、汲水場に立つ湯上りの素肌しなやかな肺病娘の唇を啜ぎ、氣の弱い鷲の毛に擾され、さうして夜は觀音講のなつかしい提燈の灯をちらつかせながら、樋を隔てて海近き沖ノ端の鹹川に落ちてゆく、靜かな幾多の溝渠はかうして昔のままの白壁に寂しく光り、たまたま芝居見の水路となり、蛇を奔らせ、變化多き少年の秘密を育む。水鄕柳河はさながら水に浮いた灰色の柩である。

＊

折々の季節につれて四邊の風物も改まる。短い冬の間に見る影もなく汚ごれ果てた田や畑に、刈株のみが鋤きかへされたまま色もなく乾き盡くし、ノ羽に白い斑紋を持つた怪しげな高麗鳥(コウゲがらす)(この地方特殊の鳥)のみが廢れた寺院の屋根に鳴き叫ぶ、さうして青い股引をつけた櫨の實採りの男が靜かに暮れてゆく卵いろの梢を眺めては無言に手を動かしてゐる外には展望の曠い平野だけに何らの見るべき變化もなく、凡てが陰鬱な光に被はれる。柳河の街の子供はかういふ時幽かなシュブタ(方言鰍の一種)の腹の閃めきにも話にきく生膽取の青い眼つきを思ひ出し、海邊の黑猫はほほけ果てた白い穗の限りもなく戰いでゐる芦葦原の中に、ぢつと蹲つたまま、過ぎゆく冬の囁きに晝もなほ耳かたむけて死ぬるであらう。

＊

いづれにもまして春の季節の長いといふ事はまた此地方を限りなく悲しいものに思はせる。麥がのび、見わたす限りの平野に黄ろい菜の花の毛氈が柔かな軟風に薫り初めるころ、まだ見ぬ幸を求むるためにうらわかい町の娘の一群は笈に身を窶し、哀れな巡禮の姿となつて、初めて西國三十三番の札所を旅して歩るく(巡禮に出る習慣は別に宗教上の深い信仰からでもなく、單にお嫁入りの資格としてどんな良家の娘にも必要であつた。)その留守の間にも水車は長閑かに廻り、町端れの飾屋の爺は大きな鼈甲緣の眼鏡をかけて、怪しい金象眼の愁にチンカチと鎚を鳴らし、片思の薄葉鐵(ブリキ)職人はぢりぢりと赤い封蠟を溶かし、黄色い支那服の商人は生溫い挨拶の言葉をかけて戸毎を覗き初める。春も半ばとなつて菜の花もちりかゝるころには街道のところどころに木蠟を平滓(ならし)して干す畑が蒼白く光り、さうして狐憑の女が他愛もなく狂ひ出し、野の隅には粗末な蓆張りの圓天井が作られる。その芝居小屋のかげをゆく馬車の喇叭のなつかしさよ。

さはいへ大麥の花が咲き、からしの花も實となる晩春の名殘惜しさは靑くさい芥子の蕾や新らしい蠶豆の香ひにいつし

かとまたまぎれてゆく。

まだ夏には早い五月の水路に杉の葉の飾りを取りつけ初めた大きな三神丸の一部をふと學校がへりに發見した沖ノ端の子供の喜びは何に譬へやう。艫の方の化粧部屋は席で張られ、昔ながらの廢れかけた舟舞臺には櫻の造花を隈なくかざし、欄干の三方に垂らした御簾は彩色も褪せはてたものではあるが、水天宮の祭日となれば粹な町内の若い衆が紺の半被に棹さゝれて、幕あひには笛や太鼓や三味線の囃子面白く、町を替ふるたびに幕を替へ、日を替ふるたびに歌舞伎の藝題もとり替へて、同じ水路を上下すること三日三夜、見物は皆あちらこちらの溝渠から小舟に棹さして集まり、華やかに水郷の歡を盡くして別れるものゝ、何處かに頽廢の趣が見えて祭の濟んだあとから夏の哀れは日に日に深くなる。

この騷ぎが靜まれば柳河にはまたゆかしい螢の時季が來る。

あの眼の光るは
星か、螢か、鵜の鳥か、
螢ならばお手にとろ、
お星様なら拜みませう……

稚い時私はよくかういふ子守唄をきかされた、さうして恐ろしい夜の闇にをびえながら、乳母の背中から手を出して例の首の赤い螢を握りしめた時私はどんなに好奇の心に顫へたであらう。實際、螢は地方の名物である。馬鈴薯の花さくころ、街の小舟はまた幾つとなく矢部川の流を溯り初める。さうして甘酸ゆい憐光の息するたびに、あをあをと眼に沁みる螢籠に美くしい假寢の夢を時たまに閃めかしながら水のまにまに夜をこめて流れ下るのを習慣とするのである。

*

長い霖雨の間に果物の樹は孕み女のやうに重くしなだれ、ものゝ卵はねばねばと潴水(たまりみづ)のむじな藻にからみつき、蛇は木にのぼり、眞菰は繁りに繁る。柳河の夏はかうして凡ての心を重く暗く腐らしたあと、池の邊に鬼百合の赤い閃めきを先だてゝ、烘くが如き暑熱を注ぎかける。

日光の直射を恐れて羽蟻は飛びめぐり、溝渠には水涸れて惡臭を放ち、病犬は朝鮮薊の紫の刺に後退りつゝ咆え廻り、蛙は蒼白い腹を仰けて死に、泥臭い鮒のあたまは苦しさうに泡を立てはじめる。七八月の炎熱はかうして平原の到るところの街々に激しい流行病を仲介し、日ごとに夕燒の赤い反照を浴びせかけるのである。

この時、海に最も近い沖の端の漁師原には男も女も半裸體のまゝ紅い西瓜をむさぼり、石炭酸の強い異臭の中に晝は寢ね、夜は病魔退散のまじなひとして廢れた街の中、或は堀の柳

のかげに SAZKO（線臺）を持ち出しては盛んに花火を揚げる。さうして朽ちかゝつた家々のランプのかげから、死に瀕した虎刺拉患者(コラ)は恐ろしさうに蒲團を卻ひだし、ただぢつと薄あかりの中に色變へてゆく五色花火のしたゝりに疲れた瞳を集める。

燒酎の不攝生に人々の胃を犯すのもこの時である。犬殺しが歩るき、巫女が酒倉に見えるのもこの時である。さうして雨乞の思ひ思ひに白粉をつけ、紅い隈どりを凝らした假裝行列の日に日に幾隊となく續いてゆくのもこの時である。さはいへまた久留米絣をつけ新らしい手籠を擁へた菱の實賣りの娘のなつかしい「菱シヤンヨウ」の呼聲をきくのもこの時である。

*

九月に入つて登記所の庭に黃色い鷄頭の花が咲くやうになつてもまだ虎刺拉は止む氣色もない。若い町の辯護士が忙しさうに粗末な硝子戸を出入りし、蒼白い藥種屋の娘の亂行の漸く人の噂に上るやうになれば、秋はもう青い澁柿を搗く酒屋の杵の音にも新らしい匂の爽かさを忍ばせる。

祇園會が了り、秋もふけて、線香を乾かす家、からし油を搾る店、パラビン蠟燭を造る娘、提燈の繪を描く義太夫の師匠、ひとり飴形屋（飴形は飴の一種である。柳河特殊のもの）の三階に取り殘された旅役者の女房、すべてがしんみりとした氣分に物の哀れを思ひ知る十月の末には、先づ秋祭の準備として柳河のあらゆる溝渠はあらゆる市民の手に依て、一旦水門の扉を閉され水は干され、魚は掬はれ、醜くさい水草は取り除かれ、溝どろは奇麗に浚ひ盡くされる。この「水落ち」の樂しさは町の子供の何にも代へ難い季節の華である。さうしてこの一騷ぎのあとから、また久濶(ひさし)ぶりに清らかな水は廢市に注ぎ入り、樂しい祭の前觸が、異樣な道化の服裝をして、喇叭を鳴らし拍子木を打ちつゝ、明日の芝居の藝題を面白ろをかしく披露しながら町から町へと巡り歩るく。

祭は町から町へ日を異にして準備される、さうして彼我の家庭を擧げて往來しては一夕の愉快なる團欒に美くしい親の情を交すのである。加之、識る人も識らぬ人も醉うては無禮講の風俗をかしく、宋欒(サカン)の實のかげに幼兒と獨樂を回はし、戸ごとに酒をたづねては浮かれ歩るく。祭のあとの寂しさはまた格別である、野は火のやうな櫨紅葉に百舌がただ啼きしきるばかり、何處からともなく漂浪うて來た傀儡師(くぐつまはし)の肩の上に、生白い華魁の首が、カツクカツクと眉を振る物凄さも、何時の間にか人々の記憶から掻き消されるやうに消え失せて、寂しい寂しい冬が來る。

*

要するに柳河は廢市である。とある街の辻に古くから立つてゐる圓筒狀の黑い廣告塔に、折々、西洋奇術の貼札が紅い

へらへら踊の怪しい景氣をつけるほかには、よし今のやうにアセチリン瓦斯を點け、新たに電氣燈をひいて見たところで、格別、これはといふ變化も凡ての沈滯から美しい手品を見せるやうに容易く蘇らせる事は不可能であらう。ただ偶々に東京がへりの若い齒科醫がその窓の障子に氣まぐれな赤い硝子を入れただけのことで、何時しか屋根に薊の咲いた古い旅籠屋にはほんの商用向の旅人が殆ど泊つたけはひも見せないで立つて了ふ。ただ何時通つても白痴の久たんは青い手拭を被つたまゝ同じ風に同じ電信柱をかき抱き、ボンボン時計を修繕す禿頭は硝子戸の中に俯向いたぎりチックタックと音をつまみ、本屋の主人は蒼白い顏をして空をたゞ凝視めてゐる。かういふ何の物音もなく眠つた街に、住む人は因循で、ただおとなしく、僅に Gonshan（色家の娘、方言）のある情の深さうな、そして流暢な、軟かみのある語韻の九州には珍らしいほど京都風なのに阿蘭陀訛の溶け込んだ夕暮のささやきばかりがなつかしい。風俗の淫らなのにひきかへて遊女屋のひとつも殘らず廢れたのは哀れぶかい趣のひとつであるがそれも小さな平和な街の小さな世間體を恐るゝ——利發な心が卑怯にも人の目につき易い遊びから自然と身を退くに至つたのであらう。いまもなほ黑いダアリアのかげから、かくれ遊びの三味線は晝もきこえて水はむかしのやうに流れてゆく。

3

柳河を南に約半里ほど隔てゝ六騎（ロッキュ）の街沖の端がある。（六騎とはこの街に住む漁夫の諢名であつて、昔平家の沒落の砌に打ち洩らされの六騎がここへ落ちて來て初めて漁りに從事したといふ、さうしてその子孫が世々その業を繼襲し、繁殖して今日の部落を爲すに至つたのである。）畢竟は柳河の一部と見做すべきも、海に近いだけ凡ての習俗もより多く南國的な、怠惰けた規律のない何となく投げやりなところがある。さうしてかの柳河のただ外面に取すまして廢れた面紗のかげに淫らな秘密を匿してゐるのに比ぶれば凡てが露はで、元氣で、また華やかである。かの巡禮の行樂、虎列拉避けの花火、さては古めかしい水祭の行事などはおほかたこの街特殊のものであつて、張のつよい言葉つきも淫らに、ことにこの街のわかい六騎は溫ければ漁り、風の吹く日は遊び、雨には寢ね、空（ひも）腹（じ）くなれば食ひ、酒をのみては月琴を彈き、夜はただ女を抱くといふ風である。かうして宗教を遊樂に結びつけ、遊樂のなかに微かに一味の哀感を繼いでる。觀世音は永久にうらわかい町の處女に依て齋かれ（各の町に一體づつの觀世音を祭る、物日にはそれぞれある店の一部を借りて開帳し、これに侍づくわかい娘たちは參詣の人にくろ豆を配り、或は小屋をかけていろいろの催をする。さうしてこの中の資格は處女に

限られ、緣づいたものは籍を除かれ、新しい妙齡のものが代つて入る、）天火のふる祭の晩の神前に幾つとなくかがぐる牡丹に唐獅子の大提灯は、またわかい六騎の逞ましい日に燒けた腕に獻げられ、霜月親鸞上人の御正忌となれば七日七夜の法要に寺々の鐘鳴りわたり、朝の御講に詣づるとては、わかい男女夜明まへの街の溝石をからころと踏み鳴らしながら「御正忌參らんかん」の淫らな小歌に浮かれて媾曳の樂しさを佛のまへに祈るのである。

沖ノ端の寫眞を見る人は柳、栴檀、柘榴、櫨などのかげに、而も街の眞中を人工的水路の。水もひたひたと白く光つては芍藥の根を洗ひ洗濯女の手に波紋を畫く夏の眞晝の光景に一種のある異國的情緒の微漾を感ずるであらう。あの水祭はここで催され、藍玉の俵を載せ、或は葡萄色の酒袋を香の滴るばかり積みかさねた小舟は毎日ここを上下する。正面の白壁はわが叔父の新宅であつて、高い酒倉は甍の上部を現はすのみ、さうして、私の母家はこの水の右折して、終に二條の大きな樋に極まり、渦を卷いて鹹川に落ちてゆくその袂から更に左したるところにある。

今は銀行となつたが、もとはやはり姻戚の阿波の藍玉屋の生鼠壁の隣に越太夫といふ義太夫の師匠が何時も氣輕な肩肌ぬぎの婆さんと差向ひで、大きな大きな提燈を張り代へながら、極彩色で牡丹に唐獅子や、櫻のちらしなどをよく描いてゐた藁葺きの小店と、それと相對して同じ樣な生鼠壁の舊家が二つ並んでゐる。何れも魚問屋で右が醬油を造り、左が酒を造つた。その酒屋の、私は Tonka John（大きい坊ちやん、弟と比較していふ、阿蘭陀訛か。）である。して、隣は矢張り祖父時代に岐れた北原の分家で、後には醬油釀造を止した。

石場町の私の家を差覗く人は、薊や蒲生英の生えた舊い土藏づくりの朽ちかかつた屋根の下に、澁い店格子を透いて、銘酒を滿たした五つの朱塗の樽と同じ色の桝のいくつかに目を留めるであらう。さうしてその上の梁の一つに、紺色の可憐な燕の雛が懷かしさうに、牡丹いろの頰をちらりと巢の外に見せて、ついついと鳴いてゐる日もあつた。土間は廣く、店いつぱいの藥種屋式の硝子戸棚には疊つた山葵色の紙が張つてあつて、その中ほどの柱に和蘭陀渡の古い掛時計が、まだ精確に、その扉の繪の、眼の青い、そして胸の白い女の横顏のうへに、チクタクと秒刻の優しい歩みを續けてゐた。その戸棚を開けると綠礬、硝石、甘草、肉桂、薄荷、どくだみの葉、中には賣藥の版木等がしんみりと交錯（こんがら）がつた一種異樣の臭を放つ。それはある漂浪者がこゝに來て食客をしてゐた時分密かに町の人に藥を賣つてゐたのが、亡くなつたので、そのままにしてあるといふ、舊い話であらう。

庭には無論朱欒の老木が十月となれば何時も黃色い大きな

實をつけた。その後の高い穀倉に秋は日ごとに赤い夕陽を照りつけ、小流を隔てゝ十戸ばかりの並倉に夏の酒は濕つて悲しみ、温かい春の日のぺんぺん草の上に桶匠は長閑に槌を鳴らし、赤裸の酒屋男は雪のふる臘月にも酒の仕込みに走り回り、さうして街の水路から樋をくぐつて來るかの小さい流は陰居屋の涼み臺の下を流れ、泉水に分れ注ぎ、酒桶を洗ひ、眞白な米を流す水となり、同じ屋敷内の溜水に落ち、ガメノシユブタケ（藻の一種）の毛根を幽かに顫はせ、然るのち、ちゆうまえんだの菜園を一周りして貧しい六騎の厨裏に濁つた涙みをつくるのであつた。そのちゆうまえんだはもの古い僧院の跡だといふ深い竹藪であつたのを、私の七八歳のころ、父が他から買ひ求めて、竹藪を拓き、野菜をつくり、柑子を植ゑ、西洋草花を培養した。それでもなほ晝は赤い鬼百合の咲く畑に夜は幽靈の生じろい火が燃えた。

世間ではこの舊家を屋號通りに「油屋」と呼び、或は「古間屋」と稱へた。實際私の生家は此六騎街中の十二の家柄であるばかりでなく、酒造家としても最も石數高く、魚類の問屋としては九州地方の老舗として夙に知られてゐたのである。從て濱に出ると平土、五島、薩摩、天草、長崎等の船が無鹽鹽魚、鯨、南瓜、西瓜、たまには鷲鳥、七面鳥の類まで積んで來て、絶えず取引してゐたものだつた。さうして魚市場の闊な折々は、血のういた腥ぐさい甃石の上で、旅興行の手品師が囃子おもしろく、咽喉を眞赤に開けては、激しい夕燒の中で、よく大きな雁首の煙管を管いつぱいに呑んで見せたものであつた。

私はかういふ雰圍氣の中で何時も可なり贅澤な氣分のものとに所謂油屋の Tonka John として安らかに生ひ立つたのである。

4

私の第二の故郷は肥後の南關であつた。南關は柳河より東五里、筑後境の物靜かな山中の小市街である。その街の近郊外目の山あひに恰も小さな城のやうに何時も夕日の反照をうけて、たまたま舊道をゆく人の瞻仰の的となつた天守造りの眞白な三層樓があつた。それが母の生れた家であつて、數代この近郷の尊敬と素朴な農人の信望とをあつめた石井家の邸宅であつた。

私もまたこの小さな國の老侯のやうに敬はれ、侍かれ、慕はれて、餘生を讀書三昧に耽つた外祖業隆翁の眞つ白な長髯のなつかしさを忘るる事が出來ぬ。私は土地の習慣上實はこの家で生れて——明治十八年一月二十五日——然る後古めかしい黑塗の駕籠に乘つて、まだ若い母上と柳河に歸つた。

私は生れて極めて虛弱な兒であつた。さうして癇癪の強いほんの僅かな外氣に當るか、冷たい指さきに觸られても、直

ぐ四十度近くの高熱を喚び起した程、危險極まる兒であつた。石井家では私を柳河の「びいどろ罎」と綽名した位、殆んど壞れ物に觸るやうな心持ちで恐れて誰もえう抱けなかつたさうである。それで彼此往來するにしても俥からでなしに、わざわざ古めかしい女駕籠を仕立てたほど和蘭の舶來品扱ひにされた。それである時なぞは着いてすぐ玄關に舁き据ゑた駕籠の、扉をあけて手から手へ渡されたばかりでもう蒼くなつて痙攣けて了つたさうである。

三歳の時、私は劇しい窒扶斯に罹つた。さうして朱欒の花の白くちるかげから通つてゆく葬列を見て私は初めて乳母の死を知つた。彼女は私の身熱のあまり高かつたため何時しか病を傳染されて、私の身代りに死んだのである。私の彼女に於ける記憶は別にこれといふものもない。ただ母上のふところから伸びあがつて白い柩を眺めた時、その時が初めのまた終りであつた。

次に來た乳母はおいそと云つた。私はよく彼女と外目の母の家に行つては何時も長々と滯溜した。さうして迎ひの人力車がその銀の輪をキラキラさして遙かの山すそを岡の赤い曼珠沙華のかげから寢ころんで見た小さな視界のひとすぢ道を懷しさうに音をたてて軋つて來るまで、私たちは山にゆき、谷にゆき、さうしてただ夢の樣に何ものかを探し回つてもう馴つこになつて珍らしくもない自分たちの潟くさい海の方へ歸らうとも思はなかつた。

かういふ次第で私は小さい時から山のにほひに親しむことが出來た。私はその山の中で初めて松脂のにほひを嗅ぎ、ゐもりの赤い腹を知つた。さうして玉蟲と斑猫と毒草と、……いろいろの草木、昆蟲、禽獸から放散する特殊のかをりを凡て驚異の觸感を以て嗅いで回つた。かかる場合に私の五官はいかに新しい喜悅に顫へたであらう。それは恰度薄い紗に冷たいアルコールを浸して身體の一部を拭いたあとのやうに山の空氣は常に爽やかな幼年時代の官感を刺戟せずには措かなつた。

南關の春祭はまた六騎の街に育つた羅漫的な幼兒をして山に對する好奇心を煽るに十分であつた。私は祭見物の前夜に顫へながらどんぐりの實のお池の水に落つる音をきき、それからわかい乳母の乳くびを何となく手で觸つた。

5

さて、柳河の虛弱なびいどろ罎は何時のまにか內氣な柔順しいさうして癇の蟲のひりひりした兒になつた。私はよく近所の兒どもを集めては、あかい夕日のさし込んだ穀倉のなかで、溫かな苅麥やほぐれた空俵のかげを二十日鼠のやうに騷ぎ回つた。さうしてかくれんぼの息をひそめて、仲のいい女の兒と、とある隅の壁の方に肩を小さくして探し手を待つて

ゐる間に、しばしば埋もれた鷲の卵を見つけ出し、さうして楝木のかげからぬるぬると匍ひ下る青大將のあの凄い皮肉な晝の眠つきを恐れた。

日の中はかうしてうやむやに過ぎてもゆくが、夜が來て酒倉の暗い中から酴(もと)すり歌の擢の音がしんみりと調子をそろへて靜かな空の闇に消えてゆく時分になれば、赤い三日月の差し入る幼兒の寢部屋の窓に青い眼をした生膽取の時がくる。

私は「夜」といふものが怖かつた。何故にこんな明るい晝のあとから「夜」といふ厭な恐ろしいものが見えるか、私は疑つた、さうして乳母の胸に犇と抱きついて、眼の色も變るまで慄いたものだ。眞夜中の時計の音はまた妄想に痺れた、Tonka John の小さな頭腦に生膽取の血のついた足音を忍びやかに刻みつけながら、時々深い奈落にでも引つ込むやうに、ボーンと時を點つ。

後には晝の日なかにも蒼白い幽靈を見るやうになつた。黑猫の背なかから臭の強い大麥の穗を眺めながら、前の世の母を思ひ、まだ見ぬなつかしい何人かを探すやうなあどけない眼つきをした。ある時はまた、現在のわが父母は果してわが眞實の親かといふ恐ろしい疑に罹つて酒桶のかげの蒼じろい黴のうへに素足をつけて、明るい晝の日を寂しい倉のすみに坐つた。その恐ろしい謎を投げたのは氣狂のおみかの婆である。温かい五月の毒の花が咲くころ、樂しげに青い硝子を碎いて凧の糸の鋭い上にも鋭いやうに瀝青の製造に餘念もなかつた時、彼女は恐ろしい面をして這入つて來た、さうして顫へてる私に、Tonka John あんたのおつかんなほんなおつかん、返事せんの、證據があるなら出して見んの——私は青くなつた、さうして駈けて母のふところに抱きついたものの、また恐ろしくなつて逃げるやうに父のところに行つた。丁度何かで不機嫌だつた父は金庫の把手をひねりながら鍵の穴に鍵をキリリと入れて、ヂロッとその兒を振りかへつた、私はわつと泣いた。それからといふものは、青い小鳥の歌でさへ私には恐ろしいある囁きにきこえたのである。

そりばつてん、Tonka John はまた氣まぐれな兒であつた。七月が來て觀音樣の晩になれば、町のわかい娘たちはいつも奇麗な踊り小屋を作へて、華やかな引幕をひきその中で投げやりな風俗の浮々と轉づりかはしながら踊つた。それにあの情の薄くて我儘な、私と三つ違ひの巽母姉(ね)さんも可哀い姿で踊つた。五歳六歳(いつつむつつ)の私もまた引き入れられて、眞つ白に白粉を塗り、派出なきものをつけて、何がなしに小さい手をひらいて踊つた。

6

靜かな晝のお葬式に、あの取澄ました納所坊主の折々ぐわららんと鳴らす鐃鈸の音を聽いたばかりでも笑ひ轉け、單に

佛手柑の實が酸ゆかつたといつては世の中をつくづく果敢なんだ頃の Tonka John の心は今思うても罪のない鷹揚なものであつた。さうしてその恐ろしく我儘な氣分のなかにも既にしをらしい初戀の芽は萠えてゐた。

美くしい小さな Gonshan. 忘れもせぬ七歳の日の水祭に初めてその兒を見てからといふものは私の羞恥に滿ちた幼い心臓は紅玉入の小さな時計でも懷中に匿してゐるやうに何時となく幽かに顫へ初めた。

私はある夕かた、六騎の貧しい子供らの群に交つて喇叭を鳴らし、腐れた野菜と胡蘿蔔の汚ごれた溝どろのそばに、粗末な蓆の小屋をかけて、柔かな羽蟲の縺れを哀しみながら、ただひとり金紙に緋縅の鎧をつけ、鍬形のついた甲を戴き、木太刀を佩いて生眞面目に芝居の身振をしてゐたことがあつた。さうして魚くさい見物のなかに蠶豆の青い液に小さな指さきを染めて、罪もなくその葉を鳴らしながら、ぱつちりと黑い眸を見ひらいて立つてゐたその兒をちらと私の見出した時に、ただくわつとのぼせて云ふべき臺辭を忘れ、極り悪るさに俯向いて了つた——その前を六騎の汚ない子供らが鼻汁を垂らし黑坊のやうな赭つちやけた裸で、不審さうに彼らが小さな主人公の顏を見かへりながら、張合もなく何時までも翻筋斗(とんぼがへり)をしてゐた事を思ひ出す。

ある日はまた穀倉の暖い二階の隅に幕を張り薄青い幻燈の雪を映しては、長持のなかに藏つてある祭の山車の、金の薄い垂尾をいくつとなく下げた、鳳凰の羽の、あるかなき幽かな囁きにも耳をかたむけた。

かうした間にも夏の休暇には必ず山をたづねた。さうして柳河の Tonka John はまたその一鄕の罪もない小君主であつた。路に逢ふほどの農人はみな丁寧にその青い頰かぶりを解いて會釋した、私はまた何事もわが意の儘に左右し得るものと信じた。而して自分ひとりが特別に天の恩寵に預つてるやうな勝ち誇つた心になつてたゞ我儘に跳ね回つた。

黑馬にもよく乘つた、玉蟲もよく捕へては針で殺した、蟻の穴を獨樂の心棒でほぢくり回し、石油をかけ、時には憎いもののやうに毛蟲を踏みにじつた。女の子の唇にも毒々しい蝶の粉をなすりつけた。然しながら私は矢張りひとりぼつちだつた。ひとりぼつちで、靜かに蠶室の桑の葉のあひだに坐つて、幽かな音をたてては食み盡くす蠶の眼のふちの無智な薄褐色の慄きを凝と眺めながら子供ごころにも寂しい人生の何ものにか觸れえたやうな氣がした。

夜になれば一番季のわかい熊本英學校出の叔父がゆめのやうなその天守の欄干に出てよく笛を吹いた。さうして彼方此方の秣や凋れた南瓜の花のかげから山の兒どもが栗毛の汗のついた指で、しんみりと手づくりの笛を吹きはじめる。さうして、何時も谷を隔てた圓い丘の上に、またまんまるな明

るい月が夕照の赤く殘つた空を恰度花札の二十坊主のやうにのぼつたものである。

かういふ時、私は晝の「催眠術」の代償として――この快活な叔父が曾て催眠術の新書を手に入れた事があつた。それからといふものは無理に私を蠶室の暗い一室に連れ込んで怪しい眼付やをかしな手眞似を爲はじめた、私は決して眠らなかつた。始はよく轉げて笑つたものの、後にはあまりに叔父の生眞面目なのに恐ろしくなつて幾度か逃げやうとした。顫へてゐる私の眼の前には白い蛾の粉のついた大きな掌と十本の指の間から凝と睨んでゐる黑い眼、蠶の卵の彈く音、繭を食ひ切る音、はずんだ生殖の顫へ、凡てが恐怖に蒼くなつた私の耳に小さな剃刀を入れるやうに絶間なく沁み込んで來る。私は何時も最後には泣き出したのである。――そのパノラマのやうな夜景のなかで亞拉比亞夜話（アラビヤンナイト）の曾遽伊傳（ソクイデ）の譚や、西洋奇談の魔法使ひや、驢馬になられた西藏王子の話を聞かして貰つて、さうして緣の紅い黑表紙の讀美歌集をまさぐりながらそのまま奇異な眠に落ちるのが常であつた。それは夏の眞晝だつたかも知れぬ、痛いほど眼に沁んだ白色はその後未だに忘れることが出來なかつた。それが何時だつたか、それからどうしたか、さつぱり私には記憶がない。それが不圖したことからある近親の人の眼を患つて肥前小濱の湯治場に滯留してゐた頃、母と乳母とあかんぼと遙ばる船から海を渡つて見舞に行つた當時の出來事だといふことがわかつた。その話から、不思議に、Tonka John の記憶にもまだ殘つてゐたことを聞いた時のその人の驚きはをかしいほどであつた。何故ならばその當時私はまだほんの乳のみ兒で、當歳か、やつと二歳かであつたのである。次で乳母の背なかから見た海は濁つた黃いろい象の皮膚のやうなものだつた。さうして潮の引いたあとの潟の色の恐ろしいまで滑らかな傾斜ほかの大空の反射をうけた群青の光澤とともに、如何に私の神經を脅かしたか、潟といふものを見たことのない人には到底不可解のものであらう。矢張り「思ひ出」の中に私はその時の恐怖を歌つたものがある。

海を見てはじめおそれぬ。
そは何時か、乳母の背に寢て、
色青き鯨の髯を賣るといふ老舗見しごと。

それから年を經て、私はその潟のなかに「ムツゴロ」といふ奇異な魚の棲息してゐることを知つた。さうしてその山椒魚に似た怪しい皮膚の、小さなゐもり大の一群を恐ろしいも

のやうに、覗きに行つた。後には吹矢のさきを二つに割いて、その眼や頭を狙つて殺して歩いたこともある。潟にはまた「ワラスボ」といふ鰻に似て肌の生赤い、斑點のある、ぬるぬるとした靜脈色の魚もゐた。魚といふよりも寧ろ蛇類の癩病にかかつた姿である。「メグワジヤ」と稱する貝は青くて病的な香を發する下等動物である。それを多食する吝嗇の女房はよく眼を病んで堀端で鍋を洗つてゐた。「アゲマキ」といふ貝は瀟洒な薄黃色の殼のなかに、やはり薄黃色の帽子をつけた片跛の人間そのままの姿をして滑稽にもセピア色の褌をしめた小いさな而して美味な生物である。その貝を捕る女は半切を片手に引き寄せながら、板子を滑らしては面白さうに走つてゆく。恰度、夏の入日があかあかと反射する時、私達の手から殘酷に投げ棄てられた黑猫が黑猫の眼が、ぬるぬると滑り込みながら、もがけばもがくほどねばねばした潟の吸盤に吸ひ込まれて、苦しまぎれに斷末魔の爪を掻きちらした一種異樣の恐ろしい點彩畫の上を、女はまた輕るく走りながらその板を滑らせてはつやつやとならしてゆく。さうして滿汐の靜かにさしてくる日沒後の傾斜面は沈着いた紫色の光を帶びて幽かに夕づつのかげを浮べる。かうした潟の不可思議は私らの幼年時代に取つては實に怪しくも美くしい何かしら深い秘密を秘めた恐怖と光の魔宮であつた。

それは兎もあれ、十六の初旅に小蒸汽や赤い商船のかげに見た門司の海の凄いほど透きわたつた濃藍色はどんなに私をして新しい西洋の香に噎ばしめたであらう。さうしてその翌年長崎旅行の途次汽車の窓から見た大村灣の風光は實にかの繪にのみ見た廣重の海の青さであつた。

8

蛇目傘を肩にしてキツとなつた定九郎の青い眼つきや、赤い毛布のかげを立つてゆく芝居の死人などに一種の奇妙な恐怖を懷いた三四歳の頃から私の異國趣味乃至異常な氣分に憧がるる心は蕨の芽のやうな特殊な縮れ方をした。

かういふ最初の記憶はウオタアヒアシンスの花の灰かに咲いた潴水の傍をふらつきながら、從姉とその背に負はれてゐた私と、つい見惚れて一緒に陷つた――その生命の瀨戸際に飄然と現はれて救ひ上げて呉れた眞黑な坊さんが不思議にも幼兒にある忘れがたい印象を殘した。

日が蝕ひ、黃色い陰翳の光のもとにまだ見も知らぬ寂しい鳥がほろほろと鳴き、曼珠沙華のかげを鼬が急忙しく横ぎるあとから、あの恐ろしい生膽取は忍んで來る。薄あかりのなかに凝視むる小さき銀側時計の怪しい數字に苦蓬のにほひ沁みわたり、右に持つた薄手の和蘭皿にはまだ眞赤な幼兒の生膽がヒクヒクと息をつく。水門の上に蒼白い月がのぼり、栴檀の葉につやつやと露がたまれば膽のわななきもはたと靜止

して足もとにはちんちろりんが鳴きはじめる。日が暮れるとこの妄想の恐怖は何時も小さな幼兒の胸に鋭利な鋏の尖端を突きつけた。

ある夜はわれとわが靈の姿にも驚かされたことがあつた。外には三味線の音じめも投げやりに、町の娘たちは觀音さまの紅い提燈に結ひたての髪を匂はしながら華やかに眉肌脫ぎの一列になつてあの淫らな活惚を踊つてゐた。取り亂した化粧部屋にはただひとり三歲四歲の私が匍ひ廻りながら何ものかを探すやうにいらいらと氣を焦つてゐた。ある拍子に、ふと薄暗い鏡の中に私の思ひがけない姿にぶつかつたのである。鏡に映つた兒どもの、面に凄いほど眞白に白粉を塗つてあつた、睫の黑くパツチリと開いた兩の眼の底から恐怖に竦んだ瞳が生眞面目に震慄いてゐた、さうして見よ、背後から、尾をあげ脊を高めた黑猫がただぢつと金の眼を光らしてゐたではないか、私は怪然として泣いた。

私の異國趣味は穉い時既にわが手の中に操られた。菱形の西洋凧を飛ばし、朱色の面（朱色人面の凧、Tonka Jehn の持つてゐたのは直徑一間半ほどあつた。）を裸の酒屋男七八人に揚げさせ、瀝青を作り。幻燈を映し、さうして和蘭陀訛の小歌を歌つた。

私はまたいろいろの小さなびいどろ罎に、薄荷や肉桂水を入れて吸つて歩るいた。また濃い液は白紙に垂らし、柔かに揉んで濕した上その端々を小さく引き裂いては唇にあてた、さうして私の行くところには、たよりない幼兒の涙をそそるやうな、つよいつよい肉桂の香が何時でも付き纏うて離れなかつた。

うつし繪の面の仄かな油のにほひはまた新しい七歲の夏を印象せしめる。私はよく汗のついた手首に、その繪の女王や昆蟲の彩色を痒いほど押しては貼り、剝してはそつと貼りつけて、水路の小舟に伊蘇普物語の奇しい頁を飜へした。

無邪氣な惡戲の末、片意地に芝居見を强請んだ末、弟を泣かした末、私は終日土藏の中に押し込められて泣き叫んだ。その窓の下には露草の仄かな花が咲いてゐた。哀れな小さい囚人はかうして泣き疲れたあと、何時もその潤んだ眶に幽かな燐のにほひの沁み入る薄暗い空氣の氣はひを感じた。そこには舊い昔難破した商船から拾ひ上げた阿蘭陀附木（マツチのこと、柳河語）の大きな函が濕りに濕つたまま投げ出されてあつた、私はそのひとつを涙に濡れた手で拾ひ取り、さうしてその黃色なエチケットの帆船航海の圖に怪しい哀れさを感じながら、その一本を拔いては懷かしさうに擦つて見た。無論點火する氣づかひはない。氣づかひはないが、ただ何時までも何時までも同じやうにただ擦つてゐたかつたのである。麴室のなかによく弄んだ骨牌の女王のなつかしさはいふまでもない。

Tonka John の部屋にはまた生れた以前から舊い油繪の大額が煤けきつたまま土藏づくりの鐵格子窓から薄い光線を受けて、柔かにものの吐息のなかに沈默してゐた、その繪は白いホテルや、瀟洒な外輪船の駛つてゐる異國の港の風景で、赤い斷層面のかげをゆく和蘭人の一人が新しいキヤベツ畑の垣根に腰をかがめて放尿してゐるおつとりとした懷かしい風俗を畫いたものであつた。私はそのかげで毎夜美くしい姉上や肥滿つた氣の輕るい乳母と一緒に眠るのが常であつた。

頑固で、何時もむつつりした、舊い家から滅多に外へも出た事はなく、流行唄のひとつすら唄へなかつた私の父にも矢張り氣まぐれな道樂はあつた。あの陰氣な稻荷の巫女や、天狗使ひや、(A+B)²…などの方程式で怪しい占ひをした漂浪者や、護摩を焚く琵琶法師やを滯留さしては、いろいろな不思議を信じた行爲の暇にはまた七面鳥を朱欒のかげに放ち、二三百の白い鉢に牡丹を開かせ、鷄を飼ひ、薔薇を植ゑる事を忘れなかつた。さうして樣樣に飽きはてては年毎にその對手を替へた。鷄を鶩に替へ、朝顏のために前の薔薇を根こそぎ棄てて了つた。さうして遂にはちゆうまえんだに豚小屋まで設けたほど、凡てが投げやりであつた。

私はまた五島平土の船頭衆から長崎や島原の歌も聞いた、年の師走には市が立つてそれらの珍客を載せた大船はいつも四十艘五十艘と港入りをした。酒造のほかに何の物音もしなかつた沖ノ端の街は急に色めき渡つて再び戰のやうな「古問屋の師走業」がはじまる。さうしてこの家の舊い習慣として、その前後に催さるる入船出船の酒宴には長崎の紅い三尺手拭を鉢卷にして、琉球節を唄ふ放恣にして素朴な船頭衆のなかに、柳河のしをらしい藝妓や舞子が頑くなな主人の心まで浮々するやうに三味線を彈き、太鼓を敲いた。その小さい舞子のなかの美くしい一人を Tonka John はまた何となく愛しいものに思つた。

9

舌出人形の赤い舌を引き拔き、黑い揚羽蝶の翅をむしりちらした心はまたリイダアの版畫の新らしい手觸を知るやうになつた。而してただ九歲以後のさだかならぬ性慾の對象として新奇な書籍——ことに西洋奇談——ほど Tonka John の幼い心を搔き亂したものは無かつた。「埋れ木」のゲザがボオドレエルの「惡の華」をまさぐりながら解らぬながらもあの怪しい幻想の匂ひに憧がれたといふ同じ幼年の思ひ出のなつかしさよ。

外目の祖父は雪の日の爐邊に可哀いい沖ノ端の孫を引きよせながら、懷かしさうに佛蘭西式調練の小太鼓の囃子を歌つて聽かす外には、まだ穉い子供に何らの讀書の權能をも認めて吳れなかつた。當時民友社ものを耽讀してゐた若い叔父は

ただ「夢想兵衛胡蝶物語」一册しか自由に讀まして呉れぬ。祖父の書架を飾つた古い蘭書の黑皮表紙や廣重や北齋乃至草艸紙の見かへしの澁い手觸り、黄表紙、雨月物語、その他樣々の稗史、物語、探偵奇談、佛蘭西革命小說、經國美談、三國志西遊記の珍書は羅曼的な兒童の燃えたつ憧憬の情を嗾かして遂にはかの嚴格なる禁斷を犯かさしむるに到つた。

私はよく葡萄棚の下に綠いろの日の光を浴びながら新らしい紙の匂ひに親しみ、赤い柿の實の反射にぼやけた草艸紙の平假名を拾つては百舌の啼く音をきき耽つた。私は本のひとつひとつの匂ひや色や手觸の異なる毎にそれぞれ特殊なある感覺の悲しみを嗅ぎわけた。私は梨の木に上つて果實の甘い液にナイフの刄をつける時も、ゐもりの赤い腹を恐れて芝くさのほめきに身をひたす時も、赤ん谷の婆（母の乳母で髮の白いなつかしい老婆だつた）のところに山桃採りにゆく時にも絶えず何らかの稗史を手にしないことはなかつた。私はただ感動し、昂奮し、あらゆる稚い空想に耽つた。

ある日の午後、圓い玉葱の花に黄色い日光が照りつけて、晝の蟲が幽かにパッチパッチと鳴いてゐる時、私はその上の丘の芝生に寢ころびながら初めて自分の身體から沁み出る强い汗の臭を知つた。さうして軟風のいらいらと葱の臭を吹きおくるたびに私はある異常な靈の壓迫を感じた。かういふ日が續いて私は遂に激しい本能の衝動に驅られた。さうしてその日から非常に晝の太陽を恐れるやうになつた。

愈「春の覺醒（めざめ）」の時代が來た。さうして赤い青い書籍の手觸りに全官感を慄かしてゐた私はまた、その以外の新らしい世界を發見し得た恐怖と喜びとに身も靈も顫はしながら、燃えたつ瞳に凡てのものを美くしく、苦るしく、さうして哀しく、寂しく感じ得るやうになつた。さはいへ、私もまた喜怒哀樂の情の激しい一面に極めて武士的な正義と信義と信實とを尊ぶ清らかな母の手に育てられて、一時は强ひて山羊の血の交つた怯懦な心に酒を恐れ煙草を憎み、單に懷中鏡を持つてゐたといふ丈けで友人とも絶交しかけたほど僞善的な十四の春を迎へた。さうして何時までも女を恐れた。淫らな水郷に育つた私はかうして不思議にも清らかな清教徒としての少年期を了つた。

尤もその僞善的な傾向も長くはなかつた、無意識に壓迫された本然の性情は何時の間にか新らしい反抗の炎を上げた。その苦しい前後に當つて私は激しい神經の衰弱をおぼえた。さうしてただひとり靜かに瞑想し思索する病的な夜の鳥の心になつた。さうして私の少年期の了るころ常に兄弟のやうに親しんだ友人の一人は自刄して遂にその才氣煥發だつた短い一生の最後を自分の赤い血潮で華やかに彩どつて、たんぽぽのさく野中のひとすぢ道を彼の墓場へ靜かに送られて行つたのである。殘された私はまた陰欝な、そのなかにいらいらと

した紅い戲奴のやうな心を閃めかす氣の短い感情の激しい二十歲の生活に入つた。さうして若鷲の巢立ちを思はせるやうに忙たゞしく東京をさして上つた。

10

私が十六の時、沖ノ端に大火があつた。さうしてなつかしい多くの酒倉も、あらゆる桶に新らしい金いろの日本酒を滿たしたまま眞つ蒼に炎上した。白い鷺のゐた潴水、周圍の清らかな堀割、泉水すべてが酒となつて、なほ寒い早春の日光に泡立つては消防の刺子姿の朱線に反射した。無數の小さい河魚は醉つぱらつて浮き上り、酒の流れに口をつけて飲んだ人は泥醉して僅に燒け殘つた母家に轉がり込み、金箔の古ぼけた大きな佛壇の扉を剝がしたり歌つたり踊つたりした。私は恰度そのとき、魚市場に上荷（あ）げてあつた蓋もない黑砂糖の桶に腰をかけて、運び出された家財のなかにたゞひとつ泥にまみれ表紙もちぎれて風の吹くままにヒラヒラと顫へてゐた紫色の若菜集を、しみじみと目に涙を溜めて、何時までも何時までも凝視めてゐたことをよく覺えてゐる。

その後、以前にも優るほどの巨大な新倉が建ち、酒の名の「潮」とともに、一時は古い柳河の街にたゞひとり花々しい虛勢を張つてはゐたものの、それも遂には沈んでゆく太陽の斷末魔の反照に過ぎなかつた。その十年の短い月日のなかに、廢れてゆくものは廢れ、死んでゆく人は死に、ただひとり古い木版畫の手觸のやうに、殘つてゐた懷かしい水郷の風俗も多くは忘られて、ただ小さな街に殘つた氣も狹く口先のみ怜悧なあの眼の狡猾らい人士のみが小さな裁判沙汰に生嚙りの法律論を鬪はして徒に日をおくるばかり、季節の變るたびに集つた旅役者も大方は新顏の陋（さも）しい味も風情もないものになつて了つた。さうして食ひつめものの商人は門司、佐世保、大牟田などの新らしい繁華を慕うて奔り、金歯入れた高利貸は朝鮮にゆき、六騎の活氣ある一團は六十餘艘の小舟に鮟一組の旗じるしを飜へしながら遠洋漁業の途にのぼるかして、わかい子弟の東京へゆくものさへ、誰一人この因循な故郷に歸らうとはせぬ。かやうにして街に殘されたものは眞菰臭い潴水に釣を好む樂隱居かたゞ金庫の前に居眠りをして一生を過ごすあの蒼白い素封家の John-John（良家の息子、やや馬鹿にしていふ言葉である。）かで、追ひ追ひに舊家は廢れ、地方の山持、田地持の類も何時しかに流浪の身となつたものが多い。母の家も祖父の沒後よく世にある例の武士の商法とかで、山林に手を出し、地方唯一の名望家として政治屋にまた盛に擔ぎ上げられたが爲に、瞬く間に財產を傾け盡くして、今はあの白い天守の屋根に屋根の艸が秋毎に赤い實をつくる外には、廣い屋根は見るかげもなく荒れはてて了つた。加之、火災後の長い心勞と疲憊の末、柳河の「油屋」とし

て、九州の古間屋として數代知られた舊家も遂には一家沒落の憂き目を見るやうになつた。

私がこの「思ひ出」の編纂に着手し初めたのは、ちようど郷家の舊い財寶はあの花火の揚る、堀端のなつかしい柳のかげで無慘にも白日競賣の辱しめを受けたといふ母上の身も世もあられないやうな悲しい手紙に接した時であつた。而して新らしい創作に從つてゐる間に秋となり冬が來て、今はまた晩春の惱ましい氣分に水祭の囃子や蠶豆の青くさい香ひのそことなく忍ばるるころとなつた。國よりの通知には愈酒倉は解かれ、親子兄弟凡てあの根ざしの深い「思ひ出の家」から思ひきつて立ち退くべき時機が迫つたといふ事であつた。而して馴れぬ水仕業に可憐な妹の指が次第に大きく醜くなつてゆきますといふ事であつた。かうしてこの小さな抒情小曲集も今はただ家を失つたわが肉親にたつた一つの贈物としたい爲に、表紙にも思ひ出の深い骨牌の女王を用ゐ、繪には全く無經驗な癖に首の赤い螢や生贈取や John や Gonshan の漫畫まで挿んで見た、而して心ゆくまで自分の思を懷かしみたいと思つて、拙いながら自分の意匠通りに裝幀して、漸くこの五月に上梓する事となつた。なほこの集に挿んだ司馬江漢の銅版畫は第一回の競賣の際古道具屋の手に依て一旦埃塵溜に投げ棄てられたのをそつと私の拾つて來たものであつて、前色の妙らしい、印象の強い異國趣味のものだつたのが寫眞の不鮮明な爲全く原畫の風韻を失つて了つたのはこの上もなく殘念に思はれる。畢竟私はこの「思ひ出」に依て、故郷と幼年時代の自分とに潔く袂別しようと思ふ。過ぎゆく一切のものをしてかの紅い天鵞絨葵のやうに凋ましめよ。私の望むところは寧ろあの光輝ある未來である。而して私の凡ての感覺が新らしい甘藍の葉のやうに生いきと強い香ひを放つてゐる「刹那」の狂ほしい氣分のなかに更に力ある人生の意義を見出すことである。終にたつた一人の愛する妹の爲に、その可憐な十の指の何時までも細くしなやかならんことを祈つて置く。

TONKA JOHN.

一九一一、晩春、
東京にて。

（思ひ出序文）

桐の花小品

桐の花とカステラ

桐の花とカステラ（フルート）の時季となつた。私は何時も桐の花が咲くと冷めたい吹笛の哀音を思ひ出す。五月がきて東京の西洋料理店の階上にさはやかな夏帽子の淡青い麥稈のにほひが染みわたるころになると、妙にカステラが粉つぽく見えてくる。さうして若い客人のまへに食卓の上の薄いフラスロの水にちらつく桐の花の淡紫色とその曖昧のある新しい黃色さとがよく調和して、晩春と初夏とのやはらかい氣息のアレンヂメントをしみじみと感ぜしめる。私にはそのばさばさしてどこか手ざはりの澁いカステラがかかる場合何より好ましく味はれるのである。粉つぽい新らしさ。タッチのフレッシュな印象、實際觸つて見ても懷かしいではないか。同じ黃色な菓子でも飴のやうに滑つこいのはぬめぬめした油繪や水で洗ひあげたやうな水彩畫と同樣に近代人の纖細な感覺に快い反應を起しうる事は到底不可能である。

新樣の佛蘭西藝術のなつかしさはその品の高い鋭敏な新らしいタッチの面白さにある。一寸觸つても指に付いてくる六月の棕梠の花粉のやうに、月夜の溫室の薄い硝子のなかに。絕えず淡綠の細花を顫はせてゐるキンギン草のやうに、うら若い女の肌の彈力のある軟味に冷々とにじみいづる夏の日の冷めたい汗のやうに、近代人の神經は痛いほど常に顫へて居らねばならぬ。私はそんな風に感じたいのである。

＊

短歌は一個の小さい綠の古寶玉である、古い悲哀時代のセンチメントの精である。古いけれども棄てがたい、その完成した美くしい形は東洋人の二千年來の悲哀のさまざまな追憶に依てたとへがたない悲しい光澤をつけられてゐる。その面には玉蟲のやうな光やつつましい杏仁水のやうな匂乃至一絃琴や古い日本の笛のやうな素朴な Lied のリズムが動いてゐる。なつかしいではないか。若いロセッチが生命の家のよろこびを古いソンネットの形式に寄せたやうに私も奔放自由なシムフォニーの新曲に自己の全感覺を響かすあとから、寥し

い一絃の古琴を新らしい悲しい指さきでこころもちよく爪彈したところで少しも差支へはない筈だ。市井の俗人すらその忙がしい銀行事務の折々には一鉢のシネラリヤの花になにとはなきデリケエトな目ざしを送ることもあるではないか。私はそんな風に短歌の匂に親しみたいのである。

＊

その小さい綠の寶玉はよく香料のうつり香の新しい汗のにじんだ私の掌にも載り、ウイスキイや黃色いカステラの付いた指のさきにも觸れる。さうして時と處と私の氣分の相違により、ある時は桐の花の淡い匂を反射し、また草わかばの淡綠にも映り、或はあるかなきかの刺のあとから赤い血の一滴をすら點ぜられる。

私は無論この古寶玉の優しい觸感を愛してゐる。のみならず、近代の新しいそして纖細な五官の汗と靜こころなき青年の濃かな氣息に依て染々とした特殊の光澤を附け加へたいのである。しかし私はその完成された形の放つ深い悲哀を知つてゐる。實際完成されたものほどかなしいものはあるまい、四十過ぎた世帶くづしの仲居が時折わかい半玉のやうなデリケエトな目つきするほどさびしく見られるものはない。わかい人のこころはもつと複雜かぎりなき未成の音樂に憧がれてゐる。マネにゆき、ドガにゆき、ゴオガンにゆき、アンドレエフにゆき、シュトラウス、ボオドレエル、ロオデンバッハの感覺と形式にゆく。かの小さな綠玉（エメロード）の古色は私がそれらの強烈な色彩の歡樂に疲れたとき、やるせない魂の餘韻を時としてしんみりと指の間から通はすだけの事である。卽ちかりそめの病に飲む一杯の古いシャンペンの味である。

＊

私の哀しい Nostalgia がまた一絃の古琴に偶と微かな月光の如くつかずはなれず付纏ふ時に、ある若い人達の集團はこれを唯一の樂器として、行住座臥、凡ての淸新な情緒と凡ての苦い神經の悅樂とを委ねて滿足してゐる。新人の悲哀は古い詠嘆の絃に上せて象徵の世界を觀照すべくあまりに複雜であり、深刻であり、しかも傷ましいほど强烈である。わが友よ、古い器樂の悲哀を知れ。さうしてその幽かな哀調の色に執し過ぎて些かだにその至醇なる謙讓の美德を傷つくるな。

ある時はビーヤホールのかたかげにそのつつましい音色を懷かしむこともある。しかし私には白晝の夏の光のふりそそぐ日比谷公園の音樂堂の上に、凡ての滿足と充實した凡ての生の歡喜とを以てその古琴獨奏の矜を衆人の目前に曝すだけの勇氣はない。そはあまりに無慘である。新人よ、汝の意の赴くままに、汝の心境の移りゆくままに、ある時は新しい戲曲に、小說に、バントマイムに、秋の日のはかないロマンツアに、太棹に、匈牙利古曲に、ピアノソロに、或は管絃樂の高き調にゆき、銀笛を吹き、道化た面して玩具の微琴をもう

ちたたけ。さうして時々その古い一絃の古琴のうへに疲れた汝のしなやかな白い手をさしのべよ。遊び盡くした小鳥の日暮れて古巢の梢にかへるやうに、日光と快樂とに倦んだ心のさみしい燈心草の陰影をとめるやうに。

＊

古い小さい綠玉は水晶の函に入れて刺戟の鋭い洋酒やハシッシュの罎のうしろにそつと秘藏して置くべきものだ。古い一絃琴は佛蘭西わたりのピアノの傍の薄靑い陰影のなかにたてかけて、おほかたは靜かに眺め入るべきものである。私は短歌をそんな風に考へてゐる。

さうして眞に愛してゐる。

＊

私の詩が色彩の强い印象派の油繪ならば私の歌はその裏面にかすかに動いてゐるテレビン油のしめりであらねばならぬ。その寂しい濕りが私のこころの小さい古寶玉の綠であり、一絃琴の瀟洒な啜り泣である。

私の新しい、デリケエトな、素朴でソフトな官能の餘韻はこの古い本來の哀調の面目を傷けぬほどの弱さに常に顫へて居らねばならぬ。

さうしてしみじみと桐の花の哀亮をそへ、カステラの粉つぽい觸感をも加へて見たいのである。

＊

單なる純情詩の時代は過ぎた。私らは單純な情緒そのものを素朴な古人のやうに詠嘆することに最早や少からぬ不滿足を感ずる。赤子の如く凡てをフレッシュに感ずる心はまた品の高い文明人の澁いアートに醇化されねばならぬ。私は涙を惜しむ。何らの修飾なく聲あげて泣く人の悲哀より一木一草の感覺にも靜かに涙さしぐむ品格のゆかしさが一段と懷しいではないか。實際、思ふままのこころを擧げてうちつけに搔き口說くよりも、私はじつと握りしめた指さきの微細な觸感にやるせない片戀の思をしみじみと通はせたいのである。

鳴かぬ小鳥のさびしさ……それは私の歌を作るときの唯一無二の氣分である。私には鳴いてる小鳥のしらべよりもその小鳥をそそのかして鳴かしめるまでにいたる周圍のなんとなき空氣の促へがたい色やにほひがなつかしいのだ。さらにまだ鳴きいでぬ小鳥、鳴きやんだ小鳥の、幽かな月光と草木の陰影のなかに、ほのかな遠くの櫻の花の甘い臭に刺戟されてじつと自分の悲哀を凝視めながら、細くて赤い嘴を顫してゐる氣分が何に代へても哀れふかく感じられる。私は如何なるものにも風情ある空氣の微動が欲しい。そのなかに桐の花の色もちらつかせ、カステラの手ざはりも匂はせたいのである。

＊

私の歌にも欲するところは氣分である、陰影である、なつかしい情調の吐息である。

（小さい藍色の毛蟲が黄色な花粉にまみれて冷めたい亜鉛のベンチに匐つてゐる……）

私は歌を愛してゐる。さうしてその淡綠色の小さい毛蟲のやうにしみじみと私の氣分にまみれて、拙いながら眞に感じた自分の歌を作つてゆく……

＊

五月が過ぎ、六月が來て私らの皮膚に柔らかなネルのにほひがやや熱く感じられるころとなれば、西洋料理店の白いテエブルクロスの上にも紫の釣鐘草と苦い珈琲の時季が來る。

私はこのいつもの詩のやうになつた Essay を植物園の長い薄あかりのなかでいまやつと書き了へたところだ。

晝の思

六月が來た、なつかしい紫のヂキタリスと苦い珈琲の時節、赤い土耳古帽の螢が萎え、憂鬱な心の繪絵がかやつり草の陰影から啼き出す季節――さうしてやや蒸し暑くなつたセルの着物の肌觸りさへまた何となく棄て難い今日此頃の氣情るい快さに、ふつくらと輕いソファに身を投げかけて、物憂げに煙草をくゆらし、女を思ひ、温かい吐息と、眞晝、マグネシヤの幻光の中に幽かな黄昏の思想を慕ひ、恍惚の薄ら明りを待つ若い男の心程悩ましいものはあるまい。

零時二十三分、日の光はヴェニス模様の色硝子を透かして窓掛の浮織を悩ましし、人も居ない珈琲店の空椅子には今恰度眞白な猫がまるで乳酪の塊のやうにとろみかけてゐる。さうして誰が喫みさしたのか、眩ばゆい食卓の一角から散らかな珈琲の吐息がたちのぼる。

珈琲、珈琲、ひとりでにわれとわが心の匂を温め乍ら、やはらかな紫のいろにたちのぼるその吐息、病ましい物思の何とも捉へどころのないやうなその香煙の縺れを、懶けた身の起き伏しに、何といふこともなく眺めやる晝の男の心持、また送げてゆく「時」の後手（おくれ）をも恍惚と空に凝視むる心持……

ゴッホの狂ほしい外光の痛さ、ゴウガンの粗い生そのもの

の調色、或はマチスやピガソ、物を角に見るキュビストの新らしい神經の觸覺よりもかういふ日の疎ましい懶けものの心にはあのルノワアルなどのふくよかな色の溫味と惱ましい息づかひの魅力、さうしたものの美しさがどれだけ豐醇な親しさと懷かしさとをおぼえさせてくれるか知れない。

珈琲の煙はまだ消えもやらずにたちのぼる。やや疲れたらしいやうなロオデンバッハの物おもひ、美しい寶石商人の溜息、ボオドレエルの苦笑ひ、或はレニエ、サマンの曇りと優しみ、それらを一つにしてたちのぼるわが珈琲の香ひの強さ、なつかしさ、心もとなさ、苛々しさ……何よりも藝術の粹を慕ふ私の心は渾然としたその悲念のとろましさにわけもなく苛められ、魅せられ、ひき包まれ、はたまた泣かされる。さてはあの怪しい沈默の秒刻に譬へやうもない靈魂の獻欷をかりそめにも聽き逃さなかつたヴエルレエヌの純一な氣分も恰度デリケエトなかういふ心持では無かつたか。

珈琲の煙はとりもなほさず心の言葉である。匂である。色であり、音樂である。さうして澁くて苦い珈琲末は心の心、靈魂の生地、匙は感覺。凡て溶かして搔き廻す觀相の餘裕から初めてとりあつめた哀樂のかげひなたが軟かな思の吐息となつてたちのぼる。もの思はしい中に限りもない色と香の諸相をひき包んで六月の光線に美しい媚のあや糸を縺らす苦い珈琲の風味は決して自己を忘れたロマンチックな空の幻でも單純な甘いセンチメントの嘆きでもない。眞實珈琲から珈琲の煙が立つやうに内心の深みから素直に心の吐息を搔き立たせてその融合渾沌のさかひに怪しい藝術の矜持と魔力とを物靜かに薫らし得る純一な詩人の歡會はまた何にもかへがたい秘密の妙諦である。世に天才の名を恣にする人達の間にも眞眞言にわが靈の匂を知り、言葉のかげひなた、ものの媚、色あひ、幽かな色觸香響の末の末まで嗅ぎわけて常に怪しい悲念にかき暮れ得る高貴な心の所有者は極めて少ない。まして世のつねのかいなでびとが心をや。藝苑の中にしてなほ荒削りの珈琲末を悦び、但しは心と言葉の距離徒に遠くしてそのみなもとの苦き香氣を忘れたつやもない思想家と僞りものの工人の世には多きよ。

珈琲、珈琲、珈琲の煙はまだ冷めもやらずにたちのぼる。紫いろの息づかひ、ロダンの線畫……

乳酪の猫がまだ夢みるやうにその光つた尻尾の尖の細かな綠色の痙攣を凝視めてゐる。窖のやうな入口からくわつと明るい銀座の通が見える、白日の輝き、濡れた舗石、柳の葉、そのかげの赤い草花の鉢、寄せかけた自轉車の銀の輪……

目に見えぬ空の何處かで花火が揚る。

そのうちにやや陰影の曇りを煙らした室内の光に懶けはてた私の物思が今はもう珈琲の香ひにさへ堪へがたいほどの疲れをおぼえる。さうしてただそこはかとなくアンダンテの夢

の調子に墮ちてゆく。

私は思ふ、男をんなの夏の中夜の秘戯（たはれ）をかういふ晝の惱ましさにかろく描きつづけてゐた歌麿の氣持、まだ暮れもやらぬ晝の舞臺に黄色いランプを點す若い女形の心持、白芥子の花に纏る晝の幽靈、投げやりな晝間の三味線、湯上りの肌に匂ふあかい石竹、さうして白日の光にうち揚ぐる夜の花火の紅綠・翡翠・土耳古玉・銀光の紫……目に見えぬ星と寶玉の一悲劇、眩耀と消滅の夢。

さうしてまた公園の晝のアーク燈を、白晝のシネマトグラフの瞬き、或は薄い面紗のかげに仄かに霞む人妻の愁はしい春の素顔を。

總じて明るい中の物の瞬き、幽愁の燻し、疲勞と陰影との薄笑ひ、眩暈中の杏仁水、それらから來る寂しさ、悲しさ、懷かしさ、さうした優しさ果敢なさとろましさが私にはあの悲み極まつた純情の嗚咽、あらゆる觀念の寂び、綺羅を鏤めた美しい夜の横顔、或は女王サロメの驕奢を盡した踊の手さばきよりもなほて染々とした歎息の推移を感ぜしめる。

涙を惜め、涙を惜め、高品なわかい心のそこひもわかぬ胸の秘奥に啜り泣けよ。芭蕉の寂びはまだうら若い私達が落ちつくところではない。少くとも世を樂しむメエテルリンクの悲愁と神秘な蒼い陰影の靄の中に寂しい心の在所を探す物馴れぬ stranger の心持、その心を私は慕ふ。

乳酪の白い猫が幽かに鮮をかきはじめた。その時私も靜かに女を呼んで一杯のウオツカを求める。この晝の暑さに無色透明なウオツカが小さなリキュグラスを透かして冷たい蓮を立てる。その投影が又プリズムのやうに、頁を開いてあるモウパッサン集の黑い活字にこまごまと果敢ない染色をちらつかす。

ふと點の赤いiの字がひとつ眼につく、それが物憂げに動いて上の行の Chambre の b の字に匍ひ出し、しんみりと蒼い光を立てて斜めに Les enfants の F を横ぎりもひとつ上の行の Passion の P に喰ひつくやうに留まつた。螢だ、疲れた小さな螢。點の赤いiの字、その尻を抓むと力のない人靈色の燐光が怪しい濕りを放つ。私は何時かしら幼い少年の日の心に歌つた「おもひで」のあの螢の一聯を思ひ出した。

そなたの首はトランプの
赤いヂャッグの帽子かな、
光るともなきその尻は
感冒（かぜ）のここちにほの青し。
しをれはてたる幽靈か。

透き徹つたウオツカと螢の赤い點、その冷たさ惱ましさ、私は染々と晝の螢に執着する。さうしてその銀の燻しをかけた蒼白い哀傷の光を愛する。

業平の高い調はまさに感じ易い夜の螢のセンチメントである。私達は時としてその纖細な平安朝の詠嘆、乃至は純情の雅びやかなる啜り泣き、若くは都鳥の哀怨調に同じ麗らかな心の共鳴を見出す事はある。然しなほ若い近代の藝術にはまだその上に堪へがたいセンジュアルな日光の觸覺と澁い神經の瞬きとを必要とする。鏽銀の晝の燻しを必要とする。さもなくばアーク燈の眩ぶしい光のかげにあるかなぎかに飛ぶ夜の螢の憐光を闇の夜のそれよりも更に哀れぶかくやるせないものに感じなければならないのである。

午後二時過ぎ、螢はいつのまにか珈琲椀のかげにかくれて白い頁の Passion の P の字のみが強く光り出した。

乳酪の白猫がまだ睡つてゐる。晝寢から覺めた料理人が今また青い甘藍の球でも拷ぎとるのか、厨の方で新らしい野菜のにほひがすずろぐ。さうして水道栓の水の滴り、誰かしら吹き鳴らす晝の銀笛……

私の氣まぐれな聯想はまだ鮮な郊外の景色に手を振つてゆく郵便脚夫の白い帽子に飛んでゆく。ゴッホの野外の景色、段々畑の銀綠色に雨の霽れ間の郭公が啼き叫び、白い葱の花のかげから出臍の兒が裸のままで笛を吹く……

凡ての因襲から放れ、馴れ過ぎた官能の愛着を斷ちきり、さうして更に新らしい驚異の鋭感にやるせなきわれ自らの靈を慄かす近代の心にもなほありしそのままの聲音に郭公は啼き、寂しい日本の笛は鳴る。ただ感ずる詩人の觸覺と、周圍の氣分の如何に依て古くも珍らしくも聽きなされるのである。

笛は鳴る、夜の笛より晝の音色の侘しさを、公卿の物の哀れよりも彌さらに病兒の溫かいその吐息を、私の神經は悲しむ。さうして葱のあたまに縺るる白い羽蟲のやうに羽搏く。

笛の音は何時の世までも滅びない、日本の笛の哀れさも如何なる人の心にも染み込んでゆく。その笛本來の幽かな弱い寂しさは誰しもの胸の中に生れながらに秘められた純情のなげきである。高貴な内心の啜り泣き、やがては奔放限りなき管絃樂のそのみなもとである。

そのみなもとを悲しめ、さうして至醇なそのみなもとの歌の氣稟をかりそめにも傷くるな、笛の匂を知れ、完成された大和歌の心根に更に悲しい銀光の燻しをかけよ。ただ懷かしいその笛に強ひても殘虐な煤煙の濁りと工場の鐵の響を吹きかけるな。

私はただ馴れ過ぎた俗人の詠歎を忌む。されば日本の笛を取る心もちにもなほ鮮かな stranger の驚異と感觸を貴み、目白僧園の鐘の音にアベマリヤの晩鐘を忍ぶ以太利亞旅人の春愁を悟り、異國の菊の香に新らしい流離の涙をそそぐピエルロチが秋の心をまたとなく懷かしむ。私はまた梅の木に鳴く鶯よりも腦病院の窓に鳴く鶯に泣き、定齋の軒みに驚く鶯に

連れて驚く。有明の月に血を吐くほとぎすの悲歎を曾て見知らぬ私は、寧ろキャベツ畑の雨に啼く郭公を樂しいものに哀れみ、昔ながらの古い前栽の繁みに飛ぶ螢よりも客待の人力車のかげに仄かに蒼白いお灰のパッチを光らす東京の螢をこの上なく今の心に親しむ。さりながら凡ての因襲から逃れて常に新らしい官能の薄明りにわれとわが靈の在所をたづねゆくわかい旅人の心にも思ひ棄てがたきは日本の笛のあはれである。哀みのそのみなもと、純情のかの吐息である。

時が經つた。いつしか黄ばみかけた日の光のもとに、薄青いクローバ模様の壁にかけた玩具の木時計が可笑しさうにお尻の分銅を動かしながら今三時を點つ。さうして驚かされた乳酪の塊が椅子の上からすべり下り、料理人が細かに玉葱の庖丁を刻み、懶けたソファの物思が軟かに温かい欠伸をつく。

くわつとした入口の外の明るさ、自轉車が去り、草花の赤い鉢に靜かに煉瓦屋根の投影が輕い塵埃と縺れる。

Cuckoo, jug-jug pu-we, to-witta-woo!
Gristchen, gristchen, tutch, tutch tutch!

鳥屋が通る、くわつと明るい人道を車を曳いて。

Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

車の上の圓い四角な金網作りの、或は竹製の、大小さまざまの鳥籠、その鳥籠が六月の日に搖られながら蒸しかへるやうに光つてゆく。

Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!
Gristchen, gristchen, tutch, tutch, tutch

感覺の小函

いつの日か懷かしいと思つて小窓に据ゑて置いた忽忘草も、青い金剛石花（ダイヤモンドフラワア）も、空色のロベリヤももうみんな枯れてしまつて、小石川の植物園に新たに茴香の花の咲く時節が來た。梧桐のかげに客待をしてゐる人力車夫にも、銀座の横丁に荷をおろすバナナ賣の半纏にも、硝子屋の白い斜面の日覆にも、いよいよ夏らしい強い光が照りつけて、早や日中から張りわたした蟲賣の露店の薄い天幕のかげにも幽かに鈴蟲が鳴きはじめる。なつかしい、然し何となく寂しいやるせない夏、夏はちやうど白い服をきたヒステリーの看護婦の夕方の露臺に出て吹き鳴らすはるもにかのやうに何時も私に新らしい哀傷のたねを蒔かしめる。

敬虔な私のいまの心持は輕薄なワイルドの美くしい波斯模様の色合から薄明りの中に翅ばたく白い羽蟲の煙のやうなロウデンバッハの神經に移つてゆく。靜かな夏の日の獨居が私の心をまた小さな仙人掌の刺のうへに留らせ、黄色い名も知れぬ三ツの花のうへにしみじみと飛びうつらす。このふた月あまり私はただ靜かに自分自身の心を觀照して、燃え狂つた煩惱の花壇から幽かな銀色の蟲の音を拾つてゆくより外に騒がしい周圍の如何なる事情からも禍される事が無くて過ぎた。私の目下の一大事は驕奢な貴公子の生活を羨む事でもなく、また華やかなバンドマンの歌劇を觀にゆくことでもない。さうして無論流行の背廣を着てお馴染のカッフェに苦い珈琲を啜り、リキュールの冷たいさかづきに唇をあつることでもない。おしろいの匂と酒と友人とに離れてからもう既に久しい時が經つた。私はただ獨り薄明の窓側に坐つて縒れからんだ神經の絹糸のもつれをときほぐし、ある冷たい硝子のフラスコのそのたよりない皮膚の上をつつましやかに匐ひ廻る小さな細蟻の感覺に心をあつめ、いかにしてまた西洋葵の花瓣の上に悲しい一日の歎きをとんぼがへりさせるかといふ、たつたそれだけの謙遜な心に眞實私自身を洗練して、品の高い陰影の微光のなかに幽かに思想の芽をひらく、譬へやうもないその美くしい歡會の時の來るのを待つてゐる。

近代の傷ましい惱みからぬけいでて純なる小鳥の心にたちかへれよ、たゞ自らを僞るな、涙を惜しめ、さうして美くしい小さな冷たい綠玉（エメロード）のごとく常に悲しい光に息づけよ。若しわれと己れ自身を僞つたなら、白い鷺鳥は蟾蜍となり、黄金の匙は怪しいニッケルのナイフとなり、酒は酢となり、きりぎりすは蚯蚓となり、戀人の美くしい眸は忽ち賤しい波羅門の腕環にはめられて一生を淺ましい脂汗と怪しい畜類の臭ひに汚されて了ふであらう。

暑い夏の日に涙をながし、さうして身のうちによそならぬ

わが汗の臭ひを嗅ぎ、なつかしい自分の命を、人よ、汝がしみじみと思ひ知りえた時、微かな夏と心との感覺をわれとわが指さきによせあつめて浮彫の寂しい小さな白金の函のなかに入れ、さうして蓋をかたく閉して、幽かな薄明の中にさし置けよ。さうして寂しさに堪へかねた時、その上に薄いリキュグラスをのせ、強いウヰスキーの少量を注げ、その黄色の漣が幽かな陰影の刺戟を顫はせて白金の微光に投げかくると き、封じられたすべての哀傷が恰も冷たい鍼醫の銀針のやうに、或は黄綠、青紅、樣々の光澤と信實ある結晶の涙を湛へた美しい寶石の音譜のやうに、初めて底の底から洗練され命づけられた感覺の啜泣きを幽かに幽かに不可思議な夜天のパノラマに傳へるであらう。

私はうらわかい寶石商の涙をよく知つてゐる。さうしてあの天才のラムボヲを嫉かして寂しい商人の群に驅り立てた怪しい寶石の心を、誘惑を、譬へやうもない美くしいその魅力を悲愁をよく知つてゐる。さうしてまたオスカアワイルドやヴエルレエヌを牢獄の底に泣かしめた悲しい耽美の心意氣をも、青玉の露をふり落す葦の葉の囁きをも、カアネエションの花を恐るる小さな綠蛇の心をも、私はまたよく知つてゐる。

愛人の胸から貰つた小さな青玉の音色は絶えず新らしい私の涙に濡らされてりんりんとあるかなきかに鳴り響く。さうして晝は幽かに、夜は清く、朝は寂しい自鳴鐘のやうに時雨の靈をそそのかしてほのかに白芥子の花に纏る。ともすれば置き忘れたその青玉の眸は微かなタナグラ人形の陰影から小さな玉蟲の眼のやうに顫へて、絶えず移り氣な私の心を氣遣はしさうに熟視める。さうしてオペラの幕あきの合圖の電鈴のやうにとりとめもなくさまようてゐる私の夕暮の感覺をひき戻す。

夏、夏、夏の薄暮は何時もアーク燈の光のやうに薄紫の涙に濡れ潤つたやるせない寂しい微光の氛圍氣を私の心の周圍にかたちづくる。さうして今日のとりとめもない感想も微かな白い羽蟲となつてその陰影の中に閃めきながら、鳴り響く青玉の音色も暮れてゆく……脆弱な心、纖細な絹糸のもつれをかたよせて、私はまた久し振りに、あの銀座の青い柳のかげの白い瀟洒な喫茶店の椅子に寂しい孤獨の身をなげかけて、せめては冷たい一杯のアイスクリームにさらに悲しい哀傷の新らしさも味つて見ようかしら、それともいつものやうに名も知れぬ黄花の三つの花の上に小さな私の靈をあづけて、たつた獨りで何時までも何時までも泣いてゐようかしら、それとも私の小さな涙の玉を赤い西洋葵の上に一踊りとんぼかへりをさして何がなしに笑つて見ようか。……ああとうとう日が暮れて、鳴り響く青玉の音色も暮れてゆく。

(Echizenbori 28. VI. 1912.)

植物園小品

春の暗示

25. III 10.

午後三時過ぎ、

薄黄水仙の淺葱の新芽枯れたる芝生のなかに仕切られたる圓形或は長方形の花壇のなかに二寸ばかり萠えいづ。その幾何學的なる配列のつつましさよ、風微かにかよふ。

水噴かぬ鏽びたる噴水の露盤より靜かに滴る水滴。

溫室前の厚葉シュロランの高きそよぎ。キミガヨランの長きしだり葉に日は光り、南洋土人の頭飾の如くにうち動ぐ。

植物園事務室より出で來りし、若き紳士の紺の背廣に赤皮の靴のやはらかなる、薄黄水仙のほとりをぞゆく。

異國の人來る、男は萠黄のソフトをかぶり、女は緹紅の外套を着け、その後より鮮紅の帽かむりし二人の男女の小兒爽やかに走りゆく。轉づるは French か、ふくらみそめし櫻の二列の並木の間の人道を、枯草の邊りを、青くして低きかなめ垣の長き徑に添ひて、ハリエニシダの花黄なる彼方へとぞゆく。日は黄にして軟かく、冷めたけれども快よき春の風吹く。

とある枯れたる芝生の隅に整はぬ圓形を作り、あまたの迎春花の小さくして色黄なる花葉もなき枯枝に咲けり、高さは人の足もとにうち見らる。

砂敷ける徑のほとり沈丁の花冷めたき風に甘く鋭し。

少年二人カンヴスを手にさげて靜心なく歩みゆく、濡れたる油繪具のにほひ新し。

老綠色の小さき園標に記したる白き文字の淡青さよ。『このおくの下に庭あり。』

暗くして青きインバネスのマワシの下に冷めたく白き指のみ見せて黄なる蜜柑をむきつつ我はゆく……

枝ぶりよきサンシユユの花の小さくして黄なる數かぎりなき哀愁よ、四時過ぎの日光をうけて風に戰げる。

人ごゑきこゆ、女のやさしき砂を踏む足音も……

色淡き、あるは華美なる羽織のちりめんのしとやかさよ。

女の一人は淡青のリボンをぞ髪につけたる。

サンシュユと徑を隔てて向へるツタウルシの木の小さき細かなる花、その枝に毛蟲の繭ひとつ透きて見ゆ。

遠き下町の夕どろき、豆腐屋のラッパ、長く曳く小さき汽笛、鐵板の音。

小鳥ちろちろと鳴く。

濕れる粉つぽくして赤みある黑き土のそこここに、枯れたる小草の淡き淡き乳黃色と、そのなかに萠えいでたる葱色の草わかばの新しき配調を見よ。佛蘭西がへりの若紳士の輕く著けたる意氣な背廣のにほひする。

丁字形の白ペンキの二尺ばかりの立標に W. C. と小さき横文字にて書きたる、そのつつましさに淡紫の花をすりつけて過ぎしは誰ぞ。

日の光は形圓きトベラノキに遮られて空氣冷やかに風うすく、匐ひくねれるサンザシに淡紅綠の芽は蕾み、そのもとに水仙の芽ぞ寸ばかり地を抽きてうち戰ぐ。とある小枝に寥しくして忙しき小さき白粉色の蜘蛛のおこなひよ。その絲の色なき戰慄……

銃の音一二發……

眼をあげよ。今、くわつと明りし二本の楠の梢を、サンシュユの黃なる花の光を、枯草の色を、淡青きヒヤシンスの芽そこらに聲したる人もはや去りぬ。

鳥は園の周圍に鳴き、園丁の鍬に掘りかへさるる赤土のやはらかなあるかなきかの濕りのなかのわかき新芽のにほひよ。冷めたけれども力あり。

老綠色の足もとの小さき隅標は日にそのさみしき半面をあてたる。その淡青き白き文字のかすかなる黃なる反射よ。『園內の草は自生といへども摘み取るべからず』云云。

椽の枯木のもとに晝架を立てたる青年畫家は、靜物の硝子杯と皿と水ざしと醋ゆき林檎とを描きくづしたる古カンヴスの上に、まづ新らしき樹の幹の White と Blue とを塗りはじめたり。すでに暮りそめたる夕日は彼の男の描けるサンシュユの黃なる枝の花に、そを見る齒痛の人の顏一面に卷きつけたる白き繃帶に、わがむく蜜柑の皮の黃橙色にさみしく光りつつあり。わが歩みは檜の日かげより丘のはづれの小亭へ、その傍の徑を下りて睡蓮科の生ひ涵れる小さき池のほとりへゆく。

日の光はここにて淡き黃綠となり、冷くして透明なる水は薄らに顫へ、汚なきココア色の泥のなかに蠢めく蟲ありて、水草のかげに油すこし浮く。そのうへに八つ手のやはらかなる乳金色の花穗はこの小さなる領內にうらわかき貴公子の如く佇めり。

三分ののちわれはまた廣き池のほとりの老綠色のベンチに

腰かく。園丁來りて踏板の上に並べほしたる靴ぬぎの汚れたる毛をはたく、チョコレートの如き埃立つ。

ここをまた蜜柑むきつつ日かげを厭ひて我はゆく……

Tobacco と白く拔ける煙草の赤き紙標見ゆ。敷島を買はんとて寥しき賣店に入るほどの饑ゑたる心と、ひとりあるきのなにとはなき哀愁に日も暮れんとするさみしさよ。

また小亭のベンチの老綠色のつつましきまでのなつかしさ。一人ゆきて休みたる十分ほどの靜けさは獨身のわかき男ならでは味ひ知らぬ憂愁の境ぞかし。この間に華美なる姿して金緣の眼鏡かけたる Blue-Stocking の輩二人三人淡紅の梅花のもとをゆく。肉色のクリームの如き梅の花は厭ふべし。かのわかき女の冷めたき白齒と、はしたなき English の會話とはことに興なし。我はただ花下の若草の上を日光の匐ひ來りてかなたの小さきベンチの脚に射せる淡黃綠のあるかなきかのかげのみを見つめたり。

マチ擦すれば火は風に消えて卷煙草のけむり一すぢのぼるほどにさみしき鐘は鳴る……盲啞院晩餐の鐘。

小石踏みつつ後を通る紳士の右の手にもてる新聞紙の包はや薄青し。

太く細き汽笛……新築中の槌の音……街の小兒らの聲……わが遂に歩み入る竹林の青さ、日かげは灑されて新しく、わがインバネスに、ノートの罫に、徑を超えて空木の幹にて衰へ、キンギンボク、毒ウツギの青き葉は暮れやらぬ陰影のなかにありて小砂利のあかりに鋭く嘆く。

猫柳のほやぼやは銀紫にして、その下の廢れたる地の面には沈まんとする太陽の半圓浮び、そが黃にして赤き光薄れ搖らぎつつ青みを帶べる銀の冷たさに擴がる。

豆腐イ……豆腐イ……

テウチ胡桃の淡紫の幹——坂をのぼりきりたるところより貯藏庫（柑子類の植物を入れたる）の煉瓦壁見ゆ。いつもいつもわが歩みの目標となる軟かなるその壁の色はまだ芽にいでぬ藥草のにほひ痛き畑のあなたに暮れゆかんとす。

植物園の鐘鳴る。

事務室の邊より四十ばかりの憐れなる女、淡青の風呂敷包を背に負ひ、手には粗末なる蜜柑函を持ちて歩み來る、木材のにほひ空虛なる函に新し、この女西洋館前のだらだら坂を下りゆく時その淡黃にて力なき壁の夕日を振りかへる。彼處には簇立せるシュロランの高き幹黑く、硝子窓にカーテン薄汚なく、入口の扉は半ば斜に開きたり。藁づとの縋めたる色ハヒビヤクシンの傾斜面の暗青色の靜止——短艇の船腹の如き雲灰白色の別館の上に薄れんとし、ヒマラヤ杉ひとり早春の風に戰ぐ、大きなる魚の青き骨のごとく。

そのかげよりまた四十前後の女園丁三人手拭の頰冠りして出で來る。坂を下るとき、そのなかの素足の女半ば青きシラ

ガミススギの蔭にゆきて、青き辨當の包を取り出しながら連のあとより急ぎゆく。

われもまた出で去る。

入口の看守はさみしげに坐り、ユヅリハの葉柄の赤きが暮れんとして、閉さぬくぐりの間よりかなたの街の薄ら明りをさしのぞき……さしのぞく……

溫室觀覽

27. III. 1910.

日曜日。溫室觀覽券の色は紫。

午後二時過ぎ。入口の硝子張のドアを排す。

青い葉の光、水の滴り、硝子屋根の空にも何か鳴りそよいでゐる。

まだ年の若い男園丁が三人、横手のペンキ塗の階段の上に休憩しながら、靜かに何か話してゐる。暗黄褐色の首まであるシヤツ。

女園丁の何か切る鋏の音。靜かな喇叭節。

別室に小さいアンスリヲムの花が見える。その黄橙色の雞冠に日かげが黄綠に射す。

大きなアンスリヲムは赤い血のやうな花だ。水の滴る音がする。

＊

別室。

此處で植物配置圖面を取る。約一時間。

同じく一々の植物に就いて色彩寫生一時間。

日の光が暑い。アンスリヲムの全部赤い花。爪哇産の Vanda

Tricolor の白、薄紫のぼかしの豆のやうな實に蟻が靜かに匍つてゐる。ある蘭花植物の一枚の葉は黴の生えた青天鵝絨の色をしてゐる。古いけれど美しい。南亞弗利加産の Polyantha、ウシノシタといふ名が奇妙だ。タンシチユウが食べたくなる。急にひもじくなつた。日が暮る。詩集の名にしたら一寸皮肉だ。

Cypri Redium とかいふ花の暗黄色の心に、一點の綠が光る、エメロウドのやうだと思ふと、あの子が急に戀しくなる。

＊

又別室に入つて見る。配置圖を取る。

ホザキトケイ草の花が天井の菱形の硝子屋根の内に一列に匍ひめぐつてゐる。赤いつつじ色の蕾。

珈琲樹、一間半、小さい白い花。果實は櫻果の大きさ。Caffea Arabica（茜草科）

ヘンエフボクの葉の暗い青と赤、なほ青い部分がある。

風は悲鳴し、日光はまるで夏のやうだ。

蕃瓜樹（ババヤ） Carica Papaya）南米印度産、果實は人間が食べ、汁液は藥用、葉は家畜が食べる。葉裏に日の光が透いて青い不思議な葉だ。南瓜の葉が間違つて木の上についてゐる。その幹に日が當る。

鳳梨（アナナス）には未だ實がない、葉の長さは一尺七八寸。風が悲鳴し、雲は硝子の上を靜かにゆく。

蟹シヤボテンの蟹大盡、惚れて振られたブラジルの夏の夜の夢。アカリフアサンデリアナの花の穗はから紅の毛蟲大盡。その毛蟲に鼻を寄せると世の中の女があはれになる。

風は悲鳴し、空青し。

＊

又別室に入る。同じく熱帶圖。ここはまるでお祭だ。

センチメンタルの處女キンギン草の花、綠の莖に白い小さい粉の花。

カミガヤツリは八九尺、埃及酋長の婿養子。

御婚禮の晩が大變だ。オホバマツリの薄紫が年增の役。アヂアントム、ガンセキクルメキ、アロエサポナリア、クウキストナロツンヂ、フオリア、大佛草花、シヤボテンタイゲキ、オホバセンネンボクの赤、青、黄とりどりの頭裝りや、腕裝り、耳環、白眼玉、尻ふり踊や蛸をどりの眞最中に、これはどうしたことだ、Serpentinis の蛇シヤボテン、醉へども益々青くなり、この婚禮は俺が不承知だと一寸のたくり廻した風。青い素肌のうねうねに生えた白毛は蟲のごとく、また黴の如く、やや赤らんで、硝子天井の内一面に匍ひ廻る。

月夜のやうでもあり、日中のやうでもある。

風は悲鳴し、空青し。

＊

温室本館。

ここは病氣の宣教師が月夜の病院の硝子戸を敲く氣持。

マルバビロウ、ヘゴ、バナナ、マルハチ、タコノキ、シュロチク、トラフオアナナス、クロトン、ココスオレラセト、ココラオレラセトム、シラタマモクレン、タカワラビ、etc.

日は光れども夏ではなし、暑いと云つても硝子の中、風は吹いても地の下から吹いてくる風。タコノキの青い長葉はサラリンサラサラと鳴りてそよぐが、冷たい植物の心はいつまでもやはり冷たい。

壁の隅つこの大きな赤い如露。黑い嘴の長い如露は上からぶらさがつて、水を滴らしてゐるけれども置去りにされて、四邊には人も無い。この靜物もかはいさうだ。

誰もゐないと思つたらタコノキの葉の向うの蔭に一人ゐる。面の色のさみしい、青みを帶びた乳色のやはらかな盲目の子、まだ十五六になるかならずそれが見えぬ眼をしばだたいて白い點字の本をつまさぐつてゐる樣子。

温室裏では活動の囃子がドカドカブウブウ……。

＊

温室を出る。

温室前の厚葉シュロラン、キミガヨランも淡黃色の本館の壁の前、青く青く際立つて青く暮れてゆく。

暮れてゆく陽は壁と同じ淡黃色に衰へて、やや色失へる蘭づとの群に寂しい光を投げかくる。

椿に紅と白とが蕾んで半ば咲いてるのがある。

樒の花が咲いてる、その花淺黃綠。

紫陽花の芽が青い。その枯枝のひとつに小兒の肉一の足袋がひとつ紐のついたまま掛つてる。

振りかへると、日の暮れ間ぢかくなつたのに、リラシヤララサラと、タコノキの長い細葉が鳴りそよいでる。硝子屋根の溫室の中で、いつまでもいつまでも……

＊

歸り途。

だらだら坂の横手から、疲れた顏の牛乳配達夫、シャツの上に汚ないチョッキをつけ、牛乳の壜を五つ六つごちやごちやにぶらさげて下りて來た。朝の儘誰も飲まない白い牛乳壜、半分腐つて殘つたやつ、飲んで了つた空の壜、白く汚なく取どりに色も寂しく暮れてゆく。もう街には燈が點いてゐる。

春

7. IV. 1910.

午後二時過ぎ。

森田恒友君と丘の上の半開の櫻の下で逢ふ。油繪具やテレビンのにほひがする。

また一人になつて、小亭の腰掛で休む、腰掛の淡藍色が寂しい、剝げかかつてゐるところに春の日が照る。

温室前に支那人が立つてゐる。それが淺葱色だ。

温室裏では、今日も活動寫眞の囃子が行く。

温室の方に行つて見る。

幾何學的な圓形花壇の中に、ヒヤシンスの花が咲いてる。紫と肉色と二種だ。

噴水の前には水仙の黃色い花。

園内をあちこち歩いて見る。

オガタマノキの落花が白い徑を超えて綠の芝生と高い濕土の上に散つてゐる。

紅い椿が咲いてる。

コブシの白い花が枯枝に今を盛りに咲いてる。コブシの花は氣狂じみて、青く黃色つぽい白い花だ。

その下をせかせか洋服の男が歩いて行く。あれも半狂人だ。

いよいよ春が來たのだ。

四月の藥草園

7. IV. 1910.

今日芽ばえした藥草はハリシドコロ（莨菪）ヲケラ（蒼朮）ヨモギ（蓬）ニガヨモギ（亞爾鮮）ツハブキ、ノコギリ草（著草）は一寸弱。

鴉がどこかで啼いてゐる。

ウヰキャウ（茴香）の葉を摘んで見れば青竹のにほひがする。ワレモカウ（地楡）は合歡のやうだ。アネモネ草（白頭翁）は薄紫のふらんねる。ヒヤクブ（百部）の芽はウヰスキイ色。トリアシショウマはサンシュユのやうな葉。莖は七寸ばかりで簇生つてる。お前もやつぱり寂しさうだ。

シヤウブ（菖蒲）の芽は黄綠で、根もとも赤くて新らしいが、イリスは可哀相に尖がすこし枯れてる。あんまり泣いたせいでがな。マンヂシヤウブ（石蒜）は恐ろしい。韮はやさしいほのかな芽。泡盛草もなつかしい。紫蘭は枯れた根のそばにやつと七八分も出は出たものの。風に吹かれてそよそよと。

カニグサ（蟹草）は枯れた葉ばかり。オニドコロの名を書いた附木は泥にまみれて踏み裂かれてる。ニホヒイリスもニホヒシヤウブも花が咲かねば匂も立てず、ウマノスズクサ鈴もつけねば春は名ばかりしよんがいな。

メンマ（綿馬）ヤマゴボウ、カラダイワウ（大黄）トクサ、ハナスゲ、アフドコロ、シユロサウ、マンネンロウ（迷送香）イブキジヤカウにレイジンサウにジネンジョウ。みな青々と綠萌え出たその中に、まだ芽も見えぬカンサウ（甘草）クラウ（苦參）トリカブト（鳥頭）。その外いろいろ名もわかぬ去年の草の、枯草の流石に嗅げば藥草らしいにほひするのがなほいとし。

鴉がどこかで啼いてゐる。
やつぱり春は春だがねえ。

春のゆく日

21. IV. 1910.

午後三時。

山崎、吉井、長田と同行。

櫻は散り盡し、園内の草木凡て一齊に萌え出す。溫室前のムクロジはまだ枯れた儘だ。

事務室の前の梨の花、淡綠の白い花。

溫室前の水仙。ヒヤシンス、とくに萎んで色香も失せてゐる。

噴水のそばの圓形花壇のシネラリヤ。紫、紅、白、さまざまの花、今日の光に強く耀いてる。もう夏だ。

長方形の花壇には行儀ただしく鮮紅の百合に似た花、一莖に一輪づつ、咲いたのもあれば蕾んだのもある。

ハリエニシダの花はまだ黄に匂つて散り盡さぬ。

青みつくした廣場の芝生には多くの小さい花壇がある。花壇の中には白い花、淡黄色い花、肉色の花、腐つた牛乳色の花、芽ばかりの若みどり。

茶店で私達はシヤンペンサイダアを飲む。

蜜柑をひとつ呉れないか。

茶店でも椿の花が散つてゐる、まだ咲いてるのもある。

木瓜の赤い花は土くさい。

斷腸木の新芽はかはいい。

花壇のそばの芝生には園丁がひとり寐ころんでる。

日が光る、眼にチラチラする。空は晴れ渡つて白い雲がむくむくと楠の新芽の上から湧きあがる。

いよいよ夏だね。

丘の下にはタンポポの黄色い花が、まだ咲いてる。

八重櫻が今を盛りに咲いてゐる。

藤の花が蕾んでる。

丘の上には櫻のやうなマルメロの花。

ニホヒウルシ、ニハトコ、ハクウンボクの若芽の綠。

丘の隅この小亭はモクカウ薔薇でいつぱいだ。

楓の花、山吹の花。

ありとも知れぬ木の花なれどあちこちに、薄い綠の花がチラチラ見える。

ヒメウツギの蕾は痛さうだ。

もう夏が來るんだ。燕が啼いてるね。

五月朔日

I. LV. 1910.

今日咲いた花はコマユミの小さい花、針の頭のやうな花。

丘の上のハナスワウの花。うす紅いろの花。

科目花壇のニホヒイリスの白い花。シボリイリスやイリスゼルマニカはまだ蕾。ネヂアヤメは今が眞盛り。薄紫の小さい花、ツリガネスキセンも薄紫。

外に白い花にはニリンサウ。オホアマナ、小亭のそばの白藤の花。

黄色い花にはキンポウゲ、クサノワウ、モチノキの花。ノウルシの鬱金の細かい花。タンポポは矢張り黄色いけれど、もはや春の名殘の白いふわふわの毛。ハリエニシダは新らしかつたが、いつのまにやら凋れかけてる。八つ手の花はすつかり枯れた。

新芽にはヒマラヤ杉の新芽、ユヅリハ、ハヒビヤクシン、カラタチの芽。イタヤカヘデ、ハリギリ、マンサク、アヅキナシ。サハグルミ。ヤマモミヂ、クサボケ、ヤマホウシ。裏白の葉の白楊。萩の新芽のやはらかさ。

シラガミスヰは刈り切られる。

てゐる。けしの葉の青くさいにほひ。日が光つたり、風が吹いたり、遠くから見ても眼がチラチラする。

眞黄色い畑も見える。恍惚となつて曳かれてゆくと、それは私の大好きな黄の花大韮(にんにく)の畑だ。肉の厚い葉に水仙のやうな鬱金色の花、花が數列に並んで一緒に咲き出したのだ。ブンブンうなる聲がする。羽の音もする。そこら一面花粉で眞黄色くなつてゐる。蜜蜂が群集してゐるのだ。

おいらん草も咲いてゐる。

草生の上を歩いてゆく青年畫家のパナマ帽子が痛いくらゐ白い。

楠の花、菩提樹の花が咲き出した。

斷腸木の白い花も咲き出した。

その外、今まで咲かなかつた木の花も咲き出した。アメリカフウ、イタヤカヘデ、ムクロジュ、ツルマサキ、みんな一緒に咲き出した。然しそれは咲いても人が見てもくれない花だ。

サンザシの花は凋んだが、トベラノキの白い花が今を盛りに咲いてゐる。近よると甘い香が非常に激しい。

四十位の女の園丁が四五人、夏の日光の滿ちわたつた草つ原の中で巫山戯ながら大きな聲で歌つてゐる。

愈々これから眞夏が來る。

五月末

31. V. 1910.

午後二時。

空白く霞み、風はこころもち吹く。

うまごやしの花の白つぽさ、それもやや萎みかけてゐる。

だらだら坂の縁(ふち)の綠に、白や淡紅の細かい花が落花のやうに咲きこぼれてゐる。

別館の側のテイカカヅラの花の棚、香ひも甘く薫じてゐる花の棚。恰度山梔子の花のやうな香ひだ。

嗅いでゐると、甘い甘い亢奮　黄色い蕋の密語が蜂のうなるやうにそこここからきこえる。あまつさへ鳥が鳴いてる。むしろ痛い位鳴いてる。鳴くな鳴くな小鳥。……

暫時經つて、異人のやうな洋服の男が二人來て、寫眞器械の函と、三脚とを入れた黑い袋を下げて、裏口のベルを押した。

チリチリチリン……

温室の前には眞紅な虞美人草の一群が咲き出した。

毒々しいまで鮮かな大瓣の芥子。

それを髪の長い男が眞紅な中に埋もれながら油繪具を使つ

六月の花

L. VI. 1910.

今日、咲いてゐる花はオホヒアザミ、小さい黄色い花、それが十位づつ長い一莖の頂上に簇り咲いてゐる。芥子の紅の鮮かな、まだ散らうともせぬ。黄の花の蒜肉菊(にんにぎく)がやはり咲いてゐる。佛蘭菊の白い花の瀟洒なこと、蔬の黄色の新らしさ。

紫苑も咲いた、紫のほのかな花。地中海のほとりに咲いたといふサルヒアの細かな花も紫色だ。カブラバノサルヒアは紫蘇のやうだ。ナミキサウ、ルリタツナミも一二寸のあはれな草だ。その花も同じゆかりの紫いろの玉、萩に似た紫モクシュク、アカツメグサ、中にもうれしいヂギタリス。華魁草はその中でも浮氣な色のにせ紫。

白い花では阿蘭陀ゲンゲ、白ゲンゲ、白玉草、明月草、伊吹虎尾。オホヤマレンゲの甘い花。葵のやうなアマモドキ。木では大麻栗の白い花、ニハトコの花。

黄色い花ではクサノワウ、オホダイコンサウは大方散りつくしてゐる、待宵草の黄と赤も萎れかかつてほのかになつた。ヘルンウダの鬱金の花は鮮かだけどすぐに萎れる。そのほか名も知れぬ花、數かぎりなし。

ムシトリナデシコの紅紫、蟲も殺さぬ面をして咲き澄ましてるその傍で、スイバの鷄冠の紅いこと、つぶつぶの疣までがいやらしい。また紫のホタルブクロ、キンポウゲ、私の國で云ふドド馬ノカチカチ、それも散りかけて今は金米糖のやうな青い實が出た。

まだ咲かぬ花、春のうちに咲いて了つた花、それもいろいろあるなかに、縮緬薄荷、麝香草、香水薄荷、花薄荷など名を聞いてさへいい匂がする。

好いたらしいのは小町菊、羽衣草も天人の五衰が見える。名の風流なのはフウロサウ、ホルトサウ、寂しいのは一輪草や二輪草。福壽草など唐人くさいが矢つ張り日本の花だ、それもとうの昔に枯れて了つた。

木の實では櫻果、つやつやとして若い紳士のカフス釦の夫婦釦そのままだ、草では蛇いちごが紅くなつたがすこしお洒落な小蛇ならお免を蒙る代物だ。和蘭陀苺は盗みに行つて、いつか犬に嚙まれた記憶がある。

六月朔日、これからいよいよ眞夏になる、身丈ばかりの茴香も今にあはれた花もつけよう、ヤグルマカツカウの薄紫も紅みがかつて開くであらう。また色狂者のかんざしのやうな紅花の鋸草も咲くであらうし、黄色い毛蟲のやうな花、オホアハダチサウも泡を立て、嫌な爺の淸正草も髯を生やし、ヨロヒグサも鎧をつけると、しみじみあれが增して來て、黄金草の雜有味に義理も人情も人は忘れる。どうせうき世はヤマ

モモの白い花と結つて了へばいいやうなものの。さうもゆくまい、しよんがいな。

女四種

I

植物園溫室内の午後四時ごろ、入口の扉を排けて二人連の不恰好な女學生が這入つてきた。さうして表情のない顏にこころもち不思議な微笑を湛へて、タコノキや、圓葉檳榔や、ヘゴや、センネンボクの奇異な南洋くさい植物の葉が菱形の硝子屋根を透して青綠に照り反す内と外の光を仰ぎながら、暫らく佇んだまゝ意地悪さうな沈默を續けてゐた。丁度、その時、左手の別室に通ふ水色のペンキ塗のはげた低い階段のところに黄ばんだ日の光がさして、そこから靜かな囁がきこえる、若い園丁の、梔子色の頸まである莫大小のシャツに黑い胸掛をあてたのが三人、のびのびと足を投げ出して休息してゐるのだ。後から四十位の女園丁が喇叭節を唄ひながらバケツに水をたぷ〳〵させて出て來て腰かける。そこから靜かな雲の往來が見える。啞の女學生は右手の室のアンスリヤムの赤い鷄冠のついた奇妙な花の咲いてる方へ重い足を運んでゆく。若い園丁の群はそれを機會に盲啞學校出身の盲目同士が夫婦になつた話、その女の兒の可愛いいこと、それがまた盲人の兒にしては不思議なほど黑い涼しい目をしてゐること、

それからあんな啞の女の執念ぶかいこと。それにある貴族の片輪同士の姉と弟の戀、姉さんが啞で、弟の十五六で夭死した綺麗な薄盲目の若樣がよくこんなシュロチクのかげで、白い點字の本を讀んでいらしつたことなど、それからそれへと新しい案外にロウマンチツクな會話が取り換される。私はそれを聽いてゐるうちに、何だか丈の高い長い葉のサラリンサラ〳〵と戰いでゐるタコノキの彼方側の幹下の椅子に、柔かいフランネルを着て休憩んでゐる如にも思はるゝ少年の、靜かな呼吸をも感じた。白い冷たい十の指の間の愁ふかい感覺……溫室の隅には水のしとしとと滴る音がして、硝子窓のそとには枯艸の間に水仙の新芽が微風に戰いでゐる。啞の女學生はどうしたのだらう、いつまでもいつまでも彼方に行つたきり出て來なかつた。

II

今日も植物園に行つて見た。例の藥艸畑の濕つた黑い土には痛いほど茴香や苦蓬の新芽がにじみ出てゐた。さうしてその傍の徑の向うにコブシの花が半分ほど咲きかけて居るのが目についた。何といふ狂氣じみた花だらう。その青みを帶びた淡黃色の白い濁が見るからにヒステリ性だ。そんな花のかげをよく下町の河岸では油のにじんだ白い胸掛をかけた四十位の髮結さんが被れたやうに通りかゝる。こゝへは支那の女留學生が三人、小さい畸形の足を傷々しいほど持てあまして歩いて來た。さうして一寸立ち留つて何か鈍い口調で話しながら心配さうに額をよせる。その青い光澤のある、黃色い月琴型の顏、淫性な、そして間の拔けた、顴骨が高くて、大きな——病人の靈のやうにうるんで何物をも吸ひよせる强くして黑い瞳。それが日本風の海老茶の袴をつけてゐるからなほさら奇異な感じを起させる。そしてその髮の青いリボンに冷たいけれど快い四月上旬の風が吹く。その三人の支那の處女の危ふげな後姿が私をしてしみじみと未だ見ぬ北京あたりの郊外の頽廢した早春の哀愁を忍ばせる。

III

三月下旬のある日の午前、溫室前の例の人工的な楕圓や長方形の花壇にヒヤシンスや薄黃水仙の芽が二寸ばかり、まだ冷めたい早春の風に微いでゐる邊を虔しさうに、一人の年增が歩るいてゐた。白粉やけのした顏の凛とした何となく意氣な女でした。丸髷に結つてね、目のふちの少し青みを帶びた、そして時々ハンケチを唇にあてゝ小さい咳をして居ました。遠くのオガタマノキの白い花が散りかけた小徑に丁字杖を兩腋に挾んで歩いてゆく一本足の少年の姿が見える。女は溫室の左手の端から硝子屋根の內部に匍ひくねつてゐる蛇シヤボテンの[illegible]毛のある青い[illegible]の[illegible]を[illegible]

り、褪紅色の毛蟲のやうなアカリフアサンデリアナの花穗を見て怖ろしさうに眉根を寄せたりしてゐたが、別に待つてゐる人もないやうな風でした。しと〳〵と絹のやうな小雨が降り出したので最寄の小亭に這入つて、老綠色の金屬性の長椅子に休憩みながら、黑い帶の間から小さい煙艸入を出して、銀の吸口の洒落れた煙管で靜かに莨を吹かしてゐましたがね、私にはその女の素性が何だかわかりませんでした。恰度、沈丁花の一番强く匂ふところで、歩るいてゐる私の心持も何となく濕つぽいやうな、物足りないやうな、さうして甘い潤ひのなかにも苦い底力のある植物園の空氣が何だか病院じみた情調に感じられました。恰かもその女も私も、知合の病人を見舞に行つたとき生憎とその病室に主治醫が見えられたので、診察の濟むまで遠慮して、裏庭あたりをあちこちしてゐる時のやうにも思はれたのです。

IV

ある日の午後、園內のハリエニシダの黃色い花に夕日がくわつと反射する邊から、齒が痛むのか、面中白い繃帶を卷きつけた若い小學敎員らしい男が片眼だけ泣き出しさうに覗かせて歩るいて來た、年增の女をつれてゐる。ほんとに田舍田舍した風の、丸髷の根のゆるい、そして馬鹿に大きな、襟元をはたげた、肉付の厚い、農家の淫奔女のやうな腋臭をたてる女だつた。何處か鈍い顏に安白粉のまだらなのが、懶るさうに足を運ばせながら絕えず身體を男に擦りつけるやうにしてゐた。氣の弱さうな男は涙ぐんで仕方なしに案內してゐる風だつた。さうして雜多な强い刺戟から逃れよう逃れようとしてゐるらしく見うける。女は先刻から無理に溫室の中を見せて貰つたり、沈丁花の咲いてる徑や赤い椿の咲いてゐる下の砂利道を歩るきたがる、のみか、如何にも間延びのした田舍言葉で話しかけてはをかしくもない事に笑つたり、甘つたるい樣子をする。

彼等がサンシユユの高い枝が悉く黃色い細い花をつけて寒さうに顫へてゐる木かげに歩み入つた時。二人はふと新しいテレビン油の濕つぽい臭に氣がついて立ち留つた。若い下手な畫家が生々しい色を使つて赤い椿を描いてゐる。齒の痛い男はその强い色彩や聽きなれぬ油繪具の臭を嗅がされて苦しくて堪らないといふ風だつたが、女が『一寸寫眞を撮つてゐるから御覽なさいよ』と云つてその儘立つたきりなので、泣き出しさうになつてゐる。そのうちに女はそそくさと左の袂を探してゐたが、ボツ〳〵と黑い齒で落花生を嚙りはじめた、無論男の手にも握らせた。

氣の弱い敎育家はいよいよ極りの惡さと齒が痛いのとで涙を流さんばかりに悄氣てゐたつけ。

南海小品

漁村の秋

漁村の秋と申しましても、私の今茲にお話しようとする景情は、特に相州三浦三崎の秋の哀れさであります。

『風の音にぞ驚かれぬる』といふ立秋の趣は、三崎あたりの漁村では少し當つて居りません。始終海を眺めてゐますと解りますが、その頃は何かしら波の穂頭が白く冴えて、それがぴらぴらと小刻みになつて吹かれて來ます。海邊では音を聽かない前に遠い沖の方から吹いて來る風そのものが先づ目に見えて、ああ秋が來たなと感じさせますので、それはその波の吹かれ方から、初めてその風の正體や方向が解つて、驚かされるのです。

私がその漁村の向ヶ崎といふ處に住んでゐた時の事でした。ある日の恰度お午近くでしたが、眺めてゐますと手斧山と城ヶ島の間の海峽を、例の通り三盛丸といふ小蒸汽が緩るい汽笛を鳴らし乍ら、東京灣の方から徐行して來ました。その鋭い角度をした舳に蹴立てられて波の穂が白くあがります、その飛沫の白さが、別してその日に限つて涼しさうな何かの冴えを見せてゐたのです。それでもう秋だなと氣がつきました。まだその頃は隨分と人も泳いでゐましたし、蟬の聲も島と陸とで騷がしいほど啼いてゐました。それでも何となく冷えびえとした物の哀れが目につきました。

空は青く晴れ渡つてゐても、立秋の頃は流石に雲の流からして冴えてゐます。涼しさうに見えます。三崎でもその通り、向うの城ヶ島が次第に近くなつて來ました。無論空氣が澄んでくるからでせうが、今まで氣もつかなかつた細々した島の姿が拭き澄ました二つの眼鏡で覗く風景寫眞のやうに、はつきりと立體的に浮び上つて來ました。重なつて一つに見えたその前の小さな水垂の島の間を置いて、涼しく二つに別れました。木も一本一本、草も一本一本に、戰いだり、搖れて見えたりするやうになりました。波間の岩に鴉のとまつてゐる翼のそよぎまでが手に取るやうに見えて、棹をあげてかぢめ採る舟人の髮までが、つい鼻先に聞えたりします、その

聲までが水に響いて、もうとくに秋が來たのを思はせました。

別して、曉方や日の暮方になると、早くも秋らしい狹霧がかかりました。鳩ぽつぽの薄紫で細かな絹灑のやうな霧でした。それが島や野山の罅裂ごとに煙つて、いいほどの濃淡をつけて棚曳きます。遠くから見ると何とも云へぬいい香のしさうな霧でした。それが時によつて、葡萄色や溫かな淡紅色に燒けます。小鳥がちらちらと翼を細かに羽ばたいて、その中からまだ青い空の上へと翔け拔けたりします。それは春の朧ろげな花曇の趣とも違ひます。何かしら矢張り寂しい秋の狹霧でした。

さうなると、漁村の鄙びた垣根にも白い木槿の花が咲き盛り、まだ實の青い無花果の廣葉や錦木の梢に初めて秋らしい風の音が騷立ちます。鮑や海螺の貝の散らかつてる磯臭い小庭にも赤や黄の怪しげな鷄頭も咲き出しました、つやつやしい紅い雁來紅も破れかけた葭簀を透してまん圓な太鼓腹をはだけて眠つてゐる子供の面までも眞紅にしました。其處此處の鹹からい井戸端には鳳仙花が末方になつて、桔槔のキイキイ響くたびに實が彈けたり、水汲みに來る女どもの無駄話も日增に長くなりました。

その頃です。城ヶ崎の草山や、八景原や、諸磯、油壺の野山に薄紅色の薄の穂が靡き出し、桔梗や女郎花その他の秋草などがちらほらと咲き出すのは。朝など浴衣の裾をまくつて歩いてゐると、其處らの葛の葉や稗草にもいつぱいに玉のやうな涼しい白露が亂れて、ちぎれた草の葉つばなどが、きりぎりすのやうに素股にくつついたり、青く跳ねたりしました。

その頃です、紅い髮の毛を垂れた玉蜀黍がぽきぽきともがれ出すのは。殘暑のきびしい光線の中に蜻蛉が出盛り、段々と畑の胡麻の花も實になり、赤つちやけた枝豆の中に俯向いてゐる麥稈帽の緣の反射までが、如何にも秋らしく光つて見える頃になると、郊外の豚小屋にごろごろ眠てゐる豚の鼾にも幾分の涼しさが見え出し、棕梠の葉のそよいでゐる街道のだらだら坂を駈け下りて來る田舍馬車の喇叭の音さへが何といふ事なく心細く聞えて來るやうにもなります。

晩夏と云つてもまだふさはしい、初秋のある日の事でした。北條入江の奥の遊廓の裏手から、友達と二人で、かなり險しい凸凹の山坂を喘ぎ喘ぎ登つて行つたと思つて下さい。すると驚いた事には下の方から、念佛講の歸途でもあるか、白髮頭ばかりのお婆さん連が七八人、杖をついたり、曲りこけた腰に後手を拱んだりして、えつちらこ、えつちらこと上つて來るのです。シンとした山坂で、しかも上りつめようとする坂の向うは夕燒が眞赤なのです。その中でお婆さんのもごも

ごした話聲ばかりが後から追つかけて來るのです。物凄い何だか怪しな事が起りさうでした。振り向くのも恐ろしいやうな氣がして、せつせと登つてゐると、つい後では、『上見りやそりやきりは無えだがな、下見りやまたきりが無えだよ。』だとか、『地獄に落つるのも因緣じや、ふわふわふわふわ。』と笑ふかと思ふと、『あゝ厭じや厭じや、長生するもんでねえだ。』と溜息したり、『こちとらももう直ぐに御成佛じや、』『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。』と口々に遣つて來るのですから溜りません。やつと上りつめると火のやうに飛び連れてゐる赤蜻蛉に面をうたれてハッとなると其處は眞黄色な粟畑でした。夕燒は赤し、電信柱は赤し、逃げ出さうとすると氣がついたか、『お若いの待たつしやれ、これさ。』と急に淫りがましくなつて、思ひきつた閨房の祕密まで曝け出した揶揄を浴びせかけて、ほつほつと追つかけて來ます。二人ともすつかり恐くなつて二筋道の一方へ逃げると、向うの道に白髮頭の皺くちや面の齒もないもごもごの大口ばかり開けて一列に並んで此方を向くと、

『これさ、あんで逃げるのだあ、婆は若えのが好きじやわよお、ほつほつほ、』

『いゝこと敎へてやるだよ。』

『こつち來お。』

『ふわ、ふわ、ふわ、ふわ、』

『ひやつ、ひやつ、ひやつ、ひやつひや。』

『ふつ、ふつ、ふつ、ふつ。』

一騷ぎ噪いで、私達が逃げて了つたと見ると、また、前に向いて、杖をついたり、曲りこけた海老腰に後手を拱んだり、白髮ばかりの婆さんが七八人、粟畑の中の細い一本道を、『南無阿彌陀佛。』『南無阿彌陀佛。眞直に、お念佛しながら、遙か向うの小松山の中へと消えて行きました。

私達は思はず、ホッとして顏見合せたきり、何にも云へませんでした。

それから十日程も經つてから、夜遲く、私はまた粟畑を通つて港へ下りて行かねばなりませんでした。暗い夜ふけでした。草も木も寢しづまつたと思つた山の畑にたゞ何物かゞ目を醒ましてゐるやうな恐ろしさがそこら中にしんしんと動いてゐました。黍でした。高い黍と黍とが目を醒まして、さらさらと幽かな葉鳴りを立てて居りました、谷底の方を覗くと紅い燈のついた廓の景色が思ひがけなく目の下に展かれてゐます。さうして明るい店格子の中には豆のやうな花魁が一人二人坐つてゐたのです。

『おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ。』

全くこの時ばかりは私は顫へました。

蒼くなつて振り返ると、粟畑です。暗い粟畑の中から聲がしたのです。

『にやあおお、にやあおお……。』

猫だ。と、思ふと私は深ぶかと熟しきつた粟の垂穗の中に二つの金色の眼を光らして坐つてゐる大きな黑猫の姿をハッキリと直覺しました。

『みい、みい、みい、みい、……。』

可哀いい生れ立ての小猫が幾つとなく、又、その下から湧いて來ました。

と、見るとその上の丘の松林の間から細い金の環のついた上弦の月が虔ましさうに差覗いて居たのです。

『にやあお、にやあお。』

聽き澄ましてゐると猫の子は矢つ張り猫の聲をして、生れて啼いてゐました。私もやつと安心をしますと、靜かにその生れて來たものゝ爲に仕合であるやうに、掌を合はさずにはゐられませんでした。

舊曆のお盆になると、日の暮れ方から、向ヶ崎と三崎の入江の兩側に赤い提灯が幾つも並びます。子供達です。東京の子供達はよく『盆、盆、盆の十六日に、お閻魔樣にまゐろとしたら。』と云ふ罪の無い謠を歌つて歩きますが、此處の漁村の子供達は昔からの鄙びた素朴な調子で盛んに兩方から憎まれ口を浴びせかけるのです。私もあまり珍らしい風俗なので觀に行きました。それは可笑味のある飾り氣の無い謠でした。その文句は忘れましたが、大概、『お前の母(かっ)やん貧(びん)つくで。』とか、『父(ちゃん)は祿でなしのぐうたらべえ。』とか、『秋が來たのに袷が無いか。』とか、漁村並の貧乏と卑猥とを洗ひ曝ひ投げ出したものでした。そこいらの子供は全く慘めなものです。まだ汚ごれ腐つた古浴衣を着て、水濹を啜り啜りわめいてゐたのです。面白い事には向う側とは謠でばかし譏り合つてゐながら、此方同志では競り合つたり、喧嘩したり、泣いたり、取つ組み合つたりしてゐました。それでも提灯だけは何れも何れも流石に眞紅な燃え立つやうなのばかりでした。それを何でも、我勝ちに突鼻へ出てうち振るのが一番お得意なのでした。

その頃から金砂子の夜天の景色も愈々澄み徹つて來て、後の丘の中腹に二本立つて葉團扇を擴げてゐる棕梠と棕梠の間から、白い天の河も愈々濃くなつて來ました。さうしてそれが涼しい綠いろの瞳を潤ましてゐる城ヶ島の燈明臺の上あたりから遙かの相模灘の末かけて流れてゐました。その下の三崎の灯がチラチラとお饒舌りしてゐるのも、淫らでゐて引締まつた年增女の哀れさを忍ばせます。赤い夜網の炬火や、汽船の檣の靑い圓燈なども、宵過ぎの灣内を澁い木版刷の寂繪具で引立たせます。たまには、その邊だけ低く一帶に、白い夜霧が引きはへてゐる事もありました。さうした晩には、誰

でも他國の港に宿を求める旅人であつたら聽きたくなくても聽かずにはゐられぬあの荷積の掛聲が、こゝの港でも必ず悲しさうに流れて來ない事はありません。エンヤラサアのドッコイショ、ヨ、エンヤラサの・・・。それが夜が更ければ更けるだけ急き立てられるやうな哀調を帶びて來ます。時とすると、思ひがけない眞暗闇の磯から、おうい大八丸よお、館山丸よおと呼びかける胴間聲などが、シインとした水面に響いたなり、ボシヤンと棹でも取落したやうな音に變つて、また閨寂となる事もあります。夜汐の燐光が秋風の中に益々濃くなつて來るのもその時分からだつたと思ひます。

その頃、私の隣の漁師などは夜の二時頃から小舟を水に引き下ろして急いで漕いで出て行きました。その日ぐらしの貧しい漁師風情では夜の目も眠られないかと思ふと、私も起きて凝と硝子障子を透かして見たりしました。すると暗い海面の上に、通り矢の小島がまだその上にも黑く、その黑い島の上には同じく黑い松の木が一本劃然と見えて、よく觀るとそれが秋の夜風に搖れてゐました。さうした時にはきつと細い二十日ばかりの月がその隙間から覗いてゐます。濕やかな雨をふくんだ小さな雲も薄青い金色に光つて消えてゆきます。さうして、その下から幅の細い金いろの光が一線、きらきらと海面に脚を引いてゐるのです。その金色の波の上を小舟はその水脈を搖れ立たし乍ら沖の方へと漕ぎつめてゆくのでした。しんしんとした舟の行衞です。難有い眞夜中の啓示、それは目の醒めた者のみが窺ひ得るだけです。私はその時、心の底から忝けないと思ひました。虔ましい懺悔の心も湧いて出ました。さうしてつくづくと自分の事をも人の事をも考へて見ました。世の中の事、人としての生き方、慈悲心、さういふ正しい眞純な願や祈りの言葉が、ひとりでに流れ出て來ました。とめどもなく涙がこぼれるのでした。

遠い沖の方では何を釣るのか、出そろつた漁船の漁火が一列に、不知火のやうにチララチララしてゐます。それがまたたまらず心細くさせました。

さうした夜中にも、蟲の音ばかりは、島と陸とでしつきりなしに鳴きそゝつて居りました。一心にです。

愈々秋です。

ひとしきり續いた殘暑が何時の間にかめつきり涼しくなると、漁村の藁葺の屋根の上に來て、どこをどう迷つたものか、田圃の鶉などが啼いてる事もありました。日中も折り重なつた藁葺の棟に、鉢卷だけ白く輝いた赤銅色の漁師の顏がちよいちよい見えて、網を干したり、何やら聲高に話したりしてゐました。さういふ頃には長滯留の避暑客も大抵は引き拂つてゐます。さうして何處の二階からも艶めいた女の聲や、氣まぐれなヴァイオリンのキイキイ聲などもすつかりし

なくなると、一時浮つ調子になつた漁村の氣分も、全く元の鄙びた靜かな畫趣にかへります。さうした道端には眼の弱いお婆さんなどが、よく蓆を敷いた上で襤褸の繼ぎはぎをしたり、針の眼をお日樣の方へ向けて絲を通しそくなつたり、傍で惡戲をする孫や鷄やを叱つたりしてゐました。色々の紅い小旗を挿した盥のやうなものを頭に載せて、女の飴屋が小さな鉦を叩いて遣つて來るのもその頃でした。チンカラチンカラ、それが黃色な秋陽の中で賑やかに囃し立てると、何處からともなく顏の眞つ黑い鼻垂らし共が群つて來て、ウジヤウジヤと蹤いて行くのです。兎角、漁村には子供と猫とがつきものです。

大椿寺と云へば一寸解りにくいかも知れませんが、椿の御所と云へば誰方でも三崎へ行らした方はよく御存知だと思ひます。その石段を上ると、古い煤ぼけた萱葺のお寺に半僧坊と大きく書いた横額が同じく古ぼけて雨曝しになつてゐます。ある日の午後、徒然なままに私はその御所の古跡に行つて見ました。横手の石段をまた三四段上ると、墓所になつてゐて、線香の煙や樒のにほひが、何處の墓所でも同じですが矢張り濕つぽく縛れて搖らいで居りました。日は明るくて、もう小春のやうでしたが、邊はそれでもシンとして居りました。角の缺け落ちてボロボロになつた墓石や亂雜に倒れかかつた卒塔婆の間を肥つた身體をすぼめてくぐつてゐると、私は思はずハッとなつて竦んで了つたのです。猫がゐました。眞つ白な猫が坐つてゐました。一番奥の一番大きな墓石の臺の上に白い芙蓉の花のやうに猫が蹲まつて、凝と海の方を見詰めてゐました。何といふ寂しい、清々しい姿でしたらう。まるで、『秋』といふものが生物になつて息でもしてゐるやうでした。

私も思はず息をつめましたが、氣がついて、そつと此方の墓石の蔭に身體を退いたなり、しばらく向うの樣子を窺つて居りました。仕合せな事には猫の方では恍惚としてゐたのか、何の身動きもしないで、ふつくらと圓くなつた儘でした。覗いてゐると、眞白なその芙蓉の花が靜かに息を吐いて、活々とした光澤を立ててゐます。花の中からは一杯に瞪いた二つの金色の眼が瞬きもしないで何かを見詰めてゐます。怖ろしいほどの寂しさです。私はそろそろと後退りして了ひました。

歸りには門前の石段の上に腰を掛けて、私も表の方を眺めて見ました。草鞋や藁草履のぶら下つた荒物店や、胡麻や小豆や隱元の桶や、干鱈などの竝んだ店屋の間から、明るい物靜かな入江が見えて、入江には壞れて傾いたまま赤い船底を見せてゐる洋風の帆前船や、その蔭を此方にゆつくりと漕いで來る渡し舟やなどが色をつけた司馬江漢の銅板畫のやうに鮮

やかに輝いて居りました。細ごましたところまでよく見えます。影と光りとがはつきりとしてゐます。さうして顔馴染みの年老つた渡し守の風つき、雁首の大きな煙管に莨をつめながら厚い掌に火の玉を轉がしてゐる、これも年寄の漁師の姿などもいかにも漁村の秋といふ氣がしました。烏賊の相場や新店の魚問屋の噂。さうした無遠慮な話聲が入江中に聞える位の聲高さで近づいて來て、どつこいしよ、と着いて一人が上ると、今度は饅頭笠の郵便配達をちよぼんと載せて、舟はまた向うへと離れてゆくのでした。房州船や伊豆船などの檣が劃然と林のやうに透いて見える向うは三崎の街です。不揃ひな、磯臭い街裏の勝手や、何かの黄色い秋草の鉢を置いた小窓や、石垣の上の土藏の白壁などが水にも鮮やかに映つてゐました。警察の棧橋や、そのまた向うの棧橋に秋鮪を舟から揚げて居る四五人の輕子の影までが、全くペン描きの細かな線で動いてゐます。その斜な上に近々と見える城ヶ島の白い燈明臺も、その青い澄みわたつた空の色も流石に秋は落ちついたものでした。

肥後の三角

私はたつた一度、しかも暑い八月の眞晝間、ありふれた他の旅客とおなじやうに、港から港へ、ただ慌ただしく通り過ぎたまでではあるが、何となく懷かしい、恰度いつまでも新しい果物の香の記憶のやうに、肥後の三角といふ名が、今でも私の胸に忘れがたい Intime な思ひ出のひとつとなつてゐる。

それは今もいふ通り、暑い暑い夏の眞盛りである。天草の最南、牛深といふ淫らな船つき場から午前の一時に出た蒸汽が、西瓜と無花果の薫の高い島々の間を、匐ひまはる海豚のやうに、樂しい薄あかりの航路を續けてゐるうちに、黎明となり、朝となり、南方の朱のやうな日の出となり、いつしか本渡を過ぎて、瀬戸内海以上の晴れやかな風光のなかに、遙かに宇土半島の一角を望み得た頃は、もう十時近くの、じりじりと加はつてゆく暑熱に、私達は長い旅の末の疲れに疲れた身體をただだらしなく投げ出して、絶えずシャツの下から滲み出る新しい汗の滴りを氣にせねばならなかつた。

正午、蒸汽が白金のやうな陽光のなかに、ぼうつと汽笛の湯氣を渦卷かせて、海景の濃藍色と紅と、綠金の岬と波の耀きとに、汗ばんだ檣頭のフラフを閃めかしながら、際崎の港へはひる、すぐと、チヤンカラ、チヤンカラ、カラ、カラと錨鎖を

響かしてゐるうちに、西瓜やまくは瓜を爽かに積んだ果物舟が新らしい陸の匂をさき立ててはや四邊に漕ぎ寄せて來た。

蒸汽から上つて、多少の空腹を覺えた私達はつい汽船問屋の傍の石垣から危ぶなつかしいほど汚れてゆらゆらする板の上を渡つて、海面に突き出した浮料理店の廣い一室に入るが早いか疲れた身體をわれがちに投げ出した。さうして上衣を脱ぎ、汗くさいハンケチを抓んでは幾度となくこの暑さから何物かを拭き取らうとした。開け放した明るい海上の座敷に樣々の潮の匂をあつめた微風がそよそよと入る。新鮮な刺身が運ばれる。胡瓜の酢のものが出る。殊に吉野杉の木香のプンとするほど芳ばしい酒の匂ひが火のやうに饑ゑ切つた胃の腑を搔きむしる。私はその酒が自家の「潮」ではないかと思つた。島原、牛深、五島遠くは新嘉坡まで聞えてゐるその酒の匂を柳河からやつと五六十里隔つたこの港のこの料理屋のこの白い盃の中に見出すといふ事は、少くともあり得さうに思はれた。さうして私達は久し振りに舌鼓を鳴らしながら思ふさま熱い晝飯を搔き込んだ。

白い短艇（ボート）がきらきらと櫂（オール）を揃へながら急速力（エビー）を出した。いま日光は數知れぬ銀色の甲蟲のやうに海面の漣に眼まぐるしい翅を響かす。果物舟の西瓜が光り、櫓を操る娘の白手拭が光る。裸の子供が纜つた小舟の縁を走りながらスポンと海に飛び込む。飯が濟んで一旦疲勞を恢復した私達はまた急に氣まぐれに燥（はしや）ぎたくなつた。さうして猿股ひとつになつて、熱いほど乾いた欄干に蹠をつけ、眞逆さまに飛び込んだ。波が動く、半身を乘り出して拔手を切る、その胸から面から、腋の下から濃藍色と綠金と紅とが反射する。——疲れに疲れるまで新らしい海の匂ひを嗅いで廻る愉快さ、私達はさきほど乘り棄てた蒸汽がまた緩やかな汽笛を渦卷かせて天草の方へと引き返してゆくその後姿が見えなくなるまで、白々と光る水脈の中に、くるりと宙がへりして見たり、手足をバタバタさしたり、死んだ蛙のやうに腹を仰向けて笑つたり、白眼をクルクルさしたり、歌つたり、水をぶつ掛けたり、さんざんに悪戯をしあつた擧句、蠣のやうに青みどろな小舟の腹に吸ひ付いたり、底を潜り拔けたりした。

一時の劇しい發作に驅られて、騒ぎに騒いだ半時間後、私達はついその上の赤く禿げかかつた岬のだらだら坂をまたもとの疲れ氣味で辿つてゐた。何處かに萎れた釣鐘草の香ひがする。烏が鳴く、日光が注ぐ——いかにも、五人のわかい旅客が揃ひも揃つて押し擴げた蝙蝠傘の上から、眞青な空の光がキラキラと篩はれて痛いほどふり注ぐ、午後が、南國の蒸し暑い午後が來た。

三角が見える。先頭に立つた一人が坂の頂上から新らしい歡喜の聲を擧げた。私達五人が一齊に岬の小岡に立つた時、殆ど思ひもつかなかつた新らしい海面がつい眼の前に展け

て、際崎の港よりも更に鮮やかな弓形の渚が眞白に線を引いて、その長靴の尖に、青い角錐形のいかにも眼の醒める樣な爽かな島と相對して、小綺麗な三角の港がキラキラとその瓦や白壁を暑い日中の光に耀かしてゐたのである。反射する海の濃藍色、その中に海水浴の一群が新らしい夏帽子を殊に際やかに反射さして聲もなく蠢めいて見え、遊廓らしい一部の二階三階の欄干には赤い夜着が痛いくらゐ光つてゐる。無花果らしい木のいろ、氷屋の旗、汽船問屋の標の付いたフラフ、殘留縞色の染物干場、すべてが南方特有の光と色とを以てわかい旅人の心をそそるやうに新らしい海の微風に濕つて見えた。

この暑い八月の十幾日を、私達は隨分長い旅をしてあるいた。東京から三晝夜汽車に乘りづめにして下の關から門司、博多、柳河、佐賀、唐津、佐世保、平戸、次いではあの懷かしい長崎に二日、その翌日は茂木から海上八里を天草に、天草の富江から海岸の斷崖傳ひに古い切支丹の天主堂をたづね、大江から牛深と、殆ど九州の西部の都會は大半見盡くして來た。さうして殆ど毎夜のやうに酒にも女にも親しんで來た。博多柳町の粹せな女、長崎は圓山の遊廓、あの應揚に優しい昔からの人情風俗のひとはしをも覗いて見た。さうしてたまには葡萄畑の多い大江の切支丹村に、天草訛のなつかしい佛蘭西の教父(パーテル)さんにも逢つて、民家の柱に置してあつた不思議な聖磔(クルス)にも涙を流した。その間にいつとなく身體も心も疲れて、ある人は旅に出る前にほんの些細な事から仲違をして別れて來た最愛の戀人を思ひ出し、皆より十歳ほども違つた年長の一人はその蒼白く窶れた顏を曇らせては時折に東京に殘した妻子を思ひ出す樣な眼つきもした。さうして他の三人のこゝろもいろいろに倦いては、いろいろに動かされて、早くも柳と瓦斯の青いあの銀座の夏を忍ぶやうになつた、然し、まだまだ一人きりになつて我儘な行爲に出たいといふ、さういふ強い心にもなれなかつた。

初めの計畫通り、薩摩へは廻らず、多少歸期を早めたものの、港々の酒と女とに疲れた身體はまた新らしい他の港の酒と女にゆくより外はなかつた。さうしてけふの午後三時の汽船で私達はこの三角からあの淫らな島原へ渡るのだ、島々の上に港町があつて、港すべてが放縱な歡樂鄕で、しかもわかい旅の男に契れば緣が早いといふ土地の習俗から如何なる富家の娘も一夜の宴席に侍するといふ、あの懷かしい島原に渡るのだ。

夏の眞晝間、じつと三角の方を眺めてゐると、靜まりきつた光のかげからカーン、カーンと鉦の音がする。不思議な南方の空と海との美くしさ、私達は恍惚として坂を南に下りかけた。

カーン、カーンと、鉦の音がまたひつそりとした酷熱の空

氣に反響する。

皆が顏を見合せた、さうしてただ默つて疲れた足を運んでゆく、カーン、カーン。カラカラツ、カラカラツ…おちついた鉦の合間々々に、乾らびた木と木との擦れ合ふ音がする。

奇異な思にうたれながら、泳ぎに疲れた懶るい足を引きずり引きずり坂を下つてゆくうちに、私達は三角に續く弓形の渚の一端に出た。さうして私達は今まで恐れに恐れてゐたあるものに突然遭遇(ばつぐわ)したやうに、思はずパッタリと足を留めた、顏が眞蒼になつたのはあながち無果花の青い反射ばかりでもあるまい。

カーン、カーン。カラカラツ、カラカラツ、…

私達の前、濃藍色の海面を背景にして、ついその波打際に粗末な圓天井の見世物小屋がくわつと降り注ぐ陽光のもとにくつきりと濃い陰影を投げつけてゐる。——その木戸の兩側に、人間大の赤鬼と靑鬼とが眞つ晝間の深い心でも睨み据ゑるやうに、淫婦の肉を挽く大きな鋸と、陋しい男の頭蓋骨を打拉ぐ重い鐵の金棒とをてんでんに握つたまま、ぢいつと前面の眞赤な斷層面を凝視めて居るではないか、さうしてその間の札場に、頭のつやつやと禿げた如何にも奇麗な老人が取澄ました風にペタンと坐つて、ただにこ〳〵と微笑んでゐる。

カーン、カーン。カラカラツ、カラカラツ…鬼の念佛の鉦と靜かな機關(からくり)の音。中には誰もはひつてゐないらしい。たゞ汚れた帳の幕がそよともしないで垂れ下つてゐるばかり。赤鬼と靑鬼とが時折かくかくと顎を開く。

「はひつて御覽じやい、地獄極樂の體相(ていさう)。」

御老人がつるりと禿げた頭を撫でて、さうしてまた取澄ました風をしてにこ〳〵と笑つてゐる。彼奴も機關かも知れない。

わかい五人の旅客は默つて顏を見合せた、さうして誰もはひつて見ようといふものもなかつた。ただ默つて三角の方へと疲れた足を引きずつて行く。

ぽうと汽笛の音がする。恰度午後の二時半、やや黃ばみかけた白金色の日光の劇しい光耀の中を瀟洒な白色の小蒸汽が藍色のフラフを揭げて、美くしい角錐形の島と港との間をはひつて來た。

皆はまた顏を見合した。さうして疲れた心のそこから、ああ今晩はまた島原で明すのかと思つて、何となく氣の拔けたやうな、なつかしいやうな、さうして何だかつまらないといふ風に疲れた足を汽船問屋の方へ向けて、ただ默つて歩いて行つた。

河豚

廣重の海に新らしい朝の陽光が滿ちわたつた。緩やかな渚の傾斜面を二條の綱に縋つて、種々雜多の姿勢を取りながら、恰度珍奇な影人形でも見るやうに裸の漁夫の一群が地引網をたぐる。十月はじめ、例の通り涼臺に出てゐると讀みさしの新聞紙をそよがす鹹風の涼しさといつたらない。私は籐椅子からそつと病後の身を起して、庭園の裏手の徑をくだり、さくさくと渚の砂を踏み乍らその爽やかな喧騒の中へ足を運んだ。

やつと長い網の袋が水面を離れると潑剌として惣田鰹の銀と藍とが躍る。その中から綠金色の奇異な魚が跳ねると早速に邪見な漁夫の一人からつまみ出されて海に落ちる。虎河豚はつまみ出されながらプゥと圓く腹を膨らした。水沫の泡の薄く殘つてゐるその白い粒だつた腹に日光が照り反す綺麗さ——赤、黃、青、綠、樣々の色がまるで石鹼玉のやうに變化しながら、刹那に空から水面まで拋物線を描いて消えて了ふ。今ひとつ拋り出された奴は濕つた青砂の上に腹を上にしてプウと膨らす。子供の中の一番意地惡るさうな髮をもぢやもぢやにした、汚ない臭氣の强い奴が竹片や指のさきでいぢめちらす、と、いよいよ怒つて跳ねる、もがく、のたうつ、河豚の身體すべてが神經になつたやうだ。毒あるものほど美くしい、さうして悲しいものはない。さうして一番正直だ。殊にこの河豚の綺麗さはさつき海に投げ棄てられたのと違つて、濃い綠色の背なかのところどころに乳綠の斑點をもつた、眞實軟かな天鵝絨の手觸りに似てゐる。この可憐な奴もいよいよ歎きに歎きつめて腹を膨らしたなり怒り死するかと思ふと滑稽な中に何となく哀れが催してくる。私は落ち散つてゐる青い松の葉をその冷たい口の中に差入れた。松の葉をブツツリ喰ひ切る河豚の悲しみの强さよ。双もので切つたやうに切口が鮮かに日にかがやく。

子供の惡戲をちらと見た貪欲な漁夫は後ろから大誇に近寄つて來て、ガンとひとつ其奴の横つ面を喰はして、河豚を取るかと思ふと、やにはに足のさきで穴を穿つて砂の中へ埋めた。埋めて了ふと砂を搔き寄せて置いて、ただ默つてデロリと睨みかへした儘、また網の始末に取りかかる。

打たれた兒は泣く、日は光る。さうしてそこらあたりの渚一面に河豚が盡く埋められてあるかのやうに、青色の金砂が細かに痙攣する。

私はそつと立ちあがつて踵を返した。これから牛乳とパンと輕るい一杯のベルモットと簡單な朝食の支度がもう私を待つてゐる筈だ。（小田原養成館にて）

パパヤ物語

油蟲

小笠原父島大村、牧師ヂョセ・ゴンザレスの舊宅、今は、內地から移住してゐる若い詩人Kが假寓、その厨房（コックば）の挿話（エピソード）。

＊

麗らかな麗らかな何ともかとも云へぬ瑠璃色の黃昏である。

厨房（コックば）のありとあらゆる靜物は、今日はことに日が暮れても安らかであつた。さうして、ただ在りの儘に、淡く淡く暮れてゆくばかしである。

薄ら明りは流しの上の欄間と、向つて食堂への通路と、同じく開けつ放しになつた庭の方の出口と、この三方から、いつまでもいつまでも夢のやうに忍び込んで來た。

ことに欄間の隙間から青い縞目になつて這入つてくる光のうつくしさ。俎板の上の大きな拷ぎたての甘藍（キャベツ）や皿や肉刺（フォク）などはまるで生物のやうに青い縞をつけられて、今にも躍り出しさうに見えた。

その上にまた、幽靈の手首さながらにいくつも結へて吊るされてあるのはまだ青い小さなバナナの房であつた。

黑く焦げついたフライ鍋や、笊や、菜つ切り庖丁やがその隅つこにあつた。

また向つて食堂寄りの隅の方にも棚がある。その棚に焜爐と、焜爐の上には華奢な銀いろの湯沸が載つてゐた。その背後の藥味や、酢、醬油の玻璃瓶などはもうよほど暗くなつて薄い光の放射だけしか認められない。

出口の外は眞白い砂地である。井戸の白い洗しも向うに見える。砂の白い反射が、今、出口を通して土間にどかりと放り出された大きな野菜籠をくつきりと浮び上らせ、彈ぢきるるばかりに積み込まれた赤いトマトの山をまだ明るく染め出してゐる。

その土間には色々のものが散らばつてゐるやうだが、さだかでない。ただ云つて置きたいのは奥の暗いところに土竈があつて、それに不釣合な大きな鐵鍋がかゝり、鍋の中には驚

くほど仰山に瀬戸物の食器や匙やコップがごつたかへしてゐる事である。これは肺結核の黴菌を殺す爲に、食前に必ず一度はくらくらと煮沸さるべきものとしてある。

それにまだひとつ妙なものがある。それは足の長い小笠原蛸の大かいのがぬるりと一本その上の梁からぶら下つてゐる事である。死物ではあるし、ことに亞熱帶の暑い空氣の中で、風も吹かねば、そよとも動くことではない。何の事はない、逃げ損つた中風の盜賊が片足だけ屋根を踏みぬいて、その儘それなりけりに日が暮れたといふかたちである。

何れも生あるものではない。ただし、凡てが恍惚と暮れてゆく。ただ在りの儘に今しも微かに暮れてゆきつゝある。

＊

この家の家族は若い主人と內地から一緒に來た若い三人の女性と、島で雇つた女中が一人、都合五人である。

こゝに註をして置くべき事は連の三人の女性は皆病人で、二人は肺結核の初期、一人は肋膜炎の徵候がある事である。女中は若いけれども白痴である、眞に健康なのは主人公一人であるが、これが極めて快活で一番無邪氣である。

病氣に對する豫防は十分にしてゐる。眞實で健康な主人は大丈夫傳染りはしないと平氣でゐるけれども、女達がさうはさせない。先づ食前食後には必ず石炭酸で手を消毒する事、食前には又必ず一切の食器を一時間ほど大鍋に入れて煮沸する事に定められてある。女中はのろのろだし、ハイカラのお孃さん達は脾弱で我儘だし、それに煩鎖なかういふ餘計の仕事があるので、三度の食事は中々に時間通りにゆかない。時には一度位は拔かす事がある。それは病人には何でもない事であるけれども、主人のやうに强壯な胃袋を持つた青年には何より慘めな事である。女中もよく食ふ。或は主人以上に食慾は貪婪であるかも知れない。それでこの二人はいつも腹を空かしてゐる。

主人は非常にトマトが好きだ。小笠原のトマトはことに新鮮でまるで鷄肉のやうな味がする。主人はトマトに正覺坊の肉さへあれば御飯なぞはどうでもいいと云ふくらゐである。だからトマトばかり買ひ込んで居る。八百屋もトマトばかり持つて來る。

＊

今日も八百屋がトマトの極上といふところを澤山かつぎこんだ。八丈女の狡猾いあの手んぼうの內儀までが來て、磨古木のやうになつた片方の肘でこりこりと籠の黑い茄子やトマトを搔き廻はしては、無理强ひにいくつもいくつも疊の上に轉がして行つた。

それで晩餐は存外簡單に濟んだ。晝餐が遲かつたので、女達は麭麵とパウリスタアの珈琲、主人は腸詰にトマト、それくらゐにして、それから珍らしく四人でうち連れて外出した。

そのあとは森閑たるものである。留守番の女中までが灯も點けずに出て行つたままだ歸つて見えない。厨房の戸も何も開けつぱなしである、さうして主人から早速しまつて置くやうにとあれほど云ひつかつた大切のトマトも、矢張り籠のまま土間に放り出された儘になつてゐる。

さうして日が暮れた。

＊

時は聖晩餐の夜である。

日曜學校の若い先生アレキサンダア・ゼセ・アカマン・ツウクラブ君は輕い背廣に夏帽子で厨房の前の垣根の外を通つてゆく。さうしてお隣の眞白な教會堂に赤や黃の飾硝子を透かしてパッと燈が點るとバナナ畑を近景にした教會堂の薄明は益々瀟洒な光景になる。先程まで裏の赤い畑に鍬打つてゐた牧師のヂョセ、ゴンザレスも今は黑い僧服に身を改めて、しづしづと椰子檳榔の葉ずれを仰ぎながらその石段をのぼつてゆくのである。

暫らくあつて、お祈禱の言葉がきこえ、靜かに靜かに讚美歌の合唱がはじまる。例のキンキン聲を頭の尖端から出してゐるのは婦化人上部邊理の娘のモデの妹のセデのそのまた妹の惡戲娘のリデヤらしい。この家の三人の女たちの聲もするやうである。

ハレルヤ……ハレルヤ……

その時、厨房の屋根の暗い檳榔の葉裏に何かしら湧いて出るやうな幽かな幽かな響がした。それが次第次第に濃密になつて蕭々と秋雨のふるけはひとなり、響は響に重なり、密集してまた更に四方の羽目にふり灑いでくる……と、梁にぶら下つた大蛸の吸盤のひとつが薄暗い空の中でピカリと光つた。かと思ふとつるつるつると見る間にその光が延びてくる。後から後からと光りながら絕間もなく光つてゆく……蛸が幽かに生きかへつて搖れ出した。と又、俎板の上の甘藍も庖丁も肉刺も籠の中の赤いトマトもフライ鍋も何かしら色が變つて來た。雨の音がそこにもここにもし出した。はては愈々驟雨のやうな響となつて、異樣な動物性の臭氣がそこら一面に滿ちわたつた。

何か異變が起りさうである。

隣ではヂョセさんの覺束ない日本語のお說教が始まつた。

＊

一旦、暗く落ちついた瑠璃いろの空の光は暫らく經つとほのぼのとまた明るくなつてゆくやうである。見る間に明るくなつてゆく。それは檳榔の葉ずれや鳳梨の香のする、砂糖燒酎や、乾草や、腐れたバナナのにほひのする月の出しほの薄あかりである。庭のタマナの葉がてらてらと光り、白い砂地の明りが更に白く潤みを帶びて、風がさらさらとわたると、豆畑や赤い斜面の玉蜀黍の中で鶯がまたささ鳴きをはじめる。

——ヨウ——、月夜闇夜と、ナ、云はずにおぢやれ、いいつもバナナのかあげはやあみい……。

ショメ、ショメといふ八丈節の流しがきこえる、濱はいま太平洋の横雲が霽れて、大方昨夜のやうな麗らかな眞ん圓い大きな大きな月が瑠璃や綠の濱桐や護謨の葉越しにゆらゆらとせり上つてきたのであらう。リデヤの父親の邊理が大きな獨木舟の擢をかついで今また垣根の外を通る。

——Good night.

——今晩は。

厨房の欄間の外が水をうつたやうに靜かになつた。これから晝のやうに明るくなるのである。

ふと、カサカサといふ音がした。甘藍が動いたやうである。月光の下、層み合つた蒼い球葉の間から褐色の大きな光るものが辷り出した。その物は爽かな野菜の香氣を沁々嗅ぎ惚れてでもゐるやうに、暫らく、その水のやうな燐光の中にぢつとしてゐたが、またするすると暗い影を曳いて辷り落ちた。油蟲である。と見ると、見る間に、その油蟲が一つまた一つ、二匹、三匹、四匹、五匹、はては數限りもなく、葉と葉の間から辷り出した。まるで生きた甘藍の心の心から湧いてでも出るやうだ、走り廻る、葉裏へ乘り越す、蕭々とまた厨房一杯に驟雨の來るけはひがする。油蟲が愈々働ひ廻るのだ。

大きな、小笠原特有の油蟲である。内地ののやうに怪しい臭こそ立てないが。居るわ居るわ、屋根裏、羽目、卓子の下、赤い詩集の表紙の上、男女の別ちもなく油さへ塗つてあれば頭の髮の中へまでも、忍び込み、着物け嚙り、菓子皿は嘗める、おしまひには羽を開いて飛び廻る、縱横無盡である。それが今、月の出潮の暗まぎれに時を得顔に跳梁する。

忽ち甘藍が褐色の塊となつた。つるつると光り、ゆらゆらと搖れ、底から無數の微かな音響を立て、輝く光の塊となつて燃えあがつた。動く、動く、一齊に動く。油蟲が動くのではない。生きた野菜が自分から搖めき出したのである。と、俎板が動く。菜つ切り庖丁が動く。ナイフや肉刺はまた豐麗な饗宴の夢でも見るやうに躍り出す、まるで貪り足らぬ人間の「食慾」が亡靈となつて、肉を切り、マカロニを掬ひ上げるかのやうに、それをがつがつ躍らすのである。鍋の中の皿や茶碗は勿論、棚の上の甕味、ソースの罎までが生きかへつたやうに音を立て、手が出、足が出て、夫々一塊の大きな大なき褐色の蟲となつて燃え上る、自分達の重さに傾きかかつた籠の中のトマトは顆顆と一つ一つに羽が生えて轉がり出し、籠までが彈ぢきれさうに勢一杯の力を出して搖めき出した。月の光は愈々らぢゆうむのやうにそれらに新らしい生活力を與へ、露を降らし、素朴な風味と芬香とを灑ぎかける。欄間から流れ込む青いその光が又俎板にいつぱい群つてゐる油蟲の集團

に美くしい幾條かの縞目を搖めかした。その縞目が又絶えず流動し、蠢動する。

靜物の世界が今、色も匂も響も一緒に眞實一念に燃え上がつたのである。

——Tonka John! Tonka John!

甲高なキンキン聲を出して、教會との隔ての垣根から誰やら呼ぶ。女の子の聲である。リデヤだ。

——Tonka John! Tonka John!

垣根を向うからどんどんと敲く。誰も内から返事をする者がない。油蟲の運動がちよとたじろいた。野菜や食器がひたと靜止する。

外は實に麗らかな良夜である。リデヤは垣根の上から眞白な顎だけしやくつて延び上つた。十二三の、鼻の高い、眼の迫つた、髮の赤い、如何にも惡戲者らしい顏付である。

——Tonka ゐないか、いいもの見せようか、Tonka!

Tonka John とはこの家の若い主人の幼な名である。南國の生れで、鄕里が長崎に近いだけ阿蘭陀なまりがあつて、日本人の名にしてはをかしいけれども、ここではその方が調子よく響く、それで自身もこのトンカジョンで通してゐる。この青年がこの島に着いて三日目の朝、人間よりも大きい濱萬年青が並木のやうに續いて、肉の厚い龍舌蘭の叢が强烈な日光の中に滅法界に大きい海蟹の足の如く刺葉を八方に開いてゐる傍で、砂濱に曳き上げられた黑い獨木舟の上に竝んで腰を掛けながら、初めて逢つたその娘は訊いた。

——お前の名は何ていふの、

——Tonka John

——Tonka かい、妾の名は Rydia.

さうして猫のやうに獨木舟を躍り越えながら、

——遊びにおいでよ、妾んとこに白い鶯鳥がゐるよ。

と云つた。さうして手に持つた貝殼をやにはに砂の上に敲きつけると、駈けて行つた。それから、そのリデヤとトンカジョンとは、大の仲善しになつた。

今も Tonka. Tonka とキンキン聲で呼んでゐるが、誰も返事をしない、リデヤはもどかしくなつたか、ヒラリと垣根に攀ぢ上つた。さうして片足を掛けながら、亂暴にも乘り越して來る。髮をお下げに垂らして、ツンツルテンの浴衣を著てゐる、さうして赤ちやんのやうに桃色の三尺を後にダラリと結んでゐるのである。それが片手に小さな龜の子を糸に吊して下げてゐる。

そのまま、駈けて來て、厨房を覗いたが、誰もゐない。食堂の硝子窓を覗いたが誰もゐない。今度は庭を廻つて後から應接間の方を覗きに行つたやうである。

明るいバナナの向うから、

——Tonka. Tonka の馬鹿やい、ヂョネの伯父さんが南洋

から歸つたの知つてるかい、小つちやな玳瑁の兒を見せてあげるから出ておいで、正覺坊の兒なんかとまるで違ふんだよ、ホーラ。

と、今度は裏庭のバナナのかげから、

――ヂヨセ、油蟲の化物、敎會に龜の子持つてたつて、何がいけないんだい、たゞの龜の子ぢやないんだぞ、玳瑁の子なんだぜ、馬鹿、肺病やみ、見てゐろ、お前のとんがり鼻に今に嚙みつかせてやるから、イヒ……

リデヤ奴、中々のお惡戯さんだ。油蟲の化物と云つたので、厨房（コックば）の油蟲は一齊にヒヤリとしてカサカサと影にかくれた。

リデヤが行つて了ふと再び厨房の活劇がはじまる。

＊

野菜や食器の感覺は常に新鮮である。貪婪な油蟲に盛んにその葉や肉心を蠶食されながら、甘藍とトマトは愈々フレッシュな滴汁（しづく）を頻吹（しぶ）き、香ひを放ち、愈々清く哀しくなつてゆく。食器は盛んに嘗められ乍ら、西洋皿は又盛んに犢や雲雀やアスパロガスの種々の豐滿な獻立を愈々白い瀨戸の光澤の上に盛り上げ、ナイフは躍つて腸詰を切り、フオクは盛んに幻想界にそれを突き刺し乍ら、愈々光りに光つてゆく。

月光は愈々厨房いつぱいに圓孤燈のやうな水々しい紫色を浴びせかけた。新鮮と素朴譬ふるものなしである、靜かなこの夜の光の中に殘るところなく照らされて、油蟲は一齊に、全身を極めて神經過敏に顫はし乍ら、活動し、蠢動し、集散し、反撥し、時に鏡のやうに反射し、雪のやうに湧き、燒酎のやうに沸騰し、雨のやうに蕭々と音を降らしつつある。さうして見る間に死んだ大蛸の片足を甦らしめ、又見る間に査古律色の甘藍を俎板の上に躍らし、トマトをつやつやと轉げさせ、脂じみた食器を微細に光らせ、愈々光らせ、舞踏させ、輪舞させつつある。さうして口には盛んに大牢の滋味に舌鼓をうち乍ら、靈魂は幽かに法悅三昧に入りつつある。

かくてまた一時間が過ぎる……

＊

ばたばたと窓の外に足音がした。

油蟲はばつと八方に散亂しながら逃げ走る。ほんの一瞬時である。半は夢のやうに半ば感傷的に躍動しつつあつた凡ての靜物ははたと靜止した。

油蟲が消えて了へば、幻想も消える。澄みに澄む月の光に照らさるる靜物は矢張り元の靜物である。ただトマトと甘藍は全く哀れであつた。散々に食ひ荒らされたトマトは新しい傷口の痛みから光澤を失ひ、顆は半分になり三角になり、或は蜂の巣のやうに吸ひ潰ぶされ、ギザギザとなり、今は籠の中から躍り出づる力もなく、染々と殘りのセンチメンタルな漿液を滴らしつつある。甘藍はなほさら、葉をむしられ、心を嚙み破られ、色も風味もなく、悄然と欄間の青い影と光の縞

目に縞づけられて僅かに冷めたい殘りの葉で胸を掻き合はしてゐる。そして、地面から湧き上つた眞青な初一念も何處へやら、今は白く轉がり放しである。

足音がばつたり停つたと思ふと、ふいとその欄間のところに、思ひがけない眞黑な顏が現はれた。奥村（此處から十町ほど離れた歸化人の部落）の黑人娘のベネの顏である。何で差し覗くのか、暫らく立つて閒寂（ひつそり）とした家內の樣子を窺つてゐたが、ただそつと首肯いて欄間の隙から燃え立つばかりの眞紅なアマリリスの花を一本差入れて、又そつと消えて行つた。しとしとと砂を踏む足音がする……、さうしてまたその足音も幽かに幽かに消えて行つた。

油蟲はたちまちにその赤い花に密集した。花が又忽ち眞黑になつた。さうして苦痛に躍り出す……。

＊

さあて、愈々油蟲の世界である。

屋根裏の檳榔の葉を傳ふ數限りもない油蟲が一時に驟雨の走るやうな音を立てる。羽目の隅から隅まで駈け廻る。焜爐の緣を辷り上る。銀いろの湯沸をまつくろくする。コップの中の腐つた牛乳を嘗める。フライ鍋の脂に群る。野菜には飽いたか放つたらかして、今度は愈々結核菌煮沸用の大鍋の中に一齊襲擊をする。油蟲、油蟲、恐ろしい肺病の微菌がそこにはうぢやうぢや繁殖してゐる眞最中だぞ、嘗めたらそれこそ、みんな肺病になつて了ふぞよ。

油蟲は考へない。ありとあらゆる物に對してただむやみに密集する。見る間に厨房いつぱいの油蟲となるまで滿月の光を飽迄も惡用する、人さへゐなければ縱橫無盡である。

油蟲は、月に光つては漣の寄せる如く屋根裏から羽目の隅々、窓、棚、あらゆる靜物の上にまた一としきり驟雨のやうに走り廻る。誇張すればシネマトグラフの西洋の化物ホテルのやうに窓の硝子がくるくる廻り、流しが步行き、土間が天上し、はてはくるくると厨房全體が廻り出す。さながらさういふ光景である。

トマトも甘藍（キヤベツ）も今はあつたものかは、

ハレルヤ……ハレルヤ……

敎會では愈々おしまひの祈禱が濟んだと見えて、また平和な讃美歌の合唱がはじまつた。

今、厨房は全く油蟲の世界である。家がゆらゆら動く……

＊

程もあらせず、おもてにガヤガヤペチヤペチヤと人間の聲がする。通り過ぎるかと思ふと、さうでなし。ばたばたばたばたと駈け込んで玄關の戸の把戸を捻るが早く。パツとマツチを擦る、應接室にはランプが點される。人の影が障子にちらつく。やがてガチヤンと搖椅子に腰を下した音がして、元氣な男の聲で、

——お腹がすいた、早くトマトを持つといで。

正覺坊

麗らかな麗らかな、何ともかともいへぬ麗らかな小笠原の初夏の一日である。宮の濱の白い弓形の渚から影の青いバナナ畑の方へ辷り上る小徑のそば、小灌木林の境界線に近く、一本の光り輝く護謨の大樹が高く搖めいてゐる。その下に正覺坊が仰向けに轉がされてゐるのである。たゞ其處にいつから轉がつてゐるともなく、轉がされてゐるからただ轉がつてゐるといふ風である。大きな大きな正覺坊がゆつたりと、まん圓い卵いろの腹の甲羅を仰向けて、ただ轉がつてゐる。無論四肢は固く縛へられてゐるのでその鰭を動かす事さへ自由でない。圖體は大きいし、二條の太い荒繩までがぐるぐる卷きに喰ひ込んでゐる。それでなくとも、一旦轉ろがされたが最後、一日かかつて起きかへるか二晩かかつて起きられるか、この應揚なのろのろの海龜の身では何だか頗ぶる怪しいものである。嬉しいのか、悲しいのか、苦しいのか、又はとうとう諦めはてて了つたのか、それぞと云ふけしきも見えない。たゞ首を當り前に出して當り前に目を開けてゐる。さうして何の事もなく空を見入つてゐる。尤も、それも仰向いてゐるから目が空に向いてゐるといふだけである。澄みわたつた明るい天の景色を凝視めてゐるのか、又は麗らかな雲のゆきゝや、風のながれに恍惚と思を凝らしてゐるといふのか、それとも碧瑠璃の大海の響、檳榔、椰子、バナナ、種々の熱帶の物の香ひを現心もなく嗅ぎわけて、懷かしい生れの海の波のまにまに靈魂を漂はしてゐるのか、何が何とも訣のわからぬ夢見るやうな眼を開けてゐる。

時は正午である。五月と云つても小笠原の五月は暑い。太陽は直射し、愈々護謨の大樹の眞上から强烈な光の嵐を浴びせかけると、燦爛たる護謨の厚葉が枝々に限りもなく重なり合つて、眞靑な油ぎつた反射を影とともに空いつぱいに搖めかす。その葉をくぐつてくる光線は鋭い原色の五色である。それが幹に當り、下に寢てゐる正覺坊の腹を燬きつける。さうして愈々綠と黃の點々に模樣づけられた綺麗な海龜の頭が軟らかな雜草の上に更につやつやと光り出し、麗らかな麗らかな何ともかとも云へぬ空のあたりで檳榔の葉がそよぎ、鶯の鳴く聲がきこえてくる。

十方無碍光、澄み輝く白金寂莫世界の一時である。

正覺坊は眩しさうに目を開けたり、閉ぢたりしてゐる。現心もないらしいただゆつたりと轉がされてゐるので大安心のかたちである。恐らく自分が囚はれの身である事すら忘れてゐるに違ひない。

微風がをりをり護謨の枝々をそよがして去つた。幹の中程に一流れながれた海のうつくしさ。向うに兄島が見え、麗らかな麗らかなその瑠璃色の海峽を早瀨に乘つて、白い三角帆をあげた獨木舟が走つてゆく。さりながら正覺坊にはその海が見えない。頭を海の方に向けては寢てゐるが、背後には護謨の樹の幹があり、海岸煙草の毛深い葉の叢がある。ただこの島、四方八方を取り圍んでゐる太平洋の波のうねりが何處からともなく緩るい調節を間のびに折り疊んでゐる。それだけは流石正覺坊の癡鈍な感覺にも稍何らかの響を受取るらしい、正覺坊は目を瞑つてまた目を開いた。

コケツコツコ、コケッ……コケッコツコ、コケッ……物に驚いた鷄の鳴き聲が丘の下の農家の方からきこえて來る。畑の甘蔗やバナナの葉かげをわけて此方へ逃げてくるらしい、一羽二羽、それが次第に近づくにつれて鳴聲をひそめてくる、かと思ふと一羽の雄鷄がやがてロスタンのシャンテクレエのやうな雄姿を現した、鷄冠の赤い、骨つ節の强さうな、羽ばたきの眞黑い、はぢきれさうにはづみかへつた驕慢な雄鷄にひかされて白い舶來種の雌鷄が何かを啄き乍ら蹤いてくる。ケケツと振り返つて搏きつけるやうに雄が雌の上に重なつた……と澄ましてまたケケッケッ羽を擴げて雌の方へ擦り寄つてゆくとたんに、奇怪な大きい正覺坊の圖體がふいと前に轉がつてゐるのが目についた、と、たちまち驚きの叫びを立てゝ、ケケツコツ、ケケツ、ケケツコツ、ケケツケケケケと

逃げてゆく。さうしてまたひとしきり急忙しさうな叫び聲が甘蔗（さとうきび）の向うからきこえる。

正覺坊はそれでもゆつたりとしたものである。平氣で大空を見上げてゐる。おとなしさうな空色の瞳がつやつやと潤みを持つて、ただぢつと麗らかな天の景色を見入つてゐる。恐らく傍らに何事が起つたかも知らないであらう。身動きひとつしようともしない。

時が經つた。日射は愈々強くなり、音も絶えた空氣の中を鶯の子が苦しさうにさゝ鳴きをしてはまた光つて消えた。ふと正覺坊は聽耳を立つるやうに見えた。のつしのつしと人間の歩いて來る足音がしたからである。山から暑い盛りに下りて來た男は繪の具の垢染だらけな仕事服をつけ、眞黑な怪しい帽子をかぶつてゐた。まんまるい顏のづんぐりむつくりした三十四五の男である。この小笠原では油繪かきのことを塗師といふ。塗師も色々流れて來たが今度の塗師は中々偉らい塗師だといふ、その塗師が傲然とのさばりかへつて歩いてくるのである。正覺坊は恐れ入らざるを得ない筈である。それだのに正覺坊は何にも感じないらしい、ただ恍惚と目を半眼に開けて見てゐる。塗師は正覺坊をちよいと瞰下して、フフンと云つた。さうして腐れたバナナの裂け葉を蹴返しながら、眞黑な墓穴のやうな巖を描いてある大きな大きな畫布を楯のやうに振りかざして又づしりづしり。

後はまた麗らかである。強烈な太陽光の下に、赤い崖、青いバナナ、瑠璃に代赭に朱の斑、耀く黄、空も木も草も、あらゆる眼に入るものの凡てがなまなましい原色ならざるはなしである。それが強烈に正覺坊の目をきらきらと刺戟する、護謨の葉が微風がくれば五色になる。

正覺坊は批評家ではない。だからこの美くしい自然とさきほどの塗師の眞黑い繪とどれほどの差違があらうとも平氣なものである。何等の不思議とも感じないらしい。よし、何とか思つたにしたところで、人間は人間、正覺坊は正覺坊、どうにもならないのである。

正覺坊は恍惚として大空のあなたを仰視（みあ）げてゐる。ゆつたりしたものである。

幾時か經つた。

正覺坊はあまりの麗らかさに思はずうとうとしたが、うしろの海岸煙草の中から人間がぽいと飛び出したのでハツと目をひらいた。眞白なホワイトシャツの光耀（かがやき）が見る目も痛い程沁みる。そのホワイトシャツが聲を立てゝ笑つた。まるで子供のやうな無邪氣な笑ひ聲である。

——やあ、正覺坊が轉がつてゐる。面白いな。

正覺坊自身に取つては面白いどころの話ではあるまいが、

のんきな正覺坊、黙つてゐる。さうして恍惚とその男を見てゐるのである。

その男は何と思つたか、コツコツと杖のさきで正覺坊のまん圓いお腹を敲いた。痛くも何ともないらしい。平氣なものである、今度はまた強くコツコツと頭を敲いた。ルコン・ド・リイルではないが、不感無覺寂寞世界と云つた風である。正覺坊はなか〳〵高踏派である。その男は

——をかしいなあ。

と云つた。正覺坊には別にをかしくも何ともないのである。その男はまた

——一體、雄かしら雌かしら。

と云つた。陰莖があるのかしら、あるとしたらどれがさうだらうと云つた風にその男はまた杖のさきでお尻のあたりをコツコツと探して見た。一寸云つて置く、その男は曾つて醜い泥豚に何ともかとも云へぬ薔薇いろの纖細にして微妙至極な陰莖があるのを見て涙を流した詩人である。

正覺坊の兩つの後肢のまん中に小さな尖のするどい短い尻尾見たやうなものがある、杖がその近くをふいと突き當てたと思ふと、正覺坊が不意にふふつと笑つた、口をあけ、鼻孔をいつぱい膨らまし、首を強くひと振り振つてふふつふふつと笑つた、よほど擽つたかつたと見える。青年は吃驚したが、これも聲を出して笑つた。腹を抱へてそこらの草つ原中笑ひころげた。

正覺坊はまたけろりとして空を無心に見あげてゐる。

——のんきだなあ。をかしいなあ。

感嘆極ると云つた風で、流石のんきな樂天家も、この正覺坊だけには叩頭（おじぎ）をしたやうだつた。

正覺坊はのんきだと云はれてものんきなのが何故わるいのか。それとも何かをかしい事でもあつたのかなあと云つた風に不思議さうな目つきをした。それで別に自分をのんきだとも思つてゐないらしい、當り前だといふ心もち。

正覺坊はまたうと〳〵とした。微風が海の方から吹いてくる。白い雲がぽうつと山の檳榔樹の上に浮ぶ。鶯が鳴く、世は太平である。その麗かさは限りがない。

その男は健康さうな生氣の溢れるやうな體格をしてゐた。こんな暑い日に素足で、その上、帽子もなんにもかぶらないでゐる。暫らく正覺坊を見て感嘆してゐたが、苦しさうにいきなりホワイトシャツを脱いで素つ裸になつた。玉のやうな汗がだくだくその張りきつた胴や逞ましい兩腕から流れ出るのである。拭くものがないので、ホワイトシャツで、こきこき顏から身體中拭き取つた。そして何と思つたかフワリとそれを正覺坊の頭に投げかけて置いて、自分もまた暑い天日に全身を曝しながら、またごろりとかたばみの中に寢ころんだ。大きなマドロスパイプを出して悠々と煙草を喫んでゐる。

正覺坊は眞白なホワイトシャツを頭からスツポリと被せられて、また恍惚とした。西洋新舶來のその匂は正覺坊に取つては未だ曾つて聽いたことも嗅いだこともなかつたに違ひない。それに人間の汗の臭氣の甘酸さ、思はず、また恍惚となつて空を眺めた。あの青い空はこんどは自分の上に落ちて來てまつしろな光り耀くものとなつてゐた。日光が軟らかいシヤツを灑してふりそゝぐ。

正覺坊は思はずぐつすりと熟睡したのである。

——Kさん、何をして御座る。

青年もうとうとしてゐたが、耳馴れた老人の聲にハツとして目をひらいた。大きなタコの葉の帽子をかぶつたきれいなS老人がにこにこと笑ひ乍ら正覺坊と彼とを等分に見下してゐた。

——裸でおゐでこわすか。この暑いのに裸は毒でごわすぞ。

一寸、眉を顰めたが、また莞爾として、

——Kさん、たいしたものがごはしたぞ。

とさもうれしさうにいふ。

青年も立ち上つた。さうしてにこにことした。

——ほうれ、これでごわす。

老人は肩から掛けてゐた雜嚢の中から人間の骸骨の下顎見たやうな灰色の石を取り出した。

——實に天然でごわすぞ。珍らしうごわすな、ほうれ御覽じろ、こゝに白いものがポチポチイとごわせう。まるで雪が降つたやうでごわす。

ポチポチイと云ふ時さもかはいらしく老人は聲を小さくした。如何にも白いものが點々としてある。然し青年の見た白いポチポチは雪ではなくて骸骨の下顎に殘つてくつついてゐる人間の白い齒であつた。老人はその石を大切さうに愛撫しながら。

——大したものでごわす、三百圓ものが價値はごわす。

この老人は名古屋の商人であるが、病氣保養にこの島に來てゐるといふ、よく閑にあかしては白檀のひねくれた根つ株や、モモタマの木のぶこつな瘤や、天然の珍石奇木を好きで集めては樂しんでゐる、快活ないゝ老人である。口癖にしては天然々々とばかし云ふので、Kさんたちはこの仁を天然老人と呼んでゐる。天然老人は然し商人である、どんな珍物を見てもすぐに値ぶみをする、さうしてこれはまうかるなと胸算用して見る。Kがにこにこしてゐると、

——題は雪景珍石としたらどうでごわせうかな。面白いものでごわすぞ。賣れますぞ。

と、天然老人、正覺坊の方をちらと見る。

雪景珍石が賣れるか、賣れないか、面白いものか面白いものでないか、百圓の價値があるものか、それとも一錢五厘の

價値しかないものか、正覺坊は風流といふ事を知らないから一向に御存じがない。たゞホワイトシャツを被つて默つてゐる。

Kも正覺坊をちらりと見たが、如何にも氣の毒相な顏をして、老人を振り返つた。正覺坊はようく睡つてゐます。

天然老人は談話をしてる間も若々しい目をあけて見廻してゐた。何か珍物はないかと思つて探してゐるのだと思ふと無邪氣な青年のKにはをかしくてならないといふ風だつた。天然老人はふいとお叩頭をして、つい傍のモモタマの木の方へ行つたと思ふと、突然、大きな大きな聲を出して、さもさも一大珍物を見つけたやうに叫んだ。

——Kさん、早く來て御覽じろ、大した珍木でごわすぞ、五百圓がものはごわす。

Kも驚いて飛んで行つたが、老人、モモタマの瘤が飛んで逃げでもするやうに慌てゝ、雜嚢を開けると二つ折の鋸を取り出し乍ら。

——ほうれ、あの瘤でごわす、大したものでごわせう。陽物そつくりでごわす。

流石に顏を赤めながら、

——五百圓がものは確にごわせう。

確かにと云ふ言葉に力を入れて、鋸を開き乍ら、下から凝と天然老人は見上げる。

如何にも、麗らかな麗らかな何ともかともいへぬ麗らかな空の下に、陽物そつくりのモモタマの木の瘤は手も屆かぬ高い高い二股の枝の間に燦然と耀いてゐる。

老人は一心に見上げながら、下からしきりに鋸を動かす手つきをした。

正覺坊はぐつすりとホワイトシャツをかぶつて睡つてゐる。

蟻と黒人

蟻、蟻　それは恐るべき蟻の集團である。その大きな小笠原の蟻が一匹、乾ききつたぼろぼろの赭土の間から、ちよいと出て引込んだと思ふと、今度は、胴長、手長、脚長、一本脚、捻ぢきれ頭、出るわ出るわ。まるで南蠻藥味の粉でもぶちまけたやうに、穴からわしやわしやと湧き出して來た。

時は未だ午前、外は目も眩むやうな光の嵐である。

その下を今、彼等は右往左往に駈け廻るのである。或者は燬け沈んだ蜥蜴色の石ころを早速にぎらつかせ、或者は萎びた中年増の麝香草に匍ひ上り、又最も皮肉にして敏捷な奴は既に腸滿病みの蜜蜂を捕へて銀砂の上にぢたばたさせた。のみならず、岩壁の襞から襞へと巧みに縫ひ走る者、又その頂邊へ出て逡巡する者、こけつ轉びつ走り續くる者。又は細ごまと列を成す者、出會頭に物を云ひ、停まり、追ひ縋り、急に逸れて引返す者、凡てが全神經の蠢動を以て、活潑に、着實に、而も最も理性的に、密集し、直行し、四方に走る。而して、あゝ其處に、音一つ立てぬ用心深さと人間以上の叡智と愛と秩序とがある。

その中で、最も大きな蟻、それは少くとも最も沈着で最も究理的熱望の所有者らしく見える。それに直覺力の鋭い者、激しく興奮し、又感情を極度まで光りつめた者、その二三が直ぐに續いて、とある岩角から、寧ろ冒險的に、そこにぴつたりと盛りあがつた或る怪しい肉塊のやうな物に匍ひ上つた。それは驚くべき大きな物であつた。而もそれは眞黑で、何處も彼もすべ〳〵してゐた。而して張り切るほど圓く深く彎曲してゐた。おまけに彈力があり熱があつた。そればかりではない、その奥行も知れぬ全面から、又盛んに、異常な生物の臭氣と、腐れた葉つぱや甘い果物の芬香とがした。そいつが深い心の心から凡ての表面に脈搏つ度毎に、蟻は彈き飛ばされさうになりながら辷つてはまた匍ひ續けてゆく。一匹は内側の方に廻つた。そこには思ひがけなく肉づけが圓くなり、陰がめり込み、他の曲線とかち合ひ、めり込めばめり込むほど暗くなつて行つた。さうして少からぬ横皺さへ彫刻されてゐる。それを一周りすると、又、光が彼を盲目にした。確かに何かの胴體である。

一匹は瑞珊として彼方此方と彷徨いてゐるうちに、その面が盡きて、いよいよ骨ばつた硬い瘤の土に出た。それを乘り越すと、また圓い肉の柱がにゆつと出てゐる。それはふくれあがつて逞ましいものだ。こいつはしめたと又走り出すと、だらだらと斜に緩るく伸び下つてゐる。だが其處には皺があつた。而して下れば下る程、光澤がなくなり、細かな渦毛が卷

いて、緊張力が無く、かば〳〵してゆく。何處までも廻り乍ら走つてゆくと、段々細くなつて、急に擴がつた。又それが裂けて五つの枝になつた。蟻はその分岐點で一寸考へたが、又その一本〳〵を突きつめずには措かなかつた。すると尖端が圓くなり、何れにも冷たい蠶豆のやうなものが劃然と白く光つてゐる。確かに何かの腕である。

眞直に何處までも登つて行つた他の一匹は、終にもじやもじやの深い唐黍毛の渦卷の中に、殆ど昏睡しさうな自分を見出した。酸つぱい汗と脂と、頭垢とが、息もつけぬほど豐潤な（少くとも蟻には）香氣に噎せてゐる。それが、ふつさりと日光を滿たし、時として暑い熱風がそれを火花のやうに搖る。全く、これは人間の頭である。

三匹の蟻は暫らくして、喜び勇んで、狂氣のやうに三方から引返した。而して最も隆起した背骨のある一點で出會すと、犇と人間のやうに頭を寄せて、何か首肯き合つてゐる。そこで彼等は各自の探檢の結果を綜合して、全くそれは生きた人間の肉體で、前向きに深く俯伏した姿勢であつた事を知り、それは黑人で、頑丈ではあるが、相當の老年者であるといふ委細まで推定したらしい。一匹は急いで引返すと、大きな奴と他の一匹がまた全速力で赤ちやけた螺髮を望んで駈け出した。と、見ると、早くも尻の割目から一直線に細かに細かに點々をうつて、無數の赤蟻が蠢々と匍ひ上つて來る。恰も黑七子の下地に赤い水引草の模樣を染め出した如く、一列に幅廣い背中を走る。その聲もなき美くしさ。彼等は今や將に恍惚として走りつゝある。

不意に、その時、黑人の大きな黑い手が背後へ廻つた、と思ふとぴしやりと叩きつけた。蟻がばらばらと五つの指の間から滾れ落ちる。水引草の點々が一齊に擾れると、生き殘つた奴等は慌てふためいて、暫らく、萬華鏡の麥藁屑の如く鮮やかに散らばつたが、また、懲りずまに首筋へ廻る、耳の縁、頸窩に辷り込む。しつきりなしに下から續いて來る。

空から又、赤い3の字が線香花火の樣に亂れ落ちた。この時、兩足の間に深く埋まつた頭がむくりと持ち上ると、又、眞黑い兩手が上へ出て、やにはに螺髮の渦卷を搔きむしつたのである。

黑人は始めて面を現はした。ポツポツペイである。人間が人間を喰ふといふ、この島きつての惡鬼ポツポツペイである。人間を喰つたとか喰はぬとか、それは噂である。流石に喰人種の血を統けた彼の面は、青銅色の、まるで閻魔大王を黑くしたやうな、見るから獰猛と醜惡とを極めてゐる。が然し、彼とても人間である。額に二本の角も無ければ、下顎に恐ろしい牙も尖つてゐる訣では無い。矢張り黑人並の形相である。たゞ非常に彼の面を凄く見せる訣がある。それは右の頰に蠑螈の赤い四肢見たいにこびりついた切疵の痕だ。それを

除いては、たゞ髯むしやの、眉間や獅子鼻の兩側に深く彫りつけた皺のいくつが、却て人間らしい溫かみと、暗い多年の憂苦とを忍ばせる。

ポッポッペイはまんまるな白い眼玉を剝いて、物憂さうに、ぢいつと地上を凝視めてゐたが、何思つたか、不意に大きな口を開くと、にたりとした。

と、同時に足ですつと一蹶り、蟻を、ぎらぎらと搖らめき立つた陽炎と一緒に踏み蹶つた。が又、靜かに兩手の指を頭の中へ突つ込んだ。

蟻はまた光のやうに滾れはじめる。而してぼう〳〵とした髮の毛を搔きむしり乍ら、彼はたゞ恍惚とそれに見入るのである。

ともすれば深い溜息が出さうになる。抑へても抑へきれない息のはずみが遣瀨なくポッポッペイを苦しめる。深い溜息、それは大地の底から盛りあがつて來るやうな、どうにもしやうのないものである。而して何處からともなく、ゆつたりとした鈍い波の音がそれに答へる。

彼の背中は今や火のやうにうだりはじめた。日が愈々天心に近づいたのである。

彼はふと、その手をとゞめた。——

玆に深い白日の光耀の中に、聲もなく死骸になつてゆく不幸な赤蟻の外に、もう一列蕭々と走つてゆく黑蟻がある。それらの蟻は何處から何時から續いてゐるのか、果しも無い。たゞ隨分の遠距離から來た事は確かである。時々疲れて立停まり、又足を疾めて、亂れず騷がず、全體に緊密な間隔を保つて、後から後から續いてゆく。それにポッポッペイの大きな眼がぴたりと吸ひつけられたのである。

彼は驚いたやうに、暫らく、凝視めてゐたが、その眸は次第に、それらの精勤な小勞働者の行列に追ひ縋つた。と、見ると、つい目の前に節瘤だらけの木の根がくねつてゐる。既に無數の黑蟻はその根元に辷りついて、其處から眞直に、たゞ一本の野椰子の幹を上つてゆくのである。それをずつと上へ上へと仰いでゆくと、凡そ三四丈の高さに、その先頭は見えなくなつて、其處には鬱金色の鮮かな花房が今を盛りに垂れ下つて、その上から、八方に開いた長い裂葉が、幽かに幽かに日中の微風にそよいでゐるのである。而してそのしやらしやらと鳴りそよぐ髮飾の間から、恰度、女の眼のやうに潤んだ空が見える。見れば見るほど、碧く瑠璃色に澄み渡つた天の一大圓蓋が、圓く高く無窮に、無際限に。

ポッポッペイは懵然とそれを見上げて、暫らくは可笑しいほど野呂間な表情をしてゐたが、何時とはなしに、いつぱいに瞪いたその眼の中には、涙が靜かに溜つて來た。

またしてもゆつたりとした波の音がきこえる。その單調な、陶醉と憂鬱とに滿ちた、緩やかな大管絃樂は、遠い遠い世界

のはてから、物鈍い大きなうねりを織つて、たゞ、がう……がうと響いて來るばかしである。それは恰度、兩手で耳を塞いだ時にきこえる何とも知れぬ大自然のどよめきを思はせる。

ポッポッペイは、放心したやうによろよろと立ちあがつた。六尺ゆたかの大男である。腰には汚れた日本の褌をしめてゐる。

小手を翳して、うち見やつたが、たゞ彼の眼に入るものは、果しも無い幅廣の波の連續であつた。それはいゝ風であつた。明るい渺漫とした大洋、そこには嬰兒でも匍へば匍つてゆけさうな靜謐と穩和とが全體に銀碧の光輝を平準して、何處までも何處までも續いてゐた。おお、而してその向うに廣大無邊の蒼穹が辷り込み辷り込みつゝある。

あまりに晴れわたつてゐる。あまりに凡てが玲瓏としてゐる。

飛ぶ鳥の影、行く舟の煙、一つとしてその眼界に現はるゝものも無く、消ゆるものも無い。たゞ滿ち溢るゝものは光である。光の堆積である。連續である。而して光は代謝しつゝ、陽炎ひつゝ、笑ひつゝ、喚きつゝ、吐息しつゝ、又苦しみつゝ、鬪ひつゝある。——而して眩暈しつゝ一切が聲を呑んで、鯨の汐噴く眞晝を待つ。

ポッポッペイの眼は燃えた。而して睫毛には露がこもる。彼はたゞ遠い水平線の彼方を眺めてゐる。彼は足を爪立てた、伸び上つた。野椰子の幹に手を高くあてた。

黑蟻の列が驚いて途切れると、又その皺くちやの手の甲に匍ひ上つた。而しておど〳〵しながら、つゞいてゆく。手が顫へてゐたのである。

これは今日に限つた事ではない。この島に來てから、もう彼是二十年の餘、星は移り月は變るが、一日として、此處にかうした彼の姿を見ぬ事はない。云つて置く、此處は小笠原島第一の高山朝日山の絕巔である。

と、縹緲たる尺八の調が谷間に起つた。

大きな小笠原の太陽は今しも野椰子の眞上に、ぶん廻してゐる。正午になつたのである。黃金色の雲が、いつの間にか、南崎の方から時雨山の嶺まで糶り上つてゐる。その山つづきの磽々たる岩角に高くゆらぐ椰子やタコの木は、宛然、南洋土人の頭飾をつけ、槍や鉾を持ち、彼方に二人、此方に三人と、手を擧げ指ざし、さしまねくかと見られる。

それが一齊にてらてら踊り出した。而して凹地や傾斜面の黑檀、アレキサンドルの鬱蒼たる中に、たまたま印度更紗の一二片を取り落したやうなは畑である。無論山の畑は眞紅である。それにバナナ、甘藍、茄子、トマトの類、色とりどりに列を正して、明るく、たゞ明るく、しかも微風に搖られてチラチラする。その畑に尺八が鳴る。處もあらうに、時もあらうに、チョコレートやパイナップルの香ひのするこの熱帶

風物のうち、しかも太平洋のまん中に、あはれ、ほそぼそと心をこめて、おしよおろお……たかあしいゝまあゝ……と吹いてゐる。百姓家も見える。豆のやうな人間も地面に坐つてゐる。

ポッポッペイは深く頭を垂れ、眼を細め、耳を野犬のやうに開いて、じつと下を差覗いてゐたがふと人影を見ると、くるりと後を向けた。

而して彼は椰子から手をはなすと、腹立たしげにぺつと唾を吐いた。

彼の手を越え、指の間を彷徨つてゐた蟻の幾つは、おかげで跳ね飛ばされたが、木の幹では下から又、新らしい蟻が奔りのぼつて、たちまちに、その缺所を補つた。而して蟻は蟻とし續いてゆく。

世はさまざまである。麗らかな異郷のバナナ畑に古い日本の尺八を吹く男も居れば、ポッポッペイのやうにぽつんと山上に立つて、蟻を相手に深い溜息を洩らすものも居る。蟻は蟻の社會に正しい道義と美しい均勢とを保つてゆくが、ポッポッペイのやうに人間が人間に激しい憎惡と怨嫉とを浴びせかける奴も居る。ポッポッペイは人間と鬪ひ人間を殺し人間の肉も臓腑も思ふ存分啖らつた男であると云ふ。それだけ彼もあらゆる人間からあらゆる無道な侮辱と慘虐とに遭つたのに違ひない。僞られ、苦しめられ、呪はれ、鞭打たれ、幾度半死半生の間をさまよつたかわからぬ。それは人間からばかりでない。禽獸から魚族から、卑怯な蟲類から、恐る可き不意うちと毒々しい敵對とを受けた。のみならず天變が彼を威嚇し、地異が彼を震慄させる。彼を見るとき、自然界のあらゆるものが、又一齊に總毛立つて身構へる。彼は憤らざるを得ぬ、用心せざるを得ぬ。復讐せざるを得ぬ。彼は野蠻人の子であつた。

彼は生れた儘で、生れた時から人間の赤い生血を啜つた。彼は嗅ぐ事に於て犬より鋭く、彼の聽覺は又響尾蛇の如く微妙であつた。彼の視野は又鷲の如く、彼の觸覺は山あらしの如く粗くして鮮かであつた。彼は又七情の赴くが儘にかめれおんの如く、豹の如く、猫の如く、牛の如く、又虎の如く深く燃え、獅子の如く高く咆哮した。彼は淫蕩で、剛腹で、執拗で、痴鈍で、粗暴で、しかも又子供のやうに無邪氣で素直であつた。

彼に道義を強ふる事は無理である。彼に愛を強ふる事も間違つてゐる。第一彼は愛されてゐない。始終恐れられ、憎まれ、避けられ、笑はれてゐる。彼はこの島に於ても退け者である。誰一人日本人で彼に好意を持つ者は無い。ポッポッペイと云ふ彼の名にしてからが、本來彼の名ではない。それは「無智」といふ蠻語である。彼はこの光榮ある渾名でかの猿より小さな腦味噌を高貴にされてゐる。彼は感謝せざるを得

ない。

譬ひ深い智識と苦行とを積んだ人間でさへ、心を空くして人間を愛し得る事は至難である。彼が如きが彼の境遇にあつて、人間を愛し得ぬ事は尤である。無論彼は文明人ではない。文盲である。何等の素養も無い。彼は又何等の體驗無くして、一躍して愛の妙諦を捕捉し、演述し、蹈襲し得る程の聰明も血氣も藝當も持つてゐない。彼は慾心の奔騰に乘じては、殆ど禽獸の如き所業も敢てするかも知れぬ。然し人眞似はした事がない。彼はまた自身が何らかの天才者であるかないか一度だつて考へたり、威張つて見たり、悄氣たり、泣いたりした事が然い。今に見ろなどと、夢のやうな將來を豫期してがんばるよりも、彼は今日だけを思ふ存分に生きさせる。

彼は無論今日流行の人道主義などを知つてる筈はない。若し茲に物數寄な人があつて、この人喰ひ鬼のポッポッペイに、トルストイ、ドストエフスキイの名を聞かしたら、彼は恐らく、これ等の高貴にして嚴肅直摯なる哲人達を、馬鈴薯、大根、八つ頭の類かと思つて一緒に頭から鹽をつけてかぢつて了ふだらう。

然し、彼も年を老つた。もう六十を越してゐる。氣が折れて來た。人を喰ふどころか却て喰はれかゝつてゐる。眼が霞んで來る。耳が遠くなる。力が弱つて來る。意地も張もなくなる。何か知らんが背後が振り返られて足が進まない。これではならぬといくら踏ん張つて見ても、直ぐお腹の底からへとへとする。何でも空虛にしちやいけねえ、うんとこ食べさして置けば大丈夫だ、世話はねえとなる。そこで餡でもバナナでも海鼠でも何でも彼でも手當り次第に詰め込んだ、が矢つ張しすうと消えて了ふ。何かかう腹の底に蝦蟇見たいな奴がゐやがつて下から大きな口を開けてすうとやるに違ひない。其奴が無性やたらに食べて了ふと、今度はぐう〳〵鼾を搔き出す。と、又無性やたらに寂しくなる、寂しくて寂しくてたまらなくなる。何を見ても氣に入りつこはねえ。——そこでポッポッペイも愈々癇ぎ出した。

どう見ても元氣がない。昔は人さへ見れば食ひつきさうにしたが、この頃は直ぐに避けさうにする。逃げ出す。でなければ恐る〳〵身構へして窺ふやうに寄つて來る。この有樣を見て誰やらが、麒麟も老ゆれば駑馬に如かずと嘲つたが、まさか麒麟でもありますめえと頓狂な聲を出した奴がゐて、それから大笑ひになつた事がある。ポッポッペイも全く耄碌した。而して愈々憎人より厭人に、彼の思想が變つて行つたらしい。恐らく今は彼自身をすら荷厄介にしてゐまいものでもない。

ポッポッペイはまた、元の岩角に凭れかゝつたが、今度は前と反對に俯伏に、その赤もじやの頭を南海の海膽のやうに

巖の割れ目に轉がした。而して暫らくは吸ひ附いたなりである。それでも今は先程のやうに、背中の蟻をさへ一々に數へ得る程の、靜かな心持にはどうしても、返る事ができないと見えて、また苛々と甞ひ上つた。魔氣を吐く妖術の蝦蟇が手をついた格構である。

而してぎろぎろと下を瞰下すのである。

この島たるや、全周僅かに十里にも足らぬ小島である。それが恰も珊瑚礁のやうに中をまん圓な灣によつて刳り拔かれてゐる。それが大村灣。善く云へば山中の湖、惡く云へば盆景の池のやうな、その綺麗な瑠璃色の波の上を、白い帆を掛けた玩具の獨木舟(カヌウ)が走つてゐる。陸地はそれで環に成つて新月のやう、それも殆ど巖山ばかり、たまたま畑があるかと思ふと眞紅で、黑人かと見るとタコの木が彼方此方で搖れてゐる。たゞ左手の汀つゞきに僅に平地があつて、其處に日本人の部落がある。それが大村。その防風林の燦爛たる、色は紫、瑠璃、綠、青磁、茶褐。樹は濱桐、メリケン松、護謨、モモタマ。その間から擯榔葺の屋根や、ペンキ塗の瀟洒な教會、千木高く秀でた神代風の裁判所、島廳、角砂糖のやうな郵便局、それに測候所のくるくる廻る風見や何かゞ、まるで極彩色の薄葉鐵細工の模型その儘である。而して日蓮宗の題目の太鼓までが、明るい墓場山の下から、とろんことんとんと鳴つてゐる。其處には黃色い日本人共がうじやうじやと油蟲のやうにゐるのだ。先づ、自己の頌德碑を巡視の待從に見られて赤面した暴虐な島司、それを見樣見眞似の小役人、洋劍、又それに阿諛する者、怨嗟する者、排斥運動をする前科者、奸黠な商人、布哇歸りの百姓、正覺坊より愚かな漁夫。それに怠惰で傲慢な白人、意久地なしの雜種兒、(この中にお喋舌のアレキサンダア・イサベラ婆、黑人のヂョウヂ・ワシントン、アレキサンダア・ゼセ・アカマン・ツウクラブと云ふ長い名の日曜學校の先生、ノラといふ娘等、西班牙の女王はさておき、亞米利加の大統領やイブセン劇中の主人公、其他名ばかりは異人豪傑雲の如し)。これに天文學者に脈落者、肺病みと十二指腸患者、江戸は吉原から流れて來た三人の娼妓、繼母の幽靈を怖がる牧師、感化院お預りの不良少年、卍巴と入亂れて相鬪ぎ、淫むれ、利用し、欺き、爭ひ、相陷れんとして日も之れ足らずである。

『ちえつ』、

天竺德兵衞の大蝦蟇が、メフイストフエレスの身振りをして、ひらりと岩から飛び下りた。と、眉間に深く皺を寄せてぬつくと黑く突き立つたポッポッペイ爺の姿となる。

ポッポッペイはじつと腕を拱いた。頭の上に高く椰子の葉がしやらしやらと鳴る。しやらしやらと鳴ると五色の光が細かに細かに降り注いで來る。滴る光を頭から浴びて、彼は汗

をたら〳〵流して立つ。

而して靜かに身の周圍を振り返る。其處には彼の外に誰一人も居なかつた。

山は高い。
が、島は小さい。
宇宙は廣大である。
大海は涯しがない。

ポッポッペイは深く頭を垂れた。而してしほ〳〵と、傍に投げ棄てた銛(もり)を取り上げると、さながら、沙翁の劇に出て來るヴェニスの猶太人のやうに、躊躇(ためら)き躓き下つてゆく。海へでも出て見ようとするのであらう。

椰子の葉が、さらりんさらさらと鳴る。

扨又、蟻は、確實に、沈着に、各自の規律を守つて、相扶け、相愛し、相苦しみ、相勵まし合ひ乍ら、更に野椰子の幹を一直線に、なほ高く高く登り續けて行きつゝある。恐らく彼等は天までも。(未定稿、ある長篇の第一部)

小笠原の夏

*

愈々、小笠原の夏が來た。

暑い、暑い、朝つからもう日中だ。今朝などは眼が覺めると、溜らなくなつて飛び起きた。空中が油煙臭くて思はず胸がむかむかする。昨夜、ラムプを消し忘れたのだ。頭がモヂヤモヂヤするので兩手で搔きむしると大きな油蟲が二三匹飛び出した。黑蟻までがボロポロこぼれ落ちる。油蟲にも弱つて了ふが、蟻から頭の毛に群られるくらゐ氣味の惡いものはない。蟻と云へばある內地の畫家が島の農家に泊つた夜中の事である。シユウシユウといふ音に目が覺めると、小暗い油火の下で、おかみさんが床の上に起き直つて、長い髮の毛を逆さまにしてシユウシユウと櫛で梳いてゐる。驚いて何したんですと聲をかけると、いえの、蟻を梳いてますじやあよと答へたといふ話を聞いたが、それは事實である。全く身顫ひがする。

蚊帳をまくると、油蟲の羽音が雨の降るやうだ。バナナの腐つた臭ひや、饐えた甘蔗黍の汁の臭ひがいつぱいする。

階下へ下りてゆくと、この宿の白髮のお婆さんが籠の下にしやがんでブウブウと火吹竹を吹いてゐる。白い浴衣を朝つ

から肩肌脱ぎにしてゐる。俎板の上では庖丁や甘藍がガタガタ動いてゐるのだ。動かしてゐるのは油蟲の蜜集團だから凄くなる。

ところが不思議な事には、この島には蚤や虱は一匹もゐない。蠅はゐる、それはすばらしいものだ。裁判所の書記のAさんの話に據ると、まだ夜が明けない頃に、天の一方で、電車の曲る時にギイと音を立てるそつくりの音がするさうだ。それは蒼蠅の大圓柱で、魚市場だとか、腐れ盡したバナナ畑とか何でも臭氣の激しい個所を目がけて突進すると云ふのだから驚く。幸に私は朝寢坊でまだ一度も見かけない。

裏の井戸端へ出て、素つ裸になつて釣瓶の水を頭からザアザアかける、それでやつと活き返へるのだ。

空をふり仰ぐと、雲一つ無い瑠璃色の圓天井は南洋人の髪飾見たいな椰子の葉の上に恐ろしいほど澄み亘つてゐる。實に何とも云へぬ美しさだ。椰子の葉のてつぺんはさらさらと搖れてゐる。風は高い高いところを流れてゐるのだ。

檳榔葉葺の家の蕃瓜樹(パパヤ)の花、紅い佛草花や、棚の火のやうな碇草の花の群がり、凡てがまるで眞空のやうに明るく、而も乾燥しきつてゐる。光り耀いてゐる。

全く小笠原の夏だ。今朝もまた昨夜の食べのこしの正覺坊の煮つけを、婆さんが食べさせるかと思ふとうんざりする。

木戸を開けて外へ出ると、道路の白い砂地は既に黄白く耀き出してゐる。下駄に穿いてゐるものの足の、裏が熱くて燬けつくやうだ。

と、見ると、不思議な魔法國の光景だ。幻覺の世界が私の眼の前に燦爛と、而も靜謐と平和と微笑とを以て輝き出した。

T字形の町角の正面、挽物細工の店の前、其處には大きな護謨の木があつた。その厚い油ぎつた葉は原色の青だ。その新芽は犬の男根の如くまたは朱の蠟燭のやうだ。その下で、女が立つてゐる。手には荒繩でくくりあげた正覺坊の頭をブラブラさしながら白い麻の帽子を阿彌陀にかぶつた白人の漁師と、何やら話してゐる。呑氣な話だと見えて、笑顔までしながら、何が何でおじやるじやあと、のろくさした古雅な八丈言葉で話してゐる。白人の奴は下向加減に大きなマドロスパイプを咥へて、煙をもやもやさしてゐる。

ブラブラの正覺坊の頭の綺麗さはまた格別だ。青、黄、綠、瑠璃、翡翠、寧ろ毒々しいほど鮮かである。

鶯が啼く。鶯が啼く。

*

千年に一度しか咲かないと云ふすばらしい蘇鐵の花が咲いたと云ふ、山から見つけ出して切つて來たと云ふ。見に行つて御覽なさいと人が云ふので、日中だつたが、つい近所なので見に行つた。

恰度、Mといふ雜貨店の向うの家で、平常はあまり見すぼ

らしいので、何をする家かとも氣がつかずに通り過ぎた檳榔葉葺の陰氣な平家だが、今日は何だか家の中が光り耀くばかりに明るい。

板張りの座敷に（この島には疊を敷いた家は官舎の外には一軒も無い、宿屋でも板張の床の儘である。偶には其上に莚だけ敷いてある。壁なども內地のやうに土ではない。板か檳榔葉かである。）大きな大きな恐ろしく大きな蘇鐵の花が、これもまた驚くほど大きな素燒の鉢に、まるで神樣の樣に祭られてあつた。

花ばかりだと云ふが、高さが一間の餘もある。鳳梨を何百と積み重ねたやうな茶褐色の花だ。それを黑ん坊の婆や眞黄色ろい日本の娘や白人の漁師共が掌を合はせるやうにして蹲踞んで覗き込んでゐる。肩と肩とをすり合して、眼を皿のやうにしてゐる。

よく見ると、まるで生物だ。生不動のやうに燃え上つてゐる。香氣と云つたら悶絶しさうだ。むしろ苦しいくらゐの芳香である。

それに、蕭々として黑蟻の幾千萬が密集して匍ひ上つてゐる。

蘇鐵の花にも驚いたが、凄まじい黑蟻の密集團體には全く身體がガタガタ顫へるほど驚いた。

*

黑人のアレキサンダア・イサベラ婆と云ふ名ばかり西班牙の女王らしい婆がゐる。その婆のお喋舌ときたら、天井のお星樣よりお喋舌だ。この暑熱にこのお婆さんにつかまつたが最後、誰でも死ぬほどの苦患を嘗めなければならない。

それにもう一人、ママの海岸といふところに、今は癩病の西班牙の老貴族の婆さんの僕で、昔は人を食つたと云ふ黑人のユペピイ爺の娘にアギネスと云ふのがゐる。この娘のお尻の大きさときたら二擁へもある。このアギネスがある時獨木(カヌウ)舟に乘つて、あの大きな飯杓子のやうな櫂でガボツガボツと漕いでゐると、何でも大きな岩礁にドシンとぶつかつた。その拍子に、驚いた事にはお尻の力で舟が二つに裂けて了つたといふ話だ。（尤も小笠原の獨木舟は底だけ刳つてあつて、兩側は板張である。）このお尻ではこの暑熱には全くたまるまい。

小笠原の夏は全くこれらの二人で象徴してゐると云つても差支へない。

*

ただでさへ光澤の強い色々の樹の葉が、夏になつて愈々油ぎつて來た。濱桐の葉などはてらてらしてゐる。それに護謨やモモタマやの、豐麗で部厚で肉太な樹の葉の色の深さつたらないのだ。

七月になつてまた、島中のタマナの白い細花が咲き盛つた。香水の原料になる花だと云ふが、全くその花の滿開する頃に

は島中が香水の島になつて了ふ。

山上の枯草にしろ、兩手で揉みにじると、掌が香水に涵したやうになる。西洋にも枯草と云ふ名の香水があるさうであるが、恐らくかうした草の匂ひがするであらう。

＊

夏は、殊に、日中は對岸の山の向うから湧き出る入道雲がまるで金色になる。莊嚴な佛畫に見るやうな金色の雲だ。

光線の鋭さといつたらない。道路の白い砂（それは人間の脊髄骨のやうな砂ばかりだが。）も、椰子や護謨の樹の幹も全く金色に反射する。

裸の人間の身體もだ。

＊

今日は○灣の海邊へ行つて見た。

海の色の麗らかさ、それは何とも云へぬ澄み亘つた瑠璃色だ。濃厚で豐麗で光輝に滿ちてゐる。裸の子供等が二三人泳いでゐたが、その肉體が鮮やかな紅色になつて見える。こんなに美くしい人間の肉體を見た事はない。

その子供等が海から上ると、正覺坊の生洲に飛び込んだ引汐時なので、十幾頭の大きな正覺坊は甲羅も何も干からびた。なりだ。のろのろして重なつたり、離れたり、眼をほそくしたり、首を延ばしたり、匍ひ廻つたりしてゐる。その甲羅の上を子供等が、ちんちんもがをしたり、飛んだり、走つたりする。まるで飛石見たいに思つてゐる。

正覺坊こそ災難だと思ふ、それでも呑氣なものだ。相變らず恍惚微妙の體をしてゐる。殊に交尾して重なつた奴は、その下の雌は流石に苦しいだらうと思ふ。それでも重なつた儘だ。

この砂濱からメリケン松や蘭舌蘭の防風林を抜けると、人間の背丈ほどの萬年青が路傍に並木をしてゐる。それに四五尺の莖が一本づゝ出てゐて、大きな華魁のかんざしのやうな白い花が、盛りは過ぎたが、まだ咲いてゐた。蟻がやはり根本から上り續けてゐるのは驚く。

前の女郎屋の井戸端には、浴衣がけの怪しい女どもが何かべちやくちやと喋舌くりながら、だらしない風をして、洗濯したり、齒を磨いたりしてゐる。もう彼是お午なのに。隨分寢坊もあつたものだ。

隣の罐詰工場では、大釜に正覺坊を煮つめる臭ひがぐらぐらしてゐる。黑人のヂョウジ・ワシントンといふ名ばかりの大統領が相變らず、杓子で大釜の中を掻き廻してゐることだらう。

＊

この頃、何處へ遊びに行つても、赤いトマトばかり出す。小笠原のトマトは全く新鮮で、鷄肉のやうないい味だ。トマトと云へば、私はある時、とある人の氣もない山坂を

登つて行くうちに、急に折れ曲ると、向うから赤いトマトを竹の籠に山盛りにして、それを兩手で擁へてよちよち上つて來る六つばかりの子供にパツタリと行き當つた事があつた。

その子供の神々しさ、まるで頭から御光がさすかと思つた。思はず掌を合せたが、あれこそ佛の童子といふのだらう。

それほど天上の光が強く、トマトが燃え上つてゐたのだ。

＊

正午。——下の座敷で、晝餐を一人でボツリボツリと食べながら、何氣なく、板塀の上の空を見てゐた。

何が私の眼に這入つたか。

其處には檳榔葉葺の向うの家根だけが見えた。その上に、てらてらと光つてそよりともせぬ護謨の喬木が見え、肉太の大きな葉の無數が、寂寞たる白日光耀の中に、葉と葉、枝と枝とを垂れかぶさしてゐるだけだつた。その間から、梢の上から空が見えた、麗らかな瑠璃色の夏の空が。

と、ピカピカと光つたものがある。それが光つては上り、光つては下りする、とまた、葉に留つては急に落ちかけたり、空へ飛んで行つたりする。それは翡翠玉のやうな一點光である。

表の通りは閒寂（ひつそり）として物音一つしなかつた。

ふと、しくしくと獻欷きする聲がした。

驚いて、立つて、庭の木戸を開けて見廻はすと燒けるやうな白い道路の眞ん中に金髮の眼の碧い色の白い、まるで護謨人形のやうにくりくりして可哀いい小さな白人の子供が、涼しい白のシャツを着けて、裸足のまま、兩手を眼に當てゝゐた。泣きじやくりしてゐるのである。

『どうした、どうした、』と云ふと、急に聲を高め乍ら "Wa-ha" と泣く。『泣くな、泣くな、何が欲しいんだ』と、頭を撫でると、

"I Want Dai-fuku-mochi." と云ふ。

見ると、眼に當てた兩手の一方の小指に細い糸がついて、その糸が眞直に天上さして登つてゐる。それが些のたるみも無く緊張する丈緊張してゐるので、驚いて眼を空へあげてゆくと、これで解つた、その糸の尖端に青い玉蟲がゐるのである。

子供が泣くたんびに兩手を眼から上げ下げする。そのたんびに糸を引つ張り下ろされ、落ちかかると、また飛んで行つては護謨の葉へ縋りつくのである。そのピカピカだ。

おお、玉蟲と子供と大福餅。

＊

風流だか、商賣だか、天然老人の物數奇には驚く。註をして置くが此老人は名古屋の商人で、綺麗な人相の人だ。とある小さな家の戸口に天然物買占所といふ看板をかけて、自分はその内で、せつせと、白壇の根つ株やモモタマやタマナの

木の瘤やを磨いてゐる。天然天然が口癖なので、私達は天然老人とお呼びしてゐる。

天然老人、ある日の事に奇體な男根そつくりの木の瘤を發見した。非常に悦に入つて、欝金の布で拭いたり磨いたり掌中の珠のやうに慈しんだものだ。私が行つたら、顏を赤めながら、そつと懐中から出しては引つ込める。それ丈なら何の事もないが、瓏を得て蜀を望むで、又一つ欲しくなつた。それから毎日折り疊みになつた小さな鋸を澁色の雜嚢に入れて、肩から斜めに掛け流しては隨所の山野を探してあるく。一つだからこそ尊いのです、二つとお探しなさるなと忠告しても、いや人には見せないものでごわすで大丈夫でごわすと云つては出てあるく。時々は獨木舟は一人で漕げさらにもありませんで、御助勢賴み入るでごわすと賴みに來るので仕方なしにお伴をする。そのうちに幾度となく木に上つては鋸をゴシゴシやつたのが戸棚に一杯になつた。もうよかりさうなものだと思ふと、今度は陰木を一つと仰有る。ほとほとに驚いてお伴をして行く中に、とある日のこと、變然老人の庵の前を通り懸つた。

又註をして置くが、この老人がまた變物で、寒山拾得そこのけの風體をしてゐる、髮ももぢやもぢや著物もボロボロで、眼鏡だけは大きいが、眞つ黑い出つ齒のそれはそれは乞食見たざる。家の中はと云へば虱の湧きさうな汚れ腐つた緞子の蒲團を一枚敷きつぱなしで、周圍には珊瑚のかけらや高瀨貝や、廣重の版畫や、そこらいつぱいに取り散らして、御自分は破れ鍋で蕎麥粉などを搔き廻はして、飄々と煙の行衞を見惚れてゐるといふ、あまりに變妙なので天然老人に對して、變然老人の尊號を奉つたのである、この二老人の面白い事にはお互に輕蔑し合つて、あれは何でごわす、高が乞食でごわせんかと一方が云へば、一方は又、ははん、あの俗物が、と云つた風である。

ところで、その庵の前を通りかかると、變然老人その日は草鞋に脚絆がけで、白檀の杖（驚いてはいけない、小笠原では白檀は山間の堀立小屋の柱にも使つてある。）をついて何處へか御出ましの樣子である。天然老人ニヤリと笑ひながら、天然木探險はいかがでごわすと云へば、變然老人、いや拙者はな、何とか山の獨活の大木を見にまゐるのでと空を向く。獨活の大木、へへえと笑ふと、いやそのな、全くの獨活の大木でな、その周圍が三擁へ半のな、高さが五六丈がものあるさうぢや、ぢたいがこの島に二本あつたといふ話じやがその一つは惜しいかな、枯れ申したで、今は唯だ一本きりじやと申す。それがな、例の大木で、それ杖でかうと云つて、横撲りに拂ふ樣を見せて、これでボキリと折れるさうじやわ、笑止じやないか、ファファファと黑い出つ齒でお笑ひになる。

天然老人澄ましたもので、いや拙者は天然の陰木さがしで

ごわす、御免蒙る、北原さん、さあ參りませうと私の方を一寸顎でしやくつて見せた。

私は獨活の大木に氣がひかされたが、山は流石に弱るので、海の獨木舟（カヌウ）を漕ぐ事にした。

夏はいよいよ酣である。

葛飾小品

葛飾から伊太利へ

鼎君。

伊太利は今藤の花が眞盛りだといふ君が羅馬からの繪葉書は、麻布から附箋がついて、萬葉のあの古い眞間の手兒奈の墳墓の傍まで廻つて來た。私達(私はこの五月に結婚したよ。妻は章子といふのだ。)は恰度その頃眞間山の下の龜井坊といふ日蓮宗の庵寺に間借してゐたものだ。その裏庭には一本の棗の花が咲いてゐてね、手水鉢の中や蔭の葉蘭や陰氣くさい洞のできた枯石の上、又は厠の窓から見える、やつと掌ほどの茄子の畑に、細かな細かな昆蟲のやうな淡黄色の花を敷限りなく散らしてゐた。そのつゝ左手に手兒奈の昔汲み馴れた龜井といふ井戸があつた。私達はその冷たい水で顏を洗つたり、お飯を炊いたり、青い野菜を濯いだりしてゐた。その前の古い湯殿が私達のあはれな臺所さ。何處からお坊さんが見つけて來たものか、壞れて脚のもげた流しの臺を傑けたボロの壁へくつつけて吳れたのは嬉しかつたが、使ひすての水はそこへその儘流しては困るといふのだ。で、鍋の中や飯櫃の中へ一旦溜めて置いて、ずつと山蔭の菊苗の畝まで棄てに行つたものだ。それはね、そのつい裏に青い葦がやつと二三十本生えそろつた汚ない古池がある。それが矢張り手兒奈の故蹟で、その昔身を投げたその人の、白鳥のやうな屍を浮かした處ださうな、それ故勿體ないと云ふ。葦の葉も悲んでか今も皆一方にばかり靡いてゐる。それで「片葉の葦」。日ざかりにはよく青い蛙が啼いてゐたが、其處には白いあやめの花がたつた一つ咲いてゐたよ。

恰度、日本は梅雨の中でね。龜井戸の藤も散つて了ひ、京成電車の中にも、菖蒲の花を畫いた堀切のビラなどがちらほらと出初める頃だつた。君がナポリの露店で枇杷が出てるのを見たり、ポンペエの道でシトロンの鈴狀になつた果樹園を見たり、「卽興詩人」でお馴染みのベスヂオの噴火を見たりして居たそれから一月も遲れて、やつと此方の草葺屋根には椶櫚の黃房がぶら下り、蕚菜ヶ池に蟇の子が湧き出した。

眞間山弘法寺の末寺鶴井坊も、多祐の頃なぞは嘸いい景色だらうと思はれる閑靜だつたがね、世も澆季となれば坊主の耳には山の松風の聲も聞えず、祖師堂の蔭に白い栗鼠が啼いても心を澄ます風情もない。後の山は切り開く。手兒奈廟の周圍の廣い蓮花の沼は埋立てる。それかあらぬか、そこら一面眞赤な原つばにされて了つて、チョボチョボと生えた草の中にはトロッコは走る、埃はあがる、正物の蟇口迄がピシヤッコに干乾び、鴉はわめく、何も彼も淺間しい夏の炎暑が來かかつた。その原つばへ時たまると、活動寫眞の赤鬼や青鬼どもが、晝の日中にひよつこり出て來て、欠伸なぞしながら、眞間の小川の一本橋に寐ころんだり、虱取つたりしてゐたものだ。紙張の鐵棒なぞは草の中へ抛つたらかしよ。其處へ黑い蝙蝠傘へ青風呂敷をひつかけて、お尻をまくつた田舍の太郎兵衞どんが、へいへい御免なせえと渡つて來るのだ。腹ん這になつた赤鬼が大儀さうに、これは失敬と土手へすべり落ちると、厚紙の白い生爪をひとつ剝がしたと云つて、わざとらしく悄氣た見得を切る。一人の青鬼がどうも俺もちとトラホームらしいぞ、一寸見てくれと青い目ばかりの中から白眼玉をむき出す。ああいい天氣だねえ、何の因果で鬼なぞになつたかなあ、あゝ〳〵、つまんねえやと、赤い奴がまた、橋の上に俯ひ上ると、下から青いのが醉つぱらつて、兎角浮世は金次第さ何のと利いた風を云ふ。

空は蒼く晴れ渡つて、雲一つ無い。鬼どもに煙草の火を貰しながら、私がお前さん達は何だと訊ねると、なあに靈坂の作り換へでね、俺(わ)どもは狼の代りに出て來たのでさあと呑氣なものだ。

土手の向うに杉を一二本立てると靈坂觀音堂の山の景色になる、下の小川が谷底ださうだ。笑ふと、なあに寫眞は二つに切り離すから立派なもんでげすぜと常盛座の半被を着た若い衆が澄ましてゐる。さあ始まり……と禿頭が手を上げると、矢庭に黃と藍の荒い格子縞の惡漢が一本橋から眞逆樣さ、背廣の寫眞師がお出たねと、カチカチ〳〵、フイルムを廻はす。鬼はどうした〳〵と云はれて眠りこけた赤と青とが吃驚り飛びあがつて、そこへ駈け出すが早いか、大手を擴げたり、兩足を上げたり、指ざしたり囁いたり、ものゝ五秒も驚いたと云ふ風を見せて、へえ何の事つた、莫迦々しいと戻つて來る。淺い川の中でしばらくあぷあぷ苦しんで見せて、惡漢は、もういいかいと水の中から大たぶさの髢を抛りあげる、髢の青い月代がテカテカ光つて原つぱへ轉がると、男役者の觀音樣が蓮歩ばた〳〵駈けつけて、早速神韻縹緲といふ體、お白粉眞白の素裸に金ピカピカの裝飾を着け、頭の上から三越ヴェルのやうなものを被つて、眼を半眼に開け、間にあはせの手拭の未生蓮を斜に持つて構へると、風が裳裾を吹きあげるといふ騷ぎ、畢丸が見えますよ、アッハ……でだいなし。やり直

し――と云ふ作者の聲、フイルムがまたカチカチ〳〵……。隨分莫迦にしてるぢやないか。

ついその下手では始終糞舟が四五艘は溜つてゐて上の一本橋から糞尿をざぶざぶ桶から其儘舟の中へあけ流しだ。その傍に浮島辨天といふ小さい祠がある。そこには濃紅の野茨の花が今を盛りに咲いてゐて、ちらほら水と舟とに散つてゐた。

日和は續いても南風が吹くので、原つぱの塵埃で障子は閉けられぬ、それに暑い盛りに臭ひはする。庭に紫蘭の花は咲いて、ふくら雀は來啼くと云ふ條、折角の閑居も全く幽かな心持はうち消されて、机も疊もザラザラだつた。それに書院の前の廢れ田圃に疳蛙は啼く。靜かに思索する事などは思ひもよらぬ。

思ひのほか眞間は俗なところだつた。赤人が「來ても見つ人にも告げむ」と涙涕悲傷なすすべを知らなかつた眞間の手兒奈の奥津城は、朝から晩まで南無妙法蓮華經ドンドコドンドロと太鼓を敲いて盛んなものだ。手兒奈が安産の神様にされて了ひ、眞間の繼橋が今に新らしい石の橋に架け換へられようといふ時節だ。御堂の中では小坊主の觀妙が木魚をポクポクぶつつけながら私達が通れば一寸こつちを向いて失敬と片手を上げる。柴又の帝釋様は年に二萬兩の御賽錢が上がる、羨しい〳〵と、白いヘルメットの坊さん達が、日がな終日埋め立ての赤い原つぱへ出て、愈々家作の相談ばかし。手兒奈の緣由を訊いてもわからず、何でも萬葉に歌があるさうですから、それよりいくらか時代がついてゐませうとの話。つくづく呆きれて了つたね。上人様の留守中は、役僧も、飯炊きの男も、その十二になる子悴もせつせと御經の暗記にいそがしい有様、それに盜人は恐がるし、蛙が啼けば喧しいと出て行つて石油をぶつかける、一にも金、二にも金だから、その他の事は推して知るべしさ。

うき吾れを寂しがらせよ閑古鳥、閑古鳥でも啼きさうなその庵寺も、住つて見れば矢つ張りうき世の風に荒んでゐた。男のやうな白髮のお婆さんが病氣で、和尚が井戸端でその汚れ物を洗濯する日が多くなると、螢が出盛り、丘の上の畑の麥は刈り倒され、新藁の山が在家の庭に山のやうに積み上げられた。愈々六月も末となつた。馬鈴薯の味がうまくなり、棗の花も散つて了ふと、私達はまた鳥のたつやうに、此處の三谷へ飛んで來た。

そこのお寺へ置土產の歌を一つ御目にかけやう。

蓮の池埋めてまま食ふ眞間の寺南無妙法蓮華經今の日蓮

＊

鼎君。

君が羅馬からナポリへ、ナポリからポンペエへ、ポンペエからまた羅馬へ歸つた頃、私達はやつと鎌倉から眞間へ移つて、

新らしい塒を作つたばかしだつた。君はまた、これからシエンナ、ピザを見て瑞西のゼノヴより佛蘭西へ歸る豫定だと云ふが、私達は眞間から川を一つ隔てたばかしの、此處の三谷へ巢を變へたばかしだ。君は今頃はゼノヴ湖の月明りに白い帆をかけた快走船（ヨット）でも走らしてゐる事であらう。君は日本なぞに歸りたくないと云ふが、それは本當かも知れん。私は君がつく〳〵羨しいよ。君は空を翔る一羽の燕、私達は風に揉まるる枝垂柳に揉まれ乍らも矢つ張りかぢりついてる二羽の雀さ。巢はありながらひとの巢でね、何時また追つ立てられるかわからない。一羽の雀は元氣だが、一羽の雀は病氣でね。元氣な雀は何處迄も啼いたり飛んだり翔つても行きたいが、二羽になつては仕方がない。せめて一羽の快くなるまで、大人しく此處のお宿で我慢をします。君も巴里へ歸つたら、日和次第に日本の秋には歸りたまへ。待つてる、みんな待つてる。

鼎君。

何だか話が感傷的になつて濟まない。私もさういふつもりでこの消息を書き出したのではないが、若しさうなら、それはみんなこの怪しいランプの光のなすわざだ。ああ、この古びたランプ！　ホヤが煤けて、時代のついた紙笠までが嗅げば黴土の香ひがする。恐らく幾年か、棕梠繩や、枯れた黍がらと一緒に乾草小屋の隅つこにでも抛り込まれてゐたものであらう。私は今その黄色いぼやけた光のもとで、きりぎりすの啼く聲を聽きながら遙かに君を忍んでゐる。ああ、ランプ！巴里や羅馬の紫の圓弧燈や蒼い瓦斯や強い電光飾に馴らされた君には、この語を聞いてすら、今更不思議なお伽譚の中へでも引き戻されるやうな時代錯誤の感じがするに違ひない。東京から僅か三四里離れたこの片田舍に來た私でも、何やら果敢ない里心が湧いて、あどけなかつた昔の事さへ思ひ出されて仕方がない。

私はその鈍い羅曼的な光のかげに、恰度子供のやうな氣になつて君を思ひ私自身を語つてゐる。今夜あたり君は何處の旅路の高いホテルの窓から、乞食どもが搔き鳴らすマンドリンの夜曲を眺め下ろしてゐる事であらう。ランプの笠には蟲が來て啼く、やつぱし此處は日本の葛飾だね。

私は今安らかだ、極めて安らかだ。すつかり落ちついた。さうして心の底から平和と神の恩惠とを乞ひ求めてゐる。私は田舍に來てよかつた。私は氣が晴々する。私は一時商人にならうとした。然し私はやつぱし詩人だつた。あの急がしい阿蘭陀書房の二階にゐて、强ひて市街の喧騷や算盤の音に交つても、私が何をしでかす事が出來よう。寂しい儘に身はいつか頭をまろめた發心者のやうになり、雨につけ風につけ隣り家の雀とばかり親しんで、末は一すぢの煙のやうに消え失せようとした私は、今思へば夢のやうな氣がする。

私がこの四五年この方たつた一人の女性の爲に、どれほど

心を搔き擾されたか、さうして諦めても諦めのつかぬこの人生に強ひて悟り澄ましたやうな氣になるまで、どんなに眞實を傾け盡し、どんなに苦勞をして來たか、君も聞いて呉れたら涙を流して呉れるだらう。私の傷つきはてた心が、今や新たなる女性の爲に甦り、昔の若々しい「思ひ出」時代の血が再び自分の脈管に燃え立つを覺える。喜んでくれ。今度の妻は病身だが、幸に心は私と一緒に高い高い空のあなたを望んでゐてくれる。さうして私を信じ、私を愛し、ひたすら私を賴つてゐる。この妻は私と一緒にどんな苦難にでも堪へてくれるだらう。たとひ私が貧しくとも、曩の日の妻のやうに義理人情を忘れて、あはれな浮世の虛榮に憧れ騷ぐ事もあるまい。私は今元氣で呼吸が輕い。私は今極めて安らかだ。

鼎君。

今、妻が傍に來て香をたいてくれてゐる。それは夜風が非常に勻ふからだ。風はこの上なく涼しいが、肥料の臭ひが隨分強い。にほどりの葛飾野邊もこれには私も弱らされる。けふ、その話を母屋の主人にすると、さうですかねえ、いや、あれは庭の沈丁でせうと云つた。今もその話をして二人で腹を抱へてゐる處だ。蚊も隨分多い、はたはたと團扇ではたくと、ランプのかげからほのかに白く、蚊遣の煙も靡く。蚊遣の煙もいいものだ。

空には星が出て、蟲がじいじい啼く。夜遊びの村の若い衆が尺八を吹いてる。夜はまだ早い。私はゆつくりと君に新居の逐一を書き綴つて見よう。君も異國の何處かの空で旅の夜長に見てくれ給へ。

＊

それはつい昨日のことだ。而も暑い日中でね。愈々龜井坊から引移ると云ふので、私達はあはれな私達の家具（それも詩集や花瓶、それに簡單な食器類位だ。）を車の上に整めて、その上に眞白い鐵砲百合の一鉢を載せて貰つて、よぼよぼの運送屋を先に出した。妻と助けに來てくれた婆やとに後の掃除を委して、車の後から私はたつた一人、壞れかかつた小鳥の巢をポケットに入れ、靑銅の燭臺の、大きな釣鐘狀の硝子の笠ばかりを一對兩腋に擁へて、あの長い市川の長い長い橋を渡つて行つた。硝子がピカピカ日に光るのではらはらして、その橋を渡りきると畑は茄子や南瓜の花盛りだ。もう其處は昔の葛西領、今の南葛飾郡となる。四方の眺望は更に廣々となつて、明るい圓天井の下でお百姓達は肥料をふり撒き、みそ萩の咲く在家の庭から雞や犬の聲が聞え、子供は泳ぎ、雀は雀で到るところのもろこしの葉に翼も頭も光りかへつて、飛んだり嚙りついたりしてゐた。さうしてまだ蕾んだばかりの蓮花や見渡す限りの靑い田の遙か向うに、眞黑くなつてあがる本所あたりの煙が見え、さうして畔の奏皮の下には糞舟が休んでゐたり、裸の人間が飯を食つたりしてゐた。

私は途々これはいゝところに來たと思つた。同じ葛飾でも東と南はかうも明るさが違ふものかと思つた。赤土のあの原つばに較べると、此方はすつかり眞靑で、みづみづしくて、稻葉を渡る肥料の臭ひまでがプンプンして氣持がいい。全く新鮮だ。歩いてゐると兩腋の硝子の笠が重くなる。土手の道芝の上におろして、額の汗を拭いてゐると、後から自轉車が來た。擦れ違ひさまにヒラリと下りた人を見ると此家の主人だ、千駄木の先生そつくりの顏をしてゐる。前のは貸間を見にいつた時、その人は乾草商で、秋になる迄はいつもブラブラ遊んでゐますなどと莞爾して話した。この呑氣な田舍の鷗外先生が相不變私の顏を見て莞爾した。「もう引越して來ましたよ、實は今日御返事する約束になつてゐましたが、面倒ですから早速荷物を出して了つたところです。お貸し下さるでせうね。」と云ふと「どうも驚きましたねえ。」とまた莞爾した。「何でも彼でも荷物を擔ぎ込んで了ひますよ。」と私が笑ふと、「どうもどちらが貸すんだか借りるんだかわかりませんねえ。呑氣だなあ。」と烟草に火を點ける。私も呑氣だがこの人も隨分呑氣だ。「もう荷物は多分着いてゐます。」それはと流石に狼狽てて、それではお先にとまた駈け出した。白狀するが實は前の日その離家を見に行つただけでまだ確とした約束はしてゐなかつたのだ。

小岩村の小岩田の三谷、そこにたつたひとつ赤い郵便函の下つた家、前は柴又と千住の別れ道、石の地藏が一體立つてすぐ下手に磯がある。これが矢つ張り地藏橋、橋の横手のこの草葺の家を遠くから見ると、南に柳が枝垂れて風情がいい、店にはラムネや果物や雜貨品が並んで、上り框には腰掛けた村の若い衆たちが烟草でも喫んでゐると、外庭には無くてはならぬやうにちやんと掘ぬき井戸がある。井戸には水がなみなみと溢れて、溢れた水が板張の流しに周圍からこぼれてゐる。その傍に紫の花あやめが眺向に咲いてゐて上に粗末な竹棚がある。まるで光琳模樣そのままだ。その家を前の日河を渡つて見た時の嬉しさつたら。

「離家をお貸しなさるさうで。」と訊ねると、誰かが井戸の右手を指してそちらの開扉があいてるだと云ふ。廻つてゆくと田圃に出る。隅つこには小さい河楊が一本白い葉裏を飜してゐる。そこに黑い門があつて中に入ると芭蕉庵と云つた風、少し陰氣なやうだが閑靜なものだ。門から槇の木、泰山木、二三の盆栽物と續いてみんな靑い。廻り緣の前に一本の百日紅がある、それもまだ花が咲くには間がある。例の靑い柳の枝垂れて垂れかぶさる下にはささやかな古池がある。池には柳河の所謂ガメノシユブタケが一面に靑く生えてそのふちには稗草や眞菰が茂つて、何處からが庭だか池だか堺がつかない。壞れて倒れかかつた向うの竹垣の上から蔓草や稻の葉がのしかかつて來て、その上から廣々とした野つ原や遠い林や

人家さへ見える。西日が射すのかその方の廂に葭簀が一枚下つてゐる。葭簀を透かして檜葉や青い橘の木が見える。その實も葉がくれに矢張り青い。どうも慈々古池の芭蕉だと思ふと何だか少々擽つたくなつたが。

その家の柳が見えて來た。急いで行くと荷車が先へ來てあやめの傍に休んでゐる。三谷の鴎外先生も白い鐵砲百合の鉢を下し乍ら笑つて居る。もう占めたものだ。「とうとう來ましたよ。」と笑ふと、店にゐた皆なも笑ふ。これが私の引越しだ。

門から入つて、障子をすつかり取はづして貰ふと、素敵に明るくなつた。昨日は何だか寂びれ過ぎて陰氣くさく見えたのは雨の前で全く空が曇つてゐたせいかも知れん、この分では安心だと、小鳥の巣を一番に座敷へ投げ出すと其中から眞紅なダリヤが疊にころげ出した。疊も新らしい。

部屋は二間しかないが、八疊の方には床の間も違ひ棚もあるし、次の六疊には多の用意に爐も切つてある。小さい臺所も別に附いてゐて、今度は坐つた儘で御飯が炊けるやうになつてゐる。これで私も落つきますと後から來た妻の章子も喜んだ。

床の間に紅表裝の佛足石の石の擦紙の軸をたつた一つ掛け流して、人がせつせと後片付をしてゐる間に素早く外へ逃げ出した私の狡さを笑つてくれ。

どうも此方はいい、素敵滅方界に明るいね、南瓜はごろごろ畑に寢つころがつてゐるし、瓦燒の畑は上るし、綠のキャベッは生物のやうに彈けかへつてるし、蟲は啼くし、人はぢよきぢよき草を刈つたり、擔いで歩いたりしてゐるし、……

私は眞間から來て溜飲の下つたやうな氣がした。

然しそれよりも先づ私の驚いたのは、向うの鴻の臺の上からむくむく湧きあがる眞白な入道雲の塊だ。それは眼に入る何物よりも一番強く光り、一番力があり、一番奥底が知れなかつた。それが見てる間に躍り出して一大ヒマラヤ山脈を現出する、と、奥の奥の銀灰色のかげから幽かな日中の雷鳴が轉がつてゆく。素晴らしいじやないか。天の景色は豪放で、彼等のほしいままだ、その上は眞青な鳥が一羽飛んで行つた。土手へ上つて見ると江戸川が洋々と流れてゐる。川向う一帶の連丘は雲の峰に壓しつけられて低くなり、前には千疊敷の青葭原が寂として何だか騒いでゐる。葭切だ、聽いてゐると羽ばたきの音まできこえさうに澄みきつてくる。而も日光は水一面に反射して葦間に纜つた糞舟まで銀象眼の屋根舟のやうに小さく上手に光つて見える。その遠くに巨大な煙突が二本煙を黑く噴きあげてゐる。「いい景色だね。」と草刈に話しかけると、「へえ、これ滿洲の景色だちふてね、昨日東京の活動が撮しに來ただあ、何でも沖禎介が向うの坂から馬で駈け下りるてえと、後から露助の奴やつぱり馬で追つかけて行くだ。東京の奴らそれ見に金出してだまされに行くだあから

莫迦だあ。」と笑つてる。ぞくぞく嬉しかつたね。

ポッポッポッポッ……と河蒸汽が波を蹴立ててのぼつてゆく、續いて白帆がいくつもいくつものぼつて來る。

草の中へ仰向になつて眼を瞠つてゐると何だか涙がこぼれ落ちさうになる。眼を瞑るとつくづく自分がいとほしくなる。じつとしてゐると何處やら人間が大きな聲で話してゐる。笑ひ聲もきこえる。雀も騒いでゐる。蟬も啼いてる。

鼎君。

此處は人間離れがしなくていい。此處の畑に働いてゐる人間は皆此處の地面にぴつたり合つてゐる。野菜も人間も皆地面から湧き出した儘だ。私は再び土手へ上つて、三谷の方を振りかへつた。

おお廣々した葛飾の野、見える限りの青田には鵠の鳥のやうに百姓が留つてゐる。大きな紅い太陽が西の空に廻りはじめると、その鵠の鳥の點々は火のやうに耀き、風はわたる。もう日暮に間もあるまい。ただ明るい一圓の野つ原から、人家の煙が賑やかにあがりはじめ、東京の方でゆるやかな汽笛が吼え立てた。

ああ、その親しい風景の中に、私に一番近く、柳が枝垂れ、ほそぼそと紫の煙を立てはじめた草葺の家、あれこそ私の家ではないか、妻がもう夕餐の煙を立ててゐる。私はたまらなくなつて茄子やもろこしの間を駈け拔けた。

紫の煙！　紫の煙！　私は私達のこの畑の中の新居を、その晩、紫烟草舍と名をつけた。

＊

その紫烟草舍に蚊遣が靡く。香のにほひも幽かに煙る。青い蚊帳を吊らせると、古代の眞菰のかげから小さな螢が來てとまる。涼しい、夜は涼しい。

いい住居だ。私の思つた通りだ。私はけふ一日泥足の儘で地面をぺたぺた歩き廻つた。いたるところ青田と蓮田續きである。田の畔には奏皮や榎の木が光りてそよぎ、何鳥の糞か白く乾いた板橋もところどころの溝に架つてゐる。而して日盛りは糞舟がいくつもいくつも綱を曳いて遙かの蒼穹の際までのぼつてゆく。

朝早く起きて、井戸端で、紫のあやめを見ながら顏を洗つてると、まだ露にぬれた田舍の一本道を、郵便脚夫が手を振つて來る。午ちかくなると豆腐屋も通れば、時折には柴又さしてダリヤや紫陽花をいつぱい載せた花屋の車も前の土手を通つてゆく。江戸川べりの河舟にゆけば新らしいピンピンする鯉や鮠が買へる。肉類その他は市川迄十二三丁行かねば無いが、鑵詰で濟ませば濟む。野菜はそこら中の畑から眞青の奴をもぎてくれる。東京には近い。住み馴れて見たら、さほど不便も感じまい。不便でもいい。私はこの地面にぴつたり合つた生活がしたい。百姓達に交つて、生れた儘な明けつ放

しの素朴な、みづみづしい、眞實の人間らしい生活がして見たい。私はこれから愈々素つ裸だ。

今庭の向うの曼陀羅村の秦皮林を紅い燈をつけた押上行の電車が通つた。あれは恐らく今夜の最終のものだらう。

明日は暗いうちから飛び起きて、また、そこらの蓮田でも見に出たい。泥の中を尻までからげて、ちやぶちやぶ歩くのはいい氣持だ。

夜がふけた。君もこの手紙を疊んで、つい上の電燈のスイッチをねぢりたまへ。さうしたら異國の青い月明りや遠い街のぞめきが、君の白いベットのあたりに幽かに流れ込むであらう。さうして君を少年の日の祭日の囃子や、庚申の晩の黄色いランプの夜話にまで君をほのかに連れ戻してくれるであらう。

私も今は日本の重い雨戸を閉めに立たねばならぬ。

星が流れる、明日も天氣か。

大正五年七月二十五日　　君の眞實なる友より

二伸。君はもう巴里のファルギエエルの畫室に歸つたかも知れぬ。と思ひながら、わざと、この手紙は羅馬あてに出して置く。この手紙がいろいろの附箋が附いて、伊太利から瑞西、佛蘭西へと後から同じ旅してゆくかと思へばなつかしい。私は今は葛飾のお百姓の一人だ、せめては私のこの言葉だけでも異國の匂ひにひたらせたい。

螢

「思ひ出」の首の赤い螢の時節になつた。今朝も妻が蚊帳を疊んでゐると、その中から螢が二三匹出て來た。それを私がひとつびとつつまんで庭の小池の睡蓮の葉に留らせてゐると、例の如く、村の子供たちがはひつて來た。

私どもの朝飯の濟むまで、子供達は緣側の泰山木の下に集まり、誰はじむるとなく、相互に可憐な兩掌を開いて、それらをうち合してゐた。一人の子の掌は雪のやうに白い。觀てゐると、非常にかはいい。私がいきなりその掌を捕へると、その子は驚いてばたばたする。それを無理に引き寄せていぢくり廻してゐるうちに、ふと怪しい好奇心が湧いた、一寸お待ち、いいものを描いてあげるから。

私が硯や筆を取りそろへて、引き歸してくるまで、その子は、大人しく元のところに待つてゐた。私はその子の小さな掌を開かせてそこに朱であかい金魚をひとつ描いた。たつた一匹。

眼を圓くして周圍から見てゐた外の子供達も一齊に歡呼の聲を擧げた。無心な子供達！　彼等は疑もなく神の奇蹟を信

じ得る。少くとも彼等の信じてゐる私の奇蹟を。それは彼等の澄みきつた黑い眼、それらが凡てを語つてあまりある。何といふ謙讓な而も正直な眼だ。

子供達は一人一人に私の前にその兩掌を開いた。泥まみれな全く汚ない掌だ。然し活々とした掌、愛と力とに滿ち、紅みがかつて指の尖まで膨れかへつてゐるそれらの掌、そこに抑へきれぬ生が今にもはちきれさうに躍つてゐる。快い活潑な發育！

日光の中に突き出せ、光りかがやく泥まみれの掌を、さうして力一杯にそりかへして見ろ、その十本の指さきを。

私は確乎とそれらのひとつびとつを握りしめた。あるものは稻の葉つばの匂がした、又あるものは馬鈴薯の花の匂が、而して又あるものは地面の匂がし野菊の匂がした。さうしてどれも、どれも日光と人間の汗と脂とに依て色づけられてゐないものはない。私はそれらの掌の中に子供達の望むが儘に、赤い花、雀、蝸牛、舌の赤い蛇、あかんぼが小便するところを描いた。又は蜻蛉、蛙の類、或は淸新な綠の蕪を。

子供達の欲する畫題は極めて簡單である。さうして眞實だ。さうして凡てが彼等の生活に昵近な、而も粗野な生物ばかりである。さうして凡てが彼等のみづみづしい愛の對稱たらぬものはない。然し子供達は多きを望む。片つ方の掌に描いてやればまた片つ方のに外のものを望む。而して意識せずして模倣をする。一人がダリヤと云へば既に蜻蛉を描いて貰つた外の子供迄が、もひとつ俺あにもダリヤ描いてくんねえなと云ふ。

子供達よ、多きを望まぬものだ。欲しいものはたつた一つでいいのだ。一番お前達の愛するもの、たつた一つでいいのだ。さうして他人の欲するものを模倣してはいけない。眞に自分一人で發見することだ。

子供達は私のこの言葉を素直に受入れてくれた。可愛い子供達、お前達は全く純粹だ。いい言葉の前には皆異議なく頭を垂れる。

然し、こゝに一人、私の言葉を心から肯ぜぬ子供が一人ゐた。それはその中で一番小さい女の子で一番掌のいたいけな子だ。やはらかな紅葉のやうな手、その手はまだ母親の乳の香ひがした。私はその子を抱き寄せて後ろからその手の小指に接吻した。さうしてその小指だけに可憐な首の赤い螢を描いてやつたのであつた。その子は三歳であつた。それが泣つ面をして首を振る。俺あこんな小ちやいの、たつた一匹ぢや

いやだあと云ふ。いい子だ、それではお前の指一本に螢を一つづゝ描いてあげようねえ、やつぱり一つづゝだよと云ふと、うむと合點々々をする。かはいいぢやないか。私は溜らなくなつて指を一本一本吸つてやりながら黒と朱で點をうつて行つた。

小さな兩掌の十本の指、その指さきの十匹の螢。何といふすばらしい畫面だ。何といふ立派な裝飾だ。難有い、私の愛は今や全くその子の掌をそのまゝ私自身の藝術品にした。

人間の掌を畫面にして確かに藝術として裝飾を施すことが出來る。私は曾て印度の古畫に於て、その掌を朱泥で塗つた歌舞宴樂の女を見た。私はけふ不圖子供の掌の圖案に就て、意外に發見するところがあつた。初めはただ漫然と子供の望む種々の物の形を畫いたが、中ごろから私は全く私の藝術を創造するつもりで、一切夢中になつた。私は私の愛と私の天稟とで爾後私の愛する子供達の掌を立派に畫面として活かして見せる。

子供達よ、毎日私のところに來てさうして毎日たつた一つでいいからお前達の手の中に描かしてくれ。

私の嘆願するまでもなく、子供たちは大喜びて賛成してくれた。さうして早速父やんや母やんに見せてくべえと云つて、相互に躍りあがりながら駈けて行つた。

轉ぶなよ、轉んでお前達の掌の中のものを落すなよ。それはお前たちの一番愛してゐるもので、一番大切なものだ。

子供達が歸つてから妻の章子が私にも描いて下さいと云ふ。私はその右手の、五本の指を、今度は下向に開かして、小指の薄紅い爪の中に、小さい黒い螢を一匹描いて、赤い點々をふたつ點つた。妻よ私がお前にあげるのはたつたこれぱかりだ。私は貧乏な詩人で、私の愛するお前に金剛石や紅玉（ルビー）の指輪を買つてあげる僅かの金子すら持つてゐない。

＊

書餐ののち、私が江戸川の土手へ出てゐると白い野菊の花の中から一人の女の子が現はれた。さうして私の傍に來て、さつきは難有うと云ふ。

私は訊ねて見た。

——どうしたい、父（とう）やんや母（かあ）やんに見てもらつたかい。

——えゝ。

——何と云つたい。

——あのね、それはよかつたねえつて、そして濟まねえから、今度葡萄が生（な）つたら汝（おめえ）持つてつてやれよと云つたよ。

——さうかい。それはよかつたね。

私はまたその歸途に、玉蜀黍の畑を通つた。すると、また

紅い髪の毛の出かかつたばかりの間から、また一人の女の子が出て來た。さうしてなつかしさうに笑ひかけた。

私はまた訊ねて見た。

——さつきの畫はどうしたい。

——父やんや母やんに見せたよ。

——何と云つたい。

——あのね、先生はいい人だねえつて、そして濟まねえから今度玉蜀黍が熟れたら俺（おら）が持つてつてやるべえつて。

——さうかい、それはよかつたねえ。

私は歸つて來ると、私の家の前で、一人の小さい女の子が足元に紅い一本の鳳仙花を落して泣いてゐるのに出遇つた。それはあの一番かはいい紅葉のやうな手の持主であつた。

私はその子の頭を撫でゝやり、言葉優しく訊ねて見た。

——お前、何故泣くの、何がかなしいの。

お莫子が　しいのかいと云へば、うゝんとかぶりを振つて、欲しかないと云ふ。それぢや奈何したのと云へば、小さな聲で轉んだのと云ふ。

轉んだつて泣くんぢやない。どれ、お見せ、さつきの螢が、そおれ、消えてなくなつたぢやないかと云へば、その子はつくづく兩掌を開いて見て、また火のやうに欷歔りあげた。

眼のふちには螢の墨と赤とがついてゐる。

泣くな、泣くな、お前が泣くから、ほたゆは飛んで行つちやつたんだよ。私が今描いてあげるからね、今度はお泣きでない。

足元の鳳仙花を拾つてその子の手に握らせると、

——これ持つてきたの。

といふ。

——さうかい、それはよかつたねえ、難有うよ。

私はその子を連れて歸つて、改めて十の可愛いゝ螢を描いてやつた。さうしてその子が喜んで門を出て行つてから、妻に話した。皆の子供達が喜んで、あのやうに鳳仙花を持つて來て呉れたり、葡萄や玉蜀黍を御禮に持つて來ると云つてゐる、かはいいぢやないかねと云ふと、妻の章子はほんとにね、ここの人達はみんな優さしいからと云つて、それでは私は小指に螢を描いて頂いた御禮に何を差上げませうと笑つた。私はそれはね、私がお前を愛したのははじめから何も報酬を豫期してした事ではないし、どうでもいいけれど、お前が濟まないと思ふならね、それはと云つて、私はその手を急に引寄せた。

妻の小指の首の赤い螢が飛んで私の襟頸に留つた。

馬

江戸川の水は濁ることがあつても、おきんの家に煙のあがらぬ日とてはない。おきんの家は貧しいけれど、それでもお百姓である。何がなしに、ほそぼそとでも、日にち毎日お飯の煙だけは上げてゐる。おきんの家はお百姓でも、高が葛西の小作人に過ぎない。馬も持たねば田地も持たぬ。つまるところは他の田である。よしや秋に一度の收穫はあつても、それは地主や村の税から多分は差引かれる。ただ掌ほどの畑に、茄子や胡瓜や人參や、時節時節のせん菜ものを、植ゑて培つて拵ぎ取つて暗いうちから、遙々神田の市場へ持つて行つたところで、たいした收益のある筈はない。それに旱が續き、風が暴れ、雨がどしや降り、水でも一時に出ると、それこそおしまひである。野菜は根こそぎ、穀類は皺枯れて了ふ。それにおきんの家は子澤山で稼いでも稼いでもおつつかない。

今日は村の水神樣のお祭だといふので、日暮頃から、他家の子供達は、さつぱりした浴衣に紅い帶をしめてもらつて、手をつないでは地藏橋を渡つてゆく、おきんのとこでは小悴らに着せる衣類も無いと云つて、こぼしてゐたが、今日はどうした事かと思つて、晩飯を濟ましてから、私と妻と見に行つてやる。

薄明の頃である。おきんの家の垣根には夕顔の花がいつぱいに咲き絡んでまだほのかに白かつた。四邊にはいろいろの蟲が啼いて、庭からはほそぼそと夕餐の煙が靡いてゐる。今晩はとはひつてゆくと、家の中はもう小暗くなりかけて、土間の地べたにそのまま藁をもやしてゐる。火がちよろちよろ赤い。見ると煤けた天井から、眞黑な土瓶がぶら下つて、ぐつぐつ湯氣を噴き立ててゐる。傍にしこたま積み上げた藁束の山から、小悴らが眼をきよろきよろさしてゐる。それが廿日鼠のやうに、いくつもいくつも出たり引込んだりする。屋の外で竈の前に蹲踞んでゐたおきんのお袋が、私達を見て慌てて汚ない前掛で顏を拭き拭き立つて來る。婆さまは赤ん坊を抱べて蚊帳を半釣りにした中から、上り框の方に匍ふやうにしてにじり出る。さうしてくどくどと、おきんに衣類をいただいた御禮を述べ立てる。疊が汚いからと云つて、莚を一枚ひろげて、まあお掛けなさいと云ふ。私達が腰を掛けると。面も手も泥だらけにした小さな三郎公が、稻の穗と大黑樣のついた破れ團扇を一本持つて來る。暑い夕方で、蚊のうなりが早くもそこら中にきこえる。足元をはたはたと團扇ではたくと、そこには紅い鳳仙花が咲いてゐて、それがはらはらとこぼれる。

おきんの家はまだ晩飯前でいそがしい。お祭に行かないかと云ふと、子供達がそろそろ藁束の中から轉げ落ちて來る。

どれもどれも垢じみた筒つぽを著て、青洟を滴らしたり、藁屑を頭から被つたりしてゐる。中には面中墨だらけにしたり、眞紅な玉蜀黍の毛で八の字髭を附けたりしたのもゐる。思はず吹き出すと、先生、俺ら偉なつただんべえと髭が出しやばる。誰だ誰だと覗くと尻退みして、お祭に行くんならまくはが欲しいだと云ふ。よしよし皆に買つてあげようと約束するとどの子もどの子も犬ころのやうに走り出す。私が無邪氣だねえと云ふと妻もほんとにねえと云ふ。さうしてかはいさうですから澤山まくはを買つてやりませうよと云ふ。水神樣の月明りに、この眞黑の洟つたらしどもが、眼ばかり光らして、まくは瓜に嚙りつく有樣が思ひやられる。

裏のもろこし畑に出ると、露が上つて、風が吹くのか、さらさらと廣葉長葉が搖れてゐる。空はよく晴れ渡つて、赤いまん圓なお月さまが、鴻の臺の營舍の上から、恰度今驛り上つてくるところだ。道ばたの茄子や南瓜の畑には轡蟲が啼き、薄靄の中からかへろがころころと咽喉を鳴らしはじめた。

二人の上の男の子はすこし先に行つた。女の子と三郎公は背後から。惡戲しながらやつて來る。

振り返つて「三郎ちやんは幾歲。」と妻が御あいそをすると。

「おつ開きだあ、」と女の子がのさばり出る。

さうして二つの鈍栗眼をくるつと刮く。紅つちやけた頭の頂邊に小さいお蝶蝶を載つけてゐる。面中鼻の吹き擴がつた、いかにも頓狂な子だ。この村にも大勢子供はゐるが、この子位百姓らしい子はない。自然で、がさつで、無遠慮で、だんべえ言葉で云ひたい三昧の事を云ふ。色も黑くて汚ないが、どこやらに野良の臭ひがぷんぷんする。

「おつ開きつて、何だい」。と訊くと、

「おつ開きだからおつ開きだあ、」と片つ方の掌を開いて、莫迦だなあ、わかんねえかいといふ風をする。

「ほ…五歲なの」

「さうだよお、」

「はゝゝゝゝ、えらいな」と私も笑ふと、

三郎公まで小さな掌をひろげて「おつ開きだい。」

いつのまにか地面がしつとり濡れてゐる。ちよろちよろ川には水藻の花が暗い中にもほのかに白い。子供達はもとより素足である。

「來う、螢がゐるだあから、早く來うよお。」

と行手の靄の中から上の子達の聲がする。急いで行つて見ると、無數の青い寶石を夜の葉に鏤めた珊瑚樹が一本、月の光に夢のやう。下には何やら山と積まれて、むしむし白い煙を立ててゐる。

「臭えな。」と一人の子がいふ。

「東京の糞尿だあもの、臭えや、」とまた一人、横つちよの笹

つ葉を掻き分けながら云ふ。螢の可憐な燐光がその糞尿の上を飛んでゆく。

「何故臭いんだい。東京の糞尿だつて同じじやないか。」

ああれ、あんな事云つてるよ。東京の糞尿ほんとに臭んだよお。」女の子がまた後から出て來る。

「何故。」

「何故つたつて、東京の奴ら、いろんなもの食ふだからよ。」

「ほう、いろんなもの食つてるから臭いんかな、それぢやお前達は何を食つてる。」

「俺あ、南瓜とお麥だ。」

「まくはも食つてるだ。」と外の奴が螢を追つかけながら、取り逃して引き歸して來る。

「まくはなんか無えじやねいか。」

「よそんだつて、食つてるから食つてるだ。」

「ああら、あんな事云つてるよ。」女の子が眼をパチクリさせる。「龜ちやん。泥棒だい。」

「泥棒だつていいやい。家に無えんだから仕方が無えだ。俺あ食ひていだ。」

「俺も食ひていだ。」今度は三郎公。

「あはゝゝゝ、まくはいくらでも食はしてやるよ、水神樣に行つたら澤山あるだらう。」

「あるとも。」

「あるともさ。」

「そんなら急げ。」

子供たちが一齊に走り出した。女の子が一番先。

土手をのぼると私達の紫烟草舍の前に出る。井戸端にはおきんが野良姿の儘でせつせとバケツに水を汲んでゐる。おきんは總領だけれども繼娘。貧乏で著るものも無いといふから、妻が洗ひざらしを一枚呉れてやると、喜んでただ貰つては濟まねえだと云つた。濟むも濟まないも無いけれども、氣にかかるなら野良歸りに水を瓶に一ぱいづつでも汲んでおくれ。また何か上げようからと私も云へばそんなら日が暮れてからでもいいかいと云ふ。いいともいつでもお前の身體の閑な時でいいからと、妻も傍から勞はつてやつてから、日にち毎にち、雨がふつても風が吹いても、おきんは瓶に水をいつぱいづつ井戸からせつせと汲みに來る。そのおきんが月明りの中から此方を透かして、

「うまよお。」と呼んでゐる。

「何だよお、姉やかい。」と、女の子が立ち留まる。

「うまよお。何處へ行くだあ。」

「水神樣へ行くだ、まくは瓜食ひに。」

妻が思はずほほと笑つた。

「貴方、この子は何と云ふんでせう。おまつでせうか。」

さう、おきんが何とか云つたね。おいお前の名は何て云ふ

んだい。おまつちやんかい。」

「ああら、あんな事云つてるよ。(これはこの子の口癖らしい)うまだよお。」

「うめかい。」

「うまだあ。」

「うまかい。」

「さうだよお、うまだよお。」

「變だね、馬かい、あのひひんと嘶く。」

「さうだあ。馬だよお。」

「ほ……、まあ貴方。」

さつきからこのちぐはぐな、私とこの子の問答を傍聽してゐた妻の章子は今はたまらず笑ひ轉げてとめどがない。腹を抱へたり、背中を後手でたたいたり。私も思はず大笑した。

あはゝゝゝ、さうかい、馬かい、いい名だねえ。」

お馬とは如何にもお百姓式だ。だが馬とはあまり奇拔過ぎる。

「馬ちやん、お前のところには馬がゐるかい。」

「馬なんかゐねえだ。」と悄氣る。

「さうだつたねえ。」

私ははつとした。あの貧乏なおきんの家に、高が人の小作をしたり、僅かばかりのせん菜ものを市に出したり、その日ぐらしの子澤山な、あのおきんの家に、どうして馬など飼つて置く餘裕があらう。同じ百姓なら田地も欲しからう、馬に秣もやりたからう。馬が買へねば、せめてはその子に馬といふ名を附けてやるべいとでも、この子の親は諦らめたかして、

「馬なんか無えけれど、俺が馬だからいいだあ。」とこの子も云ふ。

「さうだねえ、お前が馬だから、馬なんかゐなくたつていいさ。」

そよそよと風が渡ると、葛西一面肥料の匂がしみじみとそよぐ。地藏橋から見わたすと、近くに水神の森、在所の煙も幽かになつて、曼陀羅あたりは白い蓮の花が月夜の青田に霞んで見える。葡萄色をした空の下にぽうつと紅いのは淺草本所の燈あかりか、夜目にも東京の方は明るい。

蓮の花

八月二十七日、正午。簡單な紫烟草舍の晝飯時、不意に、門のところから大きな白い蓮の花が一本歩いて來た。おやと思ふうちに、その下から子供の頭があらはれて來た。蓮の花があまり大きいので、子供の頭は猶さら小さく見える。觀てゐると、その頭がくるりと此方を向いた。面中が笑つてゐる、三郎公だ。

お馬の所謂今年おつ開きの、弟の三郎公が今や眞盛りの白い蓮の花を持つて來て呉れたのだつた。三郎公は泥まぶれになつた兩方の手で、一生懸命に自分の頭より大きな蓮の花を高く捧げてゐる。三郎公は緣側の下から延びあがらうとするが身體が小さいので、面から上だけしか見えない。その面もまた泥まぶれになつて、その上水濞までたらしてゐる。面中の笑ひがくづれると、澄まして、また、白い蓮の花を高く捧げた。さうしてその花の淸高やかな一瓣でも落すまいとする精一杯の努力が、益々彼の可憐な口元を引締めるらしく見える。全く思慮と意力に富んだ大人の口元である。その大きく見張つた黑い眼、それは無邪と愛とに滿ちてゐる。さうしてこれいい花だんべい、俺あいいもの持つて來ただんべい、見てくれいやといふ得意と滿足の微笑がその底から底から現はれる。それはいいものと信じて、そのいいものを人に與へ得る聖者の心である。外に何にもない、純眞まざりけなしである。何しろ、三郎公は一生懸命だ。見えこそしないが彼のいたいけな兩足は、恐らく庭の地面に力いつぱいふんばつてゐる事であらう。面が上氣したやうに生々と紅みざして來た。そのいきいきとした面。蓮の花はかすかに搖れてゐる。

葛飾の夏の眞晝間である。澄みわたつた太陽光は庭の泰山木の厚葉を透かして。鮮やかな綠色の光線を投げかけてゐる。蓮の花の上に、さうして子供の頭の上に。さうして光線と一緒に、それらが幽かに搖れる。子供の頭が綠になり眼に見えぬ背光が子供の全身から溢れ漲り、それも綠に燃え上るかとさへ思はるる。

三郎公は默つて益々花を高くさし上げた。葉も何にもないただ一本の蓮の花を。

「いい花だねえ、三郎公、いいものを持つて來てくれたねえ」と、私は早速聲をかけた。「ほんとにいい花だこと、三郎ちやん。」——妻も私と一緒に箸を置いた。さうして二人で緣側へ出てその花を受取ると、三郎公はほつとしたやうに、それを手放して、はじめて泥手で濞を啜つた。

「三郎公、何處に咲いてゐた。」と私がたづねると、うんと云ふ。さうして白い眼をする。

「何處から取つて來たの三郎ちやん。」と妻が改めて訊いて見る。

「ううん俺んちのだあ。」と少からず不滿らしい。さうだ、さうだ、三郎公の家には掌ほどの溜池があつた。糞尿溜のうしろのあはれなどぶ泥の中にも時節が來ると白い蓮の花もほのかに咲いたに違ひはない、私が惡かつた。お前はお前の家の溜池に、正直、足を踏み込んで、この花を取つて來て呉れたに違ひない、私が惡かつた。「難有うよ、ほんとに難有う」私は心から感謝した。私の妻も兩手に頂き乍ら言葉を盡くして感謝した。何といふ尊い贈り物だ。貧者の一燈といふ事はあるが、これは猶更淸淨で、より以上に無心である。悔恨も無ければ懺悔も無い。もとより釋尊の足元にひれ伏して新らに歸依隨順の涙を流した信心者の心ではない、子供は生れながらの佛である。三郎公はまだ赤んぼである。その赤ん坊が自分を愛してくれ、自分もまた好きな隱居所の先生の爲に「俺んちの好きな花を持つて行つてやるべい」と思うて持つて來てくれたのである。三郎公は自分の好きな花は矢張り先生も好きであるに違ひない、「持つて行つたら悅しがるだんべい、どんなに悅しがるだんべいか、」ただそればかしである。私達がしみじみ禮を云ふと三郎公はにつこりした。さうして今さら極りの惡いやうな面をして「フフン」と鼻を鳴らす。「いい兒だ、何を上げようねえ。」と云ふと「要らねえや。」と云ふ。「まあお待ち、何かあるでせう。」——私が目くばせするまでもなく妻は蓮の花を捧げたまま立ち上つた。さうして戶棚などを探してゐたが引き返して來ると「あなた、けふは何にもございませんの、三郎ちやん困つたわねえ。」と濟まなさうな面をする「さうかい、それはいけないな、」——貧しい二人の生活が思はず顧られる。

何か買つてやらうにもけふは文なしで、この無心な子供にでも十分には禮をする事が出來ないかと思ふと寂し。私はただその兒の頭を撫でてやり、妻はその兒の水濞を拭いてやつた。さうして私はその兒に詫びた。——「三郎公、けふは何にも上げるものがなくて濟まなかつたな。また上げようね」「要らねえや。」と三郎公は云ひ棄てて勢よく門から飛び出して行つた。さうだ。あの兒には何にも要らなかつたのだ。あの兒が一本のこの蓮の花を持つて來てくれた心持には、もとより何の報酬も豫期してゐる筈はなかつた。彼には純眞無垢な愛があるばかりである。酬い無くして人に與ふる心。それは私のやうな大人にはなか〳〵できる事ではない。大人の愛はいよいよ汚れてゆく。

白い蓮の花は早速床の上のキュラソウ壜に挿す事にした。花が大きいので壜が倒れさうになる。やつと紅表裝の佛足石擦紙の軸の下に安定させる。花が靜かに薰り出した。

しばらくして私達はまた元の食卓についた。冷たい白の御飯に白い瓜の漬物をいただきながら、改めて蓮の花の方を觀

てゐると寂しい寂しい。が何かしら嬉しい。

三郎公は今何處の野原を飛び廻つてゐることやら。

蘆間の煙

下總の國東葛飾郡國府臺は栗市の渡しに近く、葦や薄の穂の中に舟がかりして、いつと云ふ時の定めもなく、折ふしほそぼそとひとすぢの煙をあぐる渡り船がある。

それは那邊から來て那邊へゆく船か、人も知らねば私も知らぬ。さうしていつも同じひとつの船か、それとも同じやうに水のまにまに、その日のたづきを求めて流れわたる同種屬の船か、それも定かに知るよしもない。兎に角日にち毎日古利根の青い蘆間から煙はあがる。まだ白しらと河霧の立ちこめた黎明、葭切の聲の澄みわたる晝間、圓い大月があがり、夕燒の空を雁金が高く鳴いて通る夕方、時雨ふる宵、始終ほのかな古代紫の煙は蘆間に靡いて、時をり饑じさうな赤子の啼聲や、ぼれぼれと追分を唄ふ老人の寂びた聲音までが秋風の中に繼續する。あゝその葦間の船。

時は十月の半ば、その日はいつにもなく晴れわたつて、朝早くから幾列かの雁が北の方へ山形になつて飛んで行つた。川べりの薄や葦原には白い穂が秋風に戰いで、濁川の濁つた波のうねりが兩岸の腐れかゝつた杭や、紅い水蓼や葦の根かたに、光琳の銀泥模樣を流しかけて、明るいが寂しい光の何處やらに、雛子も高音をうつやうだつた。

まだ午にはならぬ、やつと彼是十時を過ぎたばかしである。櫻霜葉の散りしいた三谷の土手から見渡すと、國府臺下の茶店には珍らしく花暖簾が掛つて、紅い吹流しや、白い軍幟がひらひらと風に飜つてゐる。人も大勢腰かけたり、騒いだりしてゐる。何ふは知らぬが覗眼鏡の景色のやうに金銀五色の光輝がチラチラと葦の穂の間に往來して、今にも戰が始まりさうである。森閑とした秋の日に何をして遊ぶぞ、子供も棒切持つて私の後から白い小犬を追つて來る。止せ止せ、それは自家のころではないか、可哀さうにと抱き上げると白い乳酪色の耳の毛が狆のやうに垂れて、ふつくりと私の手の中で丸くなる。ころよ活動でも見に行かうか。

渡しへ出て舟へ乘ると、河の中は涼しい。舟はゆつくりと上手へ漕いで、次第に流されると恰度向うの岸に着く。茶店の床几には眞白な顏に紅隈取つた人間の小猿が二匹無花果を食べてゐる。地に飛び下りた小犬が吃驚して飛び込むと、そこには豆絞りの手拭を肩にかけた親の大猿が奥で跌坐をかいてお酒を飲んでゐる。傍に陣笠かぶつた雜兵が五六人土足の儘ぶつ倒れて、ぐうぐう眠つてゐる。宿の爺は鰻をさき、裏ではヒヒンと馬の嘶く聲がする。おやおや、妙な世界に來たものだと廻つて見ると、大阪は冬の陣となる。一面の葦や薄の穂は吹きみだれて、その前に二十四五人の鎧武者が白い六文錢の細旗を二三本なびかして、隊伍正々と控へてゐる。眞田幸村らしいのが本物の黑馬に乘つて、黑皮縅に金の鍬形うつた兜をいたゞき、采配を頭上にキツと構へたところで、寫眞師がフイルムをカチカチ鳴らしはじめると、矢庭に馬が荒れ出す、そこへころがイキナリ飛び込んでキヤンキヤン吼え廻る。あつと驚くと後藤又兵衞、塙團右衞門、薄田隼人ノ正の面々一時に慌てゝ叱々コン畜生と追つかける騒ぎ、あまりのをかしさに留めるのを忘れて腹を抱へてゐると、後の方でキヤツ〳〵笑ふ聲がする。思はず振り向くと崖の小松につかまつて四五人の女子供が轉がり落ちさうに笑つてゐる。どれもどれも哀れな身なりをして、髪もそゝけ、色も日に燒けて眞黑く、而もどんぐり眼の反齒で、獸見たいな聲を出しては、『はあれ面白いぞな、ヤハハイ。』と喜んでゐる。赤子を背負つてゐるのもあれば、洟つたらしの手を曳いてゐるのもある。

役者もワイワイ笑ひながら引上げて一旦休憩となると、原つぱは寂然となる。靜かな秋の光の中で緋縅の鎧を着た若武者がひとりこつそりと向うの無花果林へ入つて、下からそつと枝を撓めて實を拷ぎつてゐる。定めない秋の空に何時かしら雲が出たのか、日が薄く暑つてその背へはねた兜の八幡座に哀れ深くチラチラする。

『もうお午づら、作やあ、歸らうや。』

『あいよ。飯づらな。もう。』

『さうづら、午砲が鳴つたらまた上るだあかなア、あああ、

つまんねえなァ、お十。』

もそろもそろと反齒の群が赤子を背負つて歩き出す。私もころをやつと捕へて蹤いて行くと、汐くさい海豚のやうな女どもは林を拔け、川緣から淺瀨をヂャブ〳〵渡つてゆく。葦間には二艘の船が舟がかりして、一方の筈の上には鬼のやうな眞黑な男がひとり恍惚と尺八を吹いてゐる。女どもがぞろぞろ船へあがると、しばらくして、その天窓からほそぼそと薄煙があがつて來た。飯を炊くのであらう。

暫時經つと、また今度は葦邊の中洲でドンチャン〳〵の合戰になる。白旗や紅旗が入り亂れる。銀紙張りの槍や刀の斬合を、寫す寫眞師は氣狂のやうに岸の方からフィルムを廻す。作者の禿頭は呼子を鳴らしたり、やり直さしたり、罵つたり。それをまた船から眺めて、女どもが寂しさうに愈々錨を上げにかゝると、東京の方で午砲が鳴り、諸方の汽笛が一時に西の空いつぱいにわめき出した。

船が愈々動き出す。折柄の時雨にぎいぎいと梶の音が濕つて響くと、長い櫓を女共が折り重なつて漕ぎ出す樣子。美しい、それでも芝居の戰爭の前を、遙かの空まで續いた白い葦や薄の穗に沿つて、ぎいぎいとその櫓の音がのぼつてゆく。たつた一夜の舟がかりに、今日も見果てぬ夢の名殘を惜しんで、明日はまた何處の葦間に寂しい命の煙をあぐることやら。

中洲の戰爭はまだ止まぬ。

蘆間出て見よ、煙があがる。
あれは時雨のもやひ舟。
立つる煙はほそぼそなれど。
やはり、うき世の泊り舟。

潮來の黎明

一番鷄　二番鷄　三番鷄　四番鷄……それから潮來はほのぼのと夜明の景色になる、潮來は隨分鷄の多い處だ。この二三日降り續いたびしよびしよ雨に、到る處の眞菰がいよ〳〵人目に枯れ果てゝゆく。さういふ小川や入江の傍には必ず鷄の一二羽がしよぼんとしてゐる。物音もせぬ古い寂しい街の家並に冬の日の暮方の小雨が横頰吹に吹きつけると、盡く閉めきつた腰高障子の前には、黑い鷄の四五羽がまた必ず雨避けをしに來る。さうして横に一列に並んで、その儘夜になる。さうした風情が見るから旅のあはれとなる。今は曉の五時半。宵の間から幸ひに雨は霽つたらしいが、寒さは一入のやうである。咽喉長く啼きかはす鷄の聲までが、暗い底の底から陰鬱な沼の瘴氣をこもらせて響く。それを終夜まんじりともしないで聽いてゐると、枯れた眞菰や支那楊にきらきらと霜の降りてくるけはひまでが目に浮かんで、どうしても眠られない。いつそ起きてしまへと思つて、窓の重い雨戸を手さぐりに一枚はづす。瓦には眞白く霜が下りてゐる。はづした雨戸を瓦の上に寄せかけて空を見上るとまだ暗かつた。暗い空に鱗雲が片鱗づつ青く光つて波だつてゐる間から、細い上弦の月が傾きかけてゐる。雲は迅く、月の光は黃色く、風は高くひゆう〳〵と吹いてゐる。

夏は眞菰の中に菖蒲の咲くといふ潮來出島も冬はたまらなく寂しい。殊に冬の夜明は身に沁みる。淫卑な頽廢しきつた街、水鄕の古い唄の情が今は盡く一色に冬枯れて了つて暗い凩の音ばかりがする。さうして鷄が啼く。

＊

黑い天鵞絨の背廣に、銀鼠の飛行帽をふかぶかと冠つて外へ出ると、外もまだ眞つ暗だ。鷄の聲が四方にする。酷しい霜柱をさくさくと踏んで、旅館角菱の前から一直線に田甫の道を川の方へ行つて見る。川は暗くてわからないが、土堤の方に赤い火がちよろちよろ燃えてゐる。火は藁小屋で燃してゐるらしい。何にかしらぼうとした明りが荒莚の內部に動いてゐるらしい。それが次第に近づいて行くと、藁小屋でなしに人間の胯ぐらであつた、人間が赤い焰の上に跨つてゐる。頭も胴も見えない。胯ぐらだけの人間が。外の輪のついた小蒸汽が下手から寒々と汽笛を鳴らして來た。五六人どやどやと乘り込むけはひがすると、またゴトゴトと音を立てゝ出てゆく。窓が赤く、上手の方に小さくなる。急いで河岸に行つて見ると、人力車が楫を下してゐる許り、其處はまた閒寂となつてゐる。汽船場には光の弱い電燈がひとつ殘つてゐる。中に這入るとまづ粗末な卓子が目につく、卓子の上には蘇鐵の鉢がある。隅の方を見ると青い毛の肩掛を頭からかぶつてゐ

る女がひとりおづおづと腰掛けてゐる。その女に車夫が一言二言ものを云つて出て行くと、引違ひに黒い帽子のお百姓が高い足駄を穿いてそゝくさと這入つて來る、さうして時間表を慌てて見上げながら、私に土浦行はまだかいなと云ふ、今出たのがさうですと云ふと、また慌てくさつて出て行つた。こゝの夜明けも寂しい。

幾分か空が白みかけた樣である。外へ出て見ると、四五間先に先刻の赤い火が消えかゝつてゐる、それに胯火をしてゐる男が今は確に二人だとわかる。廓がへりに土堤の枯草を燃してゐたのだつた。

下手へ行くと水門に一枚の板を渡してある。その板橋も霜が下りて眞白だ。その橋の上に立つてゐると、まだ暗い河風の空を黑い羅紗をこするやうな雁の羽音が掠めてゆく、雁は姿を見せないが、枯れ枯れの眞菰のそよぎも目醒めて來る。水門の下から二三人乘つた渡し舟が棹をさして出かゝると、誰やら寒い嚏をした。

水の面もまだ暗い。それに向う岸の森のかげがこんもりと黑く映つて、夢のやうな出島の水門が間から見える。

雁がまたきゆうきゆうと上手へ消えると其下から、早舟がまたあるかなしかに向う寄りを棹さしてゆく。あれも恐らく廓がへりの若い衆であらう。すいすいと狹霧がくれに流れてゆく。さうして白い水門の中へ吸はれて了ふ。

弦月にも圓い線がかゝつた。その圓くて細い月の輪が、黑い月が本物の月の弦よりやゝめり込んで小さく見える。黎明の風が更に冷たく吹き出した。私の兩の耳もちぎれさうになる。

寒い波の音、枯れた眞菰のそよぎ、さうしてまた黑羅紗をこするやうな雁の羽音。

街の方では鷄の聲。

＊

六時、四邊がやゝ薄ら明くなり出した。河風は冷たし耳は痛し、また先刻の一本道を街の方へと引き返す。途中の板橋が今度は白く見える。その霜の上に俥の轍が二筋走つてゐる。べたべたと踏みつけた人の足跡もある。小堀の捨小舟も眞白だ。枯田の刈株も眞白だ。入江の荷足船も眞白だ、それが四五艘、どれもどれも俵を積んでゐる。俵も霜に眞白だ。その入江を右について曲つて行くとあやめ橋といふのがある。粗末な欄干も朽ちかゝつてゐる、その名所の橋も眞白だ。

橋を渡ると、水路に添うて、古びた藁家が散らばつてゐる。藁家の前には必ずひよろひよろの支那楊が五六本つつ立つてゐる。その楊の枯木も眞白だ。楊の下にはところどころに空舟が纜つてある。その空舟も眞白だ。

また板の橋がある。その板橋も眞白だ、見れば見るほど美しい。今度が一番美しい。つやつやしてゐる、空も愈々明けてくる、ここの霜には人の足跡一つついてゐない。この橋の面を

眞白な自分の集の表紙に見做すと、さて「雀の卵」の圖案はどうしたものかな、かうでもしようかなと思つて、かぢかんだ右の手を下して、大きな雀を一匹描いて見る、頭と胴とをまん圓く、足をつけ、尻尾をうしろにぴやんと撥ねて、小さい嘴をつけると、なかなか可哀ゆくなる。それに圓い眼玉をひとつ入れる。今にも鳴き出しさうだ。夫から小さい卵をぽとりと一つ足元に落すと愈々たまらなくなる。そのうちに五本の指が霜にちぎれさうになつて痛い。

可哀いい雀を傷けまいと、思ひきつて一足飛びに飛び越すとまたひよろひよろの楊がある。藁家もあるがまだ戸を閉めた儘だ。先刻の水門の傍まで行くと、その下の藁家の厨に火が燃え出した。覗いて見ると竈の前に子供がまん圓い眼をして火に當つてゐる。その面が眞赤だ。

それでも空はまだ暗い。兩耳を吹き斬るやうに河風が吹く。

また雁の羽音がする。今度は一つ頭の上を掠めて行つたが、姿はつきりとせぬ。黑羅紗の音がやゝ茶色つぽくなつた。月が消え入りさうになつてゐる。

水門の上から見ると、汽船場の土堤にはまだ火を燃してゐる。私が靴音をさせて近づくと、二人の男があわてゝ火を踏み消した。お巡査さんとでも思つたらしい。靴の音がまことに霜にいたかつた。

また一本道の板橋を渡つてゐると、後の方から

潮來出島のよう、眞菰の中に、あやめ咲くとはしをらしや、よう。

と、二人の若衆が頰かぶりの懷手でついて來る。

あやめ橋の下では、眞白な荷足船の苫の中から鍋の底を洗ふ音がする。

また板橋を通ると、雀がさつきのまゝになつてゐる。それに下嘴をつけて口を開かせると、愈々可哀ゆくなる。また飛び越して前の水門のところまで行くと、其處の藁屋から今度はぺつたらこぺつたらこと餅を搗く音がする。

ほのぼと空も明けかゝつて來た。向う岸の森や人家が次第にはつきりとなる。白い向うの水門もいよ〳〵おちついて來る。

見てゐると下手から青い俵を積んだ荷足が一艘帆をかけて上つて來る。遠くの遠くで汽笛の音がする。

上手も下手も冬枯の眞菰の色が一入寥しく寒い霧の下から現れて來た。河波の音が、ぢやつぶん、ぢやつぶん、それにさはる。

遊廓の方では桔槔の音がしだした。

さうしてあちらこちらでは愈々鷄が長鳴をする。どうも鷄の多い街だ。

＊

旅に來て見知らぬ里の夜明を何といふことなしにそゞろ歩

きしながら待つ寥しさ。またそのもの珍らしさ。今朝は煙草を吸はないせいか、頭が澄み透るやうに感ずる。全體煙草と酒とは頭にあまりよくない。酒に亂れるのも宜しくない。一人旅では猶更煙草でも喫んではいけない。喫めば頭がほこりつぽくなる。かういふものに甘えてゐると方途がない。旅は同じく人生の旅は寥しくて寥しくてまつたくぽつんとならなければ、澄み入ることはむづかしい。今日から酒も煙草もつくづく止めようかなど歩きながら考へる。昔の武藝者は霜の下りる聲にも耳を醒したといふが、それ程に隙がなくならなければ藝道の達人にはなれない。詩も歌もやつぱりそこまで行かなければ嘘だとつく〴〵感ずる。

今朝は全く頭が透きとほつてゐる。一本道を角菱の前までいつて突き當つて右へ折れると、やはり小堀つゞきになつてゐる。此處の景色はまた格別眞白だ。小さい入江のほとりに一本の枝垂柳が霜をかぶつてゐる。その下に空船が一二艘、それも眞白になつて、落ちついた墨繪の氣持を出してゐる。閑かな冬の閑かなこの心持。冬は全くここに結晶してゐる。芭蕉もたしかにこの寂を狙つた。白秋の澄心も亦この一點を外にしてはない。

左手には白い土藏がひとつ、その裏にはすがれた桑の木畑がある。その桑の木の小枝で雀が一生懸命聲をたてた。たつた一匹だがずゐぶん思ひ切つた高音を出したものだ。姿は見なかつたがこれが今朝きいた一番最初の雀の聲だ。

ふいとある家の戸があいた。元氣のいい肥つたお内儀さんが出て來た。新しい青い竹箒を持つてゐる。石屋の前では小僧が雑巾バケツに兩手をつつこんでゐる。どしどしこれから石や敷居を拭きにかゝるのだ。

又左へ曲ると、小路になつてゐる。生垣の檜や槇の葉のかをりがする。その生垣にくつついて乞食のやうな女が頭から青いものを被つて一心に溝浚ひをしてゐる。そのどぶの香がぷんぷんする。

下味噌と大きく書いた看板の下に直徑四尺以上の大釜が据ゑてある。その薪屋の廂まで積み上げた薪の間から、雀がぱうつと三四羽飛び出した。勢のいい雀、羽ばたく雀の大きさ、これが今朝見る一番最初の雀の姿である。

雁の聲がする。空をふり仰ぐと、明けかゝつた冷い冬の高空を、小さい雁の列が山形になつて飛んでゆくところだ、ついその下に桐の枯木の鶏茶色の莟が鈴なりになつてゐる。恰度櫨の實のやうだが、またとなく上品なものだ。これは何かの圖案になると眺め入る。

小徑のつき當りに大きな寺の山門が見える、門内には高い松の古木が蒼々として見える門を入ると、松風の音が澄みとほつて、そこに唐鶏が尻尾をふり切る程羽たゝきながら、枝から枝へ飛びうつつてゐる。その聲の鋭さ。

愈々夜は明けはなれて、虔ましい午前の氣持になる。本堂の格子から中をのぞくと、坐禪とかいた札が内陣の欄間にかゝつてゐる。奥の方はまだほの暗いが、一段高い佛前には白い紙の蓮花が、山程むら〳〵して、色も香もなく褪めはてゝゐる。さうしてさびしい朝の日光はその一つ一つの花瓣や圓い葉の上に白つぽい細かな埃をまはしてゐる。

松風の音と坐禪、私も沁々した心に縁側に腰を下して澄み入つた。

唐鶏が今度はつい眼の前の枯木の梢に留つた。はつきりと靜かに留つてゐる。さうして嘴をひらいて、強く鋭く啼く。私はまたそれを靜かに大きな眼を開けて觀てゐる。唐鶏と私とが一つになる。

それから色んな鳥の聲がしだした。

桔槔の音がしきりにし出した。

人間の聲がし出した。

私も立ち上つて、思ふ存分爽やかな朝の空氣を吸ひこんで見た。さうして深い呼吸のあとに兩手で思ひ切り體操のまねをして見る。

門前を向う向きに馬がゆく。その尻尾が左右にしづかに振られてゆく。それを見てゐるうちに、ふと『門前をゆく馬の尻』といふ句が出來た。たゞそれだけだ。

愈々古い潮來の水郷が夜から目醒めて來た。さうして裏の天王樣の笹藪では一番おしまひの鶏が長く長く咽喉を曳いて、やがてけけつこつこつと啼き收めた。

（大正三年三月）

小田原小品　その一

お花畑の春雨

いい雨がふります。

それは絹灑のやうな細かさを持つた、明るい、落ちついた、いい雨です。温かないいお濕りです。

その雨を觀てゐると、安らかな、細ごまとした自然の愛(いつくし)みといふものが、とりわけて懷かしく感じられます。降りそそぐ春雨の愛(めい)、それは全く慈母のやうな優さしみを持つた愛です。ねんごろなその雨は誰にでも何物にでも、細かに細かに分けへだてなく降りそそいでゐます。

今朝はお向うの燻ぶつた萱屋根もしつとりと紅色を帶びてゐます。それだけ、その蔭の白い障子の中が紫に見えて何となく春の田家と云つたやうな鄙びた畫趣を感じさせます。而かもその前に、淡紅色の杏の花が咲いてゐるのです。杏の花も今は盛りが過ぎて、その花の間からは青い綠の若芽が、もうちらちらと萌え出して、それに白露の樣な雨の玉が一杯です。降つてゐるとも見えないが、霧雨がその空にも枝と枝との間にも幽かに動いては消えてゐます。

垣根の木槿の芽にも、蕗の葉にも、白い泡のやうなペンペン草の花にも、はこべにも雨は降つてゐます。何の葉もいい色をしてゐます。まるで光琳の銀泥の上に浮きあがつたやうな青繪具の色です。それがみんな、十分によく濡れて生々としてゐるので、その新らしさつたらありません。

それに土の色もいい調子に濕つてゐます。それがチョコレエトやブラジル珈琲や、たまにはココアのやうな澁さを持つて、部分々々がどこもここもすつかり落ちついてゐて、それに何とも云へず明るいのです。そして庭は可なり廣いのです。それに燃えたつやうな梅や桃の若芽が反射して、あちこちの小さな庭たづみに淺い綠色の虹を流して居ります。蜜柑も五六本別に手も入れてないやうですが、どれもどれも整つたいい形をしてゐます。その繁つた青黑い蜜柑の葉蔭もいいものです。その蔭にあちこちと綠の草の芽が萌えてゐます。それはあの日本の彩色畫家が(それはどういふ風景畫家でもが)よく筆を收める前にポツポツとやる、あの綠の點々です。そこにしつぽり濡れた雀が降りて來ます。さうして小さな頭を動かし乍ら、チュッチュッと根元に近づきます。

雨はまた低い百日紅のすがれ木にも降つてゐます。つるつるとしたいい光澤、その枝々のほそい梢に縋りついてゐる去年の枯葉も、またなく哀れをそそります。

雨はまた、移し植ゑた棕梠の、新らしく枯れた白茶色の裂葉をも明るく、却つて溫かに浮き立たせてゐます。

雨はまた、細かにふるつて平準(ならし)したその前の長方形の花壇の土にも降りそそいでゐます。そこへ正しく植ゑつけた色々の草の芽生と露がいつぱいです。この分ならば確かについたといふ悦びが今更らしくこのいいお濕りに感謝しずにはゐられなくなります。皆生々としてゐます。潑剌としてゐます。十分に濕りを吸ひ上げて居ります。延びようとしてゐます。

植ゑつけたのは花の苗ばかりではありません。斑らな蜜柑の木のうしろの方にも私と妻とで小さな鍬を使つて作つた畑がある筈です。誰しもが、一寸見落すやうな畑も、整はぬなりに幾刻みかの畝がついてゐて、そこには淡紅色の杏の落花がいつぱいです。そこにも雀や鶺鴒がちよいちよい來ます。さうして小さな嘴で、胡瓜や茄子や隱元豆の種をつついては私達を何時もハラハラさせます。

それに、ついこの十日ほど前、人から貰つた儘食べ殘した青葱の幾束かも、軟かな土をかけられて、そこらの隅こに伏せられてある筈です。その青葱のさきには細かな雨の白玉が凝つて、そこにも杏の花がこぼれかかつてゐさうに思はれます。何といふ淸新。

雨はまた軒下の哀れな蜘蛛の巢をも水から引き上げた銀の糸のやうに輝かしてゐます。芭蕉が「蜂の巢つたふ雨の洩り」と詠ひましたが、それよりもなほしをらしいのは春雨に濡れたささがにの糸捲模樣です。

雨はまた、緣側の下の圓石をもしつとりと濡らしてくれます。その前の龍の髭の瑠璃いろの玉にも、その長い細葉の列にも、雨はまた絹灑の露をふりかけます。

雨はまた、白兎の木函の、荒削りの木肌にも、細かな金網にも降りそそいでゐます。兎と云へば私は白い綿製の玩具のやうな小さな白兎の子を一番ひある人から貰ひました。葛飾にゐた時は鴉と狆ころとを飼ひましたが、今度の白兎はそれは何とも云へぬ可哀いらしい奴です。蕗や薺や車前草の葉を金網の目から入れてやると、それは喜んで嚙ります。內側の薄紅い長い白い兩耳をピョンと立てて、まるで齒の無い嬰兒のやうに、口をモグモグさせます。ともすると兩方から一枚の細い葉を取り合ひつこをしたり、眞つ白いたんぽぽの穗のやうに重なつたりして食べて了ひます。その綠の紅い眼玉の睫毛にも銀の小露が凝ります。その兎もまた、かうした春雨の

朝には、恰度私達の子供のやうな親しさを見せてくれます。

茶の間の障子を開けて眺めてゐると、誰かしら、いいお濕りですねと聲をかけてくれます。姿は見えないが、蛇の目の頭が生垣の上を歩いて行くのです。謠でも習ひに行くのでせう。

全く、いいお濕りです、いい雨がふります。

×

簡素な朝飯を濟ましたあと、かういふ春雨の日に獨り靜かに二階の書齋に籠つてゐると、何といふ事なく心は落ちついて、素直な、それは物優しいいい氣持になります。

私は上り口の三疊の方を何時も仕事部屋にしてゐますが、奥の間の六疊は何時も奇麗に掃かして、ただ紫檀の机だけを据ゑさして置きます。何も彼もチンと取片づけて、この部屋だけには殆ど何の裝飾もしてありません。ただ床の間に紅表裝の佛足石の擦紙を掛け流してあるのと、外には鼠色の壁に、亡くなつた田中恭吉君の黑と白との草畫が一枚粗末な黑枠の額にはまつてるきりです。時とすると、掛軸の前にやはた燒の鳩の香盒を置くぐらゐの事で、凡てがただ質素です、ただ閑寂です。

南も北も明るい白い障子で、疊も高麗緣の、それはさつぱりとしたいい部屋です。拭きすました机の上には梨型青磁の小甕に、時をりの草花が挿してあります。今朝もただ一輪の黃花水仙が挿してありますが、それは妻の朝毎の日課としてありますが、ただ一輪の花に過ぎないものの、それがどれほど私の心を溫めてくれるか。おお、愛に滿ちた優しい溫かな花。

机の上には、その外には無論何にも載せては置きません。ただ、その時その時に讀みたい書物を一冊だけしみじみと載せて飜きます。たとへばサバティエのアッシジの聖フランチエスコの譯傳とか、法華經とか、芭蕉句集とか、時とするとサッフオ詩集とか、菜根譚とか。それらはみんな私の靈を溫めてくれるいい書籍です。さうして私の靈を心から淸々しものにしてくれます。

かうして靜かに私が澄み入つてゐる間も、外には音もない絹灑の春雨が降りそそいでゐます。彼方此方に長閑かな鷄の聲もきこえます。さうして何とも知れぬ木の花の匂が幽かな濕りに濡れて、部屋の中まで忍びこんで來ます。近くの山の方では朗らかな鴉の聲がをりをり二聲三聲渡つてゆくかと思ふと、小鳥はしよつちゆう、窓のまはりのゆづりはや蜜柑の木や、植こみの中で鳴きそそつてゐます。

靜かないい雨です。

葛飾の春雨もいいものでしたが、この小田原の春雨はまた何といふ上品な明るさと蕭やかさを持つたものだらうと思ひます。もとより、それは降る雨の品にもよりますが、ひとつ

にはそれを觀る私の心の移り方にもよります。あの頃はまだまだ私は悟りめかして居りました。閑寂の三昧境をただ慕つて居りました。無理に澄み入らうとしてゐました。それに較べるとこの頃はおとなしいものです。安らかなありのままの心でありのままに自分の息がつけるやうになりました。少しも固くならずに、ゆつたりと落ちつくところに落ちついたといふ心もちです。ほんとの閑寂、ほんとの澄心、それは外に求めるものではありません。自分そのものと自然とがおんなじになつてはじめて本然の寂しい命が目を開きます。悟りなぞといふ事も考へたくもありません。それに、以前はよくいい詩を作りたい、いい歌を詠みあげたいといふ私心の爲に何となく身構へしたものですが、今はもうさういふ賢しい心はなくなりました。ただ子供のやうな素裸の心で、何事も安心して、ありの儘に、書きたい時に書き、歌ひたい時に歌ふといふ柔順な氣持になるばかりです。うれしい心もちです。

外には細ごまと春雨がふつてゐます。その春雨の降りそそぐやうに、私の愛みは、何物をも漏らさず、細かに降りそそいでゆかねばなりません。

少し疲れると、私は窓の障子を開きます。さうして靜かにあちらこちらの人家や木立や生垣や畑や蜜柑やを眺めます。其處にも霞んだり煙つたり濃淡をつけたりして、なつかしい霧雨は降りそそいでゐます。さうして、ところどころの淡紅の杏の花や、松の間の白い櫻の花や、黃色い連翹や、木蓮の花やなどもおんなじに濡色をして、溫かに明るい哀れを添へてゐます。

春雨と云へば江戸の人情本などにはよくかうした日の色里の口說や爪彈などあしらつた、浮かれた、それでも放埒の悲しみといふやうな物のあはれが畫かれてあります。酒や花に親しむ好色な、さういふ趣も春雨にはふさはしい風情を添へるかもわかりません。しかし、かういふ田園の草屋に、物靜かに獨りを樂しむといふ今の心もちが今の私にはこの春雨には最もふさはしいやうな氣がいたします。

萬づに遜り、また萬づの物を愛むといふ心、苦しきに耐へ、貧しきに耐へ、獨り耐へるといふ、おとなしい忍從のいい生活が、かうして私を益々古への聖賢に近づかしめ、自分といふ宇宙の一微塵をも愈々虔ましく見守らせ、省みさしてくれます。騷がず、焦燥らず、大きな聲も立てず、爭ひもせず、私は私であらねばなりませぬ。人生の半ばを過ぎて、私はもう愚痴や煩惱の過ぎ去つた夢を今更繰り返すでもありませぬ。どんなに寂しからうと、じつとこらへて涙を惜しむといふこの心もちが、寂しいと思へば寂しいにちがひはないが私にはそれがいい力です、いい禮拜です。

強ひて人を厭ふでもありませぬ。強ひて俗をさげすむでもありませぬ、又強ひて世の中から離れる必要もありませぬ。

ただ私に深い思索に耽る時間と創作をする丈の豐かな餘裕と、草花や兎や鷄やと共に遊び恍れるだけのあひまさへあればよろしいのです。逢ひたければ人にも逢ひに行きます。都にも出ます。人の訪問をも受けます。訪づれて來てくださる人とは快く話をします。さうしていつしよに自由に遊ばしてあげたいと思ひます。色々の事も教はつたり、慰められたりします。詩や歌は作りますが、私が詩人であらうが無からうが、それは構ひませぬ。私はたゞ一個の人間として、信心篤く、おほまかで、愛に滿ちてさへゐればいいのです。素直に頭を下げてさへゐればいいのです。靜かに自分の靈の奥ぶかいところに、幽かな叡智の光を瞬かしてさへゐればいいのです。さうしてもつと勉强します。

『やあ、燕がもうやつて來てらあ。』といふ幼げな聲が、向うの杏の木の上からしました。驚いて見ると、お隣りの子供がこの春雨のふる中を木によぢのぼつてゐるのです。杏の花を折りにでも上つたのでせう。さうして西の方の明るい空を一心に見上げてゐます。いよいよ燕がやつて來たのだなと思ふと、いかにももう晩春だ、春もかうしてをはつてゆくのだといふ、何だか寂しいやうな、それでも近づいて來る初夏のすがすがしさが待ちどほしいやうな、嬉しい心にもなりました。

風があるのか、絹灑のこまごましい雨も今はやや斜がちに動いてゐます。

* * * * *

雨を觀ほれてゐると、お晝飯を召し上りませと階下から女中が呼びに來ます。さうすると、下へおりた私はきつと茶の間の障子を開けて、先づ木函の兎を覗きます。さうして庭下駄をつつかけて、雨の中をはこべや蓬の葉をむしつて來ては、金網の中へ差入れて、上つて濡れた手を拭くと小さい食卓に妻と二人差向ひに坐ります。今日は珍らしく蕨と筍のぬたが皿についてゐました。それで筍がもう出たのかなあといふ話が出ます。時節の移りかはりの早いのに驚く心もかいふ日にはとりわけです。口數も少く、ただ虔しい中に樂しい晝飯を濟ますと、私はまた書齋の人になります。雨の日は外を散策するよりも、靜かに家の中に引き籠つて、彼是と自分の好きな仕事に遊びほれるより樂しいものはありません。晝中、仕事部屋に膝を拱みながら、氣樂に色々の消息や、童謠の選や、子もり唄やを書いたりしたり創つたりしてゐると、何といふ事なしに心から歌ひたくなります。さうして閉め切つた狹い三疊の部屋は煙草の煙でいつぱいです。もやもやした紫の煙の中からおとなしく外にふる春雨の音を聽いてゐるのもいい心もちです。波の音までが緩いだるげな調子をつけてきこえて來ます。學校の鐘も遠くに鳴ります。人の話ごゑもきこえます。

夕方になると、私はまたいつものやうに兎を籠かしてやつ

て勝手の方へと廻り乍ら、お隣との劃りの小溝をちよろちよろと流れてゐる水の音などに聞き入ります。今日も見に廻ると、空はもう紫色に深みかけて、木戸の前の白桃の花ばかりが白く搖めいてゐました。その下の黑い塵埃溜にその白い花が二片三片こぼれてゐるのも田舍らしい。豪所の硝子戸を覗くと、もう女中が夕飯の仕度にかかるのか、ほそぼそと煙がのぼつてゐます。その煙が濡れた天窓から溢れて出ると、黄昏の雨の中を、やはやはと縺れながら匂ふともなく紫色に擴がつてゆきます。

傘をさして外へ出ると小溝の前の澤山のごろた石もしつとりと濡れて、その間から眞青に萌え出た雜草の幾叢も銀いろの小露がいつぱいです。ほどよく濡れた小路を輕い足駄で歩いてゆくと、爪革のさきに薄紅の櫻がチラチラとこぼれて來ます。檜葉や槇や小篠の籬つづきを曲り曲つて行くと、庭々の植こみには樣々な若葉や、濕つぽい青黑い小松や、散り方の花や、黄色な柚子の實などが、まだ暮れもやらずに霧雨に動いてゐるのです。家々の前には必らず小溝があり、それには蘆の湖から流れて來る清しい水がちよろちよろと流れてゐます。それも今日はいくらか濁つてはゐますが水かさは却つて增したやうです。小路の角の電柱の燈が、かうした蕭やかな『お花畑』の空を悲しくすると、方々から晩方の炊煙が上つて來ます。何といふ優さしい夕景かと思ひました。

通へ出ると、私のつい前を紺に白の波に千鳥の模樣のついた蛇目傘をさした女の人が俯むきがちに歩いて行きます。私の外にもかういふ私と同じやうに雨に親しんで行く人があるかと思ふと、何かしら世の中といふものが嬉しくなります。

早川口の橋袂に出て見ると、驚いた事には川洲は草で眞青になつてゐます。少しづつ枯れ枯れの洲が青みがかつて來るやうに思ひましたが、二三日來て見ないでゐると、もうこのとほりです。傍の水車は、落花や流れ藻に堰かれていくらか廻りが緩くなつたやうに思ひました。

全く、晩春です。

砂濱の前の枯芝の土堤へ登つて眺めると、廣びろとした相模の海は今や蒼茫と暮れかけてゐます。ただ水平線だけが、廣重の紺青を一なすり引きはへてゐるだけで、近くの空には降るかとも見えぬ雨霧が細かに東の方へ疾つてゐます。その下を緩い大うねりさして打寄せて來る波濤が間を置いてはザザザザと眞つ白く捲き返して、すうと傾斜面を滑り上つて來ます。

眞鶴の岬は霧ばかりです。西手の山々にも薄く霧がかかつてゐますが、峽はざまでおのづと濃淡がついて、ところどころに青や綠が透いて見えるのもいかにも春雨の蜜柑山らしく見られます。その水々しい霧雨の中から點いたばかしの燈火が、黄色く赤く色々の度合をつけて瞬いてゐるのも蕭やかで

懐かしい風景です。橋向うの白い壁のかげの、もうよほど暗みかけた海岸の道を、明るい番傘が一つ二つ動いて來るのも見えます。凡てが濕つてゐます。凡てが朧ろで、凡てが物柔かくなつてゆきます。

同じ道を引き返すのも興が無いと思つて、外の小路から廻つて行くと、先とは違つていよいよ物の色合が暗みかけて來てゐます。思はぬところに麥畑があつて、そこに賣地と書いた古い立札も濡れ乍ら暗くなつてゐます。植こみの中のどの別莊にもチラチラともう灯が點いてゐますが、扉の朽ちかかつた萱葺の門や枝折戸の奥なぞは極つて閒寂（ひつそり）としてゐます。籬と籬との間に櫻の落花が吹き寄せられて驚くほど溜つてゐるのを不思議と見ると、その奥の藁家の戸は閉つて、かしやと貼紙が白く曝されつぱなしになつてゐます。それは寂しいものです。

雨はこまかに降る。自分の家の前に來ると、もう電燈が二階の障子を赤あかと染め出してゐます。ぼうとした水氣の中に見る赤い障子の明りほど賑やかなものはありません。

格子に近づくと、もう夕飯の支度をすつかり濟まして、ただ私の歸つて來るのを待つばかしになつてゐると見えて妻が何やら樂しさうに女中に話しかけてゐる聲がします。

私は蛇目傘をすぼめしなに、もう一度暮れてゆく晩春の空を仰いで見ました。

相變らず、雨が微塵の樣に降つてゐます。紫色の雨が。いい雨がふりました。

それは絹灑のやうな細かさを持つた、明るい、落ちついたいい雨でした。溫かないいお濕りでした。

今夜も安らかな春の霧雨がふりつづきますやうに。

鐘の音を聽きながら

鐘が鳴る。

あれは午前十時の時鐘です。

小田原の晩春です。白い籐の寢椅子に凭れて、今朝も聽くこの鐘の音は、それは安らかな今の私の息づかひのやうに、春雨の明るく霽れた蒼い空の圓天井に溢れてゆきます。

溫かい珈琲を喫んで、私はその鐘の音に聽きほれながら、うれしい私の心を溫めます。

考へると、私も人生の半ばを過ぎました。今實に身のいとほしさが感じられます。落ちついた心で、ねんごろに、自分のいのちの落つくところも考へねばなりません。自分の事も他の事も、親しく云へば親達の事も妻の事も、弟妹達の事も、友だちの事も、隣人の事も、多くの知る知らぬ世間の人達の事も、世の中の事も、色々の生きものや、草木や、土壤や、鑛石たちの事も、それから廣大な宇宙の事も、その不思議な樣々の力も光も凡ての現はれも、今はたゞねんごろに思を深めて考へて見ねばなりません。

靈の存在、死後の生活、これを思ふと、今更に、遊んではゐられませぬ。夢のやうに笑ひたはぶれてゐるわけにもまゐりませぬ。私は靜かに、安らかな裸身のまゝで、いつも嬰兒のやうな心で、ゆつたりと自分の息をついてゆきます。深く考へて、深く觀て、深く識りたい。獨ででもいゝから、行きつく高いところまで急がずに歩いて行きたい。

大きな聲も立てたくありませぬ。焦燥る必要も騒ぐ必要もありませぬ。慌てたり、騒いだり、偉がつたり、怒號つたりせねばならぬほど、私の今の心はかよわいところに住しませぬ。十分に自分の靈の痛んだところをしんから底からいたはつてやるだけの餘裕がつきました。

さうして私は自分で十分に溫め ふくらました自分の靈の奥底から靜かに虔ましい光を、柔かな、それでも智慧の深い落ちついた光を、あのかはいゝ鳩の目のやうに瞬かしてゐればいいのです。

私は獨でゐても、どんなに苦しい事、辛い事、貧しいその日の糧にもさしつかへるほどのわびしい目に遇つても、それをじつと獨でこらへてゆくだけの辛抱はいたします。どんなに寂しくとも、自分の命をおもちやにしたりおろそかにするやうな事は私には致せませぬ。寂しさには馴れて居ります。さうしてその寂しさにじつと耐へてゐるこの心もちに深い愛着を持ちます。泣きたい事も、じつと眼の底に涙を溜めるだけの事で、たやすく聲をあげ度くはありませぬ。涙は惜しい、惜しいほど心の底に泣きに行きます。そこは涙でいつぱいです。

私は人はきらひではありませぬが、獨で靜かに自分に觀ほれてゐるのが好きです。然し人から離れたくはありませぬ。逃げたくはありませぬ。爭つたり、さからひたくはありませぬ。十分に親しみたい。隱れたくない。世の中を棄てたくない。

世の中と云へば、あの大きなうき世のうねり波に身をまかせてゐるのも、あながち憎いものではありませぬ。騷いだり、恐れたり、自分ひとりを大切にして慌てたりしなければ、どれだけ混みあつた小舟でさへも、なかなかくつがへるものではないときゝました。

私は神の子でも、佛の子でもありませぬ。私は人間の子です。酒屋の子です。柳河のトンカジョンです。北原長太郎の次男の隆吉です。さうして石井シケ女の胎內から確かに生れ落ちた人間の赤ん坊が、たゞ無闇に大きくなつて來ただけの事です。だから人間の樂しむだけのことも、苦しむだけの事も、行きつかねばならぬだけのこともし、人間らしく、人間の中に交つて人間の中に死んでゆきたい。さうして玉のやうに自分の靈を磨きあげたいばかりです。自分を救ふものは自分だけです。

人を救ふといふ事はよく人もし、人の說くところですが、私なぞは人を救ふどころか、自分ひとりでさへ救ひあげる事ができずに苦んで居ります。多少いゝ事をしたと云うて、矜り顏にお話のできる方は幸福です。それ位のことで。考へると顏から火が出ますよ。

默つてゐる事です。靜かに落ちついて、自分の眼を自分の內側へ向けてゐる事です。溫かな心がそこから溢れます。こんこんと、深い力も湧き出て來ます。

兎に角、今の私は極めて安らかです。

小田原も安らかないゝところです。ゆつたりとしてゐます。

妻の病氣もよほどこゝろよくなりました。やはりおほらかな自然のふところに抱かれて、子どものやうに甘えきつたからでせうね。

それから葛飾にゐた時は、御存じの鴉と犬ころとをお友だちにしましたが、今度はかはいゝ二匹の白兎と紅い頸卷をしたガッグと云ふ鷲とが、私共に可哀がられに來ました。

一度見に來て御覽んなさい。それは可哀らしいから。

小田原の時鐘が今度は十一時をしらせて居ります。

四月十四日　　小田原十字お花畑にて

虎が煙草を吸ふ

*

ゴッホの畫いたあの向日葵、ひとしきり黃金色に燃え狂つた庭の向日葵もいつとなく盛りが過ぎて了つた。もともと園藝種の向日葵だから脊丈は低いが、葉は廣くて部厚で、花は亂咲で無數についてゐる。それがもう成熟しきつて種子がポロポロに落ちる。聞けば英國邊では盛んにこの向日葵を栽培してゐるさうである。それも小禽や家畜の食料としてであつて、鑑賞の爲ではない。もとより米や麥よりも餌としては經濟であり、案外に美味だと言ふのである。

朝鮮では昔々と言ふところを、虎が煙草を吸うた時代と言ふさうだが、米が一圓にやつと二升と言ふ今の時世では所謂民衆は向日葵の種子でも食べなければ、全く生きてゆけさうにもなくなつた。かうなると、つくづく、虎が煙草を吸うた太古の原始的な生活が戀しくなる。

*

基督は汝若しパンを有せば、その半は食べ、半は割いて隣人に施せよと語つた。マホメットは汝若しパンを有せば、半は食べ、半は市場に持ち行きて紅き薔薇の花と代へよ、而して汝自ら精神の爽快を味ふべしと言つた。私達はパンの半片を强ひて薔薇の花に代へなくともよいが、パンを貰つた御禮心に向うから薔薇を呉れたら、又何も斷る必要もない。難有く頂いた方がよい。全くパンばかしで生きて行ける譯でもないのだ。殊に私達はパンを食べる際でも卓上に紅い薔薇の花でも置かなければ、おいしく食べられないのだから困る。かう言ふ事を私が曾て詩に書いたら、白秋には薔薇そのものが既にパンであると、或る人が云つた。

*

今の家主のお婆さんの言ふには庭の梅も杏も蜜柑も花だけは御覽になつてよろしいが、果は一顆でも採つてはいけませんとの事である。別に欲しいとは思はぬが、さう初めから極められては、そこは人情で無性に食べたくなる。恰度蜜柑の花の眞盛りであつたが、見てゐると隨分と蜜蜂が來る。盛んに羽音を立て乍ら、それは氣隨氣儘に飛び廻る。飽迄も花粉にまみれてチュウチュウ蜜を吸ふ。たまらなくなつて、私も庭に下りると、早速、蜜柑の繁りに首を突つ込んで、兩手で眞つ白に花をバサバサと搔きさがしてはチュウチュウだ。夢中になつてゐると、生垣の向うから、

『あら、先生、何をしていらしやるの』

とお隣のお孃さんが吃驚して聲をかけた。

『なあに、一寸ね、蜜蜂こつこで。』

『まあ。』と言ふと、皆が出て來て大笑ひになつた。

ところで、この蜜蜂、いささか熊蜂に近いとの噂である。そこで又、家主のお婆さん、この秋になつて大きな籠を擁へてやつて來ると、蜜柑のミの字も生つて居ないので、さぞおつたまげるだらうとの話である。

實際、お婆さんは蜜柑は食べていけないとは言つたが、花の蜜までを吸つてはいけないとはきめて置かなかつた。

*

宵の明星がちろりちろりと空に出て、潮風のそれはそれは涼しい薄明の頃であつた。お隣へゆくと、岐阜提灯に灯が點いてゐて、緣側には河鹿の函が据ゑてあつた。圓い金網の中を覗くと、水を今、そゝいだばかしの盆石の間に小さな河鹿が二匹、恰度陶器の蛙のやうに、さも涼しさうにしがみついてゐた。その金網に小さな開きがついてゐる。これは何の孔ですと訊けば蠅を入れるのですと云ふ。そして、

『河鹿はあなた、一日に生きた蠅をたつた三匹しか食べないのですよ。』と言ふ。

『ほう、蠅をたつた三匹、それで鳴きますかしら。』

『鳴きますとも、それはいゝ音ですよ。』

すつかり驚いて、私も河鹿になりたいと言つたら、たいへんな河鹿と、女達から笑はれたが、だがしみじみとさう思へるから仕方がない。

人間に生れて來てよかつたと、ほんとに思つた事があるかいと、一日私は妻に訊いた。えゝ、この頃はしみじみさう思ひますと言ふ。それでよい、さう思つた時は、目の前の草の葉一枚でも既に光が違つてゐる。先づこの一枚の草の葉つぱから見直して御覽と私は再び云ひ添へた。

*

ある日、眞紅に咲いた薔薇の花の中に小さな圓い蟲が氣絶してゐますと、妻が驚いて知らしたので庭に廻つて、その花の中を差覗くと、全く甲蟲が悶絶してゐる。あまりに豐艶な色であつた。又あまりに高い芳香であつた。妻は救つてやりませうよと指でつまみ出さうとした。私は輕く押しとどめて言つた。

『まあ、お待ち、この小さな蟲はこの儘死なした方が或は幸福だかも知れぬ。彼女は今、歡樂の絶頂に悶絶してゐる。救つてやるには訣はないが、先づ先づ靜かに觀て居た方がよい。救ふつもりで却つてこの蟲を悲慘にする場合もある。若し又この蟲に眞に生き返るだけの力があり、意志があり、命があればひとりでに醒めるべきは醒める、蘇つても來る。まあ見てゐて御覽。』

案の如く、その蟲は次第に覺醒して來た。肢が動き、眼が動き、觸覺が動き、翼が動き、心臟が動き出して來た。

今日新聞を見てゐると、姑と折合がよくなくて入水した嫁の事が出てゐた。その夫の言葉によると、姑もそれほどの惡婆ではなささうである。朝鮮の俚諺に『嫁の踵が鷄卵のやうに見えると言つて憎む。』といふ言葉がある。全く若い女房の踵が鷄卵のやうに美しいと、それこそ騷ぎになるのである。人としてお互にそれ以上の惡意は持てる筈はないのだ。

*

私のとこの鶩は雌ではあるが、たつた一羽の鶩である。それが毎日卵を必ず一つづゝ產む。相手も無しに卵を胎むといふ事さへ既にをかしなものであるのにそれがまた日に必ず一つづゝは產み落すのだから驚く。

白茶色の鶩、寂しいやもめの鶩、尻太のSの字型の鶩、彼女は全く寂寥の極にゐる。終日鳴いて終日獨で堪へてゐる。何時も蜜柑の木蔭の冷たい地面に燬けるやうな重たい腹を壓しつけて、ハアハアと喘いでゐる。暑熱も苦惱も飢餓も、情念も彼女はたゞ獨で堪へなければならぬ。

さりながら、日に一度は聖なる受胎の歡びが來る。それは思ふだに靈を涼しくする。寂しいからこそ卵が產めるのである。私達の詩の靈感もこの理に洩れぬ。寂しくとも私は獨でゐる、寂しくとも金の卵を日に一つゞつは產む、寂しいからこそだ。

さて又、私の父がそれを見て、親の代には百羽も飼つたが、子の隆吉の代には鶩がたつた一羽になつたと大得意である。それでは百羽で一日に卵を百づゝ產みましたかと訊くと、いや、卵は十も產まなかつた。何でもあまり大勢なもので巫山戲たり、乳繰り合つたり追ひ廻したり嫉妬したり、喧嘩したりばかりして、全くだめだつたよとの事である。

さうれ、御覽なさいと私は笑つた。

*

私のとこの女鶩はまた極めて巧妙な料理人である。つくづくと私は觀た。その時、鶩は庭の小流の緣に近よつた。すると、其處から首を下向けて水を一口チャブチャブと飲んだ。と、今度は向うの石垣の靑蓬の葉を一枚喙み取つて食べるかと思ふとまた水を一口飲んで、また葉つぱを一枚喙む。何の事はない、口の中で、そのすばらしく淸新な卽席のお吸物を調理し乍ら召し上るのである。あれくらゐに簡易な生活ができればいゝなと私はまた人に言つて笑はれた。全く素朴で、單純で、自然で、見てゐてさへ新鮮なすがすがしさを感じさせられる。

金なぞは不要のものだ。

*

紅いグラヂオラス、紫のニゲラ、それに黃金色の向日葵が燃え狂ふばかりに咲き盛つた私の庭の花畑、その向うの無花と棗の蔭に、小さな新らしい小屋が出來てから、もう三月に

もなる。その家には氣の狂つた一人の少年が可哀相にも監禁されてゐるのだ。その狂少年は燥狂で内から破目をドンドンたゝく、手當り次第にぶち壞す。手がつけられぬ。それに一番聽いて辛いのは、朝から夜更までのべつに、『何か欲しいよう、食べたいよう、たつた一杯でいゝから持つて來ておくれよう。すぐによう。』と泣聲立てゝ怒號り續けられる事である。私もそれを毎日聽いてゐるうちに、何といふ事だらう。それが何だか口癖のやうになつて了つた。

『何か食べたいよう、水蜜でもいゝからよう、たつた一つでいゝから持つて來ておくれよう。すぐによう。』

私ばかりかと思ふと、いつとなしにお隣の御主人迄が叫び出した。

『何か食べたいよう、ウキスキイでもいいからよう、たつた一杯でいゝから持つて來てよう、すぐによう。』

初めは戯談だつたが、いつのまにやら私達の聲は悲しさうに、愈々眞物になつて來た。情ない事だ。

＊

二た月ばかり臥續けてばかりゐた妻が、ある時仰臥した儘晴れわたつた高い聖ヶ嶽の姿を天の一方に見て、しみじみとから語つた。

『私はあの高い山を見てゐますと、まだこの春壯健で、蕨取りにあの山に登つた事が思ひ出されてなりません、さう思つて眺めてゐますと、私の身體が筍のやうにずんずん延びて、何かしら、あの山と同じ高さになるやうな氣がします。』

私もそれを聽いて黯然とした。

いよいよ足腰が起たなくなつて、床に就いた儘の子規居士が、花瓶に挿した白い藤の花を觀てゐてその花房が短いので正直に、『疊の上にとゞかざりけり。』と詠つた心持がつくづくわかる。

私のやうに頑健な者は、打たれてもたたかれても、さういふ眞純な聲は出さうにない。

— 小田原十字町お花畑にて —

野外劇場の初夏

野外劇場と云つても、これは希臘若くは古羅馬の盛時にのみ觀られた驕奢な人間世界の演技場でもない。無論又、彼の大雅にして醇撲な田園の野芝居でもない。

玆に人間の識る可らざる不思議があり、奇蹟がある。

私はそれを觀た。觀たと云ふより僅かに窺ひ得た。それは凡てが生物共の怪しい、而も澄徹した靈覺の世界に於てのみ觀得る歡樂であり、戯咲であり、演舞であり、簡素な默劇でもあつたのである。

×

時は初夏である。日は午後の三時——四時。所はO町のK梅園、その梅園の鳥瞰面がまさしく私の觀た野外劇場の全景であるのだ。

先づ劇場の構圖から説明しよう。

何よりも一大藍色の穹窿が萬物の上に朗らかに圓く、更に高く垂下してゐる事を考へねばならぬ。

劇場の三方、北と南とは數段の梅林から成つてゐる、これが觀客席である。

舞臺は最下層の楕圓形の廣場で、此處にはココア色の土に萠え立つ芝の散斑(ばらら)で、天然その儘の古雅な更紗模樣を呈してゐる。

背景は燻んだ赤鳥居と、茶亭と、黄ばんだ竹藪と、遠見に白い綿雲と白い天主閣と、數株の古松その他で、いかにも悠久な太平の世の書割である。

私はとある小丘の徑から、その南方の最上段に出た。それは偶然であつた。私はふと何氣なしに通りすがつたに過ぎぬ。然し私はその時、私が全く人間とかけ離れた植物圏内のその劇場の入口に身を置いた事を知つた。而してあまりの沈靜と靈異とに、全く驚歎して了つたのである。すばらしいその全景！　その沈靜！

その時、蒼空にはふうはりと大きな手で抓んで延ばしたやうな綿雲が白く輕く引きはへてゐた。而もその時、燕の一群が一齊に高翔飛揚してゐる眞最中であつた。私は極めて虔ましい歩調で、萌え立つばかりの梅や楓の若紳士達の間を、輕く頭を下げながら、幾段の觀客席を下つて、漸く、とある雨曝らしの木のベンチの上に腰をおろした。それが私としては最も謙讓であり、人間としての正しい禮節でもあつた。

私が席に着いた時、私はつい下を覗いたが、その一階目の斜面の芝生の清新さ華麗さはまた格別であつた。其處には紅や淡紅色や純白の夏の輕羅を着けた小さな躑躅達（恐らく子供や處女達であらう）が眩ばゆいばかりに初夏の日光に汗ばんで肩と肩とを拱みかはしてゐる。それらが幽かな物音を感

じたのか靜かに私を振り返つたが、また默つて空を見上げた。私は思はず忸怩としたが、その親愛な目交せと淑やかな無言の好意とを直覺し得たので、初めて凡てが人間の私をも觀客の一員として許してくれてゐる事や、異種屬の介在にも決して無理解な咎め立てする者のない事を知つた。而して何となく心の底から溫められたやうな氣安さと喜びとを感ぜずにはゐられなかつたのである。

燕の群は非常な輕快さで翼を返す。而もその水際立つた離れ業は思はず觀衆をしてハラハラさせるばかりである。ある燕は一線に高く直上するかと思ふと、ある燕は急轉直下に落ちかかつて來る。と、ある燕はまた横あひから眞一文字に突き拔ける。命がけの宙返りと、道化と亂舞と。この黑と白との燕、赤い頰紅をつけたハイカラな曲藝師の一群は、南の空からはるばると今著いたばかりを、少しの休息もなしに、早速、この演技場の上層に現はれたのである。

既に晩春から初夏へ移らうとしてゐる、今は若々しい新綠と爽やかな南風の季節である。三方の觀客席は、青い芽麥の絨氈で楕圓形の段々に劃られ、其處には梅や楓の若紳士達が、瀟洒な崩黃色の背廣をつけ、青い瞳に鼻眼鏡をかけて隙間なく肩を並べてゐる。その所々にまだ紅い姥櫻の色を見せて上品な女達が差覗いてゐるのも惱ましい。然し彼等は凡てが果敢で凡てが溫柔で、時をり上空の妙技に我を忘れて驚き

交はす事はあるが、それは殆ど沈默に近い言語で私達人間の粗雜な耳朶には到底聽きとれぬほどのものである。彼等は私語する。然しそれは山椒の葉や青梅や楓、杏のそれぞれの綠色の香料の香でうち消されて了ふ。

そこに澄み亘つた無言があり、默契がある。私は言ひ忘れたが、これらの觀客席の背後には亭々たる老松や大樹の樟や槲の木が群衆してゐる。彼等は植物界の最も因循した頑固連であるか、最も野蠻で强健な農民か勞働者かであるが、彼等は歡極まると潮のやうに騷ぎ立つ。然し、人間社會の劇場に於て見る大向うの彌次りとは違ふ。騷がしい中にも自から調整があり、律呂があり、澄みに澄んだ神機とがある。

燕の演技が極點に達した時、一羽の黑い大鴉が何處からとなく飛んで來たと思ふと、悠揚な羽ばたきで上空に一圓周を描いてゆく。すると燕達は急にその舞踊を止めて散ぢりに遙かの圈外へ引き取つて了ふ。その間も凡ての誠實なる觀客達は飽迄も靜肅で、飽迄も愛に滿ちた心の淑やかさを保つて、少しの不純な雜音も立てなければ些の騷擾をも敢てしなかつた。ただ、有りの儘に有りの儘の姿で有りの儘の演技の實相を觀、且つ聽き惚れてゐるばかりであつた。深い暗示の後から來る美妙な恍惚と、思索と、更に高く、より尊い靈感と、彼等は凡てが己れの有る處を十分に知つてゐた。

鴉がまた隱れると、舞臺は空虛になつた。にもかゝはらず、

寬潤な彼等は失望もせず、喧騷もせず、ただひたすら敬虔と沈默の中に靜かに來る可き實在に向つて期待し自重する。

而も、其處には永い永い間の空虛があつた。

突如、赤い帽子をかぶつた茶色の小犬が赤い鳥居の蔭から奔つて來た。と思ふと、黑の覆面をした白ジヤケツの大きな野良犬が追つかけて、巫戲けあふと、またそれぞれ大小の圓周を急速に地面に描き乍ら、更に輝くばかりの興奮と慾情とを以て一つになつた、而して剽輕と素朴な壬生狂言が、また彼等の間に初まる。

クスクスと誰やらが忍び笑ひをした。私はふと振り返つたが、凡てが其所には取澄まして、相も變らぬ溫容と冷やかな諦視とを續けてゐる。彼等は鋭い、彼等の叡智は正しい、慈愛があり、飽和があり、而も恐ろしい心理的觀察がある。それだけ對者には身慄ひさせるほどの皮肉と直覺とを藏してゐる。激しい熱情をもまた深く燻してゐる。何事もよく理解してゐながら、而も何事をも意識せぬかの樣をする。複雜過ぎるほど複雜であるが、それがまた極めて單一な簡素な表現まで、全心を集中し凝念する。ただ表面に現はすものは寬厚な微笑と肯定とがあるばかりである。卑賤な忍び笑ひ！　おおそれは人間の私自身の忍び笑ひであつた。あまりに人間くさい。私は思はず赭然とした。

二匹の犬の粗暴は淫樂はまた指揮者の大きな鴉によつて舞臺裏へ追ひ退げられた。

さうして、再び永い永い虛無が來た。

而も、凡てが靜謐な光耀の中に閒寂として過ぎ去る『時』の腐爛を目送し、更にその新生を待つ。

玆に少しの不純も動搖もない。縱んばこの恐る可き虛無が、永久に永久に持續するものとしても、終始靜止不動の觀客達には、殆ど何等の倦怠をも來たすまい、と思はれるほどの固い信念がありさうに見えた。

永い間待ち、何時までも待つてさへすれば何らかの實在が虛無を埋める。而してまた實在が消滅すると、再び虛無が來る。畢竟は繰り返しに過ぎない。彼等は安住して何事も有るが儘に受け容れて待つ。然し、これは人間の私には到底堪へられぬ事である。

既に傾きかけた太陽は白い雲の中に黃金の卵のやうに光り出した。而も極めて明るい蒼空には金粉酒のやうな澄みわたつた精氣の中に點々として金色の微塵光を漾はしてゐる。

私は立ち上つた。さうして周圍の無邪な躑躅の處女達や梅や楓の鮮綠の紳士達に、靜かに頭を下げて、目禮し乍ら、その靜肅で啓示の深い野外劇場の圈外に出てゆくのであつた。

振り返ると、眞白な鳩が二三羽、羽裏を金色に耀やかし耀やかし、恭々しく演技場の上空へ飛んでゆくのが見えた。

小田原小品　その二

金魚經序品

古池や蛙飛び込む水の音　芭蕉

幽かに心を心に潜め、靜かに澄み亘つてゆく各々の心眼を開いてこの幽かな文意の寂びを讀んで下さるやう。いや讀んで下さると云ふよりはただ聽き入つて下さるやうに。深く聽いて深く味つてゐて下さるやうに。構へて聲を立てたり、上の空に笑ひそらし讀みそらしては下さらぬやうに。たとへば果敢ない馬追の背翅の青草色の輕るい翅ばたきのやうな、この薄い頁をめくる音さへも氣をつけて下さるやうに。

さらでだに、幽かに生れて、幽かに閑寂の心の底に潜む金魚は、此世の中の生きものの中でも、まことに纖弱過ぎる位驚き易くて、殊にはあの並はづれた細かい神經（それは電氣絹のやうな）の持主なのです。それは些細な、あるかなきかの息づかひにさへも、たちまち驚いて姿をかくす、それほど寂しい金魚を心なく驚かしては下さらぬやう。

金魚を思うて、金魚の心になつて、私は今ほのかに私の靈魂の尾鰭を動かして居りますのです。今夜獨り、金魚の爲に筆を執り、紙をのべて、凝と眼を瞑つてゐますと、四邊は水のやうにしんしんと沈んで澄み徹つてゆくのが感じられます。

×

古い寂びれ果てた山寺の書院で、使ひ古るした壞れかけの紫檀の机の上に、紙笠の煤びた、これも古風な洋燈を點して、端然と坐つてゐますと、また、妻が寢しなに炷きすてて呉れた梅花香のかをりがそことなく漂つて來たり致します。

洋燈の黄色な火光の下には青磁まがひの梨形の小壺に、鄙びた紫の菫の花がこぼれる程に挿してありますが、これは今朝妻が裏の孟宗藪から竹の根つこの切株ぐるみ拾つて來ましたそれなのです。泥まみれに掘ぢくり出されて轉げてゐた一塊の根つ株にも、かういふ可憐な菫の花がいつぱいに咲き亂れてゐるかと思ふと驚きます。

山路來て何やらうれし菫ぐさ

芭蕉が靜かに頭を下げたものも恰度かうした大自然の暗示に驚いたのだ、尤もそれは極々小さな、春そのものの瞳のやうな一つきりの花だつたに違ひないがと、私も申しました。

晝過ぎになつて、妻はまた不思議な野生の花を墓場の横から拾つて來ました。それは一本の太い莖に鳳仙花の葉のやうな新鮮な綠色の天蓋が開いて、その根方から毒々しいほどな濃い紫の喇叭狀の單瓣花が、何かの怪しい唇のやうに上で卷いて、その白に紫の點々の縞目のついた漏斗の内からは、花瓣と同じ燕子花色の鬚が、まるで拂子の毛の一筋ででもあるやうに突き拔けて、それがまた上から弓形に長く長く垂れ下つてゐました。それを彼女が涼しい水を盛つた阿蘭陀グラスに活けて、机の傍の白ラック塗の小さな廻轉書棚の上に飾りましたら、その鬚の細かな蔓の先は、机の上の小さな馬蹄形の目醒時計の硝子の面に觸るばかりに顫へてゐました。莊嚴な、それは重々しいいい花でした。

『この花　何だか御存じ。』

『いいや。』と私に彼女は答へました。

『教へてあげませうか、これはねえ、菖蒲玉の花ださうですよ。』

『聞いて吃驚りでせう。實はね、私だつて初めてですの、でも隨分立派な花でせう。』

私もそれには驚いて、またつくづくと眺めて見ましたが、何だか妻と二人で、その花を間に置いて涙ぐましいやうな氣持になりました。

妻は私に申しました。

『ねえ、私達の今まで氣にも留めなかつたあんな粗雜な菖蒲玉にこんな立派な花が咲かうとは、何といふ不思議でせう。あんな下らぬ菖蒲玉に。』

私も感に堪へて、かう答へました。

『かうなると、何一つ下らぬ葉つぱも無いものだね、神様は（若し有れば、だが大自然とでも私達は云はうか）よくして下さる。有難いではないか。』

その花の長い紫の鬚の先では、今の今も、薄い蠟盤の目醒しの細かなセコンドが生きて刻んでゐます。透明な阿蘭陀グラスの柄の下は、白い皿にうでた小さな海螺の身ばかりが、三つ四つ盛つた儘、珍らしい寶物のやうに据ゑてあるのでした。それも彼女の供物ですが、これは昨日人から貰つたのでした。それを何氣なくうでて、甲羅から一つ一つに小楊子で掬ひ出してゐた彼女は驚いてまた目を瞪つて飛んで來ました。

『まあ、貴方御覽なさいましよ。何て奇麗でせう、この渦卷は』。

見ると全く、私もまた驚いて了ひました。ただ怪態な貝族

だとばかり思つてゐた海螺の素肌が、黒と薄青との大理石の光澤で透き徹つてゐて、その一部には派出な海老茶の渦卷模様さへ刺青してあつたのでした。

『こんな美しい渦卷が、こんな野暮くさい海螺に。』

さう云つて、彼女は一しきり、それらを高貴な寶玉でも拾つたやうに掌に載せて轉がしてゐましたが、ふと私を振り返つて、

『こんな奇麗な渦卷があるのを、海螺自身は知つてゐるのでせうか。』と訊ねます。

『さあ、極々底の方だからね、知つてやしまいよ。』

『さうでせうね。さう思ふと、私は何だか神様が、ただ御自分ひとりで、さういふ誰の目にもつかないところへ念を入れて美しくして、ただひとりで樂んでいらつしやるのでないかと思はれますわ。』

『そこだよ、自然の攝理と云ふものは、どんな蟲けらの隅々にまでも行屆いてゐる。考へると畏ろしくなるぢやないかね。』

だが、この海老茶の渦卷を發見したのは、あなたの手柄だと、私は云ひ添へるのでした。

晩餐の時も、箸をつけるのは惜しいと云つて、妻がかうして皿に載せた儘に、蒐翡玉の花の蔭に飾つて置いて呉れたのでした。

×

さういふ簡素ではありますが、何より美しい妻の心盡しの置物を前に私と彼女とは、今晩も色々の心靈上の細かな質疑を解き合つてゐました。

實は、今日の夕方、葬式があつたのですが、それは何でも生れてから一と月も經たぬ赤子が亡くなつたのだと云ふ事でした。話はしぜんその子の上に移つて行きました。

『あの小さな白木の位牌を見たかい。』

『いいえ。』

『いい名だつたよ、可愛いらしい、桃花光水兒と云ふのだよ、やつぱし春だね。』

『まあ。』

『春だとなると、子供が死んでもうれしい氣がするぢやないかね。』

何といふわけもなく二人は微笑しました。寂しかつたが。

『それにしても、あの金魚はどう思ひなつて、何だか、私はあれの上にも、近々異變が起りさうな豫覺がされてなりませんの。』

『金魚。』

私も思はず息を呑んで了ひました。

それは長い秋と冬でありました。金魚が土中の甕の水に凝と潜んで堪へ得るだけは堪へてゐたその寂しさは、恰度私と

私の妻とのこの侘びしい山寺の生活その儘でした。貧しさにも寂しさにも堪へて、しみじみと自然の閑寂を心の心とした私達は、それでもまだその中に遊んで、本當に寂びしがるだけの本當の心の喜びと云ふものがありました。私は無論の事、妻も私の影身に添つて、常住寸分の隙も無い同じ心の道づれとなつて呉れました。でなければどうして私がさういふ澄みきつたその日その日が送つて行けませうぞ。それは感謝してゐます。したが金魚はたゞの一匹で堪へてゐました。寒い間、誰の目にもつかず、殆ど人にも忘れられて了つてゐたあの金魚の心持、それを思ふと、人間の寂しい以上に寂しい生ものゝ哀れさが犇々と私の心にも迫つて來ますのでした。

金魚の事を書き留めて置かうと思つたのは、隨分永い以前からでしたが、今晩妻の言葉が機縁となつて、いよいよ、坐り直す氣になつて見ると、今更に、詩の經典でも書き綴るやうな、虔ましい遜つた心がしぜんと私の頭を下げさして來ました。

私は書いて見ます、金魚を、いや金魚そのものと云ふよりは、その金魚を聲一つ立てさせずに、深く深く水の底へと壓し込けて行つた測り知られぬ閑寂の大精神を、その命を、簡潔に、而も如實に、一筆に三禮し乍ら、彫りつけ刻みつけて行かねばなりませぬ。

あらゆる森羅萬象にも春が來たのに、金魚にばかり春が來ないわけはありませぬ。今日も今日とて、裏庭の土甕の水の面で、ボチャンと音を立てたのは、堪へに堪へて深く潜んでゐた赤い金魚の久方ぶりの春のおとづれでありました。

驚いて、甕の中を覗きますと、その水の面には久方ぶりに青い大空の色が映つて、新らしい見變へるやうな親しさと喜びとが輝やいてゐました。さうして、其處にはまた、傍のまだ枯れた儘でゐた櫻の下枝がくつきりと逆まになつて、その枝のところ〴〵にはまた萎びながらも辛うじて咲き出した五六輪の薄紅(とき)いろの花がちらほらと映つてゐました。その面の金魚も初めて浮いて出ました。ところ〴〵擦り剝けて白くぼやけた赤の金魚が。背をすれすれに水に浮んでゐました。よく見ると、思ひきり一つ動いてまた音もなく沈んで行つた金魚は、まだまだ力が足りませんでした。動いてゐるともゐないとも定かには見わけのつかぬ、それは幽かな尾鰭の振り方でした。その開いた大きい尾鰭もその尖り尖りで白く擦りきれて、青い水苔がいつぱいについて居りました。その青い水苔がまた一つ一つに幽かに動いて居りました。

したが、あまりに弱い金魚の浮び方でありました。

『春が來た、春が來たが、もうこの金魚は、死ぬのぢやないか。』

私はふとさう思ふとたまらなく不安になりました。程經つて、私はまたその庭で、妻の方に話しかけてゐる酒屋の小僧

の聲を耳にしました。

『奥さん、もうこの金魚は死にますよ、壽命が來てゐますよ。』

永らく待ち構へた春の光に、たつた一目逢つたばつかりで、もうあの金魚は死んで行くのか。

私はまた庭に下りて、その土甕のそばに蹲踞むと、枯れた松葉の鋭どい尖で、一寸、その浮き上つた儘でゐる金魚の背中を突つついて見ました。

生きてゐたのです、無論、金魚は急に尾鰭を強く振つて、すうと沈んで了ひました。なかなか死ぬけしきもありませんでしたが。

私がその傍を離れると、今度は茶色の雄鷄と白の雌鷄とが二羽、その四つの足に春の濕り香を蹴立てて、馳せ寄つて來ました。そして、その甕の水を見つけると、向き合つて、甕の兩方から、盛んに紅い鷄冠を振り立てながら嘴をつけてゐました。そして一口づゝ水を含むと、かはるがはるに首を上に向けて、青い美しい空を見上げ見上げ、コク〳〵と飲んだり、また下向いたりしてゐました、かはるがはる上げ下げする天秤棒のやうに。

『やつぱし、春が來たのだ。』

私もほうつと安心はしました。

先程、私の妻は私の力づけにと白い小皿に生み立ての鷄の卵を一つ割ると、ぽつとりとその黄味を白味の中に落しながら、かう申しました。

『金魚と云へば、恰度かういふ工合でしたわ。あの水に浮いてたところは。』

さうでした。さうおつとりとした浮び方でした。

『大丈夫だよ、なかなか死にはしないよ。』

かうして春の一夜は靜かに闌け亘つてゆきました。私は妻に先きへやすむやうにと申しつけて、それからかうして端坐してゐるのです。妻は立つて淑やかに自分の床をのべると、あの梅花香を一さし炷べて置いて、それから、お先にと背後の方にやすみました、それでも彼女は私の方へその病み上りの青白い顔を向けてゐました。

私の心が澄み亘つて來れば來るほど、紫の菫と菖蒲玉の花のにほひが致します。それから香のかをりも縺れてまゐります。

金魚經、金魚經、妻の寢息を少しでも呼び醒まさぬやう、この金魚の詩經は綴られねばなりませぬ。何故かなら、彼女もまた恰度金魚のやうに驚き易いいのちの持主なのですから。

×

金魚經序品

幽かな金魚、幽かな心の金魚は、かうして私の心に移つて

來ませう。深く沈み、深く潜む金魚の閑寂な長い忍從の秋と多とが還つて來ませう。

チツクタツク、チツクタツク、チツクタツク……。

薄い蠟盤の、小さな目醒時計の細かなセコンドは、その間も生きて動いて刻んで行きつつあるのです。いつまでもいつまでも……。

山莊建立

つくづくに慕はしいのは芭蕉の心境である。私はその芭蕉を更に新しくした閑寂の三昧に入りつつある。この頃この破れ寺の書院から前の盂宗藪を見てゐると、その竹の一節毎に黄金でも潜んでゐるやうな歡喜が、薄明の砌はなほさら私の心をゆする。小さな赫尘姫でも全く生れて來さうな感じである。

春の桃の花が紅く咲いても、この竹藪の風景に閑寂を極めたものである。私の生活も同じく簡素である。

私は愈々、質素な私の山莊をこしらへにかかつた。色々世上の取沙汰は繁かつたが、あれは遠つてゐる。私の山莊は私の極内々の古い門下たちが寄つて群つてこしらへてくれるのであつて、それ以外の人の手を煩はすのではない。初めは二疊の朝鮮式の方丈と日本風の四疊半の寢室だけをこしらへる事になつたが、それにまたもう一棟小笠原風の堀立小屋を建て增す事になつた。丸太の柱に萱の屋根の、それに壁に麥藁で、正面から見ればそれはとぼけた木兎の顔そつくりである。これをカーテンで二つに仕切つて應接間兼仕事場と食堂にする。これは私の『雀』がこしらへてくれるのである。

雀と云へば、曾て葛飾で極貧の生活をしてゐた時、私は雀

とばかり遊んでゐたが、あまりの貧しさに、私は兎に角病身な妻に對して氣の毒でならなかつた。私が妻に詫びると、妻はしんみりと涙ぐんで答へてくれた、さうして私を慰めてくれた。

『御安心なさいまし、これ以上の貧しい事はもうございますまいよ。あの雀たちでも、愈々あなたがお困りとなつたら、たとひ一粒づつでもお米を啣へてまゐりますわ。』

全く妻が云つてくれた通りであつた。全く雀がこの頃は私と妻とを安樂に食べさしてくれてゐる。私は私の『雀の生活』のお蔭で、この頃はさう貧乏しなくても濟むやうになつた。

雀ばかりでなく、大きな人間の雀たちも私にお米を袋に入れてちよい〳〵送つてくれた。今度はまた詩社の水の江君からお米を一俵贈つて貰つた。

大正の白秋山莊が、何だか元祿の芭蕉庵に還りさうな私の今の生活である。有り難い事である。妻はよく云ふ。

『それはあなたが雀をお可愛がりになつたからです。』

私は私の堀立小屋の周圍に芭蕉や、棕梠やピカピカする玉蜀黍やもろこしをいつぱいに植ゑる積りである。この中で白い鷄を二三羽程飼ふ。さうして黑い大きな犬を一匹飼たいと思つてゐる。山莊からは竹藪や樹木や赤屋根の人家やが目の下に見える。さうして遠くに海が見える。小田原隨一の景色である。

私はこれから愈〻落ちついて本當のいい生活ができるであらう。本當に書も讀め、詩も作れるであらう。

哥路（コロ）の葬式はこの山莊の上棟式と同時に擧げる。悲しみも喜びも畢竟は同じ一如の禮讃である。どれに區別をつける筈も無い。

一茶のやうにあなたまかせである。

大自然の中に、一枚の草の葉の如く同じ呼吸を安らかに續けてゐればよい。何事も自分を投げ出しておまかせ申すにしく事はない。

明るい。安らかな世の中である。

神童の死

去年の秋、小田原の近在に意外の大慘虐が行はれた。恐らく、この吾が人生に於ける悲劇中の悲劇であらう。而かも私は、未だ曾てかゝる神聖無垢な殺人犯を見た事がない。清純にして無邪、眞實にして玲瓏の極、のみならず、單純無比にして深刻無比。而かもまた無心無我の極にあつて、既に恐るべき惡魔的天才の萌芽を示した雋鋭錐の如き近代の神經と感覺。驚くべきこの犯罪はただ手もなくやつつけられた。このすばらしい犯人こそ當年五歲の男の兒に外ならなかつた。

この犯罪は更に他に戰慄すべきそれ以上の犯罪を生んだ。そればかりでない、更にまた血みどろの自殺者を二人まで出して了つた。一家族の全滅である。

それがまた、ほんの突嗟——永くて五分か十分——の出來事であつた。

而かも相互の愛情には些の不純も無かつた。相愛してゐた。唯一人憎むべき人間は見當らなかつた。

たゞ愛ばかりであつた。而かもこの悲劇は唯一人豫期したものも無ければ、何一つ當初計畫されたものではなかつた。

事件は突如として起つてゐる。

當事者は知らず、第三者から觀れば、此等の犯罪者乃至自殺者は、全く人意以外の或る惡魔（それはその一家を全滅さすべくのしかかつて來た）の凄まじい蘇弄に遭つたか、或は何等かの因果律に依つて、その一家のとどめを刺されて了つたとしか考へられなかつた。

私の假寓してゐるD寺の和尙さんは『前世からの約束事でせう』と嘆嘆した。而してまた『因緣事だ、仕方がない。』と苦もなく諦めて了つた。

多くの人間は一體自分から觀て一寸測り知られぬ異常な事件に打突ると何も彼も因緣事だと諦めて了ふ。然し、私達はそれで決していい事はない。近代の人間はもつと理智的であり、考察的であらねばならない。

私が考へたところでは、全滅した此等四人の家族の中から、一人の惡人でも、矢張り見出せなかつた。が、たゞ一つ犯人の母親がたゞ一言不用意な言葉を使用した。それが凡ての起因で、兎に角母親が不謹愼だつたといふ事はわかる。然しそれを以て母親に最上の惡を擔はせる事はできない。

ただ、玆に、私が、心から驚いたのは、此悲劇の主人公たる男の兒のすばらしい天才的感覺であつた。

えらい奴である。とにかくその男の子は。

考へると、私は全く讃嘆し崇拜したくなる。尤も、私は決して殺人を是認する者ではない。然し、その犯罪があまりに無邪氣で、その犯人がまたあまりに無心であるから、その手

段だけが、ただ藝術的にも見え、天才的にも神聖化して考へられるのである。

×

事實を言はねばわからない。

時は初秋、一味清涼の秋風が空には流れても、山間の雜木林にはささ栗の毬がまだ青く搖れてゐる頃であつた。

處は函嶺に近いある村落の田家に、兩親と二人の子供とがあつた。子供は二人とも男の子で、兄は五歳弟はまだ三歳だつたと云ふから何れも頑是ないものである。ところでまだその年齡が自分の片手の指の數しかない兄の方が、ある時過つて疊の上に尿を洩らした。すると、その傍で何かのつぎものでもしてゐた母親が見咎めて、『おや、この餓鬼、お尿しやがつたな、うむ、今度して見い、おめえのおちんこを、これよ、此の鋏でチョン切つちまふぞい。』と叱りつけた。さうして目の前でチョンと鋏を一つ鳴らして見せた。兄の子はわあわあ泣いた。だが、『この鋏でチョン切つちまふぞい。』だけは、確實に耳に留めた、鋭く。

それが悲劇の原因である。

それから幾日か經つた後の事であつた。父親はやや離れた裏の田圃の方で蹲んでゐた。母親は背戸の小流れで何か洗濯物をごしごしとやつてゐた。その家の緣側にはまだ汚れきつた蒲団一つで、兄と弟とが遊んでゐた。二人はまだ粗い毛並の幾分か黄金の光澤を潤ませた玉蜀黍の、その新鮮な薄い緑色の薄皮をはぎはぎ、無心に遊びほれてゐた。三歳の子は一生懸命に、食べられもせぬ固い琥珀の粒玉のやうなその實に嚙りついてゐた。兄の子はまたそれを大人くさい顔をして押しとどめようとした。弟はムキになつてその兄の手を振り拂はうとした。そのはづみについお尿を洩らして了つたのだ、弟はわあわあ泣き出した。

この時まで、兄の方は子供ながら、自分はこの子の兄だと云ふ優越感と、兄としての愛と、その兩親の外に出てゐる間は自分がその家を守らねばならぬ、といふ全責任とを深く感じてゐたらしい。始終、兄らしい愛撫と監視とをその弟の方に向けて、その遊びほれてゐる間も少しも油斷はしてゐなかつた。

自分の監視下にある弟がお粗相をした。と思つた瞬間、その弟を折檻するのは自分の役目で、それはまた、母親からも喜ばれる事と思つたに違ひない。いきなり弟に乘しかかつて、傍にあつた鋏を取ると、その小さな、また可憐な、恰度朝顔の蕾のやうに尖つた、ヒクヒク動いてゐるそのおちんこをいきなり、チョンと切り落して了つた、根元からチョンと一つ。

曾ての母親が確かに不謹愼であつた。また神のやうな純潔白紙のやうな子供に滅多な事を云ふものではない。

そこは子供である。兄の二べつけ僧おちんこをチョンと一つ切り落す事が、それほど簡にブ単は思ひがけなかつたにちがひない。一つ折檻して、また仲めたら、それはそれで濟んで、また一緒に面白く遊べを吸 とおもつてゐたに違ひない。彼は無論弟を愛しきつてゐたからだ。またその弟が死んぢまつてそれつきりだとは思ひがけない事だ。第一まだ五歳ばかりの子供に人間の死などゝいふ大問題がわからう筈もないのだ。

チョンと鋏が一つ鳴つた、と、弟の小さな男根はピョンと彈みをつけた昆蟲のやうに飛ぶ、弟はウンと引つくり反る、血がシュウツとその胯間から噴出す。四邊一面眞赤になる。と、思はず飛び退つた兄の子は、吃驚すると、啞のやうに其處に突つ立て了つた。彼の子から觀ると、それはあまり豫期しない奇怪事であつた。それはおちんこをチョンと一つ切り落す事は朝顔の蕾を一つチョンと切り落すのと大した相違はなかつた筈だからだ。

兄の子が火のつくやうに泣き出したのは、やや暫らく經つてからであつた。

然し彼の子は、それでも別段惡い事をしたとは思へなかつたに違ひない。無論それが人殺しで、非常な罪惡だとは知る筈がなかつたに違ひない、弟が死んで了つたなどとは無論また知る筈はない。ただ血を見て仰天して了つたのだと思ふ。何といふ無邪氣な人殺しであらう。

ただならぬ泣聲を母家の方に聞きつけると、その母親は洗濯物を投げ棄てて、背戸の方から飛び込んで來た。見ると、弟の子が緣側にひつくり反つてゐる。何事と思つて抱きあげると、その內股は血みどろである。ハッと思つて手を突つ込んだ。

その時兄の子はわあわあ泣き泣き、飛んでつた弟のおちんこを拾つて、そつと母親の方に差出した。と、

『あれつ、てめえは。』と云ふとそのまゝ母親もそつくり返つて了つた。眞つ蒼になつて。

兄の子はそれを見ると、またひいひい泣き立てて母親にむしやぶりつく。それを突き飛ばすやうに振り放すと、むつくり彼女は立ちあがつた。その時はもう元の母親でなかつたのだ。

母親は『ほほゝゝゝゝゝ』とたまらず を上げて笑ふと、落ちてゐた小さなおちんこを拾ひ上げて、弟の子の血みどろの跨の間に押しつけて見た。彼女の手も無論血みどろであつた。押しつけて見てまたをかしくてをかしくて堪らぬかの如く聲を立てて笑ひ出して了つた。

『おちんこが。おほほほほ、おちんこが、おほほほほ・・・』

氣が狂つて了つたのだ。

ところが田圃から父親がふらりと歸つて來た。何氣なく歸

つて見るとこの始末である。仰天せずにはゐられない。

『ど、ど、どうしたつてんだ、え、おい、こおれおますよお、三太、やい、次、次、次郎公』

女房はただゲラゲラ笑つてゐた。

次郎公はまたひいひい歔欷りあげた。

『小便垂れやがつたからな、おら、チョンぎつただ。』

『え』と吃驚りすると、ハッと三太の跨ぐらを引つくらかへした。その手がワナワナ顫へ出した。

『と、飛んだ事しやがる、こん畜生。』

一時の驚駭と激怒と惑亂から父親はカッとなつて思はず、次郎公の面部をたたきつけた、たたきつけて、一蹴り蹴つ飛ばした。

次郎公がキヤッと叫んで後へドタリと倒れると、女房もまたウーンと云つたまゝ氣絶して了つた。

あつと慌てて次郎公を抱き起すと、打ちどころが惡かつたか、その子はそのまゝ息の根が留つて了つてゐた。動顫して女房を抱き起して見ると、彼女もまた、口から血をタラタラ出して死んで了つてゐた、舌を嚙み切つたのだ。

この思ひがけない悲慘事の一事で、それでも彼が冷靜に有り得ようとは誰一人思へる譯　母親は　無論彼は逆上して了つた。

『嬶、ゆ、許してくれ、おら遊んでゐたかねえ。申わけがねえだ。』

その家

そのまま、納屋へ飛び込んで行つて、壁にかかつてゐた草刈鎌で、無茶苦茶に腹に突き立てて了つた。

一家全滅。

これで事實は畢つてゐる。

○

これで見ても、一家四人凡てが善人である。父親は頑愚で、正直一圖で、愛情が粗く野性的ではあるが愛情は深い。母親も無教育で、不謹愼な點はある。然しかういふ女は百姓の女房としてはザラにある、それに非常にヒステリックではあるが、それだけ確かに純でもあり、愛情も濃かつたに違ひない。

子供は無論無邪氣である。もとより善惡を超越してゐる。

さうなると、果して誰が善で、誰が惡か。

私達はまた誰を憎み、誰を憤り、誰を罪すべきか。

恐らく、最後の審判の日が來つたところで誰一人罪せられる者はゐないであらう。ただ母親が不注意だつたと云ふ事であるが、それも決して深く罪せらるべき問題でない。

父親がまた少々粗骨だつたとは思へる。然し、あの場合では、ああ逆上するのも無理はあるまい。無論ある瞬間に彼が憎惡のあまりその子をたたき殺さうと迄は企らみ得る餘裕は無かつた。神の眼には涙がある。

ただ同じ人間の私から見て、思はずハッとしたのは、あの

あどけない子供の無意識な慘虐性が根深く潛在してゐる事の中に、既に人間通有の私自身の事から考へて、[illegible]

私は弟が生れると、たち[illegible]

母親の愛を專有できなくなつた。それが憎くらしかつた。私は弟が母親の乳房を、我が物顏にしやぶり、時としては思ひきり甘えて、反つくり返つて腹をつん出して、兩足をバタバタさしてゐるのを見ると、思はずつかみ殺してやりたく思つた。その小さなおちんこまでが腹立たしかつた。が、またたまらず可哀ゆくもあつた。そんな時は弟のおちんこに飛びついていぢくりまはした。

その私よりも、次郎公は鋭い。私は彼が弟の上に乘しかかつて、そのちよつぴりと膨れてちくちくと尖つた、可憐な昆蟲のやうな朝顏の蕾のやうな小男根をビクビクと息づいてゐるやつを、大きな鋏を開いて凝と差寄せた瞬間の彼の神經の鋭さ、その沈着と大膽と、それから一息に根元からチョキンと切り落した瞬間の神的決斷と、人間性の無意識的快感、これを思ふと恐ろしくなるのである。

この突き詰めた事實と直覺。壯嚴な性慾の萠芽。

『恐ろしい感覺だ。少くとも彼奴はすばらしい神童だつたに違ひない。』

私は舌をまいて讃嘆したがまた、顫へ上るほど恐ろしくなつた。

彼の子の如く愛憎の念が奥ふかく、純眞で、一圖で子供ながらにも責任感が堅く、自らにしてまた頭領としての見識も備はり、而かも前に云つたやうに沈着で、大膽で、決斷力が強く、猛勢な精力と神秘的直感力を有してゐる子供が、幸にして麗かな天日の下にのびのびと生ひ立ち、よく愛されよく教育されよく生長して行つたならば、果し　どれほどのすばらしい人類的の詩人若くは思想家、實行家になつたであらうか、あらゆる人間としての諸惡心も、確かに彼には潛在してゐた。然し彼は將來確かにそれらを制御し壓服し得たにちがひない。

惜しいかな。彼は無心にして彼の父親にたたき殺されて了つた。

『すばらしい奴だつた。ああ、すばらしい事をやつてのけた。』

蒼蠅

ふと足を留めた私は、凝つと眼をその石の上に注いだ。石と云つても、それは無縁墓の平石を横にして、單にベンチ代りに道端に据ゑて置いただけのものであつた。平石と云つても平滑ではない。粗々しい切りそぎ方で、古風な、いかにも素朴なものであつて、それに午後二時頃の光がまだ冷々としてはゐながら、何となく物温かさうに當つてゐた。その面には南無阿彌陀佛と大まかな行書で彫りつけてあつた。無論、その名號も永年の雨曝しで寂び盡してゐた。

その面に蒼蠅が五六匹留つてゐたのであつた。よく觀ると、それは美しい蒼蠅であつた。その絢爛さは全く生れた許りの生物だけに觀る事のできる、あの特殊の新鮮さで透き徹つてゐた。薄い透明な網翅、その尻の青い螺鈿の光澤、小豆色の悧巧さうな頭、觀れば觀るほどそれらが生々と光り輝いてゐた。

一匹は「南」の字の上に下向きに留つてゐた。一匹は「阿」と「彌」との間に横向きに[illegible]してゐた。他の三四匹はそこらの兩側にてんでに散らばり、[illegible]き合つてゐた。どれもどれも冷たい石の上に恰度程よ[illegible]てゐる太陽の光と熱とを嗅ぎ慣れてゐた。縋りついて執着してゐた、嘲り付いた

狙つて行つて、やにはに壓へつけると、その薄螺鈿の光澤が一緒に耀き反つた。その瞬間にブウンとたちまち飛び分れて、その空を互に一廻りして、またてんでに石の上に歸ると、また凝と、黄色い太陽の光線を吸ひ初めた。

『「佛」の字の上で交尾してゐる』。全く、それは正しい絢爛な受胎の一瞬であつた。

私は微笑し乍ら、一二歩本堂の方へ歩るき出した。私の影がやや冷たく流れて、その石の面へ映ると、急に蔭になつた蒼蠅の一團は思はず驚いて飛び立つた、それは細かな觸感であつた。それでもまた石碑の縁に四五匹歸つて來て密集した。そこには日が當つてゐた。

一匹は石碑の裏から下の蕗の葉に飛んで下りた。蕗の葉が思はず金色の光線を搖りこぼした。私はハッと驚いて其處に蕗の葉の存在を觀た。その蕗の葉は圓く、而も極めて鮮かな原色の綠であつた。その圓い　の葉の中心に一匹の生きた蒼蠅が留つてゐたのである。その蒼蠅は動いてゐた、とまた、その傍の雜草の細長い何本かの葉も動いてゐた。凡てが綠であつた。さうして一杯に金の射光を搖りこぼしてゐた。それはやや冷たかつたが洗はれたやうに明るかつた。

蒼蠅がまた一匹蕗の葉の前に下りた。ふと見ると、その地面の濕り色の美しさ、それはやや乾いたココアの赭みを交ぜた、親しい地面であつた。それが蕗の葉の綠と映つて何とも儘であつた。

その蒼蠅共は、時折細かにその兩つの前肢を擦り合したり、揉手したり、またその肢で幽かにその頭を撫でたりしてゐた。ある一匹は永い靜止の狀態から、急にカサリと向き直つた、そしてまた深い默想に耽つて行つた。

ある一匹は不意に飛び立つて、しきりに微風にそよいでゐる孟宗の笹葉のかげで、その宙宇で、キラリと光つて消えた、かと思ふとまたそこらを一廻りして、ピタと元の位置に据つた。

ある一匹は横匐ひにひつそりといざり乍ら、兩肢で顫へ顫へ、つい近くの一匹に擦り寄つて行つた。寄られた奴はまた慌ててその兩肢で防ぎ乍ら恥かしさうに後退りして行つた。さうして二匹ともが向き合つたなり、身體を固くして据つて了つた。一匹は彈けさうに身悶えしてゐた。一匹にまた恐ろしさうにワクワクしてゐた。

勿論、それらの蒼蠅は生れて既に、正しい「性」の自覺から搖り動かされてゐたのだ。莊嚴な愛慾と眞實とが既に彼等を靈の底から燃え立たしてゐた。彼等の圓い臀部は濃藍色に光り、銀綠色に光り、時としては金色にさへ耀いてゐた。

と、一匹が「佛」の字の上に、逃げて、ほつとして留ると、揉手で、念入りに、その花蘇枋の蕾のやうな小意氣な頸すぢを化粧し初めた。すると、他の一匹が横あひからジリジリと近へず靜やかに染め出されてゐた。そこにも、日の光が當つてゐた。眩しからぬほど、明るく、そしてやや冷たかつた。

そこにも、蒼蠅の螺鈿は光つて動いてゐた。

私はまた靜かに一二歩退いて、曩の石の面に十分に日の光を當ててやると、蒼蠅の群はまた、その緣や蕗の葉から飛び立つて來て、また元の樣に散らばつて留つた。留つてさうして溫かさうに、また揉手をした。

突然、パラパラと日の照り雨がその平石の面へ點々をうつて來た。見る間に明るい日向の面を濕つた大きな點々が亂れうつて來た。蒼蠅の群はたちまち飛び立つたが、まだたつた一匹だけは相變らず「阿」の字の上にしがみついてゐた。飽迄辛抱强く、飽迄かぢりついた儘であつた。と愈々その小豆色の頭の傍や尻や翅のつい近くに、雨の點々が石つぶてのやうにピシピシぶつつけて來た。私はハラハラした、さうしてその凝としてひそまり反つてゐる蒼蠅の一匹を凝視めてゐる。氣がつくと、その螺鈿の圓い尻の下には小さな乳酪いろの卵が二つ三つ生みつけてあつた。

『卵を生んでゐるのだ。』

驚いて眼を瞠つた私には委細構はず、蒼蠅はまた卵を一つ生みつけた、また一つ。

そこへ。雨が一降り通り過ぎると、日の光が一層强く光り出した。四邊が再び目ざめたやうに鮮やかになつた。その蒼

蠅はまた揉手をして、その頭を撫でた。

私が歩み出すと、その石の面にはまた蒼蠅が一齊に群つて留つた。石の面の點滴のあとは次第に乾いて行つた。日の照り雨の點滴であつただけその乾きは一層早かつた。

そこへ、日あしが次第に廻ると、傍の雜草や枸杞の新芽などが爽やかな浮織模樣のやうにその石の面へ影を落した。さうしてそれが搖れ初めた。氣をつけて觀ると驚く事ばかりであつた。

目の上の空間では唸りながら耀き廻つてゐるものがあつた。それも蒼蠅の二三であつた。

蒼蠅はまた雨に濡れた孟宗の青い竹の幹にも留つてゐた。その蔭の篠笹の葉の上にも青く光つてゐた。篠笹の下葉はまだ上葉からの雫で濡れそよいでゐた。

篠笹はまた、そこらに無雜作に積み重ねた無緣墓の珠石や石地藏やごろた石の間から突き拔けて繁つてゐた。それらの捨られた古い石碑の上にも、生きた螺鈿の裝飾がキラキラと鏤められてあつた。中には赤い頭の泥蜂の一二も、輕騎兵のやうな華奢な格好で留つてゐた。

孟宗藪を背景にしては、紅い桃の花が花盛りであつた。その花も雨に濡れて一層鄙びて耀いてゐた。その紅い花と、地面の白豌豆や蠶豆との空間にも蒼蠅はブンブン唸つてゐた。

『春は蠶りだ。』

私は何かしら心から微笑したくなつた。さうして蒼蠅のやうに兩方の袖を振つて飛ぶ眞似をした。

古い萱屋根の本堂の障子は開け放つてあつた。さうして其處へ西の窓から夕方の光がいつぱいに射し込んでゐた。その奥に金色の阿彌陀如來の尊像が幽かに明つて見えた。

海の畫の解說

『海上法悅』

『海上法悅』は予が著はすところの詩集『白金の獨樂』中の插畫の一つである。

此畫は木版三度刷であつて、銀光燦爛たる一大海上に群青の直線的波濤を裝飾風に描き、近景を粗に遠きを密に、一列の白帆を同じく水平線上まで辷らせ、その上に一分の空白を存せしめてゐる。之は天である。廣大無際限の天空である。此一幅の銀光の海面を、裸身の儘、彼の水平の天空を望みながら靜かに匍匐して行く人間の赤ん坊がある。それを赤く而も眞赤にふつくらと染め出さした。之が海上の風そのもので之は少くとも怪異である。幻覺上の虛妄であると云ふ人がある。

然し乍ら、神秘は實相そのものにある。人間が眞の靈覺を以て此宇宙の眞實相に徹する時、眞の神秘は光を放つて顯現する。一には官感の雋鋭極つて初めて把握し得る生の實相そのものであつて、之を鈍痴な凡眼者流には神韻縹緲たる夢幻的神秘として寫映するに外ならぬのである。神秘はかかる空中樓閣ではない、適確なる實在であるのだ。

白日の光耀無限にして、大海の光耀も亦無邊無窮無際である。光明と靜謐とに澄み亘つて、玆に一塊の赤子は生れて安らかに龜の子の如き坊主頭を上げる。兩手を動かし兩足を曲げる。飛ばず、陷らず、唯安らかに新鮮なる菅疊の面を匐ふが如く進んでゆく。

之を單に奇蹟と云ふか。有り得べからざる虛妄と爲すか。此事實を否む者は天地初發の時、如何にして人間が虛無より生じ來つたかを省みるがよい。また瓢々たる太古の神仙が如何にして海上を徒涉したかを人に訊くがよい。

予が畫は卓上の秘技ではない。予は小笠原航海の節明らかに是の如く觀取したのである。

後日、予はまた佛畫家洗鱗桐ヶ谷君に示すに此畫を以てした。彼は非常に驚喜して予もまた印度洋上赤道直下に於て是の如き深紅の肉塊を觀たと云つた。稀に見る名畫也と爲し

た。それは讃辭に過ぎる。然し乍ら控を一にした其觀照の冴えを通じて乃ち相共に顫へて驚嘆したのである。

予が觀た大海上の一小赤子は遙かに遙かに進んで、遂には一點の白金光となり、瞬時、突如として波間に消去つた。畢竟するに此我婆婆は、少くとも其海上の靜謐は永久の靜謐では無かつたのである。因あれば果がある。無は有を孕み、有は無に歸する。世の實相と云ふも遂には是空寂たる大千世界の一波瀾一轉移に過ぎない。

予が言を怪しむ者は、飜つて自己の內奥を深く諦視し省察したがよい。其處には大宇宙があり、梵天があり、大地があり、太海があり、光明があり、暗黑があり、神がある、魔が棲む。而も往々にして瞬時の光耀と靜謐とが幸に意々たる一小赤子を生み、生んだかと思ふと倏忽にして覆る。日に幾度か、かゝるものがあつて、吾曹の精靈を鮮やかにし、又うち碎く。玆に思ふ。生死は瞬時にして轉換する。而も是の如き眞の無間地獄の歡喜も苦患も一切汝の肉身の中にあるのだ。

『海空』

『海空』も亦『白金の獨樂』の中の一挿畫である。

此畫は黑及び白を以てした。極めて簡潔で素朴なものである。曾て誰だつたか此畫を見てビアズレーだと云つた。然し全く違ふ。彼には羅曼的な幻怪美と象徵がある。然し之には大自然の一實相に滲徹する魔氣的直覺と象徵とがある。東洋藝術の精髓は古來より單刀直入にあるのだ。

此畫は殆んど三つの三角形を以てしてある。一は白で、二は黑である。

玆に錐の如く尖り、內側に向つて斜に相迫つた二つの眞黑な直角三角形がある。雋鋭極まる此狀態、此精神は少くとも二山の靈異と其聳立とを現はす。而も其峽上に向下した三角狀の空白を殘す。是天である。

二山の峽間より漣波洋々たる大海の一面が見え、天には、おお、その空白には倏忽として、生れた一朶の黑雲がある。之が其畫面である。

ただ一朶の黑雲である。

光耀燦爛たる大天と大海と、麗明限りなき此空間に於て、突として出現した黑雲、ただ一朶の黑雲、未だに白い覆輪光を放つ黑雲。それを其峽間より透かし觀た予が曾ての豫覺と

恐怖とを思へ。

來た、來た、世界滅盡の凶兆は此時予が眼前に一朶の黑點となつて動き出した。

其瞬間である、予が靈肉も聾せむばかりに轟いたのは何か。

予は聽いた。大千世界の光明歡喜が此時一時にとゞろと墜落したのである。

復云ふ、此畫を徒に怪奇と觀る善男子よ、飜つて此書を汝の內奥に觀よ。日に一度、十日に十度、百日に百度、千日に千、萬日に萬、億日に億、——是の如きは必ず有り得る。有りつつある。考へると五體がガタガタと顫へないか。

「泥潟展望」

「泥潟展望」は予が未刊歌集『雀の卵』中の一挿畫である。

此畫は畫面の八分は眞黑な泥潟であつて、その潟の近景より水平線に到る、數列、數百點の白い片手を飛白の如く差出さしてある。無論、その手は數千數萬數億數千億數億兆の蟹の手のつもりである。其上空には黑と茶褐の斑の曼陀羅華の形をした三つの雨雲と、雲の下に一二の舟の帆とを走らした。而も全畫面一面にちぢれた金泥の細線を隙間なく雨ふらした。金と黑と茶褐との三度刷である。

此畫を觀る人は此無量無際限の蟹の鋏を見て少くとも怪奇として不可思議とするであらう。然し事實は遙かに眞實であり、鮮明であり、悲慘である。否、寧ろ恐怖を感ずる。

彼の廣重の群青の海の色のみ常に觀、識つてゐる人は恐らく我が筑紫潟の黃濁した海水の擾亂を想像するのさへ至難であらう。殊に眼に見る限りの海上一面陰闇として泥潟ばかりになつて了ふ引汐の跡の凄まじさは格別だ。

其時紫金色の恐ろしい光澤を反射し、擴大する泥潟は全く地獄のどん底である。而も委細に之を觀れば、その潟一面、無量無數無際限の微塵の蠢動するが有つて、宛然方途もない一大生物が動いてゐるかの如くである。その微塵たるや蟹で

あるのだ。田打蟹と云ふその蟹が一齊に白い隻手を差し出して田を打つが如くに潟を打つてゐるのだ。彼等は潟を手で打つ、聲も無く打つ、寂しい白い手を以て一齊に規律正しく見ゆる限りの泥潟の面を打つ、永久に無窮に彼等は打つ。此の殆ど無窮無限の悲しい運動は、單調極まる此の運動は、有りとある生ける者の愛着、慘苦、忍從の諸相、彼の善惡を越え、眞僞を越え、美も醜も分かぬ、言語も絶えた境界にもがいて、而も肅々切々として續け續けて行かねばならぬ。おお、この寂光土、この大千世界に生きとし生ける森羅萬象の何ものもが、必ず享けねば救はれぬ此苦患を正眼に彼等も見せて呉れる。此の曾て予が童の頃、彼の突堤の上に坐つて、わなわなと顫へて見た數千數萬億兆の田打蟹の白い隻手の運動は今憶ふだに潛然とする。而も夏、炎天酷暑の候は猶更である。潟は千割れ、縱ままに白日の光燦々と照り返つて、紫金の潟は宛然銀箔の裏面の如く眩耀し盡すのである。

雲でも出てくれればいい。ああ、彼等の切に待ち焦がれるものはただ雨である。一味の法雨である。黄金の膏雨、佛說に曰ふところの甘露、或は曼陀羅華、摩阿曼陀羅華であつた。生命の歡喜、法悅の熏染、おお、ただそれのみであつた。

「泥潟展望」おお、そこらにウジヤウジヤしてゐるのは微塵の田打蟹ばかりではない。

大慈よ、大悲よ。今の此澆末の世に出でて、一人でもいい、誰かこの心を以て眞に己れの心とする人はないか。

「胡蝶の海渡り」

「胡蝶の海渡り」は予が畫では無い。予が畫は「群蝶の舞」と云ふのである。此等の二つの畫は一は彩色の木版、一は黑及び白の鉛版であるが、而も相通じた眞實の生物の寂しさとが非常に近似してゐる。之を以て予が此の解說を敢てする所以である。

「胡蝶の海渡り」は予が童の時に見た畫である。誰人の作かも何時の時代のものとも予は知らぬ。ただ今にも忘れられぬ色が確かに江戸繪風のものであつた事と、貧しい山家の爐邊の煤ぼけた壁に同じく煤ぼけて張られてあつた事だけわかつてゐる。枯松葉や柴のにほひに噎せながら、俯ひあがりながら紅葉のやうな十本の指さきで、その蝶々を押へたり數へたりした頑是なかつた昔を憶ふと懷かしい。

其畫は澎湃たる大海の波濤の上を、ただ同じやうに靑く靑く連續した波濤の上を、幾百幾千とも數知れぬ胡蝶の群れがへんぽんとして羽ばたき羽ばたき渡つてゆく彩色畫であつた。胡蝶の翅の豐麗な赤・黑・紫・翡翠・而も雪のやうに白いものや、月見草の花のやうに黄色く輕い纖弱な翅も入り交つて亂舞しながら飛んで行くのである。それも煙にくすぶつて、折々赤いゐろりの火光が反射した。童の時はたゞ美くしい畫だとばかり眺めてゐたが、長ずるにつれて、何といふ寂しいたよりない畫だつたらうと思ひ出さぬ事はなかつた。今は愈々其畫を憶ふと人間の世の中までが寂寥で堪へられぬ。果敢なく味氣なくなるのである。

さて、一昨年の晩夏の、とある日の、日はやや西に廻つた午後の五時頃であつたが、江戸川の堤に出でて何氣なく上空を仰いでゐると、遙かの上を白い白い胡蝶が一と番ひ、恐ろしい夕立雲の下を舞ひ狂つてゐるのが目についた。雲は暗く、重く、而も深い暑熱と白光とを奥に包んで彌が上に、壞れむとする重い氣流を壓しつけてゐた。その隙間々々の汗ばんだ碧空を縫つては飛ぶかとすれば重なつて狂ひ、狂ふかと見れば急角度を爲して離れ、痴戲し飛翔してゐる二羽の胡蝶の現なさ、一羽だつたら、此の幻怪な異變の前にかくまでの大膽さで遊び恍ける勇氣は有り得ようとは思はれぬが、二羽なればこそとつくづくと涙ぐまれた事がある。

果して、盆を覆すが如き豪風が襲來した。電光がひらめき雷霆がとどろき、空も丘も河土も銀白の雨霧に被はれて了つた。無論、二羽の胡蝶などどうなつたか知るよしもなかつた。

又、其後一じ晩夏の空に、その大河の暗く輝く漣波の上から、雪の如く羽ばたき舞ひのぼる群蝶の數十を見た事がある。彼等は登るにつれていつとなく空中に集まり集まり、高くな

るに從つて、紫白の紫陽花の毬花の如く、お手まりの花の如く圓い一團の球になつた。遂には其の球が翅たたく雪の眞つ白さに變じて小さくなつて行つた。その行く手には而も、早くも蕭々たる秋の細雨が銀色の雨あしを見せてゐるのである。

夏も了るのに、この定めない空の日和に而も無邊際の蒼穹の中を、何處まで彼等は行かうとするのか。予は思はず襟をかき合せて潛然とした。

さるにしても、蝶も一羽ではゐられぬのである。人間も一人は寂しい。眞實に寂しい。世の中はどう考へても持ちつ持たれつである。人も高く俗を離れ、なまじひに卑怯か大悟か何れにせよ逃避し閑居して見たところで、うき世の暴風は何處までも追つかけて來る。靈の寂しさは測々として己れを覆へさむとする。矢つ張り人を離れて生きる事は不可能だ。やつぱり持ちつ持たれつである。それほど吾等は孱弱なのだ。胡蝶ばかりが果敢ないのではない。

予が畫いたのは、此の群蝶の球團である。全部黑い畫面に下に白い單調な漣波をいくつも並べ、高いところに雪のやうな鞠狀の群蝶を白く拔いた。而してその中間の遠見には針のやうなあはれな針線を十二三本走らした。君はそれを何だと訊ねるのか。

無論、蕭々として近づく秋の小雨ではないか。

「雀の生活」抄

小序

雀を觀る。それは此の「我」自身を觀るのである。雀を識る。それは此の「我」自身を識る事である。雀は「我」、「我」は雀、畢竟するに皆一つに外ならぬのだ。

かう思ふと、掌が合はさります、私は。

一箇の此の「我」が、此の悉い大宇宙の一微塵子であると等しく、一箇の雀も矢張りそれに違ひは無い筈です。靈的にも、肉的にも。一箇の雀に此の洪大な大自然の眞理と神祕とが包藏されてゐる、としたならば、無論、其の莊嚴された雀はそれ一箇が、既に立派に此の大自然の生命、若くばその生活力の顯現と見て差支へない筈です。立派な象徵だとも云へます。

雀を、私は觀てゐました。絕えず觀てゐました。觀て、さうして識りました。いやまだ、觀つつ識りつつあるのです。識りつつ一々に驚き、一々に愛し憎しんでゐる此の私は、彼の雀の中に此の私を觀、此の私の中に彼の雀を觀て、今は全く、恐れ入らずにはゐられなくなりました。

あまりにまざまざとしてゐます。

此の事實は主として、此の三四年の經驗から敎はりました。それを書いて見ます。これを讀んでくださる方も、恐らく私と同じ驚きを感じてくださるに違ひない。可なり痛切に。

これが雀の生活です。これが茶色のあの小坊主どもの生活です。

雀と人間との愛

一

雀を私は觀てゐます。常に觀てゐます。觀てゐると云ふよりは常に雀と一緒になつて、私も飛んだり啼いたりしてゐます。雀は全くかはいゝ。彼は全く素朴で、誠實です。極めて神經が細かで、悧巧で、時々慌てゝ、初心で、單純で、それはあどけないものです。

鳥類の中の雀を、大概の人は、地上の石ころ同樣に思つてゐます。(それはあまりに多くゐるからです、あまりに珍らしくもないからです。)人間がさう觀て平氣なのは、人間そのものの愛が足りないか、或は、その人間としての實在が、容易に雀の心と合致できないか、そのどちらかだと思ひます。

雀、雀はかはいゝ小鳥です。彼を輕蔑する人間が果して彼より誠實で、彼より無垢で有り得るかどうか。雀を識るには雀と一緒になる事です。さうして雀になつて了はなければなりません。愛が先づ結びつけるのです。私は雀と話をしたアッシジのフランシスを尊みます。彼の聖が雀を集めて教を說いた時、その聖は最もやさしい解りやすい言葉、鳥類の雀にでも解るやうなやさしい言葉を選んだに違ひありません。さうして深玄な大自然の心を最も的確に、而も最も單純に表現し得た事と思はれます。それが偉いと思ひます。恐らく彼がものを云ふ時には、彼の頭から後光が射したでせう、幽かな後光が。さうしてその周りに圓い環を成した雀の頭も、一齊に幽かなイルミネエションを點じたでせう。掌を合はせたくなります。

聖者フランシスでなくとも、雀を觀てゐると、私でもかはゆくなつて、何とか物いひかけずにはゐられません。私がある時、露の深い草原に坐つてゐた事がありました。夜の明方でした。つい傍の圓い石の上に古い革表紙の聖書を載せて置きました。すると、小さい子雀が來ました。おづおづと頭を動かしては近寄り近寄り、その古い聖書の金文字を差覗いて珍らしさうに小首を傾けてゐた、その姿の可哀さつたらありませんでした。

雀は小さい。殊に雀の子の小さな事は、掌を開いても五つ位は留められさうです、この五本の指に。

釋尊の莊嚴極まる涅槃に、取るものも取りあへず參りあはせて、頭をすりつけて泣いたあの素朴な雀も、恐らくさうした小さな雀だつたでせう。溫かな人間の太い掌や、黃金いろの髮毛の中や、肩や、粗末な黑の長服の裾に取りついて、無邪氣に遊んだり、信心深く聽聞した以太利亞の雀も恐らくさうした小さな雀だつたでせう。

その小さな雀と人間との愛は、それは深いものです、殊に私との親しさは。

雀となり雀と遊んでゐると、全く私は天眞の私に還ります。さうしてこの人間の私までが、頭がしぜんと圓くなり、小さな嘴ができ、翼が生え、尻毛がピヤンと後について、何時でも羽根たゝきして飛んでゆけさうな氣が致します。あの青い空の向うへ。大きな雀と笑つてはいけません。

私は雀を思ふと、その雀の卵のいつぱいにつまつた天上界の雀が戀しい、光り輝くばかりのその巢が。

人間が波羅葦僧有の戀しいと同じく、雀も亦その青い圓天井が戀しい筈です。だから雀も悲しいのです。

無論雀は昇天します。大きな雀の私さへ救はれゝば。だがだが私はまだ救はれません。

アッシジの雀が金色ならば、日本の雀はまだ茶色です。

フランシスは聖者、私はまだ一介の凡夫です。

二

雀を思ふと、いたいけな子供の姿が目につきます。

小さな一茶と小さな雀と、涙を流しあつて遊んだ心もちを考へると、あの大空の圓天井までがその上に小さくかはゆく懸つて見えます。それは硝子のやうに透明な穹窿です。稚い靈の流す涙は眞珠です、まだ罪に穢れぬ神の世界の悲しみです。

雀の子そこのけそこのけお馬が通る。慌てゝ飛びのく雀の子も小さな小坊主ですが、お馬も小さなお馬でせう、眞つ白な蠟細工の。

雀と子供はつきものです。大人も子供の心に還ると雀が戀しくなります。

ある冬の日の暮でした。私と母とはある寺の大きな山門をくゞつてゐました。雀の聲がしてゐたのです。母は破れた風呂敷に青い葱を包んで、それを寒むさうに兩手で擁へてゐました。ふと道で行き遇つて、何氣なく親子はお寺參りをしたのでした、雀の聲にひかされて。母は頭を下げました。私も下げました。母は葱を擁へたなりで、二つのその掌を合せました。私も掌を合せました。母はなむまみと唱へました。なむまみと私も母のうしろで唱へました、子供のやうに。母が佛樣を拜みますゆゑ私も拜みました。

靜かな心になつて親子が歩み返すと、お庭の細い枯木には雀が三匹留つてゐました『お庭の裏のちさの木に、ちさの木に雀が三匹留まつた、留まつた。』さうした子供時代の小唄の手拍子が思ひ出されて、私が子供のやうに母を見返ると、母も亦嬉しさうに微笑んでゐました。母もきつと私の子供の頃の事を思ひ出したのでせう。

雀と子供は附物です。

＊＊＊

子供はよく雀をいぢめます。私も子供の頃はよく雀をいぢめたものでした。

ある時、私は小さな雀を掌の中に握つて、ある寂しい山の中を歩いてゐました。母の里に母と行つてゐた時の事でした。掌に握つてゐると雀は溫かい、それがちゆつちゆつともがいて、今にも掌の隙間から飛び出さうとするのでした。私は必死に握り締めてゐました。夕方でした。私は夢中になつて何時となく路に迷つて了ひました。山と山との間には紅い雲が棚曳いて、高い空では寒々と夕燒けして來ました。雁が棹になつて啼いて行きました。いくら行つても行つても母のお城（母の家はお城のやうでした、白い天主閣があつて。）は見つかりません。しんしんと寂しさがつのります。私はもうたまらなくなつて、涙をぽろぽろ滾しながら泣き出したのです。でも雀はもう啼きませんでした。可哀相に締め殺されてゐたのです。

可哀いゝから憎むのです。農家の濠たらし共がよく、新らしい唐黍の花や紅い鳳仙花の蔭で遊んでゐる雀を、粉糠まじりの青い箕や箒で押へたり、逃げ廻つてばたばたするのを嬉しがつたりしてゐます。だが決してたゞの憎しみではない筈です。

十分によく睡つて自然と目が覺めて來る朝の淸々しさはありません。薄紅い蓮の花でもポツと開くやうな、それはいゝ感じがします。まだ幼い子供の朝の目覺めは格別です。子供は誰よりも一番に早く眼を開けてゐます。さうして戸の外で雀の聲がちゆつちゆつとでもしようものなら、それこそ凝としてゐられません。すぐに手足をバタバタさします。その時その子の頭の中では既に朗らかに晴れ亘つた圓い靑天井が描かれてゐるに違ひないのです。

＊＊＊

罪のふかい大人になつても、目の覺め際のあの雀の聲には、全く玉のやうな幼な心に還ります。

まだ私が麻布に居ました頃、それは初めて妻といふものから別れて、長い秋や寒い一冬を淋しい元の一人で過ごして來たその後に、ある朝でした。ふと目を覺ますと、夜は全く明けはなれてゐて、二階の硝子戸からは水々しい靑い空の雲窰が見えてゐました、その靑い空の下には涼しげに木木の戰いでゐるのも見えます、と、雀の聲がつい傍の土藏の廂から聞えて來ました。かはいゝ雀の聲がです。それは穩かな春の曙でした。見馴れた空、見馴れた雀の聲とは云へ、何といふ親み深い景色でしたらう。私はよくこそ目が覺めたと思ひました。よくこそ生さてゐた、かういふ平和な人間の世界によく

こそ今日も死なずにまた蘇つて來てくれたと、心から感謝しました。目を開いてゐるといい香がします。それは紅い一顆の林檎の香でした。枕元の白いシーツの上に乘つかつてゐたのでした。氣がついて片手を伸べると、その圓い林檎が私の掌の上に轉がつて來ました。冷たいつやつやとした手觸りでした。たまらなくなつて私はそれを嚙りました。薄團の中からです、まるで子供のやうに齒を當てました。さくさくとしたその新鮮さ。そのうちに次第に目を覺まして來る都の朝のとゞろきが聞こえて來ました。人聲もしました。寢てゐる階下では聞き馴れた父の咳や、何か云つてる母の話聲なども聞えて來ました。これを聞いて私はやつぱり此處は私の家だと思ひました。さうしてつくづくと目が覺めてよかつたと思ひました。何といふ仕合せの事か。

かうして春が深くなりますと、ともすると私は寢過ごす朝が多くなりました。さうした時にはきつと床の上の一輪挿しには、母か妹の手かで折々のすゞしい花が挿してあり、大きな靑銅の火鉢には炭火が赤く熾り、鐵瓶はシンシと鳴つて、もう白い湯氣を溫かに噴き立てゝゐます。天鵞絨のくゝり枕のそばにはまた、きつとその日の新聞紙がキチンと折り疊んだ儘載せられてないことはありません。そのぷん〳〵した爽かな匂。私が寢ながらそれを攫げてゐる頃には、お隣りの雀達はとくに朝餌を濟まして、そろつて土藏の廂に出てゐました。さうして圓い茶色の頭を振り動かしては私の方を差覗くのです。ずゐぶん寢坊さん、ちゆつちゆつ。」「もう起きなさいな、お午ですよ、ちゆつちゆつ。」それは嬉しさうな揶揄聲なのです。私は少々面を赤くしながら、それでもまだ爽やかな新聞紙のにほひを貪り食らつてゐます。新しい世間の出來事や、文藝の消息や、親しい友達の動靜や、それらを思ふさま貪り食らつてゐる時の私は全く安らかな玉のやうないい子供でした。何といふ親しい事です。それから私は、自分の双の掌を攫げて、昨夜つけた生墨の跡などをしみじみと眺めたり、指の間を檢べたりするのでした。さういふ時ほどまた我と我が身のいとしさといふものを身に染みて感ずる事もありますまい。

三

女戒を犯して、しみじみと目の覺めた時、雀の虔ましく啼き交はしてゐる聲を、聽いてる苦しさといふものはありません。かうした時、心からの懺悔の機緣が雀の聲から開かれます。

雪のちらちらとふりしきる朝などは猶更でした。外へ出ると寺の赤い山門の雪の廂の上なぞで、雀が子供のやうに燥いだり轉げ廻つたりしてゐました、その無我な雀の姿を見ると私はつくづくと身の淺間しさが耻かしくなりました。私は花

屋へ寄つて白い水仙の花でも妹の爲に買つて歸らないと、よう私の家の格子が開けられませんでした。

四

雀は貧者の寶です。いい慰めです。

麻布にゐました頃は隨分と私達は慘めでした。それでも私は人から貰つた碧山上人の竹に雀の破れ軸を何よりの慰めとしてゐました。それは墨畫の一羽の雀が、竹の笹葉に遊んでゐる、それだけの簡素なものでした。それを掛けて眺めてゐると、いかにも雀が遊んでゐるやうな喜びと小踊りとが生き返つて來ました。私は朝も晩も、ぽつねんと坐つては、その雀ばかりと親しんでゐました。時たまに父も母も、その軸の前に坐つて、しげ〳〵と眺め入つてゐた事もありましたが、それは大方生活向の悔み話も盡きはてた時の仕方のないありのすさびの諦めでした。私も貧しい親達のうしろから、しげ〳〵と眺め入つては、親達と亦同じやうに、聲一つ立てませんでした。軸をはづしたところで、壁には大きな孔が開いてゐたのです。涙も出はしません。

その冬の貧しさは言葉に盡せません。私達親子は眼を見合せて、たゞ心と心ばかり縋り合つてゐました。朝の御飯をいたゞく時も、箸は動かし乍ら誰も默つてよう話せません。父はむつゝりと怒つたやうにしてゐます。母はいつまでも手をつけません。さうしては、あと云ふ深い溜息をします。さう云ふ時位、私は、肉親の母の心に深く喰ひ入つてゆく自分の心に、自分と驚いた事はありません。全く私は脊骨がピシ〳〵折られてゆく思がしました。貧故のひがみや、皮肉や、いがみ合ひや、さうした間はまだいゝのです。皆が默つて了ふともうおしまひです。でも雀が、廂から不意と轉げ落ちたりすると、第一番に私が目つけます。あれ御覽なさいましと笑つて見せると、父も母も弟妹達も思はず噴き出して了つたものです。雀のお蔭です。

さうした時は思ひきり子供げて親達に甘えました。弟の箸と私のと較べて見て大きければ嬉しがつたり、三つ子のやうにボロボロ飯粒をこぼしたり、茶碗を引つくら返したり、わざとするわけでもないのですが、生みの母親の傍に坐つて食べてゐるとさうなるのです。それをまた母が何といふ赤坊さんだねえお前はなぞと笑ひ乍ら一粒々々拾つて自分の口に入れたり、膝を拭いて呉れたりしますと嬉しくてなりませんでした。親の雀も廂に並んではさうしてゐました。人間も雀もおんなじ事です。

雪のふる夜中などにふと目を覺まして、薄い蒲團にくるまつてゐる自分の裸身が可哀相でかはゆくてたまらなくなると、親は子を、子は親の身を思はないわけはありません。たとひ我が足の指先だけが擦れ合つてもたまらないのです。冷たいです。石の上に枕せられた親鸞上人の事なども思ひ出されます。雪はさらさらと音を立てます。物の葉つぱに降り積る雪の音もします。あれは何の木だらう、冬青の木かしらなぞと思つてゐると、私はまた自分の家の雀の事がよく氣になりました。さうしてその雀の聲の待ち遠しさと云ふものもありません。夜が明けると、一くほど威勢のいい聲で寒の雀が啼き立てます。ホッとして飛び起きると、母がもう路次にしやがんで竈に火を焚きつけてゐます。貧家の事ゆゑ紙の反古で燃しつけてゐるのです。その煙の黄臭さい空にも雀がバタバタ羽ばたいて呉れます。隣の石臼にも雪がいつぱいに積つて、盛り上つた雪の中から斜めに出てゐる杵の柄の上にも眞白です。さうした朝も雀は地面の厚い雪の上に小さな小さな蹠をつけてちゆつちゆと寄つて來ました。かはいゝ雀が。

**

私が今の妻と葛飾へ移つて、新鮮な田園の肥料のにほひに羽ばたく雀の聲を聞くたびに、思ひ出されるのは、あの麻布の黄臭い紙火の煙に咽んで啼いた雀の聲でした。親達の貧しい生活の有樣でした。

だが、葛飾の私達の生活も決して貧しくないとは云へませんでした、いや、ずつと貧しかつたかも知れません。

米櫃に米の幽かに音するは白玉のごと果敢なかりけり。

かういふ歌がどうしようもなく寂しい泣き笑ひの底からできて來ます頃には、時候も日に日に晩秋の物の哀れとなつて來ました。私は貧しくとも堪へてゐました。私の妻も沁々と堪へてゐました。然し私達の小犬は聞き分けがありません。いつも自分のお皿はすべすべと嘗め盡して了ひました。一色に枯れはてた庭にその犬の皿だけが眞白に光つてゐる寂しさと云ふものはありません。古池の傍の枯れ枯れの柳の向うには矢つ張り眞つ白な不二の山が見え、水田には寒々と薄い氷の張る冬の日も次第に近づいて來ますと、饑ゑきつた小犬は雀の啼き聲にでも脅かされて、不意に、風に靡く枯木の柳を見ては吠え立てたり、追つかけたりしました。

雀もです。時折には雀までがしよぼんと臺所の米櫃の上に留つてゐました、長い事です。然し、それが何の張り合ひになりませう。悲しいかな、その米櫃の中にも、雀の欲しがる何一つ、今はもう入つてはゐなかつたのです。白い霰の玉のやうな殘り米を白い茶碗の底でこすつて、まだ幾粒かを妻がすくつてゐる頃はいいのです。全く無くなつて了つてゐた時はたまりません、私は雀が可哀相でなりませんでした。私は妻が可哀相でなりませんでした。私は私自身が笑止でなりませんでした。

然し、仕合せにも、温かな、ほかほかと湯氣の立つ御飯をいただける事もありました。籾殻くさい田舎の玄い米でも、あのふつくらとした温かさは何とも云へません。雀にも投げてやると雀も寄つて來ました。妻と食べ食べ眺めてゐると、雀も食べ食べ小さな頭を振り立てます。その幾つにも動いてゐる、雀の頭が可哀ゆかつた。

いよいよ寒さに向つて、ひとり、破れ障子の切り張などを何くれとなくやつてゐると、時折ぽうぽうと飛び立つ雀の羽音がしました。その羽音の寂しさと云へば何とも云へませんが、貧しい自分の寂しさに引き較べるとまた、何といふ事もなく微笑まれました。雀は貧しい時の慰めです。

また幾らか物温かなEなぞには、雀が一二羽はきつと來て、臺所の亜鉛張りの屋根の上で、トトトン、トントン、トトトンと輕い足蹈をしたり、又は引窓から差覗いたりしました。貧しいと云つても人間の住居です。下では妻が壞れた七輪に赤い炭火を煽いだり、新鮮な葱のぬたを糯古木で糯り出したり、ほそぼそ乍らでも飯焚く煙が欞子窓から煙つて來ると、頭の上では雀もいよいよ浮かれ出して來ます。その小さな雀の足蹈の音を凝と團扇の手をとめて聽き惚れてゐる妻の後ろ姿も嬉しいものでした。さうして妻の方でも嬉しいと見えて「おホホホ、まるでフェアリーテェルズの侏儒でもダンスしてゐるやうですわね。」と振り向いては何時も私に云ひ云ひしました。全く、輕く氣取つた足音でした。「厨の屋根の雀のダンス。」これだけでも、人間と雀の生活がどんなに親しいものかがわかります。

＊＊＊

雀は素朴で眞實です。その聲も頼みになります。率直です。貧しい人間の親友です。

私達はよく温かな上手の日溜りなぞで、野菊や苅萱の中に埋れて、ぬくぬくと頭の虱を取りつこしたり、握り飯の凝えたかけらを嚙り合つてる乞食の姉妹なぞを見かけます。さうして一二羽の雀もその食べあまりの飯粒どを頂いたり、時にはちよつちよと盗んだりして遊び合つてゐるのを見かけるものです。何といふ親しさです。

それほどでなくとも、貧しい長屋の路次の厠の屋根などに、天氣のいい日には、尻きれ草履や紅い鼻緒のついた子供の下駄などが干してある、その上に、雀が遊んでゐる小さな景色もよく見かけます。殊に貧すれば人情も荒んで、子は親を足蹴にしたり、親は子を叩いたり、赤い灸を据ゑたり、その淺間しさはありません。さうした軒端にも、窓の前の一二

本の竹の小枝には必ず雀が留つてゐて、かはいい聲でちゆつちゆとなだめてくれてゐます。雀もさうした賤卑な事は悲しいでせう。雀の聲が頼みです。

五

雀はまた寂じい人間の慰めです。人間も寂しいが雀も寂しい。人間も雀も眞實寂しいとなつたら、それはもう譬へやうがなくなります。

葛飾の秋も闌けての事。自然の風物が愈々寂しくなるにつれて、私も愈々寂しい人になりました。障子だけは時々開け放して置きましたものの、私はただ靈ばかりででも坐つてゐるかのやうに寂しい一日中を何一つ聲一つ立てなくなりました。ぽつねんとして、行ひ澄ましてゐるその頃の私の寂しさは、もう堪へられるだけは堪へた上の事で、ともすると泣きたくなる心持をやつとやつとどうにか抑へつけてゐたばかりでした。床の間には「玉のごと生れたまひて」と云ふ越後の良寛禪師を歌つた私の歌の軸（それは曼陀羅村のある百姓の爺さんにトマトの禮に書いてやつたのを、その後素朴な表裝をして見せに來た序に、お前が書いたんだからお前からちよつくら見てたらよかんべえと云つて掛けて行つて呉れたのを、其儘にして置いたものなのです。）を一つ掛け流して、その前に、小笠原の椰子の殼に白い茶の花を毎朝一輪づつ挿してあるばかりでした。紫檀の机の前に坐つて、折ふしはこれも椰子の殼の刻み煙草に手は觸れましたがその細かな粉を爪さぐる指の幽かな事、それにも、近づいて來る冬の冷たさが沁みついて、その侘びしさはありません。訪ねて來る人も減多になし、雀の歌ばかり考へてゐましたが、ある時ふと廂の方を觀てゐると、その廂から小さな雀の頭が逆さになつて、その圓い頭だけが一寸私の方を覗きました。おやと思ふと直ぐに引つ込めました。が、私一人其處に坐つてゐる事はわかつてゐても、家の内が閒寂（ひつそり）としてでもして了ふと、直ぐにその雀の逆さ頭が覗くのです。私もさうされる度毎につい涙が滾れ出さうになりました。ある時なぞは、何かの拍子に私がごほごほと咳き入つてゐると、またその雀の頭が出ました、二つの足で廂の緣を必死につかまへ乍ら、逆樣にその頭だけ。私も寂しかつたがあの雀もどんなに寂しかつたか、寂しい同志がさうして毎日寂しい目付をし合つてゐる、その心細さと云ふものはありませんでした。とは云へ、お互にそれが寂しい中のたつた一つの慰めだつたのです。

だが、ともするとその雀が廂からころりと轉げ落ちて、慌てて縋りつく事もありました、その可笑しかつた事。

又、或時などは、私が居なくなると、部屋の中へまで迷ひこんで飛び廻つたり、破れ障子に突き當つたりしてゐた雀も

ありました。

冬になると、庭の景色も一入にすがれ果てて了つて、垣の壞れの落ちかけた古池の面にも氷が張り、時雨が折をり寒い水田の果てから粉雪まじりに渡つて來る心細さも日に日に深くなるばかりでした。雀は寂しい、さうした寒い日にも枯れ枯れの百日紅に來て羽裏を搔いたり、縮こまつてゐたり、一羽は一羽と擦り寄つたり、破れ垣の上にぽつんと小さく留つたり、寒むさうに飛び立つたり、下りたりしてゐました。

たまたま、靑く晴れて溫かな午過はあつても、すぐ夕方になると、力のない弱い日射になつて了ふのでした。その黃色い光の中で、雀が枯芝に羽ばたいたり、破れ垣越しに見える向うの水田の畔や、野良の小川の縋め過ぎた川蓼の蔭やなどを歩いてゐたりしました。暇つづきの枯木の木立にちらばつてゐる姿も目につきました。寂しいと云つても今更らしい。ぽつんと眺めてゐるとなかなかでした。さういふ時、私はもうその寂しさに何一つ抗ひたいと云ふ氣持も失せて了つて、ただおとなしく、庭の落葉でも掃くより外には所在がありませんでした、ただ雀の聲ばかりを賴りにして。

それでも、古池に枯れて枝垂れた柳の向うには、立てかけた破れ葭簀を透いて、黃色い日射の名殘が消えるか消えないかになりかけると、また寒い冬の時雨がお極りのやうに、はらはらとそそいで來るのでした。

「寂しさに堪へたる人のまたもあれな。」と求めた西行法師も眞實は寂しくてたまらなかつた人でした。私もその寂しさに堪へてゐようと思ひました。さうして妻にも堪へてゐるやう貧しさにも忍べるだけ忍んでゐようではないかと云ひ云ひしました。それは辛かつたが堪へ忍んでゐました、二人ともその冬だけは。

さうした時には、妻と差向ひで、ゐろりの火に手をかざしてはゐましたところで、今更二人ともが何にも云ふ事のありやうはありませんでした。それだけ寂しさも互の親さも深かつたのです。私達はただ茶を啜つたり、眼を見合はしたり、日が暮れると紅い洋燈でも、點したりするばかりでした。それに小犬の哥路までがまるで人間のやうに私達の間に寢そべつたまま、その前足を折り曲げて火にあたつたり、私達の顏をショボショボと見上げたりしてゐました、古い破れ障子の向うではぽうぽうと雀の羽音がしました。その羽音がまた寂しい中のたつた一つの慰めでした。

＊＊

私達はまだしもですが、所謂世捨人の寂しい境涯にゐて、庭に竹を二三本植ゑたり、空洞のできた枯れ岩の寂びに思を遣り、かさこそと匐つてゆく蝸牛のやうな小蟹の足の音に耳

を傾ぶけたり、或は破れ芭蕉にふる雨のしづくを眺めたり、朝には窓の戸を押し上げて竹の棒を突つかひ、夕方にはばづして閉める閑寂三昧の趣も、流石に雀を忘れて唯獨り樂しめるものではありません。時雨がふればカンカンと鉦をたゝく庵はあつても、雨があがれば寒竹の細い小枝に來て急に忙しさうに羽づくろひをしに來る雀もゐます。短かい冬の日あしの中にも一羽か二羽は必ず來て留ります。夜が明けて雪が眞つ白に笹の葉に積つてゐても、その笹に縋りついて羽根ばたきする雀はゐます。

南畫の大雅堂あたりの趣もかうした中にいいのがあります。窓から寂しさうな面持の人が顏を出してゐるとします。前には簡素な竹が五六本、川向うの孟宗藪も時雨の過ぎたか墨畫の山の下に皆靡いてゐます。その藪にも窓が見えて、矢張り寂しさうな顏が空を眺めてゐます。間の小川の水の流も淙々と寒竹の蔭を行く時には、自然と聲を立てるが、人の渡らぬ丸木橋には雀が時たま渡つて行つたり、竝んで日向ぼつこをしたりしてゐるといふ風です。

寂しいが雀は溫かです。澁いけれども生きてゐます。

六

簡素な雀の生活に親しんでゐると、しぜんと人間の心も虔ましくなります。眞純になります、そして穩和しく、素直になつて了ひます。

私の葛飾の生活は、もとより簡素を旨としましたので、猶更雀によく似たその日その日を見送りましたが、誰でも本當に雀の聲に聽き入つた時には、その時だけでも俗念を離れて淸々となります。さういふ尊い瞬間は無論誰人にでも必要なのです。

雀は飾りません。その聲も冷たいほど率直です。

深い謙虛な心で聽いてゐると、その雀の聲がまた深く遜つて響きます。頭の下るやうな畏こさから人がゐずまひを正した時には、雀も木の上から頭を下げ、雀が涙ぐましくささ啼きをする時には、人も亦涙ぐましい素直な心に還ります。一つには人間の心次第ですが、雀の聲がまた如何にも透明で引締まつてゐるからです。

麗らかな日に、あの安心しきつたやうな鴉の聲を聞くと、如何にも天空海濶と云ふ氣持になるものですが、大寒に入つて虔ましい雀のあのささ啼きに對する時には、沁々と自分の命と云ふものがいとほしくなります。さうして無常な此の人生と云ふものがつくづくと勿體なくなります。いつまでも常住美しくあるやうに、何事も掌を合せて祈つてゐたいやうな

穏和しい忍従な心になります。さういふ時は雪もちらちら降つてゐませう。庭の笹葉にも積つてゐませう。手水鉢の薄い氷の面にも蔭の葉蘭にも雪はさらさらと消えて行きませう。厠にゐても、雀の聲さへ耳につけば寂しい中にも澄み入ります。

殊に風邪でも引いた時、薄い玻璃製のアルコールランプに冷たい緑いろの灯を點して、細かに嘖き立つる吸入器の白い湯氣に凝と咽喉を開けて、雀のささ啼きを聽いてゐると、雀も風邪聲になつて、凝と枯木の枝から眺めてゐます。可哀相だと此方で思へば、雀も可哀相だと見てくれます。人間も雀も、かうした相憐の中に眼を見合せて、心と心とで啼き合ふのです。

假初の病でもさうなのです。人が重い病に罹つた時、身體の髓まで弱つた時、雀の聲は懺悔と勇氣を降りかけます。何よりの力づけです。憔悴と倦怠と、それに代ふるに雀は一味の「新生」を白い雪片のやうにその窓枠の上に啣えて來ます。さういふ時、靈までも腐りかけたその病人の枕下にはすがしい夜明の微光が射しかけます。

人間の七情、殊に憤怒や憎悪や邪見や、それらも雀は拂つてくれます、穏めてくれます、落ちついた愛と涙とに取り換へてくれます。

私が先の妻と別れた時、私は憤怒と侮蔑とに燃え上りました。恐ろしい殘忍と 愛着と、未練と、憎悪とが心中に嚙み合ひ鬩ぎ合つてガタガタ慄へました。酒乎々々と白いパラソルを開いた妻の面を見ると、思ひきり張り倒してやりたかつたが、母の眼を忍んで悄々と振り返つた時には流石に擁き締めてもやりたくなりました。だが、私の憤怒はそれ位で收まるものではなかつたのです。私は素知らぬ顔をして、二階からただ庭の小松の梢ばかり凝視めてゐました。小松の針のやうな細い葉の間にはまだ青い松笠が二つ重なつてゐました。青い松笠でも重なり合はねば寂しいものです。しみじみと觀てゐると、その松笠が二つとも幽かに顫へてゐるのです。よく觀ると、雀がゐました、雀が下から揺つてゐたのです。ちゆちゆつ、ちゆちゆつ。私は初めて私の眼の底が痛くなりました。澄んで來ました。私の心機が。それから私は、青い空の圓い天井をながめました。私の頭がしぜんと下つて了ひました。

七

雀は老後の慰めです。

私の父と母とは殊に寂しい。麻布にゐた頃、夢のふる朝な

どはまだ夜の明けぬ中から目を覺まして何かとひそひそと話してゐました。私も目を覺まして階下の話聲に耳を傾ぶけては、老年の父母の爲に一刻も早く夜の明けるやうにと祈つてゐました。待たれたのは雀の聲でした。恐らく父も母もさうだつたに違ひありません。やがてすると、聞き馴れた自分の家の雀が思ひきつて一番聲を立てると、近所でもつぎつぎに騒がしくなつて、ちゆちゆ、ちゆちゆ、ちゆちゆつちゆつです。

毎朝、父は神棚の前に坐つて、先づ手をうつと、朗らかな、高天原迄も響きわたるやうな聲で中臣の大祓をあげるのが常の例になつてゐましたが、そのつやつやと禿げあがつた後頭を見て、その祝詞を聽いてゐると、流石に齡のせいか一年一年に聲が弱つてゆくやうでした。父は宣り了へてから縁端へ向き直つて、にじり出ると、今朝の寒さはなどと袖をあはせてゐました。狹い庭の板塀の上などに雪が積つたり、霜が眞白に降つてゐたり、朝毎に冬は寒さが募るばかりでしたが、雀はいつも其處いらで啼いたり飛んだりしてゐました。雀の聲がせめてもの頼りです。それから皆揃つて茶の間で番茶を焙じたり、熱いお粥を啜つたりしました。子ども達が出拂つて了ふと、後は親達二人つきりになります。古い長火鉢を中に向ひあつて、何の話も無く一日中坐つてゐた寂しい親達には、麻のかげから出たり這入つたりする雀の圓い頭ばかりが慰めでした。障子を閉めても、枯木にちやべちやべ喋舌くつてゐる二三羽の雀の姿が映つたり、動いたり、驚いたやうに飛び立つたりしました。

温かい午後などには、縁側へ日向ぼつこしてゐる父の後から、母が白い布を捲いてあげて、馬の毛を刈る大きなバリカンを兩手に持つと、ヂヨキリヂヨキリと刈り込みます、父の後頭はまだチョツピリと胡麻鹽の白髪が殘つてゐるのでした。何といふ悲しい事か。母が泣き笑ひし乍ら刈込んで了ふと、今度は父の頭を自分の膝こぶしの間に引き寄せて凭せかけるのでした。すると、父も寂しさうに目を瞑つて仰向きます。それを上から前屈みになつて、母が研ぎすました剃刀ですうすうと、父の咽喉佛に當てゝゆきます、痩せ萎びた片手を父の下顎に掛けたなりです。力のない呼吸と呼吸とが縺れて來ます。父も安心しきつて、咽喉佛を辷つてゆくその剃刀の、冷めたい、それでもすべすべした感觸に何もかも任せて了つていゝ氣持になると、うつうつと眠りかけて來ます、齒の缺けて了つた締りのない口を大きく開けて。何といふ信じあつた寂しい心持か。さういふ時にも、雀は庭の葉蘭の傍や、板塀の上の物干し棹などに轉げたり 羽ばたいたりして

みたものでした。

定めのない冬の空は、日が射したかと思ふと、急に風が出たり、寒い時雨が渡つて來たりします。夕方なぞは粉雪まじりの霙雨がいつのまにか眞白な霰となつて、都の屋根續きを一齊に音立てゝ來ます。その時の雀の騒ぎ方と云つたらありません。まるで子供です。降り亂れて轉げ廻る霰を米粒か白い寶玉のやうにでも思ふのでせうか、一しきり地面へ群がり下りて、頭と頭とを動かすその急忙しさは全く戰です。いつの朝か母とその子の私とが圓い葉團扇のやうに刈つて揃へた二三尺の低い棕梠の木の葉の上にも、霰は米粒のやうに可哀ゆく溜つたり、溜ると下から下から消えて行つたりしました。寂しい親達もその時だけは流石に子供のやうに喜びましたが、それもほんの暫くの間で、霰が消えて了ふと、また元の年老つた寂しい姿に還ります、父はむつつりと、母はしよんぼりと、茶の間ではまた煙管いぢりです。

父も母も決して幸福な夫婦仲とは思へません。趣味も性格も何もかも違つた、少しもソリの合つた間柄だとは思へません。それ丈二人とも不幸な寂しい人達でした。父もさう云ひ、母もその子の私に云ひました。それがもう連れ添つてから三十何年と云ふもの互に忍從して、とうとう老境に入つて了つたのです。これから先どうならうと云ふ目當もなく、苦しい運命の儘に苦しい一生をその墓場の下まで送りこんで了ふのです。寂しくない筈はありません。子の私としてからが、どれ丈苦しみましたか。それでも氣根が弱り、行末の望が絶え、うつて變つた貧しい隱居の身になると、何方が何方ともなく折れあつて了つて、不懸がり、慰めあひ、賴り賴られて、今はもう離れるに離れられない仲のいゝ茶のみ友達になりました。

夜になつて電燈が點くと、茶の間はまたしきりに賑やかになります。然しその子達がそれぞれ自分の部屋に引取つて了ふと、父も母もまた二人つきりになつて、寂しい目と目を見あはせてゐるばかしでした。時たま、父が夕刊の續きものや四十七士の講談などを面白さうに讀めば、母が傍から聲を合せて笑つたりしてゐる事もありましたが、それはただ寂しさのあまりでした。心から樂しいわけはない筈です。雪でも降るとか、木枯でも吹き荒む夜分などは猶さらです。父も母も何時となく寢支度をして、まだ宵の中から匆々と寢て了ひます、疲れ果てゝすうすうと鼾を掻いて。その力の無い親達の鼾を襖越しにでも聽いてゐると、全くその子の心細さはありません。あゝ早く夜が明けてくれゝばいゝ、雀が啼いてくれゝばいゝ、ただそれだけでした。

私の親達ばかりに限りません。貴賤貧富樣々の世相の中に寄る年波ほど、爭ひ難いものはありますまいが。老境になつて、日一日と靈肉ともに我と我が生命の蠹ばんでゆく、その淋しさを感じないではゐられぬ人達は、どんなに心細いか。彼等は歩一歩と「死」に近づいてゐる事を無論自覺してゐます。恐ろしい事です。たまらなく寂しい事です。だからどうでもして目をそらさなくては、胡麻化さなくては生きて行けないのです。それで詩歌、茶の湯、書畫、骨董いぢりとなります。それでなくとも、白髮の絹帽の老紳士が黑のフロックコートの襟に紅い大きな薔薇の花を挿して若返つたり、俗は俗で思ひきり赤い着付をして、手拍子をうつて、雀のやうな可哀いい半玉達と遊びほれたり。何ともつかぬふさぎの蟲に取りつかれては、日がな終日澁面作つて小さな驢馬を乘り廻はす粉屋の赤鼻爺も、雀に明け雀に暮れてはせめてもの徒然を樂しみにしてゐます。

ふくふくと襟卷をしめた江戸の御隱居が大きな龜甲緣の眼鏡をかけ、雪の日の火燵に前曲みになつた、爲永春水のいろは文庫などを繙いてゐる木版畫は、草双紙の見返しにも私達のよく見るところです。さうした畫にも、丸窓の前の雪折笹に一羽二羽羽ばたいてゐる雀の姿を見ない事はありません。

**

私はまた實際にかういふ寂しい老人を見ました。その老人は貧しい石版畫工でしたが、ある寒い蠟月の事です。その老人は白髮頭を俯向け俯向け、一心に紅い大きな蓮華を一つ描いてゐました。すべつこい冷たい石の上にです。初めは黑い線だけ畫いて、それから、紅繪具で、筆の穗先を嘗め嘗め、いよいよ彩色に取りかゝるのでした。朝です、雀が工場の硝子窓の向うの屋根で遊んでゐます。老人は畫き惱んではちらとその雀を見、雀を見てはまた力づいて、丹念こめて畫いてゐます。老人が紅い蓮華をと思つて畫けば、眼を皿にしてそれを差覗いてゐる人達も矢張り紅い蓮華だと思つてゐました。午頃になると、石の上には半分だけ紅い蓮華が浮き出しましたが、老人は一先一服と云ふ風に煙草をつめると、嬉しさうにその畫に見惚れてゐるのでした。そしてふうと煙を吹いてポンとはたくと、急がしさうに冷たいお辨當の飯をポツリポツリと拾ひかけたり、箸の手を留めてはまたその蓮華を覗いたりです。それを雀もその米粒が欲しさうに外から眺めてゐます。畫飯が濟むと、また丹念こめて殘りの半分にかかりましたが、全く石の裏に迄徹るやうな熱心です。雀が騒ぎ出す日の暮方は、誰しも終日中その日稼ぎする者の、やれやれと腰を伸ばす休息の時刻ですが、その老人も初めてホッとしたのか、立派に出來上つた紅い蓮華を石の上に殘したまま、そそくさと歸り支度をすると、穴のあいたマントに油じみた茶色の鳥打を一寸かぶつて、とぼとぼと外へ吐き出され

て行くのでした。もう腰も可なり曲つてゐましたが、それでも出て行きしなに、廂の隅つこに尻尾だけ動かして這入りかけてる雀に、叩頭でもするやうに、復ちらと眺めると何しか莞爾としたものでした、寂しい笑ひではありましたが。

八

かの不老不死の靈藥を求めさせに東海に人を遣はした秦の始皇帝は流石に人間中の人間でした。全く命は惜しいものです。だが、かの驕慢な夢想家も遂には哀れな現世の夢想家でした。秀麗な日本の一角に遂にその大船をとゞめて、また不可思議の蓬萊島を再びと探しに行かうともしなかつた徐福は彼こそ現實家の最なるものと見なくてはなりますまい。

日本の雀は彼を現實に生きさしました。雀は單純なリアリストです。

私は思ひます。雀の聲と呼吸とを透明な玻璃の圓球に封じられるものなら、それこそ眞の不老不死の靈藥でせう。

思ひきり死なうと迄突き詰めても、あの率直な雀の聲を聽いたが最後、決して短銃を我と我が蟀谷に差しつけられるものではありません。

私もその雀から救はれた一人です。

恐ろしい事です。死ぬのは厭です。死なうとすればするほど自分の命が戀しい。沁々と戀しい。

雀の聲がする。硝子窓の窓枠の上には壓へつけるやうにつかへた紅い薔薇の花が底から動く。それに雀が羽ばたいてゐる。キラキラした五色の日の光がこぼれ返る。煙が立つ。丘の下の谷かげの町から汽車のカダンスが聞えて來る。子供が沙羅双樹の花の木蔭で泣いてゐる。つい窓の下まで三輪車なぞを氣取つて乘り廻して來る子供もゐる。人聲がする。からなると全く死なれるものではありません。

生きるのです。生きるのです。生きなければなりません。

雀の羽ばたきはまた、人間の臨終にも、却て來るべき靈界の曙光を浴びせかけます。

末期の水が一生の冷めたい圏點ならば、その刹那に耳に入る雀の聲は、全く新生のAです、Bです、Cです、その花文字です。

雀の聲は喜びです。

また、親しく近親の死に面接して、變り果てたその恐ろしい死相を見守るとき、戰慄と慟哭とから相次いで私達は支配されて了ふ。それは哀傷の極點です。然し、夜が明けて、淺い狹霧でも細かに明りかけてゐれば猶更です。雀の聲が會て聽いた事のない鮮やかさで胸から湧き出したり、遠の枕邊の

猫柳の葉の沁々と動かす爽かさは、眞に生きた者だけが知る事のできる歡びです、幸福です、法悦の羽ばたきです、死者は死者として置いて、生者は生者としての眞のいい生活が、その朝の雀の聲から必ずと明けて來ます。さうして霧が霽れて大きな紅い太陽が上つて來ます。何といふ悦ばしさです。輝きです。涙で胸がいつぱいになります。

＊＊

私はまたかういふ光景を會て見ました。

ある早春のほのぼのとした黎明方でした。ある土手の蒼々とした、大木の松の一番下の枝に、首くくりが一人、まるで操り人形のやうにブラ下つて居りました。まだ少年でしたが、それは正しい瀟洒ないい姿勢でした。制帽をかぶつて制服を着て、顏は白いハンケチでキリッと包んで、すらりと宙に下つた二本の脚のさきには紅い鞵が風が吹けば身體と一緒にふらりふらり搖れてゐました。金釦がキラキラしてゐました。靜かなものでした。死んだ者とも思へぬその少年の死相は、全く天眞な幼な童の無邪氣に遊び事でもしてゐるやうでした。清澄な空氣の中に浮いて見えるから、猶更です。見てゐると雀がその松ヶ枝に留つてゐたのです。首をくくつた黑い細帶の結び目にも一羽留つてゐたのです。頭を動かしたり、羽裏を搔いたり、羽ばたきしたり、それにちゆつちゆと啼いてゐたのです。その枝の一番尖の一叢の青い松葉の中にも小さな雀が目を覺ましてゐました。松葉が搖れます、小枝が搖れます、動きます。その松と土手との空間には、目を覺ましかけた市街が見え、橋梁が見え、人馬が見え、工場が見え、煙突が見え、幾筋かの煤煙も彼方此方に立ち初めると、碧い空の圓天井が、次第に上つて來る朝日の放射で紅く紅く燒けて來ました。廣重の空のやうに。何といふ平和な朝でしたか、私はたまらなくなつて大きく息をつきました。涙が感謝と祈念とに輝きました。

雀は寺院の廂にも巣をくつてゐます。よしそれが、松風の中に鐃鉢が鳴り、白い棺が入り、讀經の聲がし、香の煙が蕭やかに縺れてゐるにしても、雀と雀が前の笹藪や、白い茶の花垣に羽ばたいてゐる世の中です。泣き泣きその棺の前を退ると、すぐに雀の啼くのが目につきます、耳に觸れます。馴染みの淺い仲ならば無論の事、戀しいその母を目前に失つた子供でさへも手を拍つてその雀と駈けります。遊びます。それが世の中です。

世は無常だと申します。然し、無常であるが故に常に光明と精氣とが新鮮に薫つてゐます、流れわたつてゆくのです、滿ち、溢れてゐるのです。寺門の前を松風がしんしんと吹き澄み、雀が啼き、小荷駄馬が靜かに白い尻毛を振つてゆく世相の一つを見ても、私達は沁々と、掌を合はさずにはゐられ

ません。生きてゐる者は仕合です、何といふ忝なさか。

雀は人間の墓場にも遊んでゐます。

それは生々としたものです、活潑な可哀いい雀、それが二羽三羽となく翼を竝べて、青い檜の葉蔭や、苔蒸した石塔、又は雨上りの線香の煙に羽ばたき連れて啼いて來る親しさはまたとありません。その雀の聲を聽き、その姿を見てゐますと、全く虔ましい「生」の歡びが、本當の眞面目な深い悲しみの底から湧いて來ます。

墓地の雀はまだ乾かぬ土饅頭の上にも小さな足跡をつけます。不思議相に堀立の深い墓穴にももぐつて見ます。

閒とした夏の眞晝にそよりともしない白張提灯も、雀がその棹に留れば動きます、それは寂しいものですが。

さうして、時には暫くの休みにそこらに立てかけた葬式の樂隊の、あの眞鍮の大きな喇叭や、銀のフルートや、太鼓の紅い緋の房やなどを、珍らしさうに覗きに寄る雀も居ります。

花屋の軒などには澤山です。頭を竝べて見てゐます、悲しい放生會の紫鳩を。

雪の白く積つた朝などは、所謂雪折笹に寒中の群雀といふ奴が、まるで世界が一新されでもしたやうに飛びついたり、騒ぎ遊つたりしてゐます。活潑に赤い五重の塔は見えても、潑剌とした神機の動きが、寂しい中にも、既に雀と一緒に羽ばたいて、パッパッと雪煙を立てる清しさと云ふものはありません。

雀の聲は喜びです。

九

世を厭ひ、人を厭ふ出家沙門の身になつても、流石に雀の聲を聞いては在所の生みの父母が戀しく、我が命がいとほしく、ありし昔が戀しいに違ひありません。行基菩薩でなくとも、山の雉子でなくとも、雀と人間の間柄はそれほど深い愛情が古びてゐるものです。

もとより私は世捨人の境涯に身を捨て果てて、強ひて行ひ澄ます因由もなければ、巷の塵に隱れて、殊更に風流韻事を旨とする必要もありません。ただ人間と生れて人間の中に生き、眞に生甲斐ある人間の一生を送つて、そこで安心して人間らしく死ぬる、その間、その玉のやうな生れた儘の赤裸々な大きい呼吸が續けて行けさへすれば、それで滿足なのです。

可哀いい小さな茶色の小坊主、あの雀ほど人間くさい小鳥はないが、それだけ私も雀と離れられないのです。私の日常はいつも雀と一緒です。殊にこの三四年といふもの、私は雀

とばかり遊んでゐました。私が雀か、雀が私か、雀を識る事私より深い人もあるまいが、私ほど雀に觀られてゐる人もありますまい。

貧しいにつけ、寂しいにつけ、私と雀とはよく力になりました、よく慰め慰めても貰ひ、慰めてもやりました。

私は私をつくづくと不憐に思へた時、雀も不憐に思へました。私が苦しい時、雀も苦しく、私があの茶の煙のやうに果敢なく消え失せようとする時、雀も消え入りさうになりました。

それだから私は私の命が惜しいと同じに、雀の命が悲しいのです、勿體ないのです。

曾て、葛飾にゐた時、雀のお宿の私の草舍に恐ろしい闖入者が來た事があります。冬の事でした。庭の枯木の百日紅に、その日も雀が鈴なりになつてゐました。こぼれこぼれしてゐました。その雀どもを、何心なく寒々と眺めてゐると、私はハッと吐胸をつきました。向うの破れ垣の間から、圓い小さな筒口のやうなものが、そろりそろりと出て來るのです。鐵砲でした。雀は何にも知らずに遊んでゐるのです。私は蒼くなつて立ち上ると、

『いけない、いけない、雀を射つては。』

思はず聲をあげる、その拍子に、ズドンと響くと、白い煙がパッとあがりました。それより迅く一齊に雀は飛び立つたが、その中の一羽がバタバタと落ちて來ました。私は跳足で飛び下りると、もう激しい憤怒と憐愍とで胸がいつぱいになつたのです。何といふ無法な人間か、その男は。處もあらうに他の庭木の雀に向つて發砲したのです。さうして而も巧みに射落したのです。雀どころか、私は全く自分の心臓を撃ち貫かれたやうに感じました。

私が飛んでゆくと、垣根の向うではかさかさと驚いて逃げて行く荒い足音がしました。が、もう濟んで了つてゐるのです。追つかけたつてどうなります。私は枯れた芝草の上に轉げ落ちてゐる雀を、思はず手に取り上げると、可哀想たものです。白いホワイトシャツの雀は血まみれになつて、かはいゝ茶色の頭もガクリと俯向けてゐます。掌を開いて載せると、私の掌も血まみれになりました。私はその圓い溫かな坊主頭を右の掌で撫でると、たまらなく寂しくなつて、暫時はただボンヤリと突つ立つてゐました。と枯木には次第に入日が傾いて、私の掌の上の雀も次第に金色になると、私の掌も細かに金色の光を放つて來ました。その靜かな事は何とも云へません。私は私の頭にも何かしら圓い輪のやうな光がかゝつて來るかのやうに感じました。

深甚な悲みは人をも雀をも金色にして了ひます。

「成佛してくれ。」私は頭を下げました。今度はいゝ世界に生

れて來るやうに、私は靜かに雀を頂きました。さうして何だか私の靈までがハタハタと羽ばたいて天へ歸つてゆくやうな氣がしました。ちゆつちゆ、ふと氣がつくと、私はちゆつちゆと雀の聲をしながら、その雀の頭をまた輕く撫でてゐたのでした。

さういふ雀がです。

私を、とある木の上から、凝と見詰めてゐた事があります。私の背後から。

それは麗かな小春の正午でした。野に出て一人でした、草を藉いてゐると、さながら麻耶夫人の乳首を含んでチウチウと吸うてござる小さなお釋迦樣の息づかひまでが聞えるほどの尊さが、その麗かさの中に限りない靜謐な耀きとなつて、この十方世界に滿ちてゐました。

私は何ものかに驚いて思はず背後を振り返つて見ました。何にも聲を立てたものはなかつたのでした。ただ雀が一羽、小枝に留つて、頭を圓く上げ下げしてゐたばかりでした、叩頭禮拜でもしてゐるやうに。

私はまた前を向いて坐つてゐると、また驚かされて四邊を見廻はした。だが、閒寂としてゐたものです、明るい光り耀く四邊が。

さうかとわかると私はまた驚いて了つたのです。それは私のでした。私の大きな深い息づかひの音でした。私はその時、初めて私の出たり入つたりする呼吸の音を知ると、驚いて合掌しました。

見ると、雀も、雀自身の息の呼吸にほれぼれと聽き惚れてでもゐるやうでした、光つたり、やや晷つたりしてゐました。

雀と私とはさういふ難有い因緣があつたのです。

その雀がです。

ある時、私の背後でちゆちゆつと啼いた、と思ひました。驚いて振り返ると、ただ笹の葉ばかりが照り返つてゐました。日の光や、その銀色の笹の葉ばかりが一面に搖れそよいでゐました。忝けないその光耀、それは雀の緣に依つて、初めて私の知つた大自然の「生」そのものでした。

私はその時初めて雀に頭を下げたのです。

さういふ雀がです。

雪の枯木の小枝に、ある朝、一列に留つて一つひとつ、可哀いい聲をあげて、何だか可哀らしい話をしてゐました、てんでに言を云つて。

三崎の見桃寺にゐた時の事です。前の晩には雪がしんしんと降り積つてゐました。故ふけになると、曹洞宗のその小庵は

いよいよに落ちついて、全く佛といふものの息づかひまでが聞えさうに思へました。難有さの限りでした。さらさらと庭の木の葉につもる雪の聲もしました。さぞあの木も寒いだらうと思ふと思はず掌を合せましたが、目が覺めて見ると、空は青く晴れて、冬青の木が一本白い粉雪を沁々とゆすり落してゐました。椎の木もまた同じやうに沁々とゆすり落してゐました。そして枯木には雀があの通りでした。かうがうしいいゝ朝明でした。雀達は何を話してゐたのか今にもわかりません。が、あの位可哀いい雀を見たのは初めてゞした。思ひ出しても涙が流れさうです。「空は屋根のかなたに。」と云ふヴエルレエヌの詩の句をさへ思はれます。私はその雀のお蔭で初めて人間の世の安けさをも美くしさをも知る事ができました、本當の幸福といふものも。

さういふ雀がです。

何時の間にか私と深く馴染んで、色々私がお話したやうに、麻布の住居では私を子供のやうに遊ばしてくれ、葛飾の草舍では私を閑寂の精でもあるかのやうに寂びさしてくれました、さうして深い愛情をも。

此の小田原に來てから、私も愈々のびのびと安らかになつて、本當の輕い自分の呼吸をつけるやうになりました。それも雀のお蔭です。

全く、私の心が平穩でありさへすれば雀もまた安心しきつて遊びに來ます。お花畑の庭では春は紅い杏の花に羽ばたき、青い蜜柑の木の蔭にポツポツと鮮やかな綠の點々をうつた草の芽生に頭を動かし、私が鍬をうつてならしてゆく畑土のにほひに咽せ、私の蒔いたサラダの種子を早やくも目つけて啄みに來るなど、それはそれは私を無上に喜ばしてくれたものです。霧ばかりかけた夏の長雨の頃にも、獨り靜かに書きものをしたり、快い思索に耽つてゐる私の二階の窓の外では、いつも雀が乳繰り合つてゆづり葉の間にころげ落ちたり、明るく啼きつれて隣の楓の葉蔭に消えて行つたりして、私を全く人間の世界に本當の人間らしく古びさしてくれました。さうして白い安樂椅子の上でゆつたりと太い葉卷の莨を燻らす私を、うれしいのか、雀も時々覗きに來てくれました。

今、私は同じ小田原の、とある山の上の傳肇寺といふ庵寺に妻と部屋借りをしてゐますが、この寺にも雀が住んでゐて、もう私を目つけては毎日話しにやつて來ます。私もこの頃は何だか雀と何かの話ができさうです。それは不思議です。それは不思議ですが、もう永い間の深い馴染みです。フランシス聖者のやうにゆかなくとも、雀と私はもう離れられません。私もよく解つてゐるつもりですし、雀もよく私の言葉を解つてくれる筈だと思ひます。

私達も二人きりですが、この寺の雀も二羽きりです。それは小さな雀の夫婦です。障子を開け放して置くと、いつも前の百日紅に來て遊んでゐます。非常に仲がよくて非常に虔ましやかないい雀達です。一羽が先きに來て、啼き立てると、あとの一羽もきつと、飛んで來ます。さうして直ぐに傍へ竝ぶと、頭をくるくるやつたり、小さな蹠を赤んぼの掌のやうにあげると、黑いほくろのついた頰つぺたをプルプルと撫でたり、黑い咽喉首を縮めて嘴で搔いたり、羽裏を調べたり、それは可哀いいものです。そしてコツコツと嘴を枝にこすりつけたり、啼いて見たり、彼方此方と移つたり、かと思ふと一羽が急に飛び立つと、同じにまた女房の雀も飛んで行つたり、いつもふたりは離れません。

ぽつねんと机に凭れて眺めてゐると笹藪も見えます。松風の聲もきこえます。寂しいのは寂しいが、雀が二羽でも、同じ廂の下にゐるかと思へば、私も心から安らかになります。ある日の午後、またその夫婦の雀が、前の百日紅に來てゐたので、私も妻も微笑み乍ら、ただ、眺め入つてゐました。と雀が地に下りると、向ひあひに、外足をし乍ら歩み寄つては話してゐます。溫かないゝ日向に二つの頭だけが動いて、あとは森閑としたものでした。草の穗のそよぎまでが聞えさうでした。私は何か食べさしておやりと妻を見ますと、さうねと彼女も笑つて白い飯粒を輕く投げたものです。雀達は飯粒が空中に拋物線を畫いてゐるうちに、もう驚いて飛び立つたのです。

「お出で、お出で。」

私の言葉が聞えたのか、すぐに雀も引つ返して來ました。さうして再び地に下りると、すぐに二つの頭が七つにも八つにも動き出すいそがしさつたらありません。それが濟むとまた木の上へ留りに來て、私の方を見ては首を傾げてゐます。私と妻とがまた微笑んでゐると、可哀いいぢやありませんか、雀の夫婦は一樣に私達の方へペコペコと茶色の頭を二三遍振りました。

私達はその日から、その木の枝に小さな竹のお皿を吊りさげる事にしました。それは雀の三度の食事の爲に。

人間と雀とは、とうからかうした仲にならねばならぬものなのです。人間も寂しい。雀も寂しい、雀を思ふと涙がながれます。

雀の形態と本質

一

小さな雀。茶色の雀。古代更紗の日本の雀。雀の茶色は全く澁い茶色です。落ちついた、素朴な、少々寒味はあるが、いい色に寂びきつてゐます。寂びきつてゐながら、それが絶えず生きて動いてゐるので、その靈の底から、その澁い茶色が光つて見えます。光澤消しの光で。

私はその茶色の雀を私の掌の上に、一寸載せて見ます。

＊＊

雀の頭は無論茶色です。純粹の焦茶です。そして頭がをかしいほどまんまるです。そのまんまるな頭がまた、何より雀を可哀ゆく見せます。

その頭がまた、如何なる時でもまんまるです、怒つた時でも、驚いた時でも、悲しさうに啼いたり、凝と寂しさうに正面を向いてる時でも、又は氣忙しくチュッチュと動かしてゐる時でも、怖れて飛び立ち、或は嬉しくて堪らぬ所謂欣喜雀躍の砌にでも、何時も雀の頭は柔らかな圓みをふうわりと保つてゐて、これがまた何とも云へぬ素直さをも感じさせます。

少しも角張らず、固くならず、圓く素直に膨れてゐるその頭を見てゐると、人間の心までが何といふことなしに安らかな童心の素直さに還つて了ひます。

子鴉の頭なども、それは可哀いい圓い頭ですが、どうかすると急に角が立つて憎々しいほど形相が一變して了ふ。雀にはそれがありません。常住まんまるくて、それがまた古く焦げきつてゐても、剃り立ての今道心のやうにつるつるとしてゐるので可哀いいのです。それだけ、發心でもしたやうな、何かしら悟り澄ましたやうな、禪坊主のやうにも見えます。

その圓い頭が胴體と較べて、思ひきり大きい事も、雀を一層無邪氣に見せます。全くその大頭をつくづくと眺めてゐると思はず微笑したくなる。由來大頭は詼諧味に富んでゐます。雀もその大きな坊主頭のお蔭で、善良で、至極安穩な、何とはなしに多量のユーモアを持たして貰つてゐます。それは天然に體得した一種の美德とでも申しませうか。全くの天禀です。

その圖拔けて大きな、圓い焦茶の頭が時々首を竦めると、胴體との間の白い襟卷の中に、ふくふくと縮こまつたやうな溫かな形になります。それは俳人めいた、若くは隱居じみた

ものです。寒い風の日や、雪のふる日などは、それが特に人の目をひきます。その頭の圓みはまた、さういふ時、利休茶色の頭巾その儘になつて、澄ましたものです。

＊＊＊

その雀の横顔の可愛らしさつたらありません。焦茶の頭に白い頰つぺたです。その白い頰つぺたが焦茶とよくうつつて、如何にも雀らしいあどけなさを現はしてゐます。それが若し頰つぺたまでも茶色であつたら、それこそ不氣味な梟か、木兎のやうな形相になつて了ふでせう。

その頰つぺたの中に、雀の目が小さく開いてゐます。(雀の目は極めて小さい。小さいが叡智そのものの瞳です。)が、一寸と見ると、それは大きな眞黑な目です。それがまた仔細に觀てゐると、目でなくて、目の周圍の黑いほくろだといふことに氣がつきます、思ひきつて厚いほくろです。それが白い頰つぺたにぽつちやりとついてゐます。その黑いほくろがまた雀の横顔を戲けて見せます。道化のやうな頰つぺたです。それでいよいよ白い頰つぺたが眞つ白けに見えます。白粉でも塗り立てたやうです。何といふ可愛いいお洒落さん！　初々しい生娘！　その黑いほくろは、全く彼女の小さな目をおどおどさして見せます。花笠つけた雀踊の娘！　御大名の腰元衆！

畫に描いた雀の横顔を見ると、必ずその目の傍に黑い小さい黑子が一つ、御愛嬌にポチリと點つてあります。さう思ふと、如何にもあの白い頰つぺたには、黑い黑子が一つは必要です。それがまた可愛いいものです。それで澄まして横つちよを向いてゐます、嘴がチョツポリついて。西洋操りの舌切り雀の娘がそれです。彼女は澁い茶色の單衣をすらりと着こなして、青笹色の細帶をきつと後ろに結んだなり、一寸と知らぬ顔で、袂を合せて空向いてゐます。何といふ可愛いい黑子！

雀の眞正面を向いた顔は極めて眞面目なものです。むつつりしても見えます。傲風にも見えます。焦茶の頭が頭巾の形になつて、黑いほくろの目が兩側について、嘴が黑く、それに嘴の下から顎にかけて眞つ黑です。その裏顎は天神髯のやうでもあり、黑い花結びのネクタイのやうでもあります。黑である丈落ちついても居り、咽喉元である丈可哀ゆく見えます、一寸高慢ちきには見えるが。

その眞向きの顔がまた生眞面目である丈、何かに留つて、時雨に濡れたり、雪にでも降られたりしてゐる時の悲しさうなことはまたとありません。しみじみと辛さうです、それを辛抱强く、凝としてこらへてゐる樣子は、全く、忍從の悲しさといふことをつくづくと忍ばせます。

雀の頭は滅多に靜止してゐません。絶えず左顧右眄です。その神經質な事はその頭だけ見てもわかります。殊に啼き立てる時か、何か餌でも拾ふ時の雀の頭の動き方つたらありません。全く一つの頭が十にも二十にも見えます。それは若し、かの不思議な直觀力を有する未來派の畫家にでも描かしたら、それこそ四方八方、焦茶の頭ばかりでせう。

＊＊

雀の翼は幾分煤けてゐます。灰黃色の斑を交へた不純な茶色で、全體としては頭の色より薄く、稍寒けが加つてゐます。うち見たところ、決して美しいとは云へません。然し、その澁くて素朴なところが、古びもあれば、眞實にも見えます。

＊＊

雀の胴は眞つ白です。光澤があつて、柔かな、その純白な胸毛は、ふくふくした眞綿の胴衣か、若くは、新鮮なホワイトシャツのいい光澤です。でなければ、無垢の法衣のやうにうち沈んだ神々しい耀きをさへ保つてゐます。雀はそれが自慢で、時折飛び上りしなに眞上を向いて、兩翼を反りかへるほど張り切つては、いつぱいにその胸を開きます。これを見てくれといふ風です。その時また、澁茶色の大きな尻尾の尖が强く內側に反り曲つて、その純白な胸毛を一つ引つぱたくと、すぐにくるりと宙返りです。

雀の翼を收めて膨れてゐる姿はまんまろです。それほど胴がまた短かくて、太つてゐるのです。それは膨れきるだけ思ふ存分に膨れてゐます。晩秋から初冬にかけて、よくかういふ大きなまんまろい雀が、そこらの木の枝に膨れてゐます。さうして十分に溫かな日光の中に、子持ち雀らしい應揚さと退屈さとで膨れてゐます。ふくら雀といふ奴です。日向ぼつこのお婆さんらしい雀！

＊＊

雀の尻尾は胴の割りに不均整なほど大きくて長く、それが勢よく後ろにピヤンと跳ねてゐます。胴よりは幾分强い澁茶色で。それがまた愈々雀を可哀ゆく見せます。

＊＊

雀の脚は小さい。小さいが兩つとも褐色で黑い。これがその嘴と共に、茶と白との全體を上下で引き締めてゐます。それが爲に澁いものは澁く、何もかもしつくりと落ちつかせて見せます。それに例の黑いほくろです。あれが所謂畫龍點睛と云ふやつで、雀全體に眞の生きた精靈を點ち込んでゐます。それで雀が生きて來る。生きて、さうして飛ぶ。

＊＊

かういふ風に綜合して見ると、可愛いい中にも雀は全く寂びた鳥。雀の色は全く寂びきつた色。雀は、だから御覽なさい、あの濃厚な油繪具で描くにはふさひません。日本の花鳥畫家がまた、いくら繪絹にいろ〳〵と染め分けても、決してあの澁い雀特有の寂や寒けは出て來るものではありません。綺

麗になるばかしです。浮ついた輕いものになるばかしです。丁寧に描けば描くほど雀は死んで來ます。却つてリイダアあたりの西洋木版の雀が、あの鐵筆の冴えきつた線畫の方が、まだ雀らしく見えます。それよりも雀は南畫風の墨畫に限ります。あの澁い茶色の精神は墨でなければ活きて來ません。殊にその材料が年代が經つて煤びて來れば來るほど、雀が活きて來るから不思議です。大切なのは寫生より直觀です。雀の寂は禪の寂です。第一雀そのものが禪的象徴味を帶びてゐます。再び云ひます。茶色の精神は墨です。雀は墨畫の小鳥です。

二

雀は非常に神經質です。全く、雀は茶の花の霜にさへ全身の神經を慄はせます。それで雀の聲は冷たい。

然し、雀の聲には力があります。ほんとうに感じて、ほんとうに腹の底から啼きます。

全く、雀の聲は腹から出ます。一生懸命です。さうしてその鳴かうとする前には、必ず尻尾を强く搏きます。それから圓い茶色の頭を上下左右に振ります。さうして全身が聲になつて了ひます。ちゆちゆつちゆつちゆつ。全く彼の聲は彼以上です、啼く時は。

雀の聲にも時により强弱があります。殊に目を醒まして飛び出した、その時の一番聲の强さは、よくもあの小さな身體で、と思はれます。それは驚くほどの太いちゆちゆちゆつです。彈けきつてゐます。

雀が紅い山茶花の間などを、獨りで寒々と枝移りしてゐる時の啼聲はちつちつです。それは刻みの短いちつちつです。三聲と一時には續けません。さうして聲を收めた時には必ず悲しさうに左右を見廻はしてゐます。

枝から枝へ移るとすぐ、雀は必ずちつと啼きます。そのちつで冷たいピリオッドを點つてゆくのです。それで、たとひ姿は見えなくとも、一枝一枝と移つてゆく雀の動作が明瞭にわかります。

雀がまた、枯木の小枝などに留つて友を呼ぶときには、それは寂しさうです。刻みも極々短く、それを見廻し見廻し啼くのです。そして首を傾け乍ら、また、ちつと啼き、くるりと向きを變へてはちつです。そして、ちつ、ちつちつ、ちつです。

雀が友達を見つけた時の喜びは、もうその聲でわかります。それは刻みの速い、全く、ピリオッドなしの早口です。嬉しくてたまらぬといふ風に空を向いたきり、いつまでもいつまでも續けてゐます。力いつぱいです。

それが、いよいよ、外のが傍の小枝に來ると、ついと横を向いてちゆつちゆつです。もう安心だといふ風で、落ちついた穩和しい聲に返ります。

雀は飛び立つ間際には啼きません。ただ、ぱうと突然に羽音をさせるばかりです。

だが、空へ行つてからちつと啼きます。そして下りかける少し前でまたちつと啼きます。

留つた間際にも雀はまた啼きません。一旦四邊を見て落ちついてから、小首を傾けてちつです。

雀は一羽、暑くもなく寒くもない、ほどよい日和に、一羽で、一直線に斜めに飛んで上り乍ら、ちつと鳴いてゆく時があります。さういふ時の雀のは如何にも安心しきつた輕快なちつです。

だがまた、何か失策つたか、氣耻かしいかしてちつと鳴き棄ててゆく、その時のは、如何にも微笑したくなる、をかしなちつです。

たつた一羽、枯枝か黍殼のてつぺんに留つてゐる時の雀は、秋風蕭殺といふ風情で、ただ寒い上空から凝視めて、堪へられる丈は堪へてゐます。何一つ聲を立て得ません。それが愈々たまらなくなるとちちつです。その聲の悲しさは、全く、尻尾の尖から身體中を徹つて空まで突つ走る一聲です。

二羽か三羽か、嘴をそろへて鳴いてゐる時の雀は所謂ぺちやくちやぺちやくちやです。可なりの饒舌ですが、朴訥な、極めて率直なものです。冷たいものです。冬ならば枯木に霜がいつぱいです。屋根には雪が眞つ白です。

二羽三羽の雀が、雪の上を乳繰り合つたり、縺れつ絡みつして羽ばたき落ちたり、靜かな雨の中を枇杷の下葉かなぞに轉がり落ちて、豫期したやうな喜びと驚きの鳴聲を立てる。その聲はまた夢中で、刻みが早くて、一時に咽喉から彈け出ます。全く意味をなさぬ位の早口で、而も吃つて、それは面白さうです。

それがまた、笹の葉か、櫻の花に小踊りしてゐる時の囀りときたら、全く欣喜雀躍です。無我無心なその聲々は神々の靈の喜びです。

霰か、米粒か、それを地上に群つて、競り合つて啼き騒ぐ雀の聲々は冷たい。が、勇ましい限りです。聽いてゐてさへ、彼等の靈までが轉げ廻つてゐるやうです。

雀は可なり話し好きです。だから御覽なさい。紅い紫雲英田か、温かな藁葺屋根か、笹か、枯木の小枝に二羽三羽と頭を突き合せてゐる時には、必ず何かとぺちやくちややつてゐます。さういふ時にはをかしいほど尤臭い聲をしてゐます。大人ぶつて話す子供のやうな雀です。

雀の朝の勢揃へ、その聲々の姦ましさが、遠樹か、丘の向うの孟宗藪を揺がすほどに響き返す大寒の頃にも、その夜の明方のは流石に冷々とは聞えるが勇ましい、活氣に滿ちてゐます。

然し、一旦日がかげりかけて、夕燒方の風向になると、また一しきり、邊りの寒竹林の群雀が啼き騒ぐ、その聲々の寂しさといふものはありません。一騒ぎしないと、どうしても寢つかれぬ雀の心持を思ふとまた堪へられません。取りわけては寒い寒い田圃のこがらしに吹かれて啼き騒ぐあの千羽雀の聲々です。赤い大日輪を後ろにして、それは賑やかさうに浮かれ騒いでは居りますが、それだけその聲々の親しさはまたとありません。さうして愈々曠田の寒々しさをより寒く募らせてゆくばかりです。雀は眞實です。姦ましくとも千羽雀は寂しい。一羽一羽が寂しさの精靈です。千羽群つても寂しい雀は矢張り寂しい。

***

寂しいその雀の鳴聲も、その性格の相違に依つて色々に違ひます。

雀の夜明には、雀の中の一羽の頭目が、その自分の集團の雀を軒毎に起して廻るものですが、癖癖の強い奴はその鳴聲までが性急で荒くて、一寸と起しても起きないと、愈々ぢりぢりして來ます。ちゆちゆちゆつ、ちゆちゆちゆつ、ちゆちゆちゆちゆちゆつです。之に反して極々穏和しい頭目になると、非常に優しくて、柔かで、温かみがあつて、それは緩つくりしたものです。ちゆうちゆう、ちゆうちゆう、ちゆうちゆう、ちゆうちゆうです。

感應性の鋭い雀は、鳴聲までが自然の推移につれて幾分かは感應してゆくやうに思へます。温かい日は幾分かは温かく、寒い日には寒く、煤煙にまみれては濁つて來、澄み亙つた空には澄み徹つて來ます。然しその聲の本質は飽迄雀です。百舌や、縣巣のやうに本質以外の擬音で浮かれたり、瀕したり、釣つたり、戯れたりする丈の輕薄さはありません。いつでも雀は雀の聲で鳴くより外には、聲の出しやうがありません。稍巧ではないかも知れぬが、それ丈實直なのです。

雀も無論その鳴聲に依つて、主としてその感情を表現します。その音の強弱、ならびにその速度、その刻み方がその主要な表現法ですが、特にそのピリオッドの點ち方一つで、可なりの復雜な感情をも手際よく、その單純な鳴聲で現はしてゆく、それは細かなものです。蛙などもさうですが、最も適切な例を引けば、あの電信機のチッチッチチッです。あれは長短の點と線とで巧みに符號を刻んでゆく。雀のもそれと同じです。簡單ではあるが、深甚微妙です。

幾度も云ふ通り、雀の聲は簡潔です。率直です。性急です。思つた丈の聲です。生々しい本當の感情丸出しです。本當に腹の底から出る聲です。

雀は美音ではありません。でなくとも恍惚と自分の咽喉に聽きほれる丈の自惚もなければ、餘裕もありません。蠱惑的なお洒落でも驕慢な聲樂家でもありません。雀はたゞ眞實です。眞實に鳴くのです。靈の底から鳴くのです。雀の聲は雀の靈そのものです。

茲に極端な一例があります。

それは雀が交る時です。それはあまりに不意で、ちゆちゆつと鳴いた時は既に兩方に飛んでゐます。瞬間のちゆちゆつは正しく雀です。雀の聲です。端的で而かも雀そのものの本體、畢竟は大自然の創造力（若くは神靈）そのものの象徴です。幽かでもそのちゆちゆつは靈體の根元力です。

三

雀の聲は冷たいが、雀の肉體は温かです。その證據には、あの寒の雀を見てさへも、涙がこぼれるほどの情味と温かさを見せてくれます。誰もよく目にする事ですが。寒の雀のあの寒々した翼に、時として、冷たい雪の一二片か、霰の玉の二粒三粒か、落ちもやらずに積つてゐるのが、いつのまにやら、その翼の隙間にしみじみと溶けて行つて了ひます。雀は凝と動かずにゐればゐるだけその身の温まりが深く保てるのか、雀はただ、雪でも霰でもその翼に降り積る儘にして置きます。積つても積つても消えてゆきます。雀の肉體の温かな丈、さうした雪や霜の消え入るさまが痛々しい。

鶴の紅い頭もちやうどその通りです。

飛行するものの常として、雀の肺量も、その割合は人間以上です。恐らくまた、雀が思ひきつて飛ぶ時の肺臓の強さは雀以上でせう。

恐ろしい搏力と高度の身熱とは、その強壯な、且つ偉大な

其の肺量から生み出します。飛べば飛ぶだけ肺量は増大する。

雀の心臓は赤い。さうして雀の胃嚢は強靱です。而も雀の呼吸は新鮮です。

だが、雀はいつも下痢してゐます。梅の古木から白い下痢する雀は、流石に世の所謂俳味といふものを體得してゐると見えます。そこへゆくと雀は健康なやうでも何處かに弱々しい一面が認められます。その簡素な素振を觀てゐると、それが卑しい食べ過ぎの腸加多兒だとは誰にも思へないと見えます。ただ一種の諧謔味ばかりを風流人は愛してゐるやうですから。

四

雀の脚は小さい。赤んぼの小さな掌のやうにいぢらしくて、可憐極るものです。だが、その把握力の強さには驚きます。殊にその微妙さには。

木に留る鳥の何れもが恐らくさうある可きでせうが、雀の脚は殊に小さくて、いたいけな丈一層です。

雀が脚で物に抓まつたら、それこそもう金剛力です。ビクとも揺れやしません。その脚の力はその時、雀以上です。

飛び乍らでも一分の隙もない雀は、愈々目ざす小枝の約一尺ばかり上に來たと思ふと、キッと兩脚を胴につけて、一旦身構へして、それからパッと飛び込んで來ます。そして飛びつくとピタリと留つて了ひます。その時の脚力の素晴らしさは、全く極意に達した武藝者の速業です。

その蹠の神經の細かな事も驚きます。

例へば、飛び下りようとして、その蹠が下の小枝につくかつかぬに、もうその枝が揺れてゐる（それはあるかなきかの揺れ方でも）事を豫感し、或は直感して了ひます。それで一寸と宙へ羽ばたき上つて、仔細に目で調べて見て、再びスッと留る。

かと思ふと、飛び上りかけて見て、また枝に抓まつて、しばらく留つて、それから改めて本當に飛び立つて了ふ。

それは雀そのものが神經質だといふばかりでなく、その蹠の神經がどれ丈微細なかといふ事の一證左になると思ひます。

雀がその留まるべき枝の彈力、若くは枝の質、重さ、形狀、外皮の粗密、長短、大小等を識るには主としてその蹠の神經に據るのです。而して一々にその蹠で觸按し、檢査した

上で、初めて一々虔ましい行動を開始します。その用心深さも雀の特質です。

雀の蹠はまた自由自在です。その動作のあまりに巧妙な時には、それが全く、手になつて了ひます。電線につかまつて器械體操をやる、枝の一點に片足で立つてくるりと留つたまま廻轉して見る、廂にかぢりついて眞逆樣に差覗く、それは不思議な妙藝です。

殊に可哀ゆくてたまらないのは、あの頰つぺたをブルブルです。かう云つたばかりではわかりますまい。

木の枝に留つて、その後ろ羽根を冷たい微風にそよがせ乍ら、小さな雀がよく頭を羽裏へ突つ込んで、そのまた小さな嘴でもつて、羽虱を掻いたり、チョイチョイとまた刷つくろたりしてゐるものです。さういふ時、雀はまた、片足で羽裏を大きく掻い擴げたり、かと思ふと、その全く赤んぼの掌のやうな小さな蹠を一寸と上へ向けて、圓い頭をブルブルと撫ぜる、そしてまた白い頰つぺたの耳朶のところまで、それを持つて行つてはブルブルと廻はす、それ、あのやんちやがよく濡れ手で顏をブルブルとやる、あの恰好です。その可哀さあどけなさと云つたら、思はずホホホと笑ひたくなる。

雀が地面へ下りてチョンチョンと歩く、その時の脚の恰好はその兩方が外方に開いてゐます。所謂外足で、可なり不樣でよちよちしてゐます。然し、それがまた愛嬌です。

また地面を歩るく、その雀の足の刻みは、大概極めて迅足です。而かも決して同一歩調で繰返すのでありません。端的にチョンチョンです。それが矢張り一時に多くて三足、少くてたつた一足です。そしてその鳴聲と同じくピリオッドを點つて行くのです。ゝゝ、ゝゝゝ、ゝゝ、ゝ、ゝゝ、といふ風です。矢張り電信符號の點々です。氣忙しない歩き振りです。

雀の脚は全く雀の神經そのものです。

五

雀の搏力がまた雀以上です。

雀が、朝、目を醒ますと、いきなり兩の翼を精一杯に擴げて、積薪か、天水釜のうしろから飛び立つ後ろ姿の大きさ。これも雀以上です。それは姿の大きさと云ふより、その勢ひの大きさです。

勢ひと云へば、地面から雀が、枯木のてつぺんへ眞上を向いて一直線に飛びあがる、その搏力の素晴らしさは全く勢力

そのものです。力そのものです。その時、雀の頭は引繰り返るほど上に向いて、パッです。黒ほくろの目が二つとも眞上向いて、その瞬間の可哀さはないです。兩翼はまるで紋帳の一羽雀のやうに圓く張つて、その尻尾がまた嘴と一直線になります。その時、雀の身體は地面に直角を作つて飛ぶ。

雀はまた、時とすると、之と反對に梢から地面に向いて、垂直に眞逆樣に飛び下ります。その大膽と冒險力とは驚嘆される。その時、嘴が地面へ突き入る程の勢ひで、パッパッパパッです。その素晴らしさ。全く勢ひそのものの顯現です。

＊＊＊

雀が蒼穹に向つて飛ぶ形のよさ。ちちと鳴き乍ら、それは必ず拋物線を描きます。それが中ほどから急に迅くなつて落ちかかると、其處には大概茶畑などがあります。冬は白い茶の花が眞つ盛りです。

雀が孤を描いて飛ぶ時は大概一羽です。殊に單獨な一個として自身の影を蒼穹に向つて投げます。さうして刹那を光り物のやうに翔ります。それは寂しいが勇ましい。

＊＊＊

雀の搏力の素晴らしさには全く驚かれます。あの少々の風にも轉げ落されさうな雀が、一旦その羽翼を擴げて羽根たゝきするとなると、あの小さな雀には不似合なほどの恐ろしい力が生じます。その羽の音ほど強くて、その癖寂しいものはありますまい。ぽうつ、ぽうつです。

そのぽうつぽうつが禪的でもあり、俳味も深い。冬の寒い日などに、獨ぽつねんと火桶にかぢりついてでもゐると、破れた古い障子などには弱い黄色い日ざしが殘つてゐて、しいんとして、外では雀の羽音です。その羽音です。その羽音が破れ障子に響き返すほどに時たま飛び立つそのわびしさは、全く寂びそのもの、芭蕉の信條そのものです。寂びきつたものです。

このぽうつが一羽でも寂しいのに、幾羽でも、次ぎ次ぎに、ぽうぽうぽうぽうとやられてはたまりません。殊にそれが枯木の枝々から一齊にぽうつと飛び立つ時なぞは、全く枯木が根こそげ飛び立つやうな唸りを生じます。それは寂しさの極です。

＊＊＊

雀は風に怖ぢません。怖ぢるどころか風に向つて飛び込むのです。

それがどんな強い風であらうと、一旦は風に向つて飛び込みます。吹き飛ばされようと、くるりと筋斗打たうと、決して躊躇しません。一氣に向つて突進します。すばらしい勢ひ

のいゝ雀。

向ひ風に飛び立つ瞬間の雀の姿勢は、嘴を鋭く前に突き出し、十分に身體を固め、丹田に精神を据ゑて置いて、愈々となると、強くただ一つ、尻尾を搏く、と、パッと突き入るやうに、疾風の中に飛び込みます。その時、箭のやうに嘴と尻尾とが一直線になつたと思ふと、兩翼を初めて開いて、第一の羽搏たきをうちます。そしてチッです。

然し、その風に向つて飛んでゐる時の雀の姿勢は、十分に首を疎めてゐます。抗抵力をつける爲です。殆ど體中にすくむ位首を突き据ゑてゐます。そして殆ど翼ばかりになつて飛んでゐるのです。さうして、翼をかなり前傾きにすぼめて風を避け避け一心に飛ぶばかりです。この時、尻尾が立派な梶になります。而かも頭から吹き飛ばされて飜る時には、その尻尾でくるりと宙がへりして、また元の位置に据ります。

曾ても描寫した通り、金色の稻穗の上を、向ひ風に二羽三羽と羽ばたいてゆく雀達が、風の爲に頭を眞向から横合に押し向けられて、一羽一羽とほぐれて行く心細さはありません。それにもめげず、雀は向き直つてひた飛びに飛んでゆくのです。一生懸命です。

それ位ならまだしもです。早春の烈風に向つて、大搖れに搖れてゐる枯木の一番頂邊から、二羽三羽と飛石のやうに飛び込んだ雀が、倏ちの間に一溜りもなく、唐棠畑の蒼空に高く高く吹き飛ばされて、別れ別れに、聲を限りに鳴き合はしてゐるその寂しさ悲しさは、とても見てはゐられません。さういふ時、雀達はお互に影も形も見えない遠い遠い空の果てから呼び合つてゐるのです。悲壯とも何とも言葉には出ません。

六

風は無くとも、大寒の凝つた氷雲の下を、折ふしぽぽつと羽風を切つて飛んでゆく雀も寂びの極です。それが一羽だから猶更です。

そのぽぽつに思はず振り仰ぐと、雀は頭の上を眞一文字です。その時、張り切るほど張つた兩翼は寒い空の色と一緒になつて、ただ胴體ばかりが眞つ白に見えます。一心一向のぽぽつです。

でなくとも、遠い畔木の梢などから斜めに、一羽、寒い天を翼も千切れさうに振り振り、細かに細かに上つてゆく雀の姿も一入です。

それが一羽でなくとも、追つかけ追つかけ、その遠景に飛んでゆく雀の姿も、冬はまた一入です。さういふ時、野も山もただ一色に寂び果てて了つて、凝つた刈田や、枯木ばかり目に入ります。遥かの空には眞白い不二の山のみが小さく見えてです。

それがまた二羽三羽でなく、たとひ千羽の群雀でさへも、胡麻の粉のやうに遠い空に散り亂れて、果ては一つに集る晩冬の心細さは、何にも譬へやうがありません。空が澄みきるほど晴れ亘つて、吹く風さへ風いで了へば猶更です。雀は千羽でも二千羽でも、一羽一羽はハッキリと、目に見え透いて、また散々に落ちてゆくその涯までも見定められるので涙が落ちます。

一群の雀でもさうです。それが幾群となく同じやうに壞れたり、行き合つては亂れ散つたり、別れ別れに落ちてゆくので悲しまれる。

寂しい鳥は雀です。

七

竹に雀は附きものですが、寒の時雨でも餘めに降りそそいでゐる孟宗竹の間を、前屈みに首を竦めて、兩の翼をすぼめ乍らに飛んでゐる雀の姿は飄逸と云へば飄逸ですが、矢つ張り寂しい。それは時ならぬ時雨に思はず衣の袂を引つ被つた老雲水その儘ですが、それが時々頭を一寸出して振り向きますので寂しくなる。

それが、孟宗藪よりまだ深い眞竹の藪で、雨もさんざと降りしきる中を、一羽ならず二羽も三羽も、十羽も二十羽も、彼方此方に飛び出しては、すぼめた翼の間から、それが幾つも一寸一寸振り向き出したら、その寂しさは凄くなる。恐ろしくなる。それで其儘日が暮れたなら、しまひには、もうこの世界が果敢なくなる。それは云ひやうない大寒地獄の繪模様です。

したが、雪の積つた朝などは雀も威勢はいい。その雪折笹の葉蔭から飛び出る雀はしてこいなです。すばらしく元氣なものです。まるで尻端折りの奴姿で、而かも跣足の、笠を前被りに一寸手をかけて、やつちよまかせのしてこいなといふ恰好です。それは氣輕なものですが、それが一羽であればです。

何羽も何羽も、同じ奴姿で、飛び出されると、さうして同じやうに袂を振つたり、素足で雪をパッパッと一緒に搬つて賦返すとなると、神妙な奴の氣前も、却て慾めに見え出し

て、どれもこれも同じやうな姿なだけに、急に滅入つて陰氣になる。

雀はさういふ風に人間くさいが、また奴臭い。

雪が降れば降る。雨が降れば降るで、凝と、笹竹の小枝かなぞに、濡れそぼち乍ら留つてゐる雀もいぢらしい、寒々しいものです。一羽ならずとも、二羽でも三羽でも五羽六羽でも。わびしいものです。それでも例の閑寂ないい姿はしてゐます。そのすぼめた翼の茶の褐色が、恰度百姓の簑笠色に曝らされて、それがしみじみと濡れ濕つてゐます。冷たく凍つて了ふまでもです。

笹の多い藪原では、どの孟宗のほづえでも、さういふ雀は澤山頭を突き合せてゐます。雨は笹の葉に彈き、風は笹の葉を吹きちぎり、雀は雀で縮こまつて、ちゆつともちつとも聲を立て得ません。そのうちに日がとうとう暮れて了ふ。寒い雨は霙になり、霙はいつのまにやら粉雪となり、粉雪はだんだん綿雪になり、牡丹雪になり、遂には目も開けられぬ吹雪となる。

さうした笹竹原を夜がふけて、紅い提灯でも入つて來ると、その寂しさは極まります。

雀のお宿は、ただ閒寂として了つて、時折りさらさらと笹葉をしづれ落つる雪の音ばかりが、まだ寢もやらぬ雀の靈を脅かして遂には降り積む雪の聲までも、積れば積るほど、聲もとだえて、夜は深くなる。

その夜すがら、笹は笹で雪の重みに堪へ得られるまで堪へてゐる。雀は雀で笹と一緒に垂れ下りながら、必死に笹葉に縋りついてる、堪へてもゐます。堪へられなくなつたら死ぬまでです。

雪が降らいでも、雨が降らいでも、笹藪のお宿は寂しいものです。

多か、早春、朝ならば格別、青い眞竹藪の青い眞竹の幹が一本一本透いて見える寒さの頂上で、その一本一本の青い眞竹に鋭く、その長い尾羽根でも觸れるかして、くわんと雉子が啼く、凄壯なその瞬間です。その鳴聲が突然向うの御堂の赤い魔閻大王でも高く咳拂したやうに響き返るその瞬間です。雀はその一聲に縮み上つて了つて、夜も明けたのに聲も立て得ぬ極寒です。

それでも晝になると、流石にチラチラと笹葉の間に光ります。その寂しさは澄みきつた寂しさ辛らさです。何の遊びもありません。時たま、氣の若いのが思はず乳繰り合つて轉げ落ちると、たちまち、其處らに散りたまつて朽ちて了つた笹の枯葉に身體をぶちつけては、その大袈裟な落葉の響に驚いて、ガサガサ、パッパッと飛び立つ、その吃驚しやうと云つ

たら、まるでその靈までも取り落したやうな慌て方です。

夜になると、寂しがりやの雀共はまた、なるべく人家の灯明りのとどくあたりに自然と押しかたまつて了ひます。意久地なしでも、さうなるといぢらしい雀の生活です。

八

何と云つても、雀の本質は墨畫の精神です。無常な、而かも常に流れてやまぬ大自然の生命、そのものの正しい一體現です。外に雀の本質はない。天地自然の姿はもともとが寂び果てたものです。この本然の寂びの中に、曾ては芭蕉が心おきなく融化して行きました。芭蕉ほどまた此の閑寂の甚深味を深く味ひ得た人間はありますまい。

何と云つても雀は閑寂の精靈です。

殊に雀がたつた一羽だけ、ぽつんと何かに留つてゐる時こそは、全く眞に寂しい精靈そのものの具體化です。それも殊に晩秋から冬にかけて、さうした法體の姿が芭蕉の寂びをその儘形に現はして呉れるやうです。

そのある一羽は、蹈ばたの枯　枯れの唐黍のてつぺんに消え入るやうに留つてゐたものです。秋の風が枯れた葉つばのさきをそよがしてゐる、その上に。

ある一羽はまた、畔の奉皮の技に留つてゐました。枝は枯れて、その一本の枝にはたつた一枚の朽葉がピラピラしてゐました。

ある一羽はまた、空の青く晴れた日に、高い椋の梢に留つてゐました。逃げて來たのです。その時、附近の笹藪では雀と椋鳥との戰爭が終日續きました。賢い雀は戰爭を憎みます。

また雀は世をのがれた隱遁者の心をもよく知つてゐるかのやうに靜まりかへつてゐる事があります。ある日ある一羽は、私の庭の破れ垣の竹の上からしげしげと寂びはてた古池の面を見入つてゐました、その寂しい姿。

ある一羽は、諦めはてたやうに、通り過ぎる村時雨を眺め乍ら、紅いもみぢのかげにしよぼんと留つてゐました。その間も、圓い頭がしづかに雨に濡れてゐました。

ある一羽はまた、冷たい寒竹の細い枝からちらと離れてまた留りました。風が吹いてゐたのでした。これこそ墨畫の心です。

これは愈々冬が極端までつきつめた時です。ある長い長い直線の街中を、石車を曳いた斑牛がふいと振り返りました。その時、そこの枯木には雀が一羽、千ノ利休のやうに靜止してゐました。それが瞬間ですが、恐らくその雀は斑牛の悲哀の結晶した一點の茶色の小坊主だつたに違ひありません。

＊＊

木に留つてゐなくてさへ一羽は寂しいのです。地に下りてゐる時もそれは消え入るやうです。

これはある夜明でした。江戸川のあの長い木の橋。下總と武藏の間に架け渡した長橋の上を、一羽の子雀が、酷しい霜の上を、あの小さな兩つの足をつけて人間のやうに歩いて行くのでした。それが一直線に幽かに幽かに歩みつづけて、おしまひには桐の實ほどに小さく光つてゆきました。

ある一羽はまた、紫蘭の花のかげに、終日うしろ向きに下りてゐました。それは夏でしたが、强烈な晝の光線が彼の坊主頭に照りつけて、風にそよぐ細い葉のかげがその背にチラチラしてゐました。おお、うしろ向きの雀。

またある一羽は、野良路から、恐る恐る掛稻のかげをくぐつて行きました。さうして日が暮れてもそれは歸つて來なかつたのです。そのうちにとうとう夜になつて、霜はいつぱいにその畔や掛稻に白くふりそそいで了ひました。

＊＊

然し、人間が一人でゐられないと同じく、雀も一羽でゐられるものではありません。

竹の細枝に一羽の雀がそぼ濡れて寂しさうにかいつくろつてゐれば、また一羽の雀が寂しさうにその傍に同じく濡れて留りに來ます。

ふとした機緣で、見も知らぬ雀同志が、同じ霜の枯枝に留まり合はすれば、雀はいつとなく顫へる體を擦り寄せます。

其處の藁屋根、彼處の枯芝の丘の日溜りに、二羽三羽が日向ぼこでもしてゐれば、溫かさうなと、四羽五羽六羽の雀がまた、いつのまにやら群つて來ます。

大暴風がやつと霽れた。もう大丈夫と、二百二十日の夕方に、風のまだ少しは殘つてゐる碧空の中を、一羽か二羽出て來る雀があれば、また諸々方々からぽつぽつと飛んで出て來